

袖ヶ浦市文脇遺跡

(中・近世編)

－主要地方道千葉鴨川線（袖ヶ浦市高谷）

県単道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書 1 －

【第 2 分冊】

平成 29 年 3 月

千葉県教育委員会

そでがうらしふみわきいせき
袖ヶ浦市文脇遺跡
(中・近世編)

－主要地方道千葉鴨川線（袖ヶ浦市高谷）
県単道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書1－
【第2分冊】



第2章 検出された遺構と遺物

第2節 地下式坑

1 概要

地下室と地下室へ通じる入口の竪坑からなる地下式坑は、調査区内から 20 基検出された。遺構の分布は 22F グリッド以北に限られる。地下式坑からの出土遺物はそれほど多くない傾向であるが、中には多数の遺物を出土した遺構や、貝殻が検出された遺構、仏器など珍しい遺物を出土した遺構、床面から完形に近い擂鉢を出土した遺構、入口覆土上部に完形のカフラケが置かれた遺構などがある。

地下式坑は、全ての調査年次を通して遺構種別記号に「SK」が用いられており、ここでは調査順に掲載する。

2 遺構と遺物

SK-020（第 97 図、図版 5・122）

20F-60・61・70～72 グリッドに所在する。地下室の平面形は長方形で、東側に長軸 140cm、短軸 90cm ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸 262cm、東西軸 168cm であるが、入口部分を含めると東西軸は 250cm ほどとなる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 200cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。天井部は、遺構検出時に既に崩落していたが、床面から天井までの高さは 140cm 前後と推測される。入口部分には、床面から 88cm 上に段が設けられている。

図示した出土遺物は 1 点である。第 97 図 1 は、覆土中から出土した錢貨で、政和通寶である。書体は篆書である。遺存状態が悪く破損している。出土遺物はほかにはない。

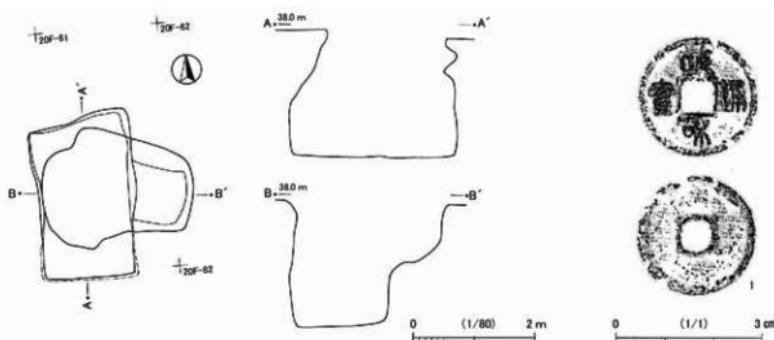
SK-052（第 98 図、図版 7・95）

20F-96・97、21F-06・07 グリッドに所在する。地下室の平面形は長方形で、西側に径 210cm ほどの円形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸 278cm、東西軸 170cm であるが、入口部分を含めると東西軸は 330cm となる。地下室の床面は平坦で、検出面から床面までの深さは 224cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、約 120cm の高さから天井部に移行していく。天井部は残存しており、中央部で床面から 150cm 前後の高さを有している。入口部分には、方形状を呈する段が、床面から 90cm 上に設けられている。

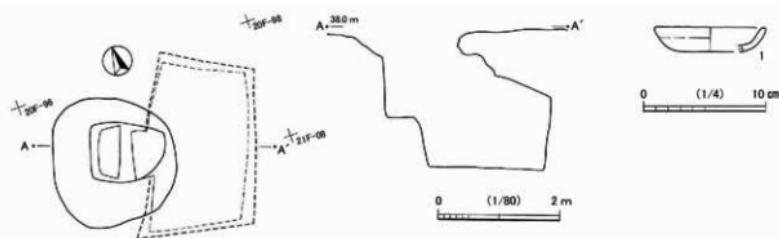
図示した遺物は 1 点である。第 98 図 1 は、覆土中層から出土したカフラケ小皿で、全体の 30% 程度の遺存度である。ほかにも中・近世陶磁器及び土器が少量出土したが、図示していない。

SK-065（第 99 図、図版 8・93・95）

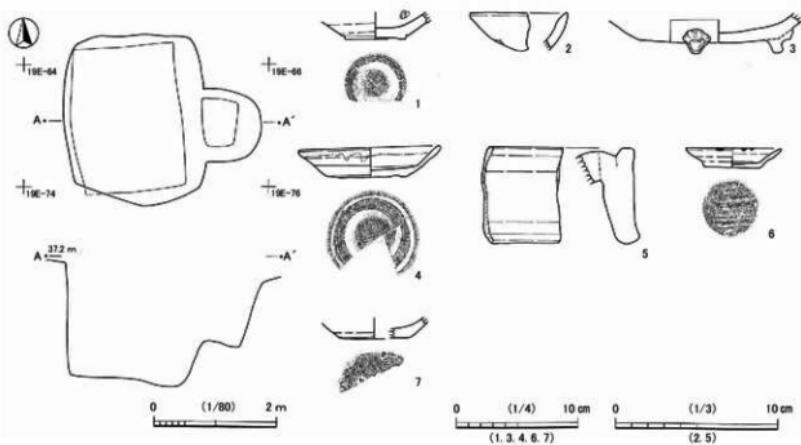
19E-54・55・64・65・74・75 グリッドに所在する。地下室の平面形は長方形で、東側に長軸 120cm ほど、短軸 93cm の隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸 280cm、東西軸 230cm であるが、入口部分を含めると東西軸は 323cm となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 183cm である。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。天井部は遺構検出時に既に崩落しており、高さ等は不明である。入口部分には、床面から 57cm 上に段が設けられている。



第97図 SK-020と出土遺物



第98図 SK-052と出土遺物



第99図 SK-065と出土遺物

図示した遺物は7点である。いずれも覆土中から出土したものである。第99図1～4は瀬戸・美濃製品で、1は灰釉平碗である。外面の釉は遺存部上端に僅かにあるのみで、削り出し高台及び胴下部から高台部分は露胎となっている。内面は全面に釉が施され、重ね焼き痕が2か所認められる。古瀬戸後期様式Ⅲ期頃に位置づけられるものと考えられる。2も灰釉平碗で、遺存部の内外面全面に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式I～II期頃に位置づけられるものと考えられる。3は灰釉盤類である。外面は露胎で脚が1か所認められる。内面は灰釉がハケ塗りされている。古瀬戸後期様式Ⅲ期頃の折縁深皿の可能性が考えられる。4は灰釉の縁釉小皿である。全体の70%程度の遺存度である。外面底部は回転糸切り後、ヘラにより高台が削り出される。古瀬戸後期様式IV期新段階に位置づけられるものと考えられる。5は常滑窯で、8型式に比定されるものと考えられる。6はほぼ完形のカワラケ小皿である。口唇部に煤の付着が2か所認められる。7はカワラケ杯である。遺物はこれらのはか、アカニシの貝殻2点及びハマグリの貝殻1点も出土した。

SK-073（第100図、図版9・95・111・122）

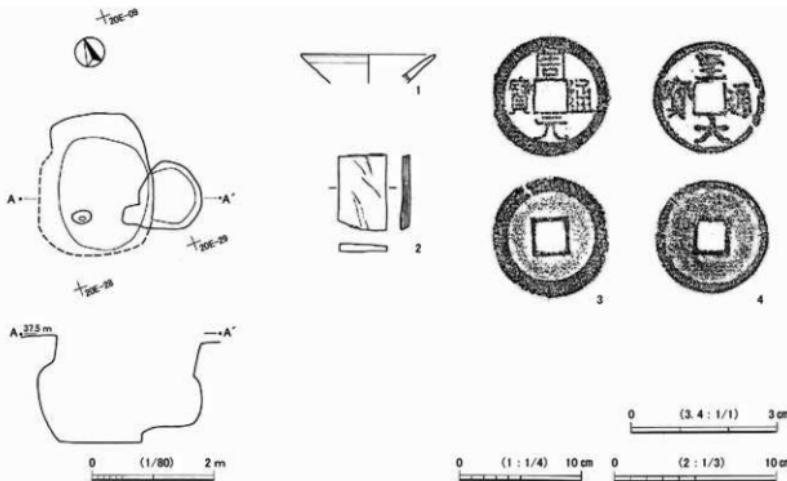
20E-08・17～19グリッドに所在する。地下室の平面形は隅丸方形で、東側に径112cmほどの円形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸230cm、東西軸190cmであるが、入口部分を含めると東西軸は270cmとなる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは176cmである。壁はオーバーハンジして立ち上がり、緩やかに天井部に移行する。天井部は遺構検出時に既に崩落していたが、床面から天井部までの高さは130cm前後と推測される。入口部分には、現状で床面から30cm上に段がある。段の部分の壁はややオーバーハンジしている。

図示した遺物は4点である。いずれも覆土中から出土したものである。第100図1はカワラケ杯である。2は厚さが0.6cmしかないが、砥石とみられる。上下端は欠損している。3・4は銭貨で、3は周通元寶である。背面は無文である。4は至大通寶である。遺物はこれらのはか、アカニシの貝殻1点も出土している。

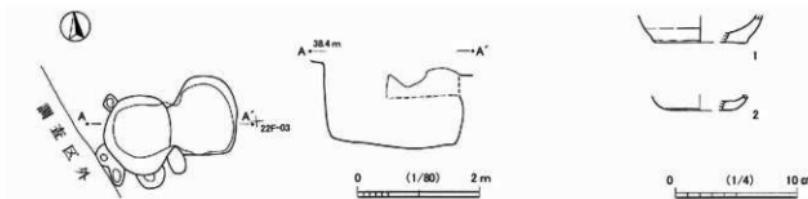
SK-082（第101図、図版9・95）

21F-91・92、22F-01・02グリッドに所在する。地下室の平面形は隅丸方形で、西側に径108cmの円形の入口部分を設けている。規模は、南北軸135cm、東西軸125cmであるが、入口部分を含めると東西軸は218cmとなる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは144cmである。床面は中央部がやや凹むがほぼ平坦で、壁はややオーバーハンジして立ち上がる。天井部は少し残存しており、壁から天井部へは緩やかに移行するとみられる。床面から天井部までの高さは、現状では85cm前後と推定される状況にあるが、天井の上部に落込みがあることから、本来の天井部はもっと高かった可能性が高い。入口部分は、床まで垂直方向の豊坑となっており段はない。入口部分の周間にピットがいくつか検出されているが、検出面からの深さは12cm～46cmと一定せず、平面形も統一性はない。遺構に伴うものかどうか、確定はできない。

図示した遺物は2点である。第101図1はカワラケ杯である。2はカワラケ小皿である。いずれも覆土中から出土したもので、器面は摩耗が著しい。



第100図 SK-073と出土遺物

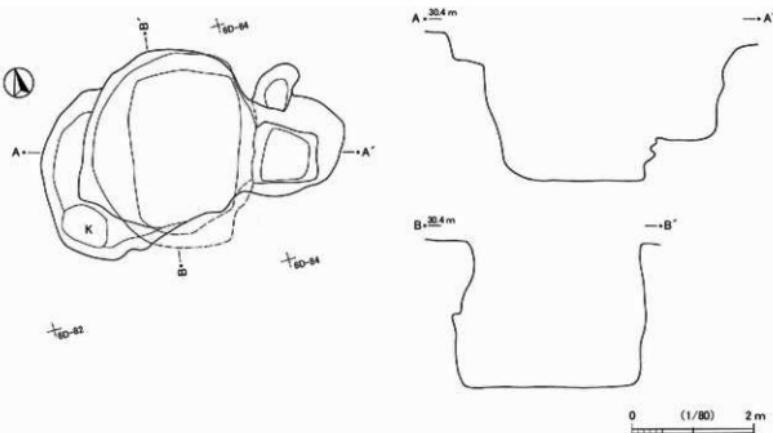


第101図 SK-082と出土遺物

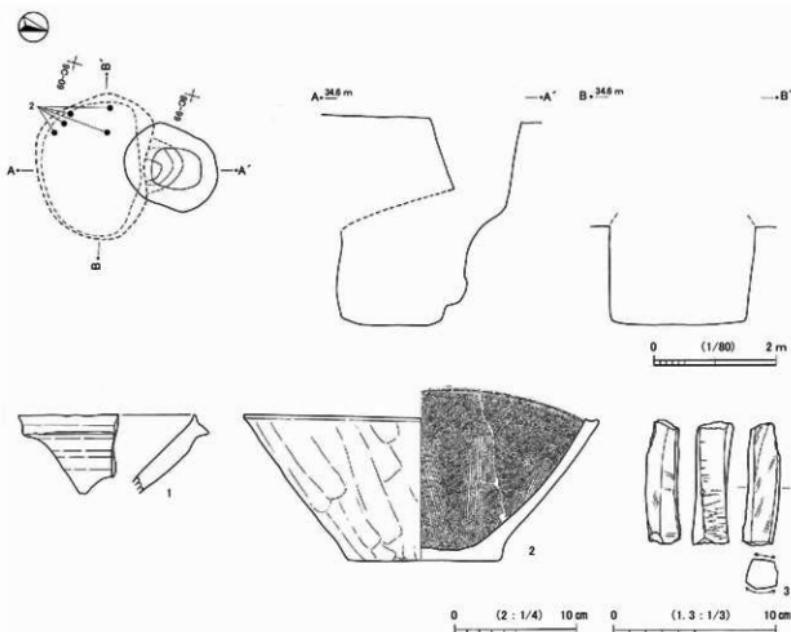
SK-095(第102図、図版10)

6D-62～64・72～74グリッドに所在する。地下室の形状は隅丸方形で、東側に長軸170cm、短軸150cmほどの隅丸方形の入口部分を設けている。堀SD-027と土壙SA-001の内側にあたる部分に位置する地下式坑で、入口部分は溝状遺構SD-028の西側に隣接している。規模は、南北軸320cm、東西軸350cmであるが、入口部分を含めると東西軸は500cmほどになる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは245cmである。壁は垂直に近い角度で立ち上がるが、ややオーバーハングするように見える。天井部は既に崩落しており、天井部の高さは明らかでない。入口部分には、床面から67cm上に段がある。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。



第102図 SK-095



第103図 SK-116 と出土遺物

SK-116 (第 103 図、図版 10・93・95・111)

8C-89・99、8D-90、9C-09 グリッドに所在する。地下室の形状は楕円形状で、北側に長径 155cm、短径 130cm の楕円形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸 170cm、東西軸 236cm であるが、入口部分を含めると南北軸は 297cm となる。地下室の床面は平坦で、検出面から床面までの深さは 330cm である。壁はほぼ垂直に、ややオーバーハングするように立ち上がる。天井部が残存しており、崩落の危険があつたため、調査は天井部を落として行った。床面からの天井中央部までの高さは 200cm 前後であったとみられる。入口部分はほぼなだらかな斜面状だが、地下室の床面から 40cm 上に壁面を抉った小さな段がある。また、その上部、地下室床面から 180cm 上にも、緩やかな段が認められる。当遺構は、SB-002～007 をはじめとする掘立柱建物跡群に隣接し、天井部の上には柵列 SA-002 も一部構築されている。それら遺構との関連も考えられるかもしれない。

図示した遺物は 3 点である。第 103 図 1 は常滑片口鉢である。2 は、地下室奥のほぼ床面から壊れて出土した在地産擂鉢で、全体の 80% 程度遺存している。底部外面はヘラナデで仕上げられており、底部の糸切り痕もヘラで丁寧にナデ消されている。内面の擂目は見込み部分にも 1 条認められる。胎土には砂粒や白色粒を多く含み、色調は内外面とも暗灰色を呈する。内面底部付近は、使用によるとみられる摩耗が著しい。時期は、古瀬戸後期様式 IV 期新段階併行と考えられる。3 は砥石で、上下端は欠損している。遺物はほかに、近世以降陶磁器の小破片も少量出土した。

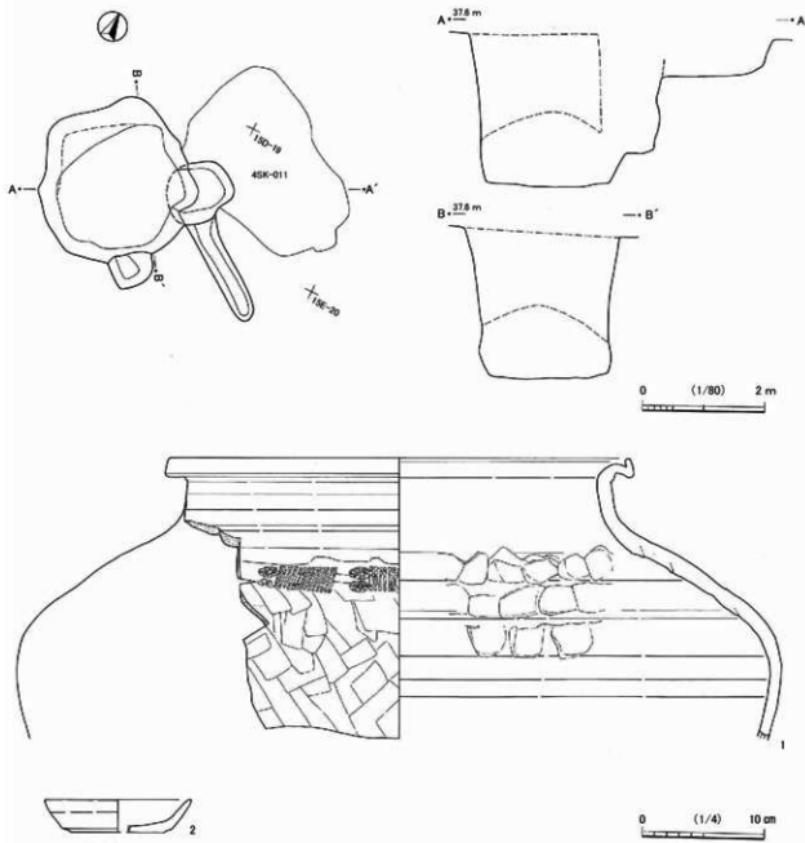
4SK-012 (第 104 図、図版 12・95)

15D-17～19・27～29 グリッドに所在する。地下室の形状は隅丸方形状で、北東側に長軸 105cm、短軸 90cm ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、北東－南西軸 225cm、北西－南東軸 255cm であるが、入口部分を含めると北東－南西軸は 320cm となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 249cm である。壁はほぼ垂直に、ややオーバーハングするように立ち上がる。検出時、天井部は少し崩落していたが残存しており、調査は安全のため天井部を落として行った。床面からの天井中央部までの高さは 120cm 前後であったとみられる。入口部分には、床面から 50cm 上に段がある。遺構の南東辺に土坑状の張出しが、また入口部分にも溝状の張出しがあるが、当遺構に付随するものかどうかははっきりしない。検出面からの深さは、土坑状の部分は 63cm、溝状の部分は 10cm 前後である。

図示した遺物は 2 点である。いずれも覆土中から出土したものである。第 104 図 1 は常滑の大甕で、復元口径は 37.6cm、最大径は 62.6cm ほどである。口唇は受け口状を呈する。外面肩部には、花文 2 個と格子文を 1 単位とする押印文がみられ、帯状に施されていたものとみられる。5 型式に比定されるものと考えられる。2 はカワラケ杯である。全体に器面が著しく摩耗している。ほかに、図示はしていないが、銭貨の小破片が出土している。銭貨は大破しており、銭種も不明である。また、近世以降陶磁器の小破片も少量出土した。

4SK-034 (第 105 図、図版 13)

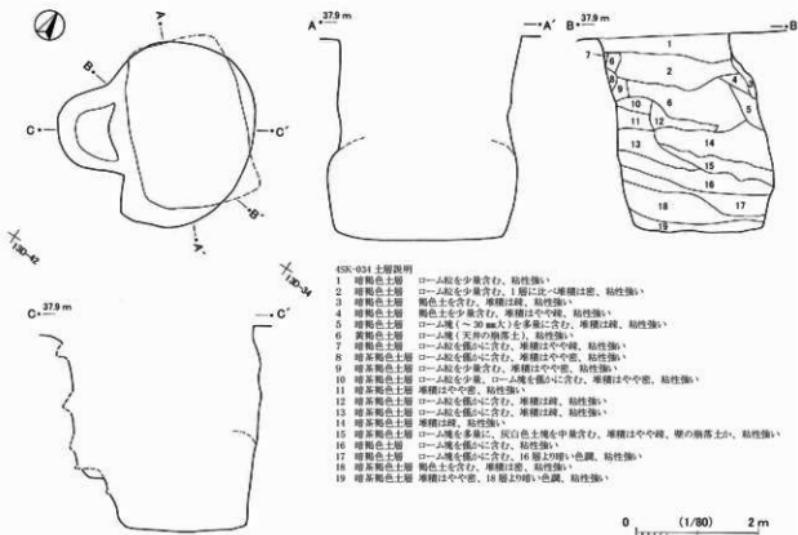
13D-12・21～23・31～33 グリッドに所在する。地下室の形状は隅丸方形状で、南西側に長軸 130cm、短軸 100cm ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、北西－南東軸 300cm、北東－南西軸 215cm であるが、入口部分を含めると北東－南西軸は 320cm となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面



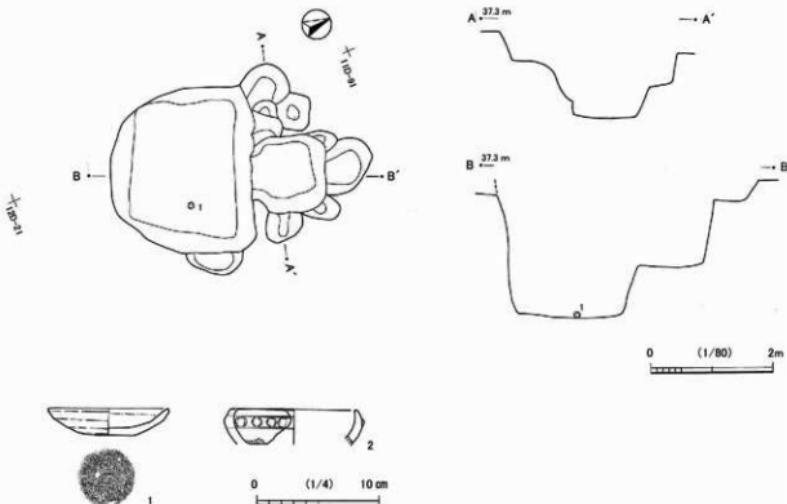
第104図 4SK-012と出土遺物

から床面までの深さは338cmである。壁はほぼ垂直に、ややオーバーハングするように立ち上がる。検出時、天井部は崩落していたが、床面からの天井中央部までの高さは170cm前後であったとみられる。入口部分には、床面から約100cm上に段があり、南西壁には足掛けと思われる奥行き15cm前後の凹みが4か所確認された。凹みから凹みの高さの間隔は35cm～80cmほどである。

遺物は出土していない。



第 105 図 4SK-034



第 106 図 4SK-039 と出土遺物

4SK-039 (第 106 図、図版 14・93・95)

11D-90～92、12D-00～02・10・11 グリッドに所在する。方形竪穴 4SK-038 と重複するが、新旧関係は、土層断面の観察により当遺構のほうが古い。地下室の形状は不整方形で、北側に長軸 125cm、短軸 120cm の隅丸方形状の入口部分を設けている。入口部分の周囲には段状の張出し部分がいくつもみられる。地下室の規模は、東西軸 270cm、南北軸 230cm であるが、入口部分とその周囲の段状の部分を含めると、南北軸は 430cm となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 230cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は崩落しており、天井の高さは明らかでない。

入口部分には、床面から 87cm 上に段があり、その北側 107cm 上には更に段状の部分がある。この部分の検出面からの深さは 36cm である。入口部分の東西側にも段状の部分がいくつかあり、それぞれ検出面からの深さは 46cm～117cm で、地下室に近い南側ほど深い。

図示した遺物は 2 点である。第 106 図 1 は、地下室ほぼ中央の床面から正位で出土したほぼ完形の瀬戸・美濃縁釉小皿である。灰釉が施されるが、釉は灰白色を呈している。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。2 は覆土中から出土した瓦質土器である。口縁部下に押印による珠文が巡る。胎土は砂粒を少量含み淡黄褐色を呈するが、表面は内外面ともミガキが入り、黒色を呈している。

4SK-045 (第 107 図、図版 14・95)

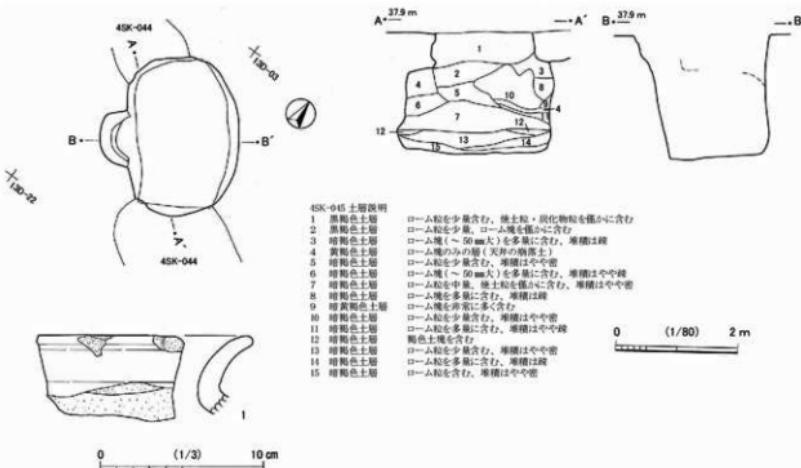
13D-02・03・12・13 グリッドに所在する。東側で方形竪穴 4SK-044 と重複するが、新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが古い。また、西側で方形竪穴 4SK-046 と接している。地下室の形状は不整方形で、南西側に長軸 90cm、短軸 45cm ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、北西～南東軸 258cm、北東～南西軸 180cm であるが、入口部分を含めると北東～南西軸は 225cm となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 202cm である。壁はほぼ垂直に、ややオーバーハングするように立ち上がる。検出時、天井部は崩落していたが、床面からの天井中央部までの高さは 150cm 前後であったとみられる。入口部分には、床面から約 160cm 上に僅かな段がある。

図示した遺物は 1 点である。第 107 図 1 は地下室奥、東隅部の覆土下層から出土した東海系の甕で、渥美窯産の可能性がある。色調は暗灰色を呈する。内面頸部は光沢を帯びて摩耗しており、転用砥石として使用されているかもしれない。ほかには、図示していないが、覆土中から近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土している。

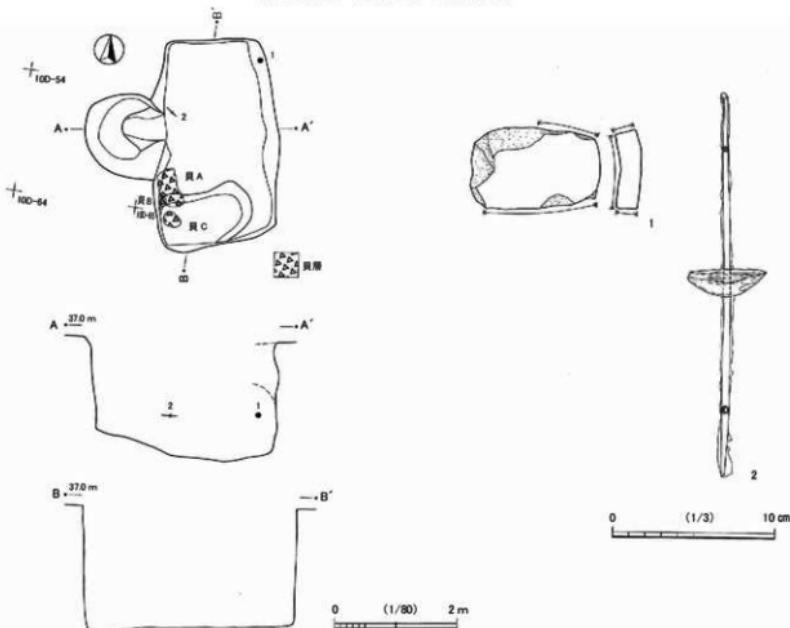
4SK-055 (第 108 図、図版 15・109・115・121)

10D-45・54～56・65・66 グリッドに所在する。地下室の形状は長方形で、西側に長径 135cm、短径 110cm ほどの楕円形の入口部分を設けている。規模は、南北軸、332cm、東西軸 200cm であるが、入口部分を含めると東西軸は 310cm となる。地下室の床面はほぼ平坦であるが、南西部がやや低くなる。検出面から床面までの深さは 198cm で、南西部は 208cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は一部残存しており、安全のために取り除いて調査した。床面からの天井の高さは 130cm 前後であったと推定される。入口部分に明確な段は認められないが、床面から緩やかに 40cm ほど高くなっている。

覆土中層には天井の崩落に伴うロームブロック主体の層があり、その直下からイボキサゴを主体とする貝層が検出された。貝層は 3 つのブロック状に存在しており、それぞれ「A」・「B」・「C」として全量を



第 107 図 4SK-045 と出土遺物



第108図 4SK-055 と出土遺物

サンプリングした。貝層中からは、貝類のほか、オオムギなどの植物遺体も検出された（付章参照）。

図示した遺物は2点である。いずれも覆土中から出土した。第108図1は常滑窯の胴部破片の転用砥石で、図の上下破断面を使用している。外面には自然釉がかかっている。2はほぼ完形の紡錘車である。軸は鉄製で、現状では先端は鋸に覆われているが、一方が鍵状に曲げてあることがX線写真から明らかである。また、折れ面の観察から、薄く細長い鉄板を巻いて中空に造っていることがわかる。軸の太さは中央付近が最も太く0.4cmである。円盤は木製とみられ、平面形は長軸4.8cm、短軸3.2cmのアーモンド形を呈し、木目は長軸方向に通っている。厚さは1.5cmである。遺物はこれらのほか、図示していないが中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土した。

4SK-085（第109図、図版16・95・116）

12C-56・57・66・67グリッドに所在する。地下室の形状は不整隅丸方形状で、東側に長径145cm、短径125cmほどの楕円形状の入口部分を設けている。規模は、北東—南西軸235cm、北西—南東軸165cmほどであるが、入口部分を含めると北西—南東軸は310cmほどとなる。更に、北西辺に張出し部がみられるが、これを含めると、355cmほどとなる。張出し部分の機能は明らかでないが、検出面からの深さは81cm、床面からの高さは170cmほどを測る。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは266cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は崩落しており、床面から天井部までの高さは明らかでない。入口部分には床面から108cmほど上に段がある。

図示した遺物は4点である。全て覆土中から出土したものである。第109図1はカワラケ杯である。2はカワラケ小皿である。3は鉄釘である。4は鉄製品の破片で、銭のようだが、肉眼でもX線写真でも文字は確認できない。復元径は2.4cmである。遺物はほかにも、中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土している。

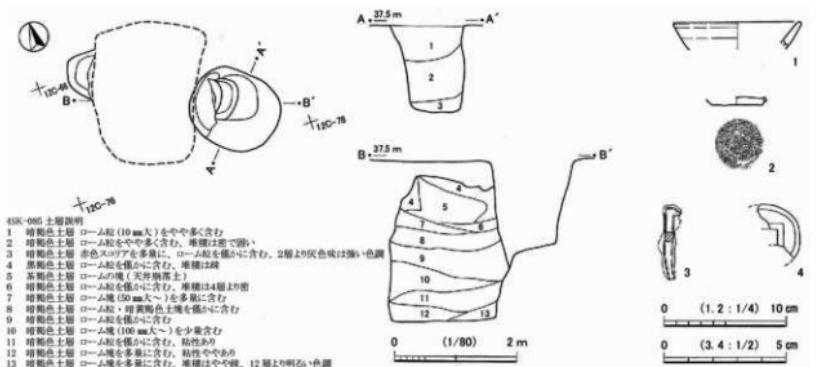
4SK-086（第110図、図版16）

12C-75・76グリッドに所在する。地下室部分は調査区外となり、入口部分のみ調査できた遺構である。地下室の形状や規模等は明らかでないが、近接する地下式坑4SK-085と同様、入口部分が東側に設けられた地下式坑である。入口部分の平面形は、径105cmの円形である。検出面から137cmの深さに段が設けられている。

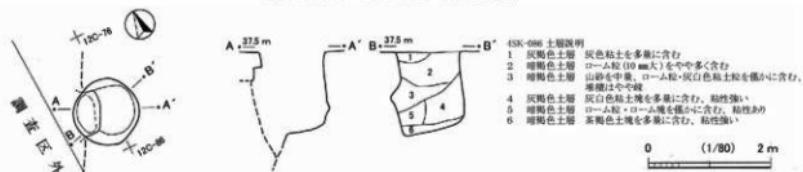
遺物は出土していない。

4SK-087（第111図、図版17・115）

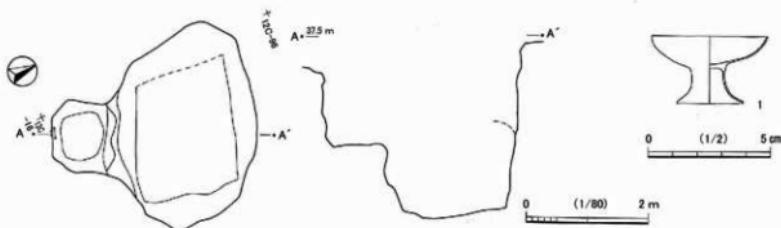
12C-95～97、13C-05～07グリッドに所在する。地下式坑4SK-088の西側に隣接しているほか、方形窓穴4SK-106なども隣接している。地下室の形状は長方形で、南側に長軸115cm、短軸95cmほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、東西軸310cm、南北軸225cmであるが、入口部分を含めると南北軸は320cmほどとなる。地下室の床面はやや凹凸があるがほぼ平坦で、検出面からの深さは281cmである。壁はややオーバーハンプする部分もあるが、ほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は一部残存しており、床面から天井部中央までの高さは150cm前後と推定される。入口部分には床面から109cmほど上に段があり、南壁には、段から53cm上に、幅20cm、奥行き5cmほどの足掛けとみられる凹みが1か所認



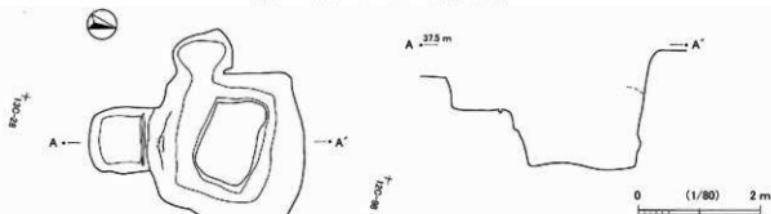
第109図 4SK-085と出土遺物



第110図 4SK-086



第111図 4SK-087と出土遺物



第112図 4SK-088

められる。

図示した遺物は1点である。第111図1は、銅製の仏飯器である。高杯状の形状で、口縁部・裾部ともに30%程度を欠損する。器厚はごく薄く、1mm足らずで非常に脆い。遺物はこのほかには、種類等不明だが、貝殻が1点出土したのみである。

4SK-088 (第112図、図版17)

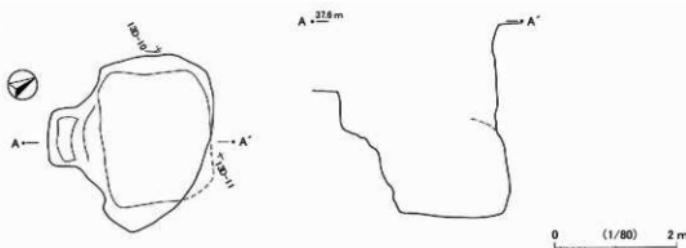
12C-97・98、13C-07・08・17・18グリッドに所在する。地下式坑4SK-087の東側に隣接し、4SK-108・109・110など多数の方形竪穴が南側へ東側に接し或いは重複している。重複する遺構との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構が方形竪穴4SK-109より古いことが明らかであるほかは、はっきりしない。地下室の形状は不整方形であるが、南西隅に奥行き60cmほど、不整形に造り出された部分がある。長軸105cm、短軸95cmの長方形を呈する入口部分は南側に設けられている。遺構の規模は、南北軸250cm、東西軸240cmであるが、造出し部分を含めると東西軸は300cmほど、入口部分を含めると南北軸は345cmほどとなる。地下室の床面は、20cm～40cmの幅で壁際が中央部に比べて数cmほど低くなっている。検出面から床面中央部までの深さは191cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は崩落していたが、床面から天井部中央部までの高さは140cm前後と推測される。入口部分には、床面から94cm上に段があり、地下室側の縁に沿って幅・深さともに5cmほどの溝が掘られている。また、床面から58cm上の南壁面には、幅25cm、奥行き10cmほどの足掛けとみられる凹みが1か所認められる。

遺物は出土していない。

4SK-091 (第113図、巻頭図版7、図版17)

13D-00・10・11・20グリッドに所在する。方形竪穴4SK-114・115・117及び土坑4SK-113と重複する。地下室の形状は隅丸方形で、南側に長軸110cm、短軸75cmほどの隅丸方形の入口部分を設けている。規模は東西軸278cm、南北軸205cmほどであるが、入口部分を含めると南北軸は280cmほどとなる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは315cmである。壁はややオーバーハングしながら立ち上がる。検出時、天井部は一部残存しており、床面から天井部中央までの高さは160cm前後と推測される。入口部分には床面から130cmほど上に段がある。

遺物は出土していない。



第113図 4SK-091

4SK-092 (第 114 ~ 116 図、図版 17・93・96・109・110・111・115・116・121・122)

13D-40・41・50・51 グリッドに所在する。地下室の形状はやや不整な隅丸方形で、南側に長径 115cm、短径 95cm の楕円形の入口部分が設けられている。規模は、東西軸 257cm、南北軸 205cm であるが、入口部分を含めると南北軸は 320cm ほどとなる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 244cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は崩落しており、床面から天井部までの高さは不明である。入口部分には床面から 170cm ほど上に段がある。入口部分の南側の壁には、足掛けと思われる幅 10cm 前後、奥行き 10cm ~ 25cm 程度の凹みが、床面から 60cm ~ 88cm の高さに 6 か所確認された。

当遺構の埋没状況については、土層断面の観察から、まず入口方向から土が地下室に入り、天井部が落ち、入口部分が埋まつた様子が伺えるが、入口部分を中心にイボキサゴを主体とするブロック状の貝層も検出された。貝層はそれぞれ「A」～「G」として全量をサンプリングした。貝層からは、貝殻のほか、ニシン科・スズキ属・タイ科・アジ科などの海産魚骨や、ネズミ・ヘビ類の骨、イネ・コムギ・ウメなどの植物遺体が確認された（付章参照）。また、入口部分の覆土上部からはほぼ完形のカワラケ杯 2 点（第 114 図 9・13）と重なった状態のほぼ完形のカワラケ小皿 2 点（第 115 図 28・30）がそれぞれほぼ正位で並んで出土した（図版 17）。入口部分を埋め戻してカワラケを置いた状況が考えられよう。

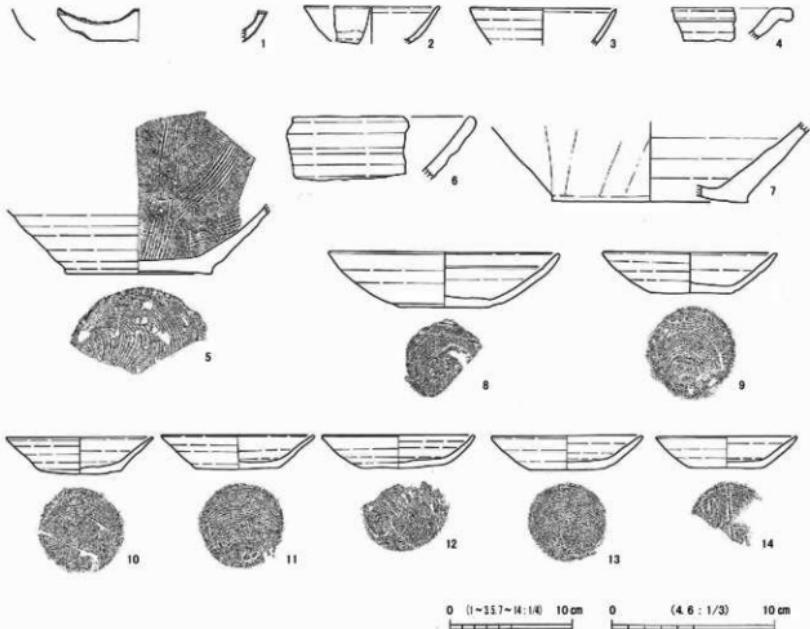
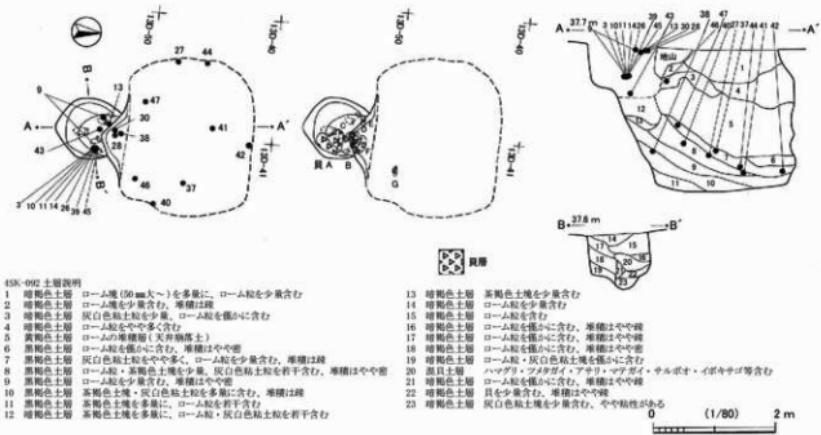
当遺構の覆土からは遺物が多数出土した。図示した遺物は 47 点である。図示したもののうち、入口部分の覆土から出土したのは先述のカワラケ 4 点ほか、第 114 図 3・10・11・14、第 115 図 26・39、第 116 図 43・45 である。そして、地下室の覆土上層から出土したものは第 116 図 46、下層から出土したものは第 115 図 27・37・38・40・41、第 116 図 42・44・47 である。そのほかは一括で取り上げられたものである。カワラケはほとんど入口部分から出土しており、金属製品は地下室部分から出土している傾向がみられる。

第 114 図 1 は青磁の鉢である。遺存部外面上端付近に陰刻文が観察されるが、はっきりせず図化できなかった。

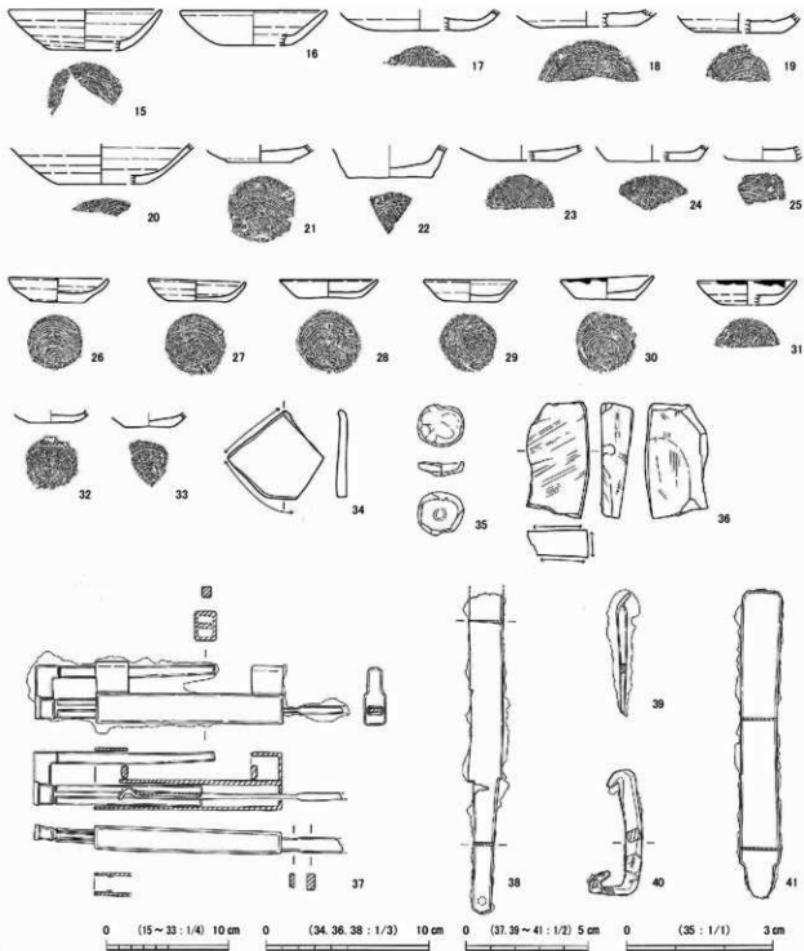
2 ~ 6 は瀬戸・美濃製品である。2 は縁軸小皿である。灰釉が施される。古瀬戸後期様式 IV 期に位置づけられるものと考えられる。3 は丸碗と考えられる。内外面とも灰釉が施釉されている。4 は折縁深皿で、内外面に灰釉が施釉されている。古瀬戸後期様式 IV 期古段階に位置づけられるものと考えられる。5・6 は擂鉢である。5 は古瀬戸後期様式 IV 期新段階に位置づけられるものと考えられる。6 の擂目は、遺存部下端にごく僅かに遺存しているのみである。

7 は常滑窯の底部である。

8 ~ 第 115 図 33 はカワラケで、8 ~ 第 115 図 25 は杯、26 ~ 33 は小皿である。カワラケは全て胎土に砂粒と白色針状物質を含んでいる。8 は、接合しない同一個体からの復元であるが、口径が 19cm ほどに復元される。9 は全体の 70% 程度の遺存度である。10 は、底部は完存するが、口縁部はごく僅かしか遺存していない。やや丸底気味である。11・12 は一括で破片として取り上げられたが、接合して全体の 70% 程度まで復元されたものである。13 はほぼ完形である。当遺構から出土したカワラケはほとんど全て暗茶褐色を呈しているが、11 ~ 13 は暗褐色を呈している。14 は全体の 25% 程度の遺存度である。26 は、全体の 70% 程度の遺存度で、遺存する口唇部に 1 か所、煤の付着が認められる。27 は完形である。28 はほぼ完形で暗黄褐色を呈するが、外面は全体的に煤けてほぼ黒色を呈している。29 もほぼ完形で、内外面全面的に煤けたように黒褐色を呈しており、内面見込み部分には磨滅がみられる。30 はほぼ完形で、



第114図 4SK-092と出土遺物（1）

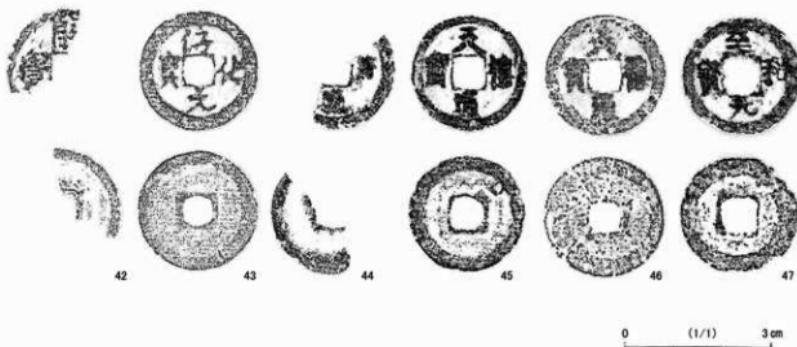


第 115 図 4SK-092 と出土遺物 (2)

口唇部ほぼ全周に煤が付着している。31 は全体の 25% 程度の遺存度であるが、遺存している口唇部全体には煤が付着している。

34 は須恵器の転用砥石で、破断面を使用している。内外面も摩耗しており、使用されている可能性がある。

35 は貝サンプル中から出土し、篩によって検出した土製品である。形状は器状で、大きさは口径・底



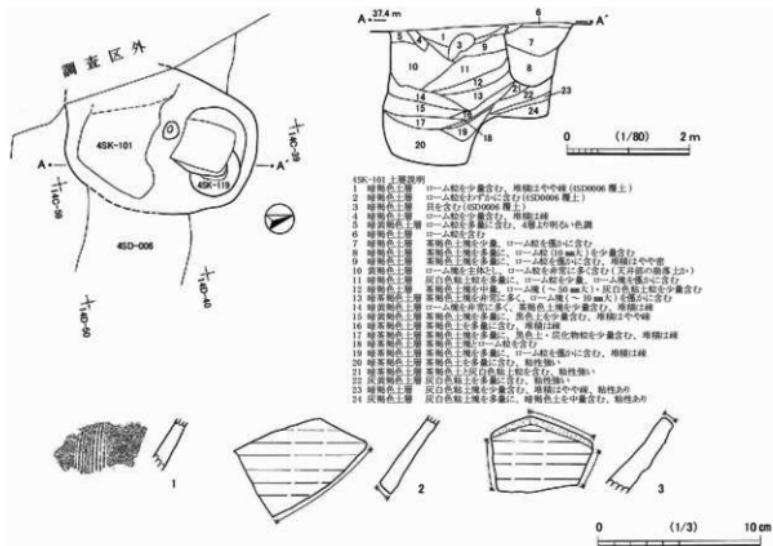
第 116 図 4SK-092 と出土遺物 (3)

径ともに 0.9cm、高さ 0.3cm、器厚は 0.1cm ほどしかないが、底部の周囲に側面の粘土紐を貼り付けて、内面の接合痕を丁寧にナデ消して作られている。外面は、底部がやや突出し、接合痕が残されている。胎土は緻密で、色調は褐色を呈している。完形と考えられるが、或いはその大きさから単独の土製品ではなく何かの一部である可能性もあるだろう。用途等は不明である。

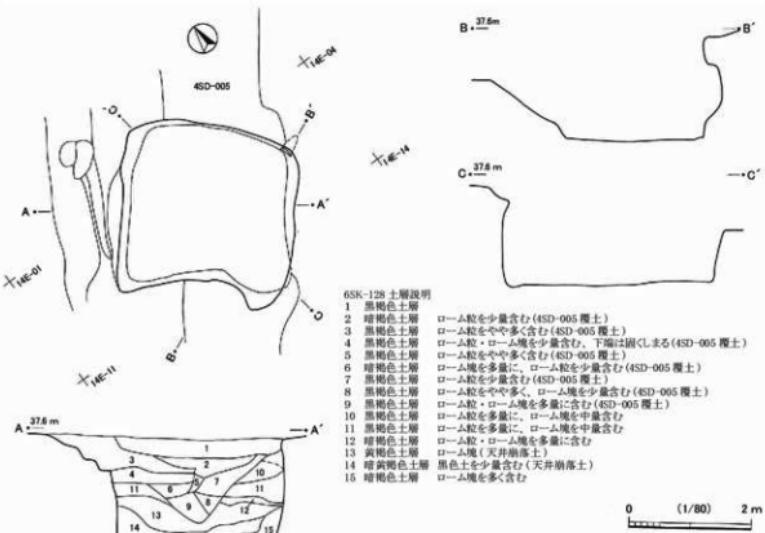
36 は砥石である。図の上下端と左側面は欠損している。

37 ~ 41 は金属製品である。37 は鉄製の錠前である。凹字状を呈する牡金具に図左側から牡金具が通されているが、図右側から鍵が差し込まれ、開いた状態のままで錆着している。錆がひどく、図は X 線写真から推定復元したものであるが、細部は不明な部分が多い。牡金具は、露出部の錆が特にひどいが、バネ軸は縦に 2 段あり、バネが横位置になる形状とみられる。鍵は、柄部が僅かに露出するのみでほとんどが牡金具の中に入っている。細かい形状が明らかにならない。恐らく、解錠部の軸が二叉に分かれ、先端に付く鍵爪部の形状は基本的には四字状と思われるが、X 線写真では、横から見るとへ字状に屈曲しているように見える。露出している柄部には紐通し孔はみられず、折損していると考えられる。牡金具の全長は 7.6cm、幅は 2.5cm、厚さは 0.9cm である。牡金具の推定全長は 7.4cm である。鍵の推定現存長は 9.1cm である。38 は短刀である。切先は欠損しており、全長 19.6cm、刀身長 11.5cm、茎長 8.1cm である。刀身の最大幅は 2.1cm、最大厚は 0.2cm である。茎の端部に X 線写真で目釘穴が 1 か所確認できる。39・40 は鉄釘である。39 は錆膨れが著しいが、ほぼ完形とみられる。頭部は薄い造りで、折り曲げられている。40 も複雑に曲がっているが、完形とみられる。木質が若干付着している。41 は細長い板状の鉄製品で、欠損部がないとみられる。下部には間があり、先端は丸く整えられている。

第 116 図 42 ~ 47 は銭貨である。42 は開元通寶である。全体の 4 分の 3 を欠損し状態が非常に悪いが、「開」と「寶」の字が読める。遺存部分の背面上は無文である。43 は淳化元寶で、書体は草書である。44 は祥符通寶である。全体の 4 分の 3 を欠損し状態が非常に悪いが、「符」と「通」の字が読める。45・46 は天禧通寶である。47 は至和元寶で、書体は真書である。



第117図 4SK-101と出土遺物



第118回 6SK-128

4SK-101 (第 117 図、図版 18・96・109)

14C-38・39・48・49 グリッドに所在する。西隅は調査区外となる。溝状遺構 4SD-006 と重複するが、土層断面の観察から、当遺構の天井部が崩落してから 4SD-006 が構築されたのが明らかである。地下室の形状は、隅丸方形とみられる。北側に長軸 200cm、短軸 125cm ほどの隅丸方形の入口部分が設けられている。規模は、それぞれ現存値で東西軸 200cm 以上、南北軸 180cm であるが、入口部分を含めると南北軸は 305cm ほどである。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 238cm である。壁はややオーバーハンプしながら立ち上がる。検出時、天井部は既に崩落しており、床面から天井部までの高さは不明である。入口部分には床面から 77cm ほど上に段がある。

図示した遺物は 3 点である。第 117 図 1 は在地産擂鉢である。色調は暗灰色を呈する。2・3 は転用砥石である。2 は、遺存部分に捕目はみられないが、瀬戸・美濃擂鉢の破片で、破断面が使用されている。3 は I 類に分類される常滑片口鉢の破片である。破断面が使用されている。

6SK-128 (第 118・325 図、図版 19)

13E-92・93、14E-01～03・12・13 グリッドに所在する。溝状遺構 4SD-005 と重複するが、土層等の観察から、当遺構を埋め戻した後に 4SD-005 を構築したことが明らかである。当遺構は、検出時には入口部分は 4SD-005 によって削平されていたが、入口部分を南西側にもつ地下式坑であったと推定される。地下室の形状は、一辺 280cm ほどの隅丸正方形とみられる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 173cm である。ややオーバーハンプしながらほぼ垂直に立ち上がる壁の現存高は 145cm ほどである。地下室部分はロームブロックで埋め戻され、天井部は遺存していないかったが、天井部の高さは 140cm 前後と推測される。なお、北西壁から外側に向かって階段状の掘込みがあるが、土層断面の観察から当遺構とは関係がないと考えられる。

遺物は、中世陶磁器の小破片が少量出土した。そのうち常滑片口鉢の破片 1 点は、4SD-005 から出土した破片と接合し、4SD-005 出土遺物として掲載した (第 325 図 15)。ほかは図示していない。

第 3 節 方形竪穴・竪穴状遺構

1 概要

単なる土坑とは異なり、竪穴住居のように床面が平らで堅く、壁がほぼ垂直に立ち上がる遺構のうち、平面形が方形を呈するものを方形竪穴、方形ではないものを竪穴状遺構とした。床面や遺構周辺にはピットを作ることもあるが、特に遺構周辺に検出されるものは、遺構に伴うものかどうか判別し難い面もある。覆土は、いずれも單一など概して極めてシンプルで、一気に埋め戻された様相を呈している。出土遺物は、概して少ない傾向である。遺構の分布は 23G グリッド以北に限られる。

検出された方形竪穴・竪穴状遺構は複数基重複しているものが多く、その場合、調査中に重複が判明した段階でそれぞれ別の遺構番号や枝番号を付したものがある一方、番号を一つで通したものもある。あくまで遺構番号の付いた遺構数として、方形竪穴は 106 基、竪穴状遺構は 10 基検出された。

なお、方形竪穴と竪穴状遺構の遺構種別記号は、「SI」が付されている場合と「SK」が付されている場合とがあるが、ここでは「SI」を先に、「SK」を後とし、その内でそれぞれ、調査次・番号の若い順に並べて掲載することとした。

2 遺構と遺物

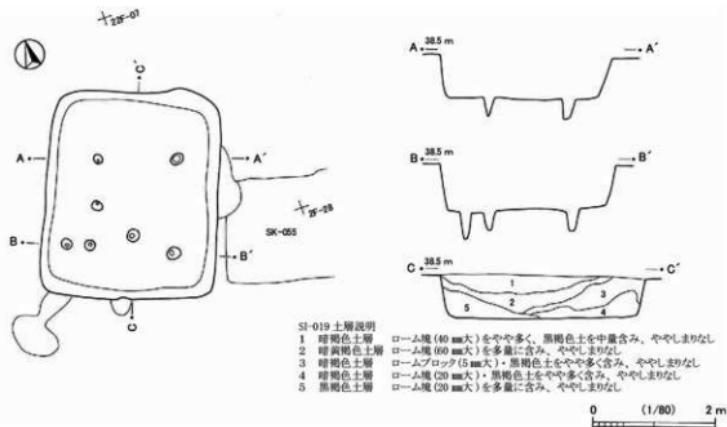
SI-019 (第 119 図、図版 3)

22F-06・07・15～17・25～27 グリッドに所在する方形竪穴である。東側には方形竪穴 SK-055 が隣接している。遺構の規模は長軸 340cm、短軸 283cm、検出面からの床面の深さは 76cm である。床面には、深さ 30cm～44cm を測る複数のビットがみられるが、ビットは遺構周辺にも分布している。

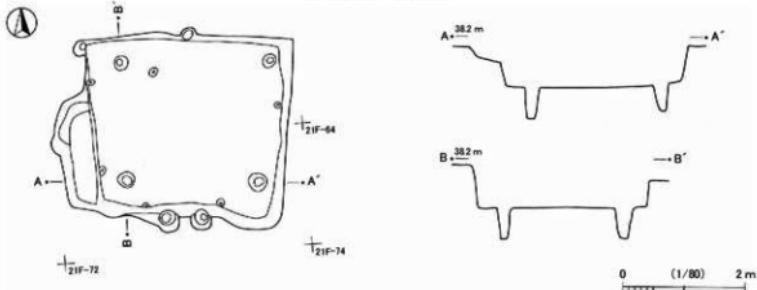
遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SI-020 (第 120 図、図版 3)

21F-52・53・62・63 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 230cm、短軸 260cm、検出面からの床面の深さは 72cm である。南西部には幅 60cm ほどの段があり、段の高さは床面から 37cm ほどである。床面や壁際には複数のビットが検出されており、中でも四隅のものが深く、床面から 35cm～50cm を測る。ほかのビットは、深さ 10cm 前後である。遺構の北側には、弧状に広がる溝状遺構 SD-014 が隣接している。



第 119 図 SI-019



第 120 図 SI-020

遺物は、中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量、及び混入品とみられる土器の小破片が少量出土したが、図示したものはない。

SI-022・025・SK-041（第 121 図、図版 3・97）

21F-67・76～79・86～88・89・97・98 グリッドに所在する方形竪穴群で、少なくとも 3 基以上の遺構が重複しているとみられる。新旧関係は、断面の観察から、SI-022 と SI-025 はいずれも SK-041 より新しく、更に SI-025 より SI-022 のほうが新しい。南西に位置する SI-022 は、現状で長軸 358cm、短軸 255cm を測るが、西側の段の部分は断面の観察から別の古い遺構とみられ、これを抜くと長軸は 263cm となる。床面には円形土坑状にやや凹む部分と複数のピットがあり、円形土坑状の部分の深さは床面から 23cm である。ピットの床面からの深さは、円形土坑状の凹みに接しているものは 13cm で、そのほかは 30cm～41cm である。北東に位置する SI-025 は、長軸 395cm、短軸 234cm、検出面からの深さは 86cm である。SI-022 と SI-025 を内包するように位置するのが SK-041 で、規模は推定長軸 595cm、推定短軸 348cm であるが、南東隅部分は、別の遺構と重複している可能性があり、その場合、長軸の規模はもう少し小規模となる。また、北西隅部分で土坑 SK-040 及び SK-042 と重複するが、新旧関係は明らかでない。検出面からの深さは 31cm である。これら遺構の周囲にはピットがいくつか見られるが、遺構に伴うものかどうか不明である。

図示した出土遺物は 1 点である。第 121 図 1 は SI-025 の覆土中から出土した瀬戸・美濃天目茶碗である。古瀬戸後期様式 II～III 期に位置づけられるものと考えられる。SI-025 からは、そのほか近世以降陶磁器の小破片が少量とアカニシの貝殻 1 点が出土している。SI-022・SK-041 からは、いずれも混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SI-024（第 122 図、図版 3）

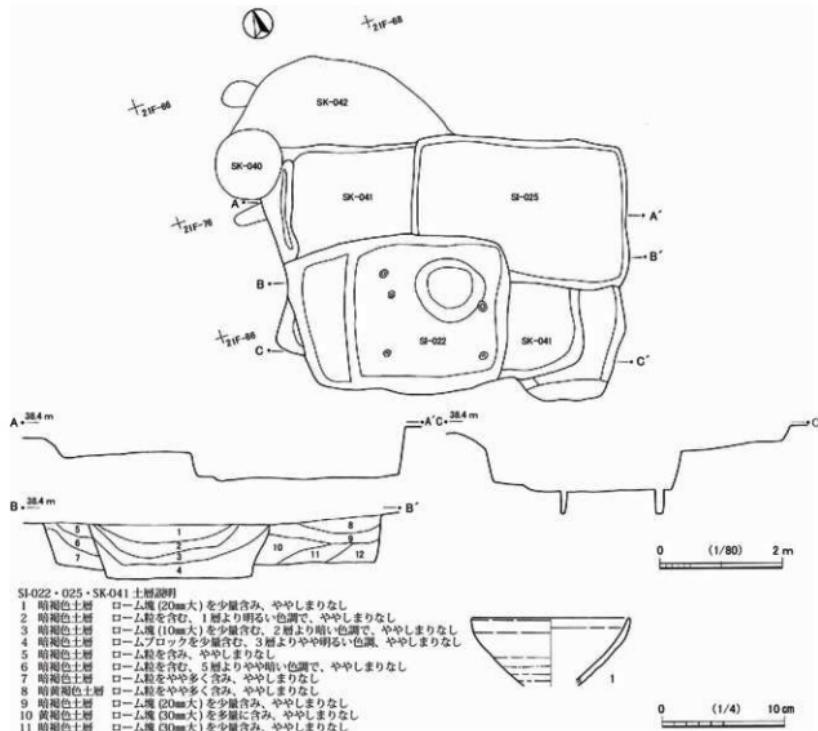
21F-64～66・74・75 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 335cm、短軸 242cm、検出面からの床面の深さは 76cm である。北西隅で方形竪穴 SK-038 と重複しており、新旧関係は、断面の観察から SK-038 のほうが新しいと判断されるが、いずれも覆土は全体的にしまりのない土で、あまり時間差はないと考えられる。床面からは複数のピットが検出されており、床面からの深さは 26cm～32cm である。なお、遺構の周辺からもピット群が検出されている。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

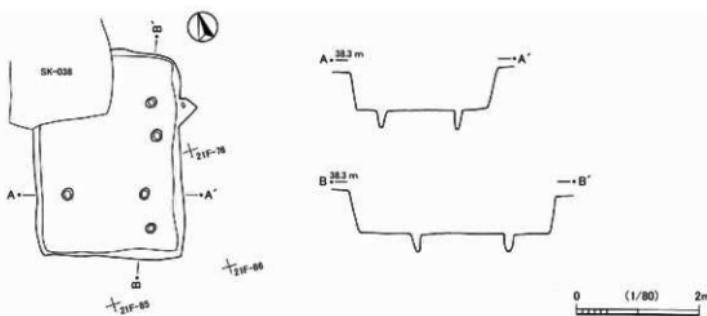
SI-028（第 123 図、図版 97・111）

20E-59・69、20F-50・51・60・61 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は一辺 300cm ほどの隅丸正方形を呈する。検出面からの床面の深さは 94cm である。方形竪穴 SK-056～058 と重複するが、それより新しくみられる。床面には、壁溝と複数のピットが存在する。壁溝の床面からの深さは 5cm 前後であるが、方形竪穴 SK-061・063 と隣接する南側には壁溝は検出されていない。ピットは、床面からの深さは 11cm から 52cm を測る。規則性ははっきりしないが、西側壁～北側壁のものが比較的深い。

図示した出土遺物は 3 点である。第 123 図 1 は N 字状折返し口縁をもつ常滑窯の破片である。8 型式あたりに比定されるものと考えられる。2・3 は砥石である。いずれも上端は折損している。遺物はほかに、近世以降陶磁器・土器の小破片も少量出土した。



第 121 図 SI-022・025・SK-041 と出土遺物



第 122 図 SI-024

SI-029 (第 124 図)

19E-56・57・66・67 グリッドに所在する方形竪穴である。北側は調査不能であったが、平面形は隅丸方形と考えられる。規模は、東西軸 294cm、検出面からの床面の深さは 76cm である。床面の東壁際と西壁際にはピットがある。ピットの床面からの深さは、東壁のものが 39cm、西壁のものが 29cm である。

遺物は、近世以降陶磁器・土器の小破片が出土した。

SI-033 (第 125 図、図版 3)

20E-26・27・36・37 グリッドに所在する方形竪穴である。北東から南西にかけて SD-020 と重複するが、平面形は一辺 265cm ほどの正方形状を呈するとみられる。検出面からの床面の深さは 47cm である。床面には不整形及びピット状の落込みがあり、落込みの床面からの深さはいずれも 30cm 前後である。また、壁面には、四隅及び東壁を除く各壁の中央部付近にピットが穿たれているほか、東壁と南壁の一部には壁溝もある。ピットの床面からの深さは、北東隅のものは 30cm だが、ほかは 51cm～72cm を測る。

遺物は出土していない。

SI-036A (第 126 図)

20F-58・67～69・77～79・87～89 グリッドに所在する方形竪穴である。プランは明確ではないが、南北軸 423cm、東西軸 386cm、検出面からの床面の深さ 45cm ほどの隅丸方形の部分を主体とし、その北側と東側には別の方形竪穴等の遺構が重複しているとみられる。床面上や壁際にはピットが多数あるが、床面からの深さは、いずれも深くても 30cm 程度で、浅いものが多い。

なお、遺構番号について、当遺構は平成 20 年度に「SI-036」として調査した方形竪穴であるが、平成 21 年度調査区においても「SI-036」として調査をした別の遺構（古墳時代竪穴住居跡）が存在している。報告にあたって、当遺構を「SI-036A」、竪穴住居跡を「SI-036B」として区別することとしたが、両遺構は直接重複関係にあるわけではない。また、「SI-036B」は本報告書には収録していない。

遺物は出土していない。

SI-041 (第 127 図)

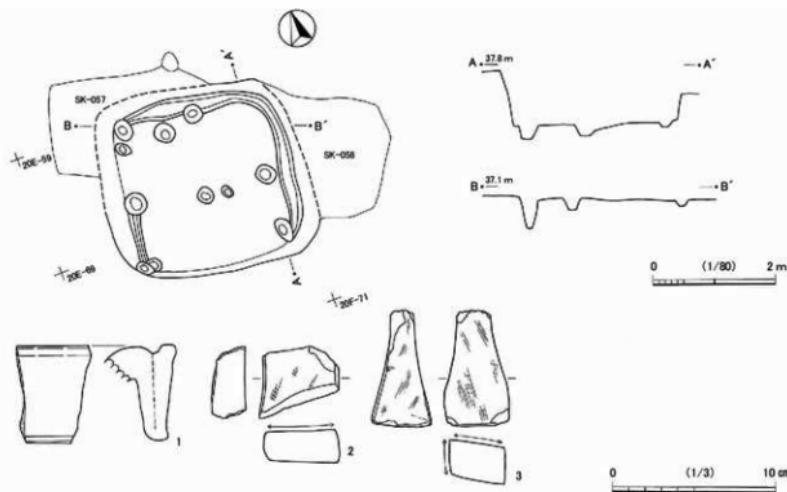
7C-52・62 グリッドに所在する竪穴状遺構である。遺構の大半は西側の調査区外へ続くとみられ、平面形ははっきりしないが、隅丸方形を呈する可能性もある。検出面からの床面の深さは 14cm ほどである。遺存する東壁際にはピットがいくつかみられるが、床面からの深さは 24cm・46cm・62cm と不統一である。

遺物は出土していない。

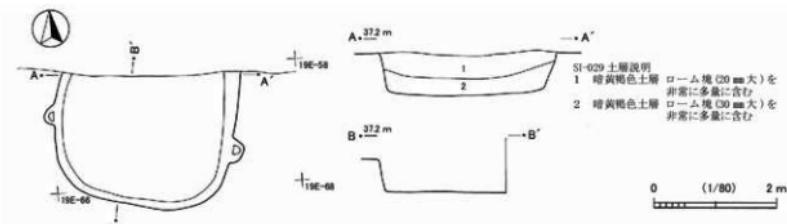
SI-042 (第 128 図)

9D-14・24・25 グリッドに所在する竪穴状遺構である。平面形は長軸 180cm、短軸 160cm ほどの不整隅丸方形状を呈する。床面には、南側に深さが 45cm～61cm のピットが集中してみられる。検出面からの床面の深さは 19cm である。当遺構は掘立柱建物跡群 SB-002～007 の南に隣接しており、軸方向もそのうちいくつかの掘立柱建物跡とほぼ一致していることから、それらとの関連性も考えられる。

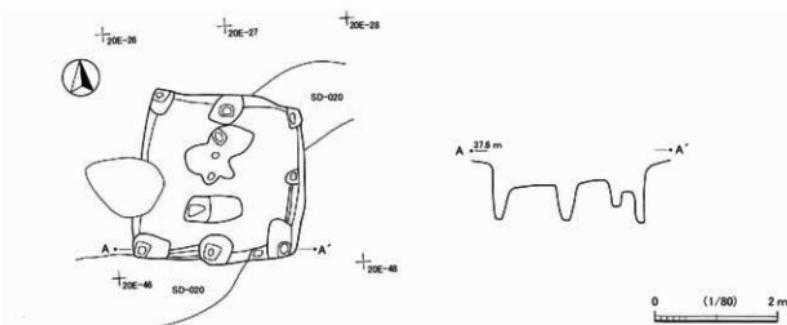
遺物は出土していない。



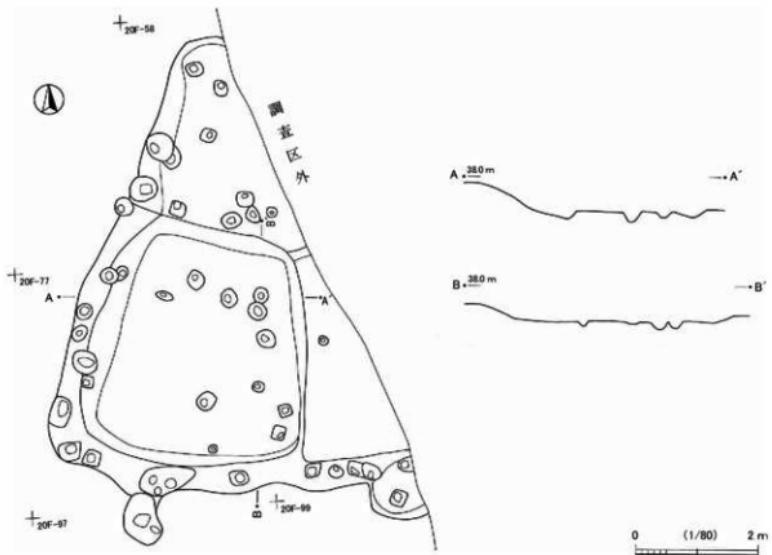
第123図 SI-028と出土遺物



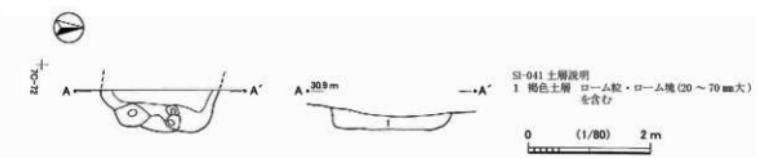
第124図 SI-029



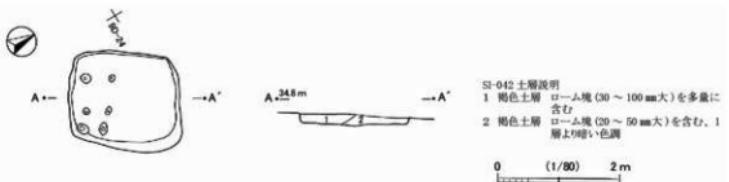
第125図 SI-033



第 126 図 SI-036A



第 127 図 SI-041



第 128 図 SI-042

SI-045 (第 129 図)

土壠 SA-001 下から検出された、6C-59、6D-50・60 グリッドに位置する竪穴状遺構である。土坑 SK-126・127 と重複するが、新旧関係はいずれも明らかではない。平面形は長軸 210cm、短軸 185cm ほどの隅丸方形状を呈する。検出面からの床面の深さは 39cm である。床面や壁にはピットがいくつかみられる。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

2SI-015 (第 130 図、図版 3)

23H-10・20 グリッドに所在する竪穴状遺構である。南側は搅乱により失われている。また、東側は調査区外へ続く。検出された部分からは、全体の平面形は直径 2m ほどの円形状になると推測される。検出面からの床面の深さは 10cm 前後で、床面には浅いピットがみられる。遺構周辺にはピットが群在しており、柵列 2SA-002 の延長上に位置することから、関連性も考えられよう。

遺物は出土していない。

2SI-017 (第 131 図、図版 3・116)

22G-77・78・87・88・96～98、23G-06～08 グリッドに所在する竪穴状遺構である。北側は調査区外へ続く。検出された部分からは、全体の平面形は隅丸方形状になると推測される。短軸は 330cm、長軸は現存値で 730cm ほどである。検出面からの床面の深さは 33cm ほどである。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。西側の床面と壁面にピットが集中してみられる。

図示した遺物は 2 点である。第 131 図 1 は板状の鉄製品である。2 は棒状の鉄製品である。そのほかには、混入品とみられる土器の小破片が少量出土した。

SK-009・035 (第 132 図、図版 4・6)

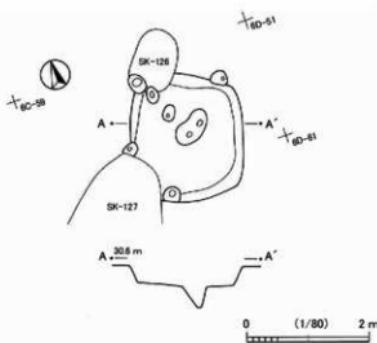
近接して存在する 2 基の方形竪穴で、SK-009 は 22F-14・15・24・25 グリッド、SK-035 は 22F-34・35・44 グリッドに所在する。規模は、SK-009 は長軸 140cm、短軸 128cm、SK-035 は長軸 203cm、短軸 174cm、検出面からの深さはそれぞれ 66cm、101cm である。

遺物は、SK-009 からアカニシの貝殻 1 点、SK-035 から混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみで、図示したものはない。

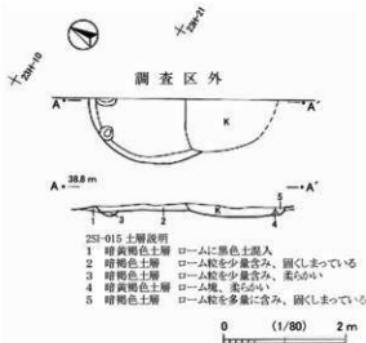
SK-011 (第 133 図、図版 4・97)

21F-81・82・91・92 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、北西隅に複数のピットが連結したような張出しあるが、概ね一辺 200cm ほどの隅丸正方形状を呈する。遺構の南東部分で土坑 SK-025 と重複するが、新旧関係は明らかではない。床面中央部に長軸 88cm、短軸 55cm、床面からの深さ 20cm ほどの梢円形の落込みがある。検出面からの床面の深さは 44cm である。

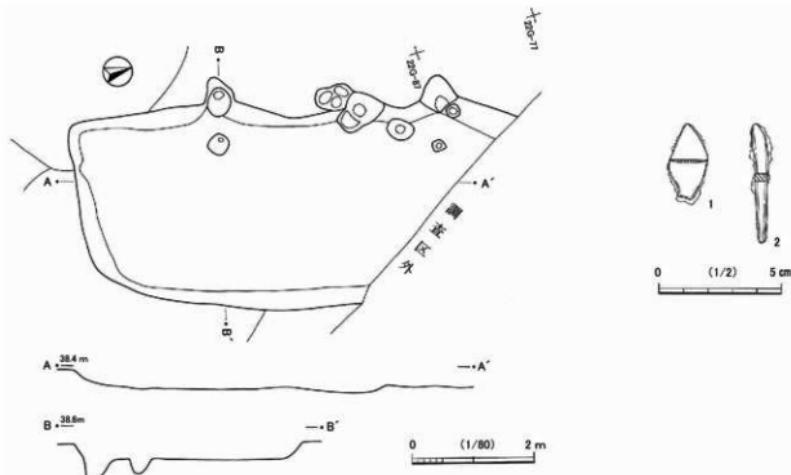
図示した遺物は 1 点である。第 133 図 1 は瀬戸・美濃の灰釉皿で、折縁中皿かもしれない。古瀬戸後期様式 II 期頃に位置づけられるものと考えられる。内外面に施釉されるが、内面はハケ塗りがなされているようである。遺物はほかに、近世以降土器の小破片も少量出土した。



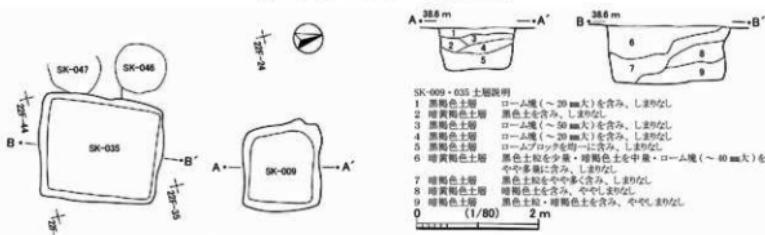
第129図 SI-045



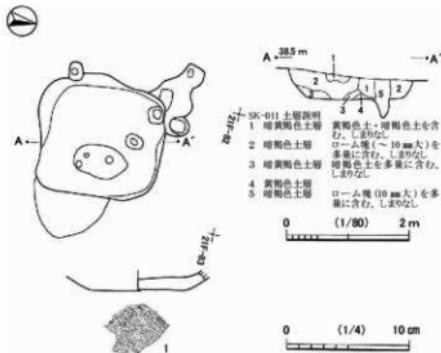
第130図 2SI-015



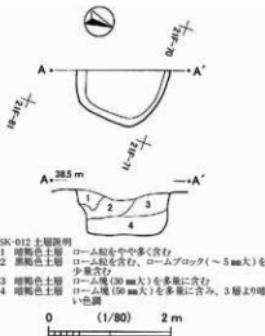
第131図 2SI-017と出土遺物



第132図 SK-009・035



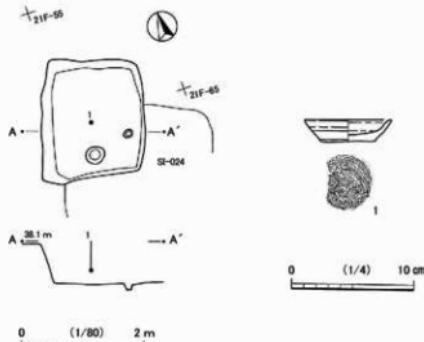
第133図 SK-011と出土遺物



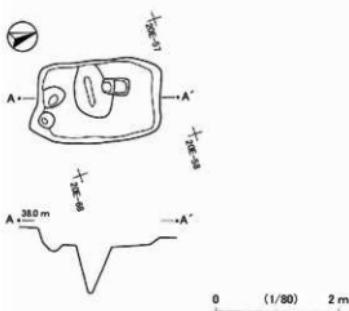
第134図 SK-012



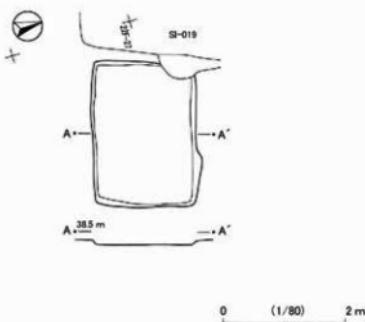
第135図 SK-014



第136図 SK-038と出土遺物



第137図 SK-051



第138図 SK-055

SK-012 (第 134 図、図版 4)

21F-70 グリッドに所在する方形竪穴である。西側は調査区外となるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、調査した部分で南北軸 144cm である。検出面からの床面の深さは 56cm である。

遺物は図示したものはない。

SK-014 (第 135 図)

21F-12・13・22・23 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は基本的には長軸 182cm、短軸 118cm の隅丸方形を呈する。床面中央部に、床面からの深さが 15cm の土坑状の落込みと、30cm 前後のピットが 2か所ある。そのほか壁際に、床面からの深さがそれぞれ 48cm・32cm のピットが 2か所みられるが、遺構周辺にはピットが群在しており、それらとの関係もあるかもしれない。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-038 (第 136 図、図版 3・93)

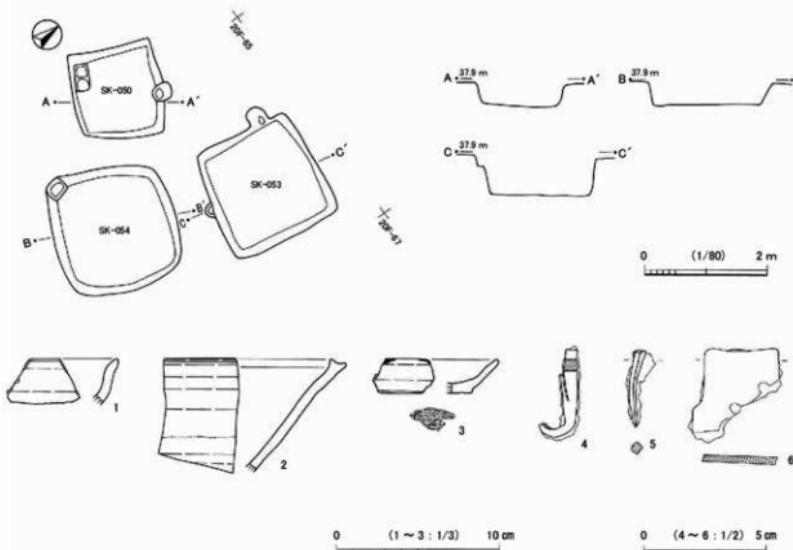
21F-54・55・64・65 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 205cm、短軸 176cm、検出面からの床面の深さは 72cm である。南東隅で方形竪穴 SI-024 と重複しており、新旧関係は、断面の観察から SK-038 のほうが新しいと判断される。床面からは 2基のピットが検出されており、床面からの深さは南側のものが 43cm、東側のものが 11cm である。

図示した出土遺物は 1 点である。第 136 図 1 は、遺構中央、床面よりやや上のレベルから出土したカワラケ小皿である。全体の 60% 程度の遺存度で、遺存部口唇部には煤が少し付着している。そのほか、角材・丸材・枝状のもの等を含む炭化材がごく細片を除いて 180 点 (1.030 g) 出土したが、明らかな加工をもつものは見当たらない。

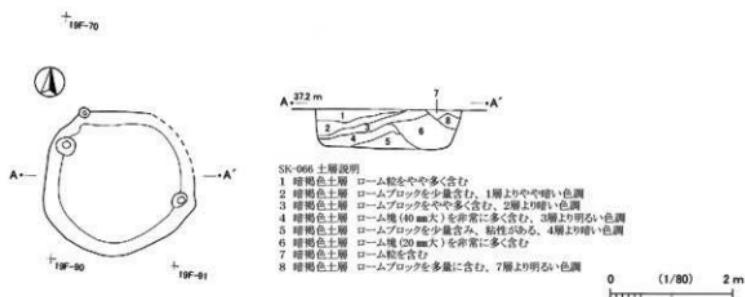
SK-050・053・054 (第 139 図、図版 7・8・97・116)

20F-64～66・74～76・85・86 グリッドに所在する 3 基のそれぞれ独立した方形竪穴である。平面形は、SK-050 は一辺約 140cm の正方形状、SK-053 は一辺約 190cm の正方形状、SK-054 は一辺約 200cm の隅丸正方形状を呈している。検出面からの床面の深さは、SK-050 が 37cm、SK-053 が 66cm、SK-054 が 41cm である。いずれも床面壁際にピットが一部みられるが、床面からの深さは全て 10cm 前後のごく浅いものである。

図示した遺物は 6 点である。第 139 図 1・2 は瀬戸・美濃製品で、1 は灰釉平碗とみられる。内外面に施釉されている。古瀬戸後期様式のものと考えられる。2 は折縁深皿である。内外面に灰釉が施されるが、灰釉は被熱により白く変質している。古瀬戸後期様式 IV 期新段階に位置づけられるものと考えられる。3 はカワラケ小皿である。外面口唇部及び内面は煤が付着し黒色を呈している。4・5 は鉄釘で、いずれも頭部は欠損している。6 は板状の鉄製品で、孔が 2 か所認められる。1・2 は SK-050 から、3 は SK-054 から、4～6 は SK-053 から出土した。なお、SK-050 からは、ほかにアカニシの貝殻 1 点も出土している。



第139図 SK-050・053・054と出土遺物



第140図 SK-066

SK-051 (第137図、図版7)

20E-57・67 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 200cm、短軸 135cm である。検出面からの床面の深さは 30cm である。床面には楕円形状の落込みとピットがある。床面からの落込みの深さは 78 cm、ピットの深さは 10cm~25cm である。遺構周辺にはピットが群在しており、それらとの関係もあるかもしれません。

遺物は出土していない。

SK-055（第138図）

22F-17・18・27・28 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 238cm、短軸 171cm、検出面からの床面の深さは 16cm ほどである。床面ではピットは検出されなかったが、遺構周辺にはピットが多数分布している。また、遺構の西側には、方形竪穴 SK-055 が隣接している。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-056～063（第141図、巻頭図版7、図版8・97・111）

20E-48・49・58・59・68・69・78・79・88・89、20F-40・50～52・60～62・70 グリッドに所在する、少なくとも 8 基が重複・隣接する方形竪穴群であるが、SK-056～058 は先に述べた方形竪穴 SI-028 に切られているとみられ、SI-028 を加えると 9 基以上が群衆していると言える。

SK-056 は、群のなかでも北西端に位置し、平面形は長方形を呈するとみられる。規模は現存部分で短軸方向が 200cm ほどであるが、長軸方向は SI-028 に切れ不明である。検出面からの床面の深さは 45cm ほどである。

SK-057 は SK-056 の東側に重複しており、南東側は SI-028 に切られる。平面形は長方形とみられ、確認できた規模は、短軸方向で 160cm ほどである。検出面からの床面の深さは 60cm である。

SK-058 は SI-028 の東側に重複している。平面形は長方形とみられ、確認できた規模は短軸方向で 194 cm である。検出面からの床面の深さは 83cm である。

SK-059 は SK-058 の北東側に重複し、群のなかでも北東端に位置する。平面形は長軸 172cm、短軸 122cm の長方形を呈するが、北東隅部分にピット SH-024 があり、ピットとつながるように張出し部分がある。検出面からの床面の深さは 51cm である。

SK-060 は SK-058 の東側、SK-059 の南側に位置する。遺構の南東隅部分しか遺存していない。検出面からの床面の深さは 32cm である。

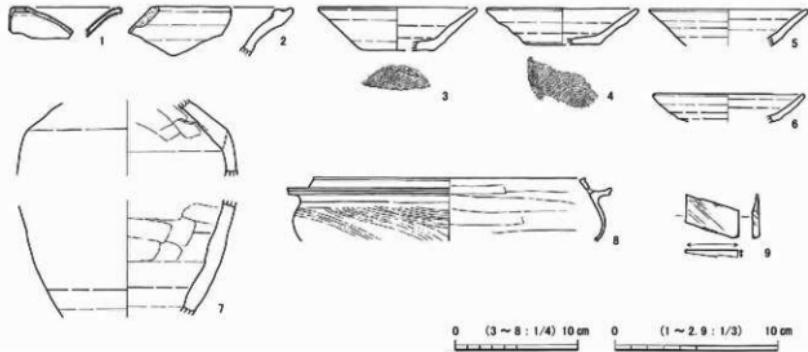
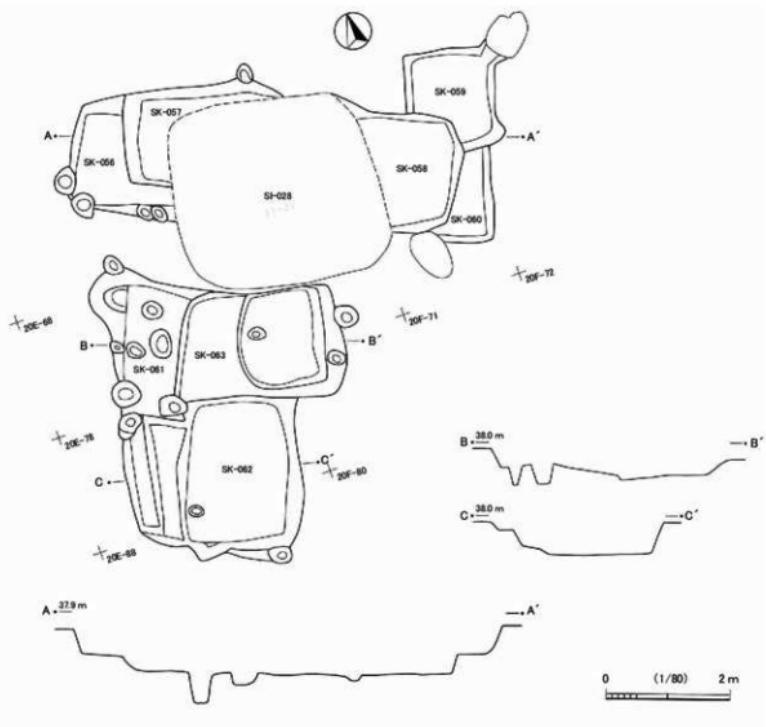
SK-061 は、東側で SK-063 と、南側で SK-062 と重複し、遺構の北西隅部分しか遺存していない。検出面からの床面の深さは 21cm ほどである。

SK-062 は、群のなかでも最も南に位置する。現状で長軸方向が 290cm である。床面には段差があるが、別遺構の可能性もあるかもしれない。検出面からの床面の深さは、最も深いところで 55cm である。

SK-063 は SK-062 の北側に重複しており、西側で SK-061 と重複する。現存の規模は、短軸方向が 178 cm である。床面には段差があるが、別遺構の可能性もあるかもしれない。検出面からの床面の深さは、最も深いところで 35cm である。

SK-058～060 を除く遺構で床面にピットが認められるが、床面からの深さは 50cm～60cm 前後のものが多い。当遺構群の周辺にはピット群があるが、床面のピットだけでなく、遺構外のピットも遺構と同時に機能した可能性も考えられる。

図示した遺物は 9 点である。第141図1は龍泉窯系青磁の端反碗である。2は瀬戸・美濃折縁深皿である。内外面に灰釉が施されるが、釉は被熱して劣化し、白っぽくなっている。古瀬戸後期様式IV期新段階に位置づけられるものと考えられる。3～6はカワラケ杯である。7は常滑壺の肩部と胴部の破片で、接点はないが同一個体と考えられ、図上で復元した。小型の壺で、復元現存器高は 17.6cm である。外面には自然釉がみられる。8は東海系羽釜で、口縁部の 30% 程度の遺存度である。接合しない同一個体の破片に、



第 141 図 SK-056 ~ 063 と出土遺物

焼成後穿孔が1か所認められる。9は砥石である。上下端及び裏面は欠損している。1～6・8・9はSK-061から、7はSK-060から出土した。なお、遺物はほかに、図示していないがSK-056から鉄製品、SK-059から中世陶磁器・土器の小破片が少量出土したのみで、SK-057・058・062・063からは出土していない。

SK-066（第140図、図版8）

19F-70・80・81グリッドに所在する竪穴状遺構である。平面形は径約235cmの円形を呈する。検出面からの床面の深さは66cmである。床面には、床面からの深さがいずれも10cmほどのピットが2か所、対極にみられる。また、北側の壁にも検出面からの深さ15cmほどのピットがある。当遺構は掘立柱建物跡SB-001の内部に位置することから、同時に機能した可能性も考えられるが、そのほかにも遺構周辺にはピットが群在しており、重複するピット1基との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが新しい。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-069（第142図、図版8・97・111）

20F-20～23・30～33・40～43グリッドに所在する竪穴状遺構である。平面形は、中央部にSD-020が重複するが、推定長軸740cm、短軸600cmほどの卵形を呈するとみられる。検出面からの床面の深さは54cmほど、緩やかに立ち上がる壁にはピットが集中している。内部に土坑SK-075があるが、新旧関係は明らかでない。

図示した遺物は4点である。第142図1は瀬戸・美濃灰釉皿である。内外面とも釉がみられる。2は常滑片口鉢である。7型式に比定されるものと考えられる。3・4は砥石である。3は、上端は欠損している。4は上下端を欠損し、表裏面も剥落しているようである。

SK-074（第143図）

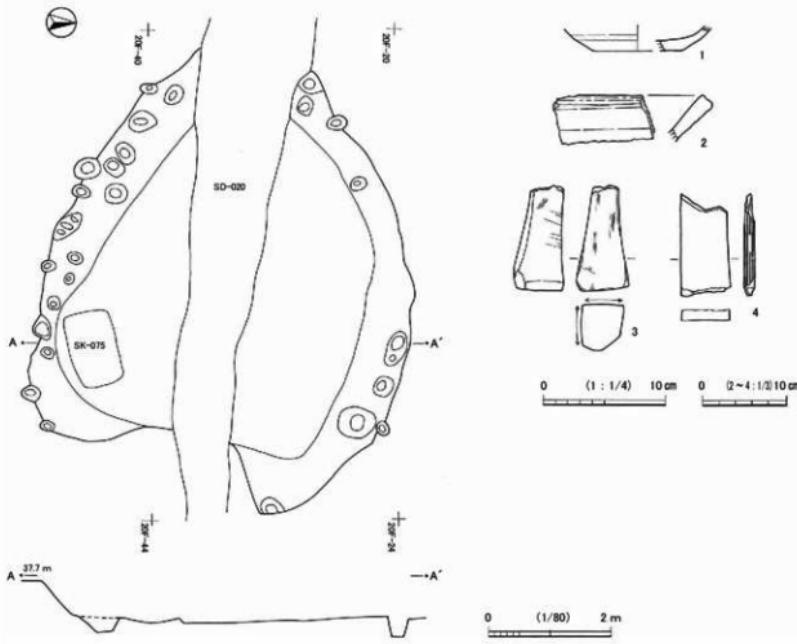
20F-80・81・90・91グリッドに所在する方形竪穴である。南側で土坑SK-033と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面形は、長軸230cm、短軸180cmほどの長方形を呈する。検出面からの床面の深さは86cmである。

遺物は出土していない。

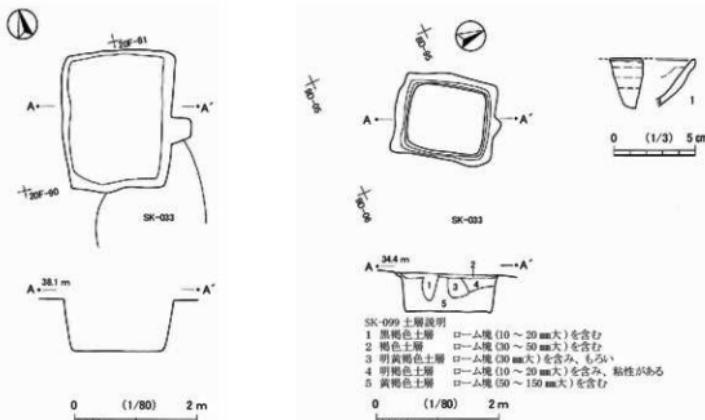
SK-099（第144図、図版10・97）

8D-85・86・95・96グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は長軸160cm、短軸140cmの隅丸方形を呈する。床面は平坦であるが、壁際に深さ5cm前後の浅い溝が巡る。検出面からの床面の深さは69cmである。当遺構は掘立柱建物跡群中に位置しており、特にSB-004のプラン内に同じ軸方向で収まるところから、関連性も考えられる。

図示した遺物は1点である。第144図1は、瀬戸・美濃縁釉小皿である。灰釉が施される。古瀬戸後期様式IV期新段階に位置づけられるものと考えられる。遺物はほかに、近世以降陶磁器の小破片も少量出土した。



第142図 SK-069と出土遺物



第143図 SK-074と出土遺物

SK-099 土層説明
 1 黒褐色土層 ローム塊 (10 ~ 20 mm大) を含む
 2 棕褐色土層 ローム塊 (30 ~ 50 mm大) を含む
 3 明黄褐色土層 ローム塊 (10 ~ 30 mm大) を含み、もろい
 4 明褐色土層 ローム塊 (10 ~ 30 mm大) を含み、粘性がある
 5 黄褐色土層 ローム塊 (50 ~ 150 mm大) を含む

0 (1/80) 2 m

第144図 SK-099と出土遺物

SK-114 (第 145 図)

8C-63・64 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、長軸 245cm、短軸 187cm の長方形である。検出面からの床面の深さは 24cm である。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-001 (第 146 図、図版 11・111・116)

16E-04・05・14・15 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、長軸 248cm、短軸 220cm の隅丸方形である。検出面からの床面の深さは 71cm である。床面には、深さ 10cm 程度の落込みが 1 か所ある。また、壁際にはピットが 6 か所認められる。ピットの床面からの深さは、四隅のものは 20cm 前後だが、北辺中央部のものは 42cm、南辺中央部のものは 34cm である。

図示した遺物は 2 点である。第 146 図 1 は砥石である。上下端は欠損している。2 は鉄釘である。頭部と先端のそれぞれごく一部が欠損している。ほかには、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-002 (第 147 図)

16E-15～17・25～27・36・37 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、複数の方形竪穴が重複しているような形状を呈するが、現状で長軸は 450cm、短軸は 395cm ほどである。床面は、東側にやや段状を呈する部分があるがほぼ平坦で、検出面からの床面の深さは 30cm 前後である。床面には、深さそれぞれ 12cm・19cm の 2 基のピットがみられる。

遺物は、図示はしていないが、中・近世以降陶磁器及び土器の小破片と錢貨の破片が少量出土した。錢貨は大破しており、錢種も不明である。

4SK-003 (第 148 図、図版 11)

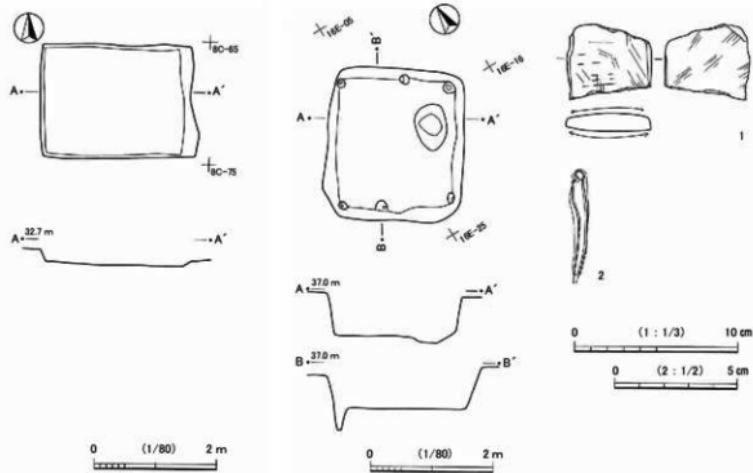
15E-86～88・96・97 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、長軸 322cm、短軸 214cm の長方形形を呈する。床面には段差があり、北側の部分より南側の部分のはうが深く、南側の部分は中央が最も高く東西にそれぞれ 5 cm 前後下がる。検出面からの床面の深さは、北側が 28cm、南側中央部が 47cm である。また、南側部分の東壁沿いに、床面からの深さ 4 cm ほどのピットが 1 か所ある。複数の遺構が重複している可能性もあるかもしれない。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

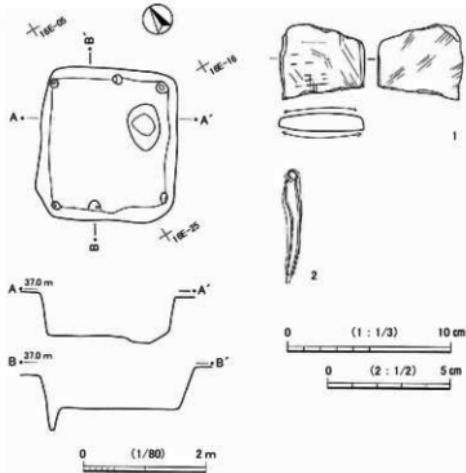
4SK-005 (第 149 図、図版 93・94・116)

16E-12～14・23～25 グリッドに所在する方形竪穴である。本調査区の境界に位置し、全体を調査することはできなかった。平面形は複数の方形竪穴が重複しているような形状を呈し、床面の高さにも部分的に若干の段差がある。規模は、現状で長軸 700cm、短軸 200cm である。検出面からの床面の深さは、最も西側の部分で 40cm、その東側の部分で 23cm、最も東側の部分で 36cm、最も広い中央部分で 31cm である。

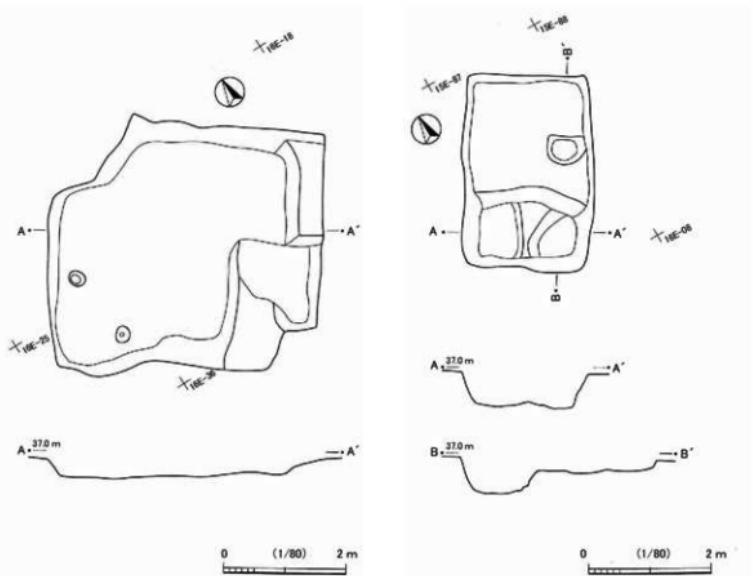
図示した遺物は 3 点である。第 149 図 1・2 は瀬戸・美濃製品である。1 は入子で、全体の 50% ほどの遺存度である。口唇部にはキザミが施され、輪花状を呈している。遺存しているキザミは 4 か所であるが、



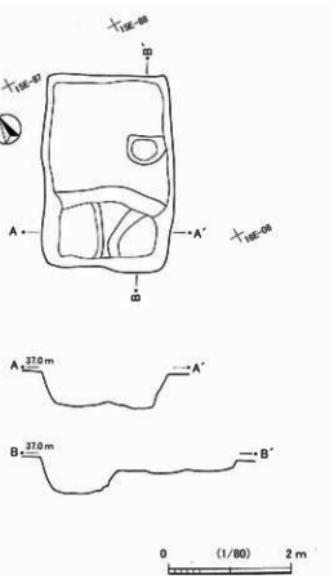
第145図 SK-114



第146図 4SK-001 と出土遺物



第147図 4SK-002



第148図 4SK-003

全体では8か所と推定される。色調は、外面は白褐色、内面はにぶい赤褐色を呈している。内面に紅とみられるものが付着しており、紅皿として使用されたようである。古瀬戸中期様式に位置づけられるものと考えられる。2は花瓶である。口縁部と高台部は欠損しているが、最大径6.4cm、現存器高7.8cmである。図の左右2か所には環耳が付くが、環耳は欠損している。頸部には変形文、胴部には印花文が、図の表面及び裏面に対照的に施されている。やや青みがかった暗赤褐色の鉄軸が外面全体に施され、内面頸部の上方にもみられる。古瀬戸中期様式に位置づけられるものである。3は板状の鉄製品である。ほかに、図示はしていないが、銭貨の小破片が出土している。銭貨は大破しており、銭種も不明である。

4SK-008（第150図、図版11・97）

15D-69・79、15E-60グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は長軸255cm、短軸131cmの長方形形状を呈する。床面は平坦で、検出面からの床面の深さは40cmである。北辺に接してピットがみられるが、遺構周辺にはピットが群在しており、必ずしも当遺構に付随するものでない可能性もある。ピットの検出面からの深さは22cmである。

図示した遺物は1点である。第150図1は瀬戸・美濃縁袖小皿の底部片である。遺存部分には袖は認められない。

4SK-009（第151図、図版11・109）

14E-90・91、15E-00・01グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は長軸220cm、短軸135cmほどの隅丸方形形状を呈する。検出面からの床面の深さは54cmである。新旧関係は不明であるが、南西隅部分で方形竪穴4SK-010と重複している。

図示した遺物は1点である。第151図1は、常滑窯の転用砥石である。上下破断面が使用されている。

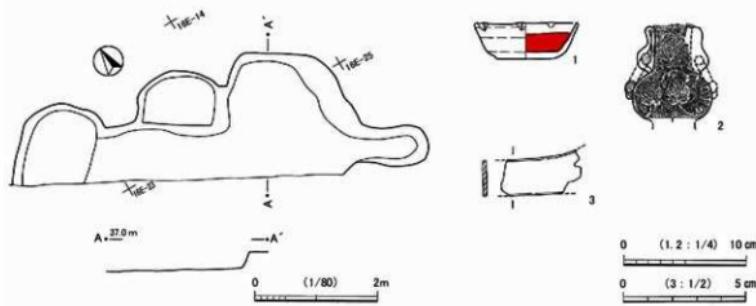
4SK-010（第152図、図版11・97・116）

14D-99、14E-90、15D-09、15E-00グリッドに所在する方形竪穴である。複数の遺構が重複しているような状況を呈しており、全体の規模は、長軸485cm、短軸330cmほどである。床面は部分的に段差が生じているが、概ね中央部分が縁辺部分より深く、中央部分の検出面からの深さは、最も深い東寄りの部分で70cm、西寄りの部分で62cm、北側の部分で57cmである。縁辺部分についてはいずれも35cm前後である。床面や壁際にピットがいくつかみられる。北東部で方形竪穴4SK-009と、南西部で方形竪穴4SK-011と重複しているが、いずれも新旧関係は明らかでない。

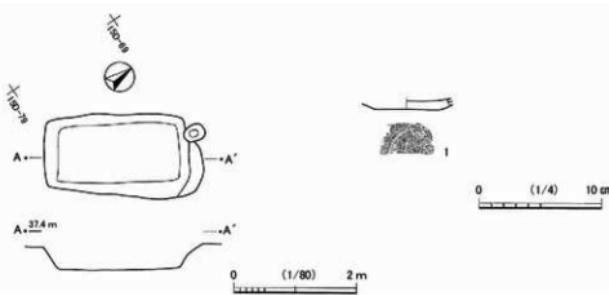
図示した遺物は2点である。第152図1は、瓦質土器である。横走する1条の沈線を挟んで上にはハート形文、下には珠文の押印文がそれぞれ巡る。器面は火を受けたように劣化しており、火鉢かもしれない。2は鉄釘である。頭部を欠損する。

4SK-011（第153図、図版12・111）

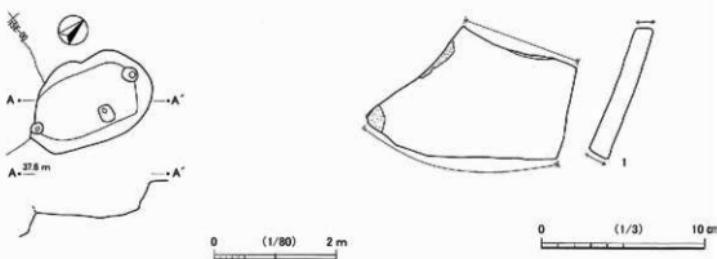
15D-08・09・18・19グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、長軸318cm、短軸200cmの隅丸方形形状を呈する。検出面からの深さは60cmである。東辺には検出面からの深さ33cmのピットが接している。南側で地下式坑4SK-012と重複しているが、新旧関係は明らかでない。



第149図 4SK-005と出土遺物

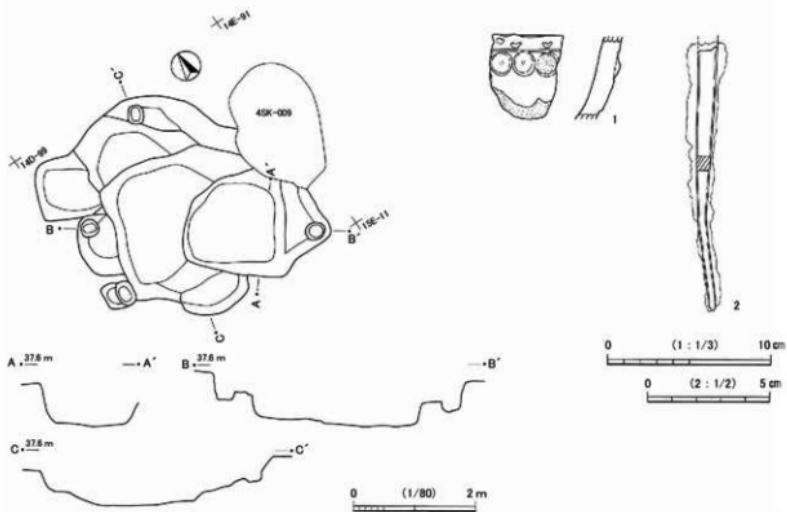


第150図 4SK-008と出土遺物

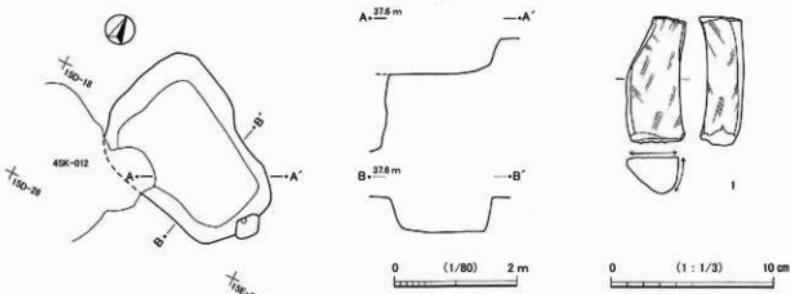


第151図 4SK-009と出土遺物

図示した遺物は1点である。第153図1は砥石である。上下端は欠損している。遺物はほかには中世陶磁器・土器の小破片が少量出土しているが、図示していない。



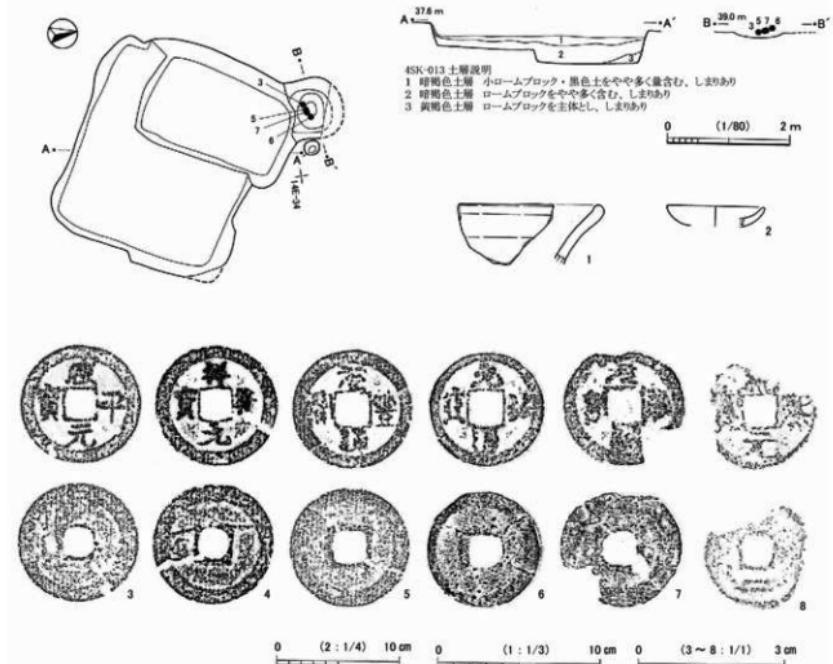
第152図 4SK-010と出土遺物



第153図 4SK-011と出土遺物

4SK-013 (第154図、図版12・97・122)

14E-23・32～34・42～44 グリッドに所在する方形竪穴である。長軸 370cm、短軸 330cm ほどの隅丸方形の北側部に径 100cm ほどの円形土坑が付随しているような平面形を呈する。方形の部分は 2 基の方形竪穴が重複しているように見えるが、土層断面の観察では切合い関係は認められず、同時に埋没したことが明らかである。円形の部分については、方形の部分との関係ははっきりしない。床面は、方形の部分は平坦であるが、北側の部分と南側の部分とで段差がある。検出面からの深さは北側の部分が深く 70cm、南側の部分が 46cm である。円形の部分は 74cm である。なお、当遺構の南 40cm 先には、大量の錢貨を出



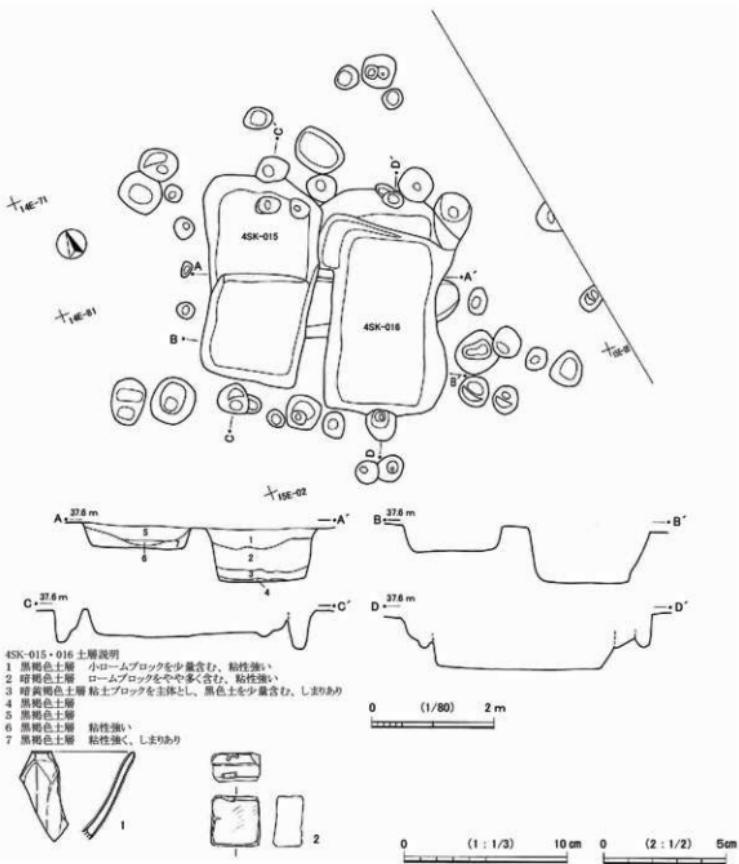
第154図 4SK-013と出土遺物

土した土坑 4SK-014 が存在する。

図示した遺物は8点である。第154図1は常滑片口鉢で、1類に分類されるものである。色調は内外面とも灰色を呈する。外面には自然釉がかかる。2はカワラケ小皿である。器面が摩耗している。3～8は銭貨である。3は咸平元寶、4は祥符元寶である。5は元豐通寶で、書体は篆書である。背面は無文である。6・7は元祐通寶で、書体は6が行書、7が篆書である。いずれも背面は無文とみられる。7は腐食して遺存状態が悪い。8は紹熙元寶である。遺存状態は悪いが、背面に「二」が観察される。銭貨は全て北隅部の円形土坑状の部分から出土し、3・5～7は底面付近のレベルから出土した。遺物はほかには、図示していないが、山茶碗と中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土した。

4SK-015・016（第155図、巻頭図版7、図版12・97・110）

14E-72・73・81～84・92・93グリッドに所在する方形竪穴群である。並んで存在する2基とみられるが、それぞれ複数の構造が重複している可能性もある。平面形は、4SK-015が概ね長軸333cm、短軸160cm、4SK-016が長軸365cm、短軸180cmほど、いずれも隅丸方形状を呈している。周囲にはピットが多数



第155図 4SK-015・016と出土遺物

みられ、これら遺構に関連するものと考えられる。底面は全体的に平坦ではあるが、いずれも部分的に段差がみられる。4SK-015は、南半分のほうが北半分よりやや深く、検出面からの深さは50cmである。北半分は41cmである。4SK-016の検出面からの深さは83cmであるが、北側に30cmほど高い段差がある。

図示した遺物は2点である。いずれも4SK-016の覆土中から出土したもので、4SK-015からは遺物は出土していない。第155図1は龍泉窯系青磁の鎧蓮弁文碗である。2は、用途等不明であるが、立方体状を呈する土製品である。図上面には浅い溝が入るようである。色調は暗灰色を呈し、須恵器か瓦のような質感であるが、転用砥石ではなく、完形の土製品と考えられる。

4SK-018～022（第156図、図版12）

14D-69・79、14E-40・50・60・70 グリッドに所在する5基の方形竪穴群である。南北方向に延びる溝状遺構 4SD-005 の東側沿いに、南北に列状に重複して存在している。4SK-018 は 4SD-005 に切られているが、ほかの遺構については現存の電柱に阻まれ調査できず、4SD-005 との関係は不明である。各方形竪穴の新旧関係は、土層断面の観察から、4SK-018 より 4SK-019 が新しい。また、4SK-019 より 4SK-020 が新しく、4SK-020 と 4SK-022 より 4SK-021 が新しいと判断される。覆土は全て粘性があった。

遺物は、いずれの遺構からも出土していない。

4SK-024（第157図、巻頭図版7、図版12・97）

13D-43・52～54・63・64 グリッドに所在する方形竪穴である。遺構の状態や土層断面の観察から、少なくとも3基が重複していると考えられる。最も新しい遺構は中央部に位置する方形竪穴で、一辺 220 cm 程度の正方形形状を呈するとみられる。次に新しい遺構は中央から南東方向にずれてあるもので、一辺 250cm ほどの正方形形状を呈するとみられる。最も古い遺構は中央から西側にずれてあるもので、西辺は 210cm ほどであるが、そのほかの辺の長さは不明である。床面は全て基本的に平坦であるが、段差を生じている部分もある。検出面からの深さは、最も新しい遺構と次に新しい遺構は 90cm 前後でほとんど同じであるが、最も古い遺構は 68cm で、それより床面がやや高い。また、南側には深さ 13cm の張り出した部分があるが、土層断面の観察から更に別の遺構である可能性がある。

図示した遺物は2点である。第157図1は青磁皿で、見込み部分に貼付双魚文がある。2はカワラケ杯である。

4SK-025（第158図、図版12）

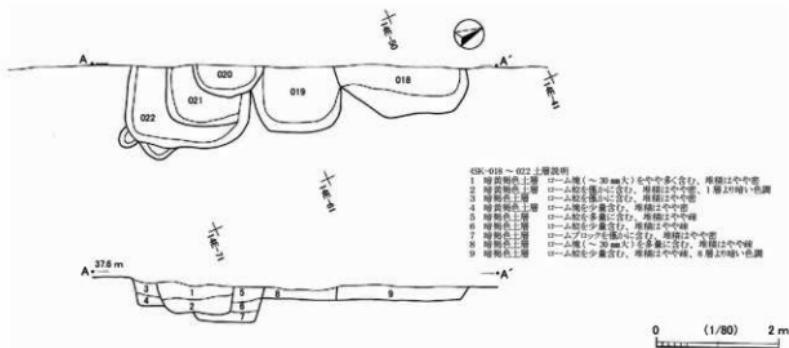
13D-24・25・34・35 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は1辺 230cm ほどの不整正方形形状を呈し、床面は平坦であるが、土層断面の観察から南北軸を長辺とする2基の遺構が東西に重複しているものと考えられる。西側の遺構のほうが新しく、その東西幅は 170cm ほどとみられる。検出面からの深さはいずれも 65cm ほどである。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

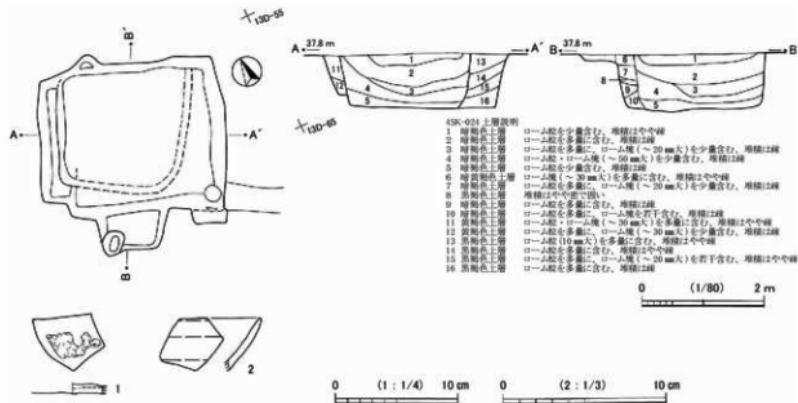
4SK-026・027（第159図、図版13）

12D-72～74・83・84 グリッドに、隣接して所在する方形竪穴群である。4SK-027 の西側に位置する 4SK-026 は、長軸 145cm、短軸 135cm の方形を呈する。床面は平坦だが、北東隅部と南東隅部にピットがある。検出面からの床面の深さは 21cm で、ピットの床面からの深さは北東隅部のものが 25cm、南東隅部のものが 6cm である。4SK-026 の東側に位置する 4SK-027 は、土層断面の観察から、少なくとも東西 2 基の方形竪穴が重複していると考えられる。また、南側に張り出す部分は別の土坑の可能性があるが、現状で平面形は長軸 315cm、短軸 230cm ほどである。

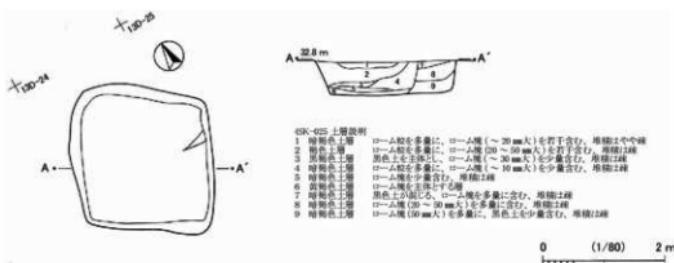
遺物は、図示していないが、いずれの遺構からも中世土器の小破片が少量出土した。



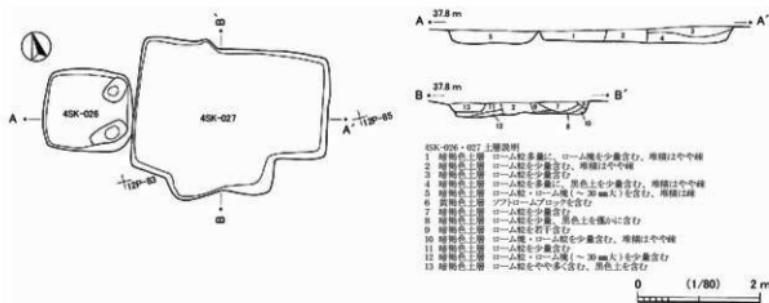
第156図 4SK-018 ~ 022



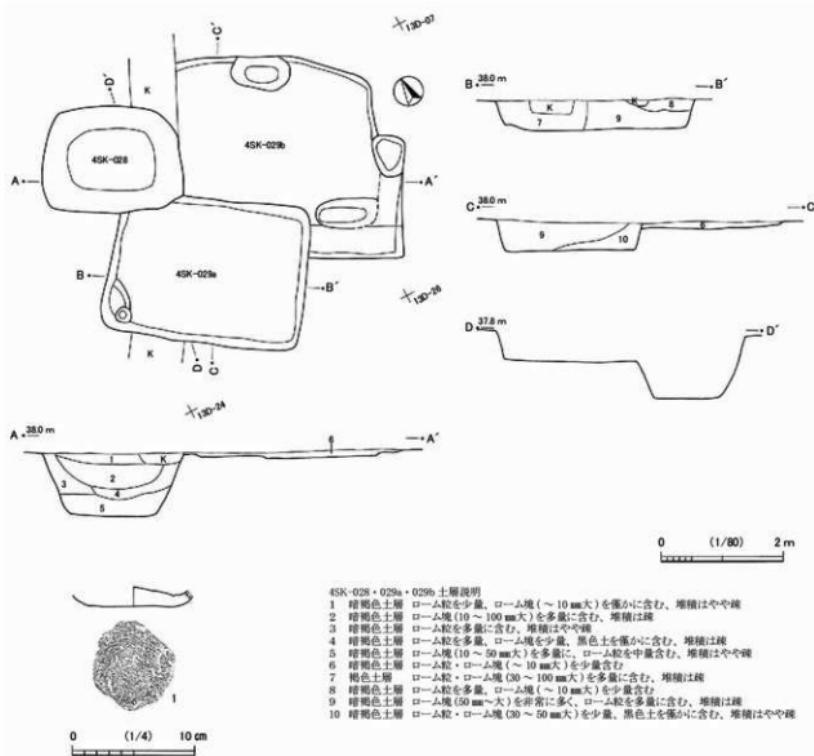
第157図 4SK-024 と出土遺物



第158図 4SK-025



第 159 図 4SK-026・027



第 160 図 4SK-028・029a・029b と出土遺物

4SK-028・029a・029b (第 160 図、図版 13・98)

12D-93～96、13D-03～06・13～16 グリッドに、重複して所在する方形竪穴群である。当初 4SK-028・029 の 2 基の方形竪穴と考えたが、4SK-029 が 2 基の重複であることが明らかとなり、深くて新しい方を 4SK-029a、浅くて古い方を 4SK-029b として調査した。更に、土層断面の観察から 4SK-029a は 2 基の方形竪穴の重複であることが判明した。また、4SK-029b の東側にも別の方形竪穴の闕と考えられる部分が重複していることが明らかとなったが、いずれも遺構番号は別には付さなかった。

4SK-028 は、長軸 227cm、短軸 175cm の隅丸方形を呈する方形竪穴で、土層断面の観察から、東側で重複している 4SK-029b より新しいとみられる。検出面からの床面の深さは 105cm である。

4SK-029a は 2 基が東西に重複しているとみられる方形竪穴で、4SK-028・4SK-029b とも重複している。現状で長軸 320cm、短軸 235cm の方形を呈する。床面は平坦で、検出面からの深さは重複する 2 基でほとんど差ではなく、50cm 前後である。西隅部分が床面より 10cm 程度高まっており、そこに浅いピットが 1 か所ある。

4SK-029b は、西側に搅乱があり、東側には別の遺構が重複しているが、規模は長軸 360cm、短軸 270 cm ほどと推定される。検出面からの深さは 8cm である。北側と南側の壁際には、それぞれ床面からの深さ 6cm、13cm のピットがある。

図示した遺物は 1 点である。第 160 図 1 は、4SK-028 から出土したカワラケ杯である。器面は著しく摩耗している。ほかにも、図示はしていないが、4SK-028 から近世以降陶磁器の小破片が少量と、4SK-029a・029b から中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。

4SK-030 (第 161 図、図版 13・111)

13D-19・29、13E-10・11・20・21 グリッドに所在する方形竪穴である。現状で一辺 330cm ほどの正方形を呈しているが、土層断面の観察から 2 基の遺構が重複していると考えられる。但し、床面は平坦で段差ではなく、検出面からの深さは 76cm ほどである。また、方形竪穴 4SK-036 と接しており、土層断面の観察から、4SK-036 より新しいとみられる。

図示した遺物は 1 点である。第 161 図 1 は砥石と考えられる。砂岩製で、特に表裏面が平滑になっていて、ほぼ全面的に擦痕が認められる。ほかには、図示していないが、中世土器の小破片が少量出土した。

4SK-031 (第 162 図、図版 13)

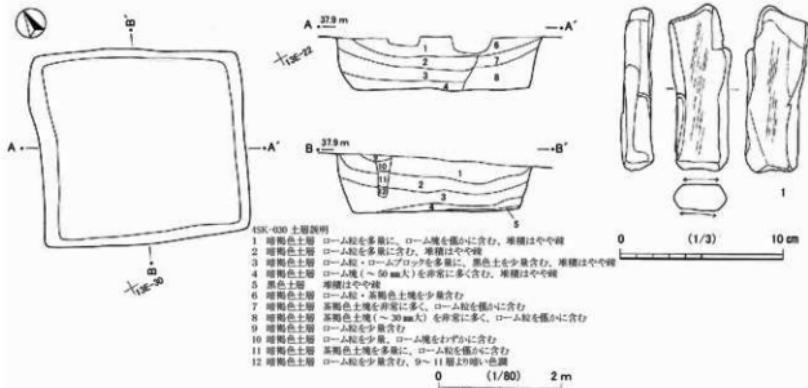
12D-46・47・56～58・66～68 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は長軸 480cm、短軸 300cm の長方形を呈する。検出面からの床面の深さは 100cm ほどで、南壁及び東壁・西壁の南側にかけて、床面からの深さ 5cm 前後の壁溝が廻っている。

遺物は、図示していないが、中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。

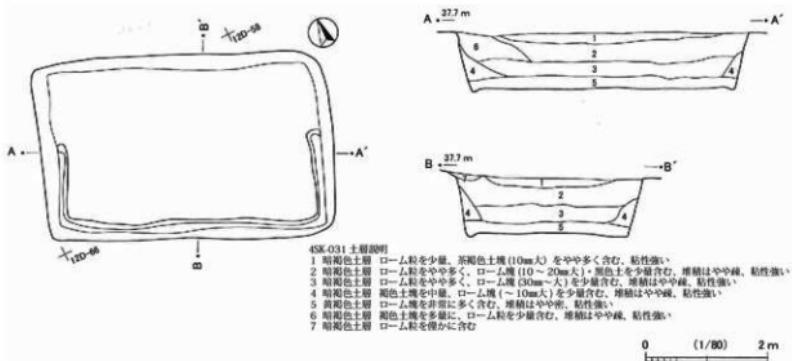
4SK-032a～032c・033 (第 163 図、図版 13・122)

12D-82・90～92・93、13D-00～02 グリッドに、重複或いは接して所在する方形竪穴群である。

4SK-032 は、3 基の方形竪穴と 1 基又は 2 基の土坑が重複している。3 基の方形竪穴については、北側のものを 4SK-032a、東側のものを 4SK-032b、南側のものを 4SK-032c として調査した。新旧関係は、



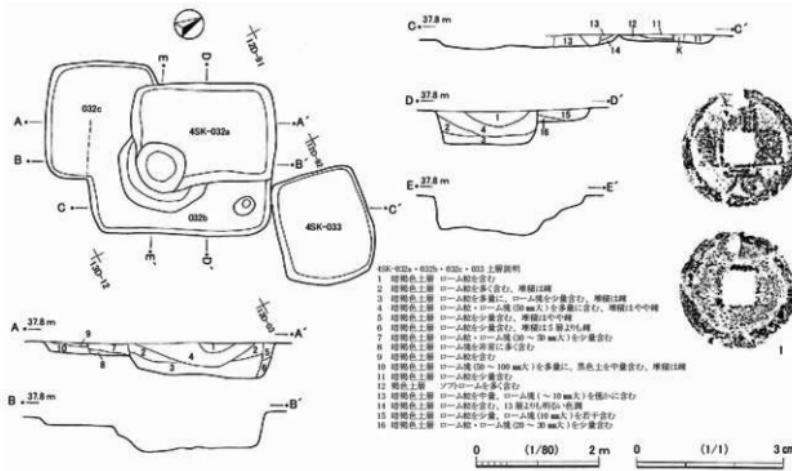
第161図 4SK-030と出土遺物



第162図 4SK-031

土層断面の観察から、最も新しいものが4SK-032a、次が032b、最も古いものが032cである。4SK-032aの規模は、長軸237cm、短軸160cm、検出面からの深さは3基中最も深く63cmである。4SK-032bの規模は、南北軸は295cmであるが、東西軸は明らかでない。検出面からの深さは21cmである。4SK-032cの規模は、長軸190cm、短軸は170cmほどと推定される。検出面からの深さは23cmである。中央に位置する土坑は、4SK-032b・032cより新しく、4SK-032aより古いとみられる。径150cmほどの段のある円形土坑1基か、又は径150cmと65cmの2基の円形土坑が重複しているとみられる。検出面からの深さは、最も深いところで65cm、段の部分で38cmである。

4SK-033は、4SK-032bの北東に接している。長軸185cm、短軸153cmの隅丸方形状を呈する。検出面



第163図 4SK-032a～032c・033 と出土遺物



第164図 4SK-035 と出土遺物

からの深さは 11cm ほどである。なお、4SK-032b の東側には、方形竪穴 4SK-046 も接している。

図示した遺物は 1 点である。第 163 図 1 は 4SK-032 の覆土中から出土した銭貨で、開元通寶である。背面は無文とみられる。欠けや歪みがみられ、腐食も進んでいる。ほかには、図示していないが 4SK-032 から中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。4SK-033 からは混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-035 (第 164 図、図版 13・111・120)

12D-20 ~ 22・30 ~ 33・40 ~ 43 グリッドに所在する方形竪穴である。2 基の方形竪穴が重複しているとみられるが、遺構番号には特に枝番は付さなかった。東西に重複する 2 基のうち、西側のほうが古い。西側の方形竪穴は、長軸 580cm、短軸 315cm ほどの長方形状を呈し、検出面からの深さは 70cm である。壁際に床面からの深さ 5cm 前後の壁溝をもつ。また、床面に床からの深さ 10cm ほどのピットがある。この方形竪穴を切って構築された東側の方形竪穴は、規模は長軸 455cm、短軸 280cm ほどと復元され、床面の深さは 60cm ほどである。そして、これら方形竪穴群を溝状遺構 4SD-012・019 が切っている。

図示した遺物は 2 点である。第 164 図 1 は砂岩製で、上下端は欠損しているが、表裏面に擦痕が認められる。砥石であろうか。2 は椀形滓である。ほかには中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土したが、図示していない。

4SK-036 (第 165 図、図版 13・98)

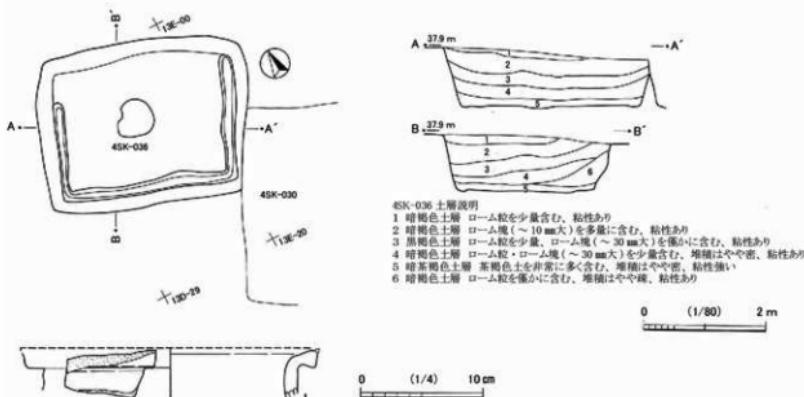
12D-99、13D-08・09・18・19、13E-00・10 グリッドに所在する方形竪穴である。方形竪穴 4SK-030 の西側に接しており、土層断面の観察から当遺構のほうが古いとみられる。平面形は長軸 340cm、短軸 270cm の長方形を呈し、検出面からの深さは 97cm である。床面は平坦だが、中央部分はわずかに凹んでいる。また、東壁・南壁及び西壁の南側にかけて、床面からの深さ 5cm 前後の壁溝がある。

図示した遺物は 1 点である。第 165 図 1 は常滑広口壺である。口唇部は破損しているが、受け口状になるとみられる。5 型式に比定されるものと考えられる。色調は内外面とも灰褐色で、内面口縁部には自然釉がかかる。

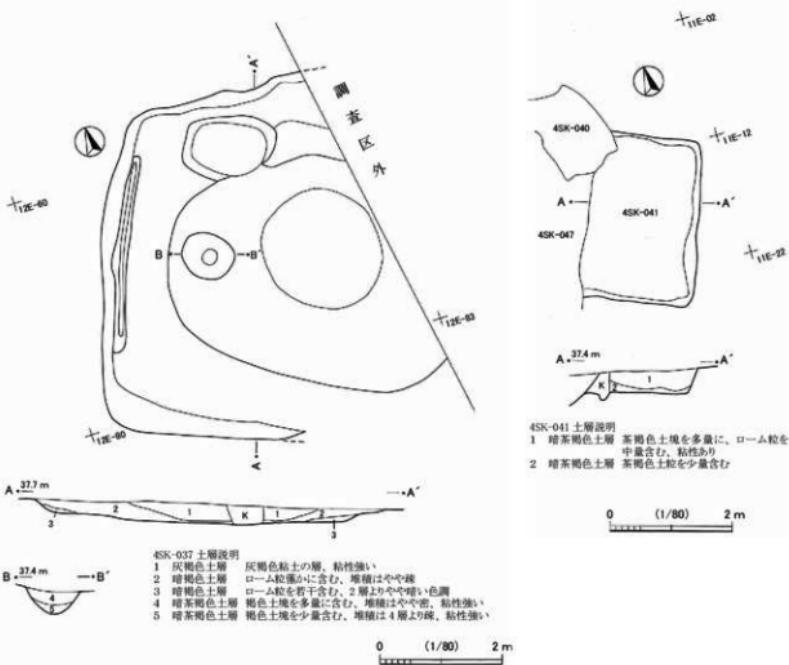
4SK-037 (第 166 図、図版 14)

12E-50 ~ 52・60 ~ 62・70 ~ 72・80 ~ 82 グリッドに所在する竪穴状遺構である。東側が調査区の境界付近のため調査できなかつたが、調査した部分から、平面形は不整な隅丸方形状を呈すると考えられる。規模は、西辺で 530cm ほどである。床面は、中央ほど窪んでおり、検出面からの深さは南辺で 24cm、中央部で 42cm である。ピットが 2 か所認められ、中央部西側のものは長径 87cm、短径 73cm の楕円形を呈し、深さは 47cm である。北壁付近のものは長径 150cm、短径 110cm、深さ 12cm ほどである。また、西壁際には、ごく浅いが壁溝が認められる。

遺物は、図示していないが、中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土した。



第165図 4SK-036と出土遺物



第166図 4SK-037

0 (1/80) 2 m

第167図 4SK-041

4SK-038（第 168 図、図版 14・109・111）

11D-90～93、12D-00～04・10～13・22・23 グリッドに所在する方形竪穴である。地下式坑 4SK-039 と重複するが、土層断面の観察により、4SK-039 崩落土を掘り込んで構築されていることが判明したため、当遺構のほうが新しいと考えられる。平面形は長軸 620cm、短軸 505cm の長方形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、5cm 前後、床面より溝状に落ち込む部分がある。土層断面から、別の遺構が絡んでいる可能性も考えられる。床面の検出面からの深さは 42cm である。

図示した遺物は 3 点である。第 168 図 1・2 は転用砥石である。1 は常滑甌の破片の内面を使用したものである。粘土の継ぎ目に沿って叩きが入り、外面には押印文がみられる破片である。2 は常滑片口鉢の破片で、口唇部及び外面が使用されている。10 型式に比定されるものと考えられる。3 は表裏面のみ遺存し、周囲が欠損している石製品の破片で、表裏面とも光沢を帯びるほど滑らかに摩耗している。安山岩製とみられ、破断面は黒色、表裏面は赤色を呈するが、被熱しているかどうかは不明である。台石であろうか。ほかには、中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土している。

4SK-041（第 167 図）

11E-01・10・11・20・21 グリッドに所在する方形竪穴である。北西側で土坑 4SK-040 と、南西側で竪穴状遺構 4SK-047 と重複する。土層断面の観察から、4SK-047 との新旧関係は当遺構のほうが古いとみられる。平面形は、南北軸が 272cm、東西軸は現存値で 180cm ほどである。検出面からの床面の深さは 32cm である。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-044（第 169 図、図版 14）

13D-12～14・23・24 グリッドに所在する方形竪穴である。西側で地下式坑 4SK-045 と重複するが、新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが新しいと判断される。南側には、地下式坑 4SK-034 が隣接する。遺構の平面形は、長軸 280cm、短軸 180cm ほどの長方形を呈する。検出面からの床面の深さは 50cm である。

遺物は、近世以降陶磁器・土器の小破片が少量出土したのみで、図示していない。

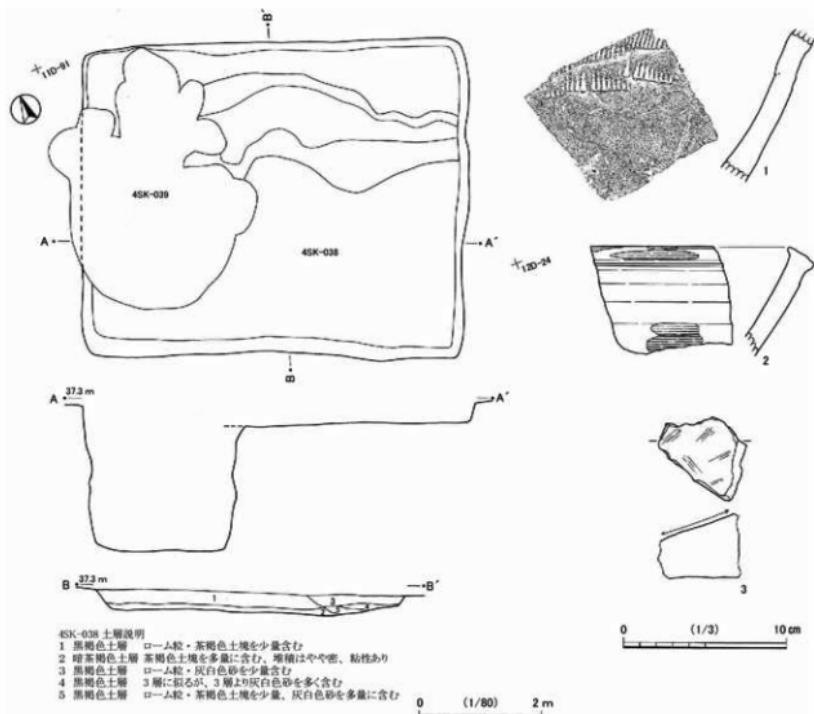
4SK-046（第 170 図、図版 14）

13D-02 グリッドに所在する方形竪穴である。東側で地下式坑 4SK-045 と隣接し、西側で方形竪穴 4SK-032b と隣接する。平面形は、一辺 110cm ほどの不整隅丸正方形を呈する。検出面からの床面の深さは 12cm であるが、北側がやや凹む。

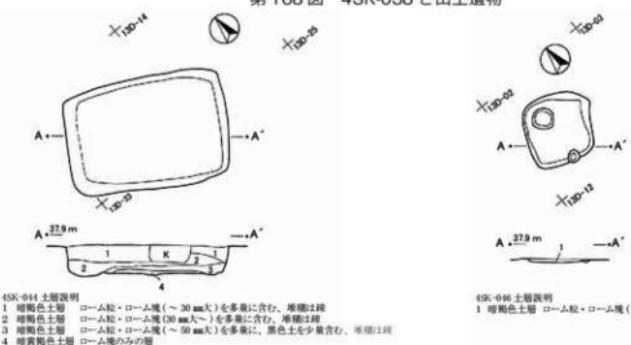
遺物は出土していない。

4SK-047・065（第 171 図、図版 14・93・98・116・121）

10D-78・79・87・88・97・98、11D-07～09・18・19・28・29、11E-00・10・20 グリッドに所在する竪穴状遺構群である。現状でいずれも不整形を呈する 2 基が、互いに、そしてほかの土坑などとも重複して更に複雑な形を呈している。床面はいずれも擂鉢状になだらかに凹んでおり、検出面からの深さ



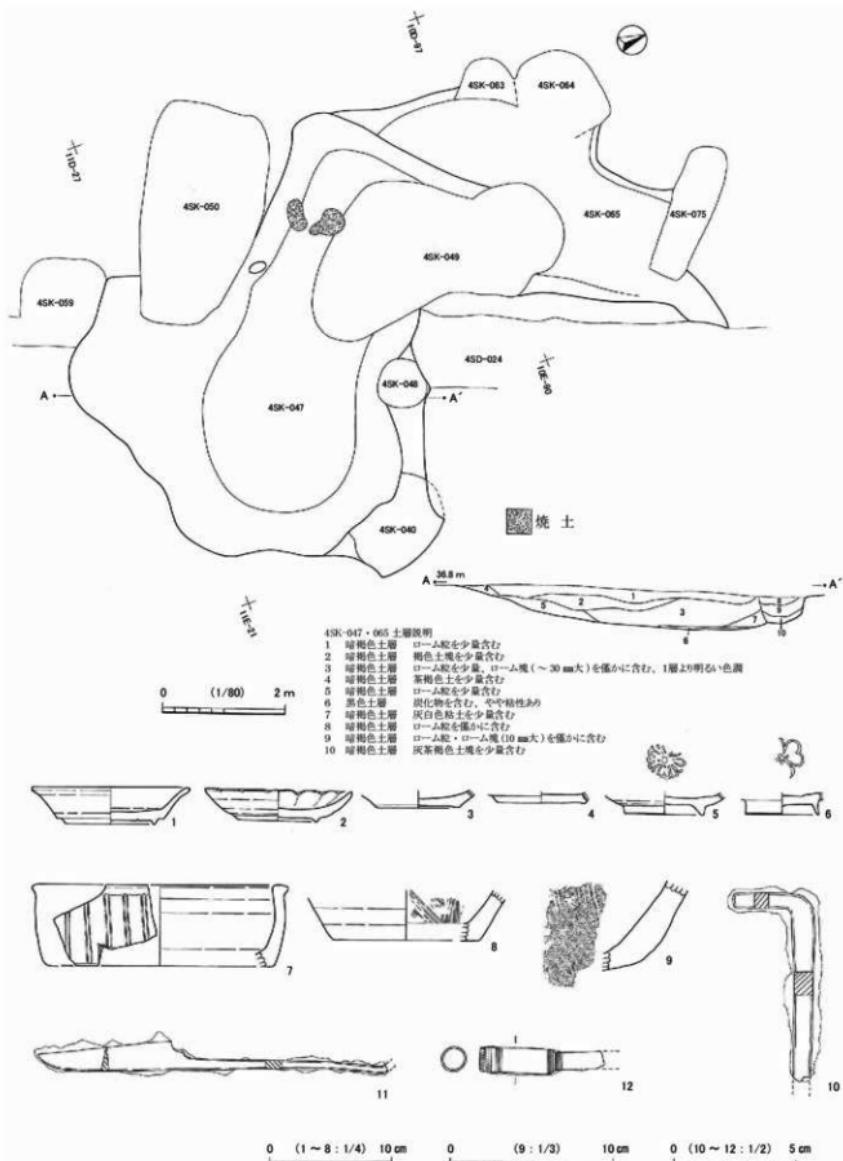
第 168 図 4SK-038 と出土遺物



第 169 図 4SK-044



第 170 図 4SK-046



第171図 4SK-047・065と出土遺物

はそれぞれ最も深い中央部で4SK-047は87cm、4SK-065は35cmほどである。4SK-047の床面北西部では、薄く堆積する焼土が検出された。

それぞれ複数の遺構と重複しているが、新旧関係が明らかなものと明らかでないものがある。4SK-047の範囲内にある土坑4SK-048、及び4SK-047と4SK-065の境界付近に位置する土坑4SK-049は、いずれも土層断面の観察から4SK-047のほうが古いと考えられる。また、4SK-047の東側で重複する方形窓穴4SK-041とは、4SK-047のほうが新しいとみられる。これら以外の新旧関係は明らかでなく、4SK-047と4SK-065の新旧関係も明らかでない。

図示した遺物は12点である。全て4SK-047から出土したものである。第171図1～8は瀬戸・美濃製品である。1は反り皿である。全体の40%の遺存度である。削り出し高台をもつ。高台部も含め内外面全体に浅黄色の灰釉が施され、見込み部分と高台裏に円錐ピンの痕跡が2か所ずつみられる。時期は近世と考えられる。2は志野菊皿で、溝状遺構4SD-024から出土した破片と接合し、遺存度は全体の60%となった。削り出し高台をもつ。内外面とも施釉されている。高台裏には3か所、円錐ピンの痕跡が認められる。大窯期第4段階末に位置づけられるものと考えられる。3・4は志野稜皿である。いずれも削り出し高台をもち、内外面施釉されている。4は遺存部分に2か所、円錐ピンの痕跡が認められ、全体では3か所と推測される。5は輪禿皿である。底部のみ遺存している。削り出し高台をもち、高台部分は露胎である。内面には灰釉が施され、見込み部分には菊花押印文がある。菊花の中央には鉄釉が一点施されている。6も5と同様の輪禿皿であるが、施釉は飴釉である。底部のみ60%程度の遺存度である。7は、南側に近接する溝状遺構4SD-019から出土した破片と接合したものである。内外面に灰釉が施されていることから、香炉ではなく盤類とみられる。時期は大窯後期～近世と考えられる。8は擂鉢である。内面は使用によりかなり摩耗している。9は備前擂鉢と考えられる。色調は赤褐色を呈し、よく焼き締まっている。内面は使用によりかなり摩耗している。外面底部も摩耗しており、転用砥石として使用された可能性もある。10・11は鉄製品で、10はL字形に屈曲する釘である。下端は欠損している。11は鉄で、片側だけが遺存しているものである。現存長14.2cm、刃部長は5.4cmである。12は煙管である。

4SK-065からは近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

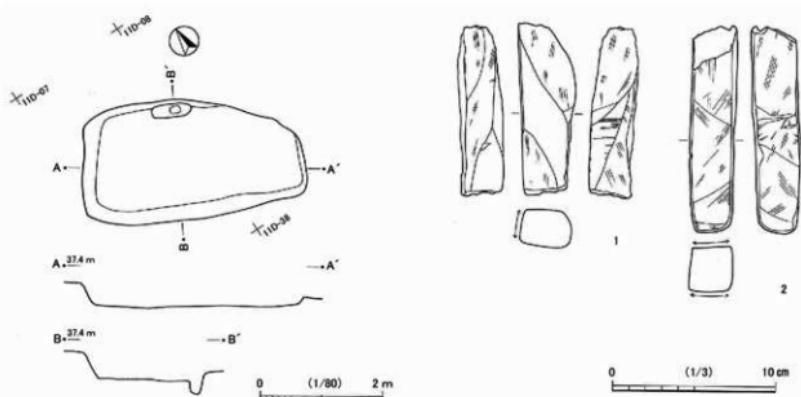
4SK-050（第172・268図、図版15・111）

11D-07・08・17・18グリッドに所在する方形窓穴である。東側で窓穴状遺構4SK-047と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面形は長軸355cm、短軸200cmほどの長方形形状を呈する。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは38cmであるが、北壁際に床面から20cmほどの深さで溝状に凹む部分がある。

図示した遺物は2点である。第172図1・2は砥石である。1は下端を欠損している。2は上端が欠損している。当遺構からは砥石の破片が別に1点出土したが、近接する土坑4SK-049から出土したものと接合し、4SK-049出土遺物として図示した（第268図3）。そのほかには、図示していないが中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土した。

4SK-066～071（第173・174図、巻頭図版7、図版16・93・98・111・115・117・121）

10D-37・47・56～58・66～68・76～78・86・87グリッドに所在する方形窓穴群である。それぞれの遺構の新旧関係は土層断面の観察からある程度明らかになるが、別遺構間で遺物が接合するものもある



第172図 4SK-050と出土遺物

り、全体としてはそれほど時間差をもたない可能性が高い。

4SK-066は最も南側に位置し、平面形は長軸247cm、短軸118cmの隅丸方形状を呈する。4SK-067・068とそれぞれ重複するが、新旧関係は、土層断面の観察からいずれよりも古いと考えられる。検出面からの深さは30cmである。

4SK-067は、4SK-066・068・070とそれぞれ重複するが、長軸210cm、短軸175cmほどの方形を呈するとみられる。新旧関係は、土層断面の観察からいずれよりも新しい。検出面からの深さは31cmである。

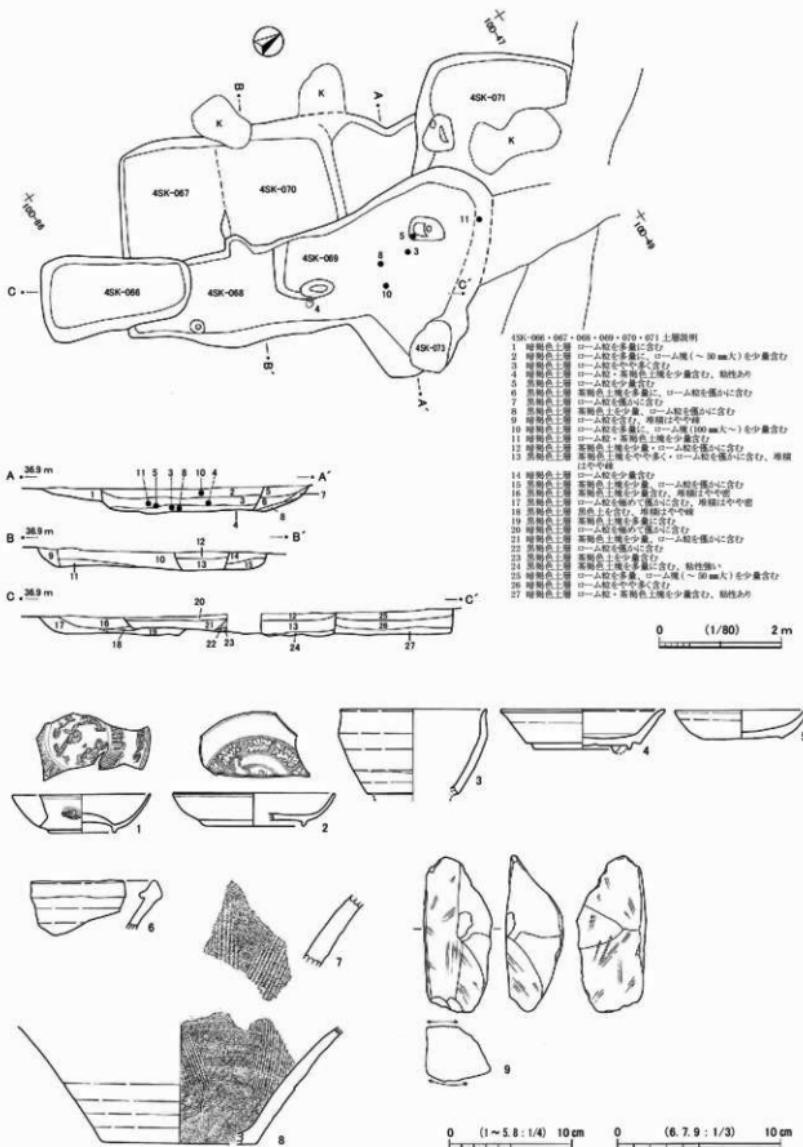
4SK-068は、4SK-066・067・069・070とそれぞれ重複するが、長軸250cm以上、短軸150cmほどの方形状を呈するとみられる。重複する遺構との新旧関係は、土層断面の観察から4SK-066・069・070より新しく、4SK-067より古い。検出面からの深さは16cmである。

4SK-069は、4SK-068・070・071及び土坑4SK-073とそれぞれ重複するが、長軸350cm、短軸300cmほどの不整形形状を呈している。重複する遺構との新旧関係は、土層断面の観察から4SK-070・071・073より新しく、4SK-068より古い。検出面からの深さは20cm前後である。

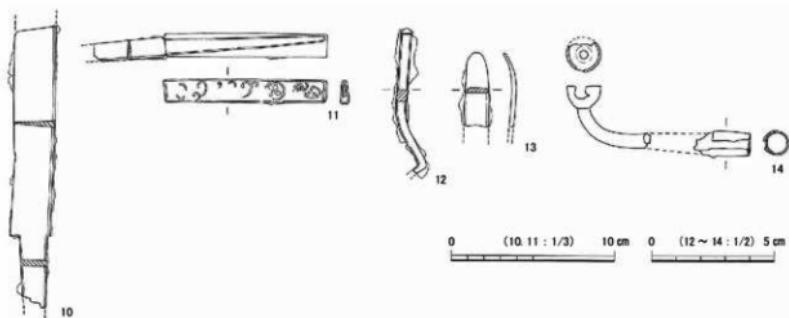
4SK-070は、4SK-067・068・069・071とそれぞれ重複するが、長軸320cm以上、短軸200cm以上の方形を呈するとみられる。重複する遺構との新旧関係は、4SK-071との関係は不明であるが、それ以外のいずれの遺構よりも古いと考えられる。検出面からの床面の深さは25cm前後であるが、北側と南側との間に段差があり、南側が数cmほど低い。

4SK-071は最も北側に位置する。4SK-069・070とそれぞれ重複し、更に北側は溝状遺構4SD-025と重複するが、軸240cm以上、短軸200cmほどの方形形状を呈するとみられる。重複する遺構との新旧関係は、土層断面の観察から4SK-069より古いが、4SK-070及び4SD-025との関係は明らかでない。

図示した遺物は14点である。第173図1・2は染付皿である。1は、高台内に放射状のケズリ痕がみられる。4SK-067・068からそれぞれ出土した破片が接合したものであるが、遺構から90mほど南に離れた15E-22グリッドからも、接合しない同一個体とみられる破片が出土した。2も高台内に放射状のケ



第 173 図 4SK-066 ~ 071 と出土遺物 (1)



第174図 4SK-066～071と出土遺物（2）

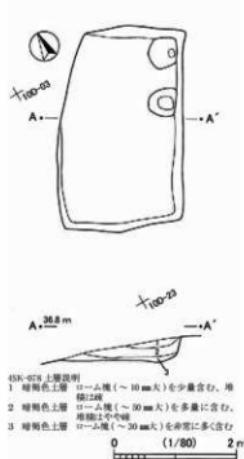
ズリ痕がみられる。4SK-070から出土したものである。3～8は瀬戸・美濃製品である。3は天目茶碗である。4SK-068・069からそれぞれ出土した破片が接合し、全体の30%程度の遺存度となったものである。釉は暗褐色を呈する。大窯第3段階の所産と考えられる。4は4SK-069の覆土中層から出土した反り皿で、全体の80%遺存している。削り出し高台をもち、内外面全面に浅黄色の灰釉が施釉される。見込み部分及び高台内には円錐ピンの痕跡がそれぞれ5か所ずつ認められ、そのうち高台内の3か所には円錐ピンそのものの残欠も付着しており、器として安定が悪い状態である。そのほかにも焼成の際の付着物が内外面にみられる。大窯第3段階の所産と考えられる。5は碁笥底の志野丸皿で、70%程度の遺存度である。釉は外面底部には施されていない。遺存部内面に円錐ピンの痕跡が2か所認められる。大窯第3段階後半の所産と考えられる。4SK-069の覆土中層から出土した。6～8は擂鉢である。6は4SK-068から出土したもので、擂目は遺存部には認められない。7は4SK-067から出土した。8は4SK-069から出土したもので、よく使用され、擂目はほぼ消え、見込み部分の釉も禿げている。9は砥石である。

第174図10～14は金属製品で、10～11は4SK-069、12～14は4SK-070から出土した。10は短刀である。刀身及び茎の先端は欠損しており、現存長は17.1cmである。刀身の現存長は12.8cm、茎の現存長は4.3cmである。刀身の幅は2.5cm、背厚は0.3cmである。11は小柄小刀である。切先部分を折損するが、全体の現存長は14.1cmで、刀身の現存長は4.2cm、最大幅は1.2cmである。柄部分は銅製で、腐食によりはつきりしないが唐草文や花文とみられる浮彫文様が表面に観察される。裏面は無文とみられる。柄部分の長さは9.9cm、幅は1.4cmである。12は鉄釘である。先端は曲がって少し欠損している。13はヘラ状の鉄製品で、ヤリガンナであろうか。14は煙管である。接合しない2破片となっているが、復元現存長は7.5cmである。

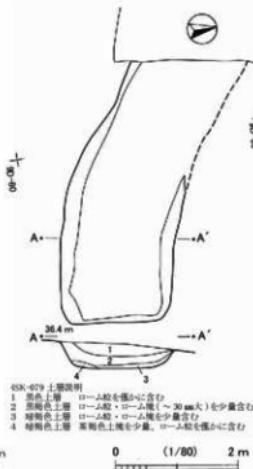
なお、図示していないが、4SK-066からは近世以降陶磁器の小破片、4SK-071からは中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土している。

4SK-078（第175図、図版16）

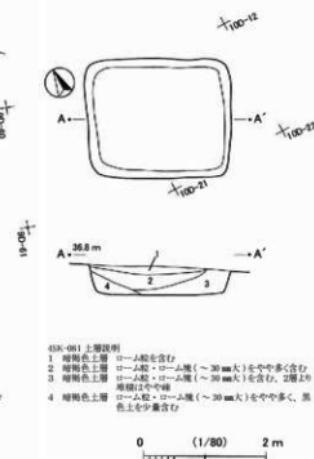
9D-93、10D-02～04・12・13グリッドに位置する。西側は現道に削平されているが、現状で平面形は長軸335cm、短軸202cmの長方形を呈している。底面は平坦であるが、北東隅と東壁中央にピットがみ



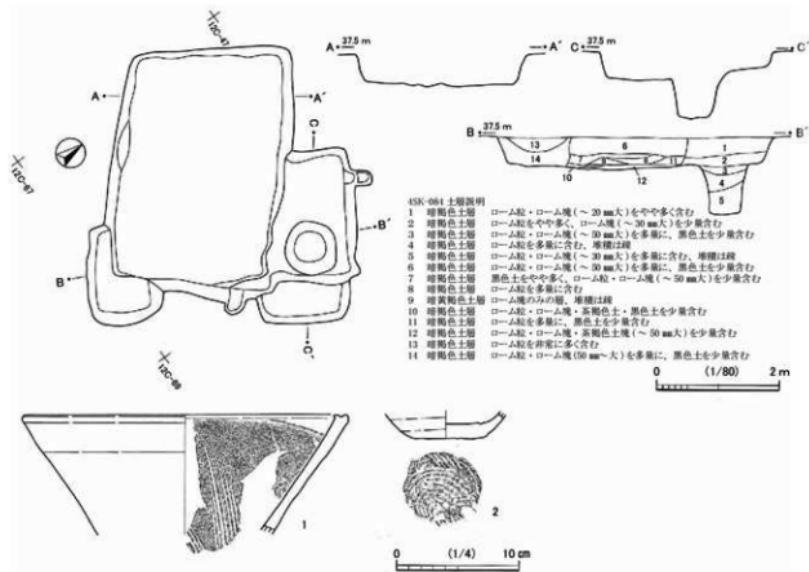
第175図 4SK-078



第176図 4SK-079



第177図 4SK-081



第178図 4SK-084 と出土遺物

られる。検出面からの床面の深さは42cmである。ピットの床面からの深さは、北東隅のものが34cm、東壁のものは6cmである。

遺物は出土していない。

4SK-079（第176図、図版16）

9C-69・79、9D-60・61・70・71グリッドに位置する。西側は削平されているが、平面形は長軸350cm以上、短軸190cmのやや歪んだ長方形状を呈するとみられる。底面はほぼ平坦で、検出面からの床面の深さは46cmである。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

4SK-081（第177図、図版16）

10D-00・01・10・11グリッドに所在する。平面形は長軸235cm、短軸196cmの隅丸方形を呈する。床面は平坦で、検出面からの深さは52cmである。覆土はローム粒等の量で分層されるが、ほとんど一様な土質で短期間に埋没した様相を呈している。

遺物は出土していない。

4SK-082（第180図、図版16・16）

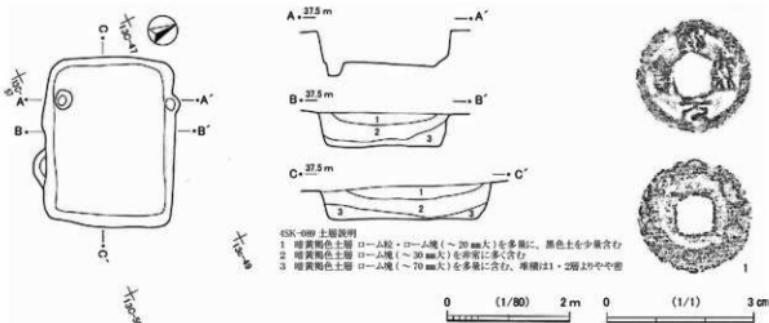
9C-63・64・73・74グリッドに所在する。平面形は長軸337cm、短軸147cmの隅丸方形を呈し、壁がやや斜めに立ち上がる方形竪穴である。検出面からの床面の深さは26cmである。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

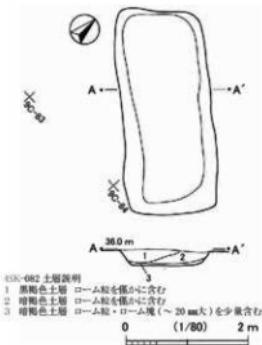
4SK-084（第178図、図版16・98）

12C-37・38・46～49・57～59・68グリッドに所在する。4基の方形竪穴と1基の土坑が重複していると考えられる遺構である。土層断面の観察から、大まかな新旧の流れとして北から南へ新しくなっていく様子が把握できる。すなわち、最も新しい遺構が最も南に位置する方形竪穴で、平面形は長軸165cm、短軸125cmほどの隅丸方形に復元される。検出面からの深さは50cmである。この遺構の北側にある最も大きな方形竪穴がその次に新しく、平面形は長軸315cm、短軸280cmほどの隅丸方形、検出面からの深さは50cmである。次に新しい遺構がその北側に位置する方形竪穴で、一辺は215cmほど、もう一辺は200cm以上の隅丸方形または正方形を呈するものとみられる。検出面からの深さは48cmである。この方形竪穴と重複する径85cmほどの円形土坑があるが、土層断面の観察から、方形竪穴は土坑を埋めて構築されたものとみられる。土坑の方形竪穴床面からの深さは64cmである。そして最も古い方形竪穴が北東部に位置するもので、平面形は明らかでないが、一辺150cmほどの隅丸方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは32cmである。

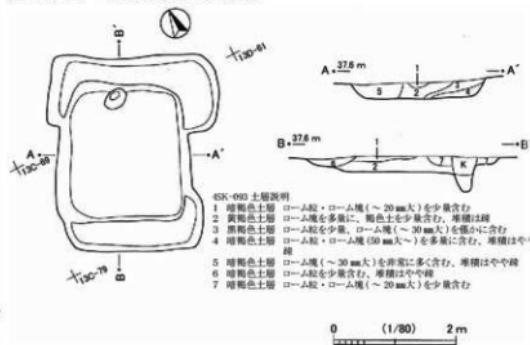
図示した遺物は2点である。いずれも、最も大きな方形竪穴の覆土中からの出土である。第178図1は在地産擂鉢である。胎土に白色粒子・赤色スコリア・砂粒を含み、焼成は良い。色調は黒褐色～暗赤褐色を呈する。時期は古瀬戸後期様式IV期新段階併行と考えられる。2はカワラケ杯である。特に底部が厚く、全体に重量感がある。



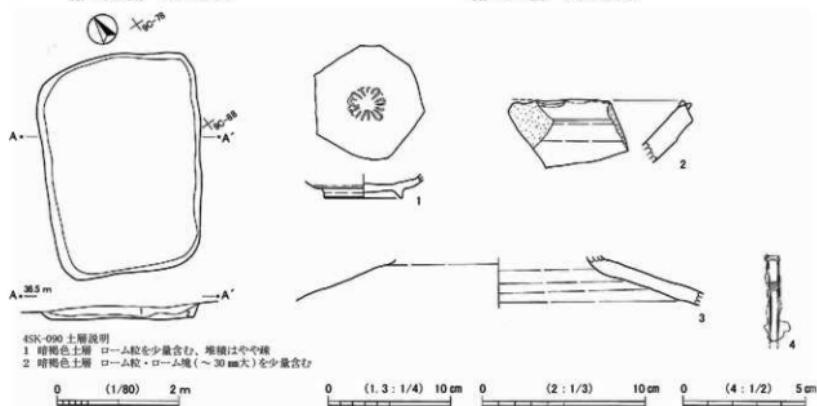
第179図 4SK-089と出土遺物



第180図 4SK-082



第181図 4SK-093



第182図 4SK-090と出土遺物

4SK-089 (第 179 図・図版 17・122)

13C-37・47・48・57・58 グリッドに所在する。平面形は長軸 278cm、短軸 210cm の隅丸方形を呈している。床面西隅付近にピットがみられる。検出面からの床面の深さは 54cm で、床面からのピットの深さは 23cm である。

図示した遺物は 1 点である。第 179 図 1 は銭貨で、熙寧元寶である。書体は篆書である。背面は無文とみられる。全体に腐食が進んでいる。遺物はほかには、中世陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-090 (第 182 図、図版 17・99・117)

9C-67・76～78・86・87 グリッドに所在する。平面形は長軸 361cm、255cm ほどのややいびつな隅丸方形を呈している。検出面からの床面の深さは 32cm ほどである。

図示した遺物は 4 点である。第 182 図 1 は瀬戸・美濃輪禿皿で、見込み部分に菊印花文がある。削り出し高台をもつ。灰釉が施されるが、高台部分は露胎である。2 は常滑片口鉢である。3 は常滑の壺又は甕の破片である。外面には自然釉がみられる。4 は鉄釘である。下端部を欠損する。

4SK-093 (第 181 図)

13C-59・69・79、13D-50・60・70 グリッドに所在する遺構で、少なくとも 3 基の方形竪穴が重複しているとみられる。主体となるのは中央の隅丸正方形を呈するもので、一辺の長さは現状で 220cm ほどである。検出面からの底面の深さは 39cm である。北壁にピットがみられるが、擾乱の可能性もある。この遺構の南北に、それぞれ隅丸方形の遺構が重複している。北側のものは長軸 277cm、短軸 130cm、検出面からの深さ 15cm、南側のものは長軸 227cm、短軸は 100cm ほどと推定され、検出面からの深さは 19cm である。新旧関係は、土層断面の観察から、中央のものより南北のもののほうが新しい。

遺物は出土していない。

4SK-095・096 (第 183 図、図版 18)

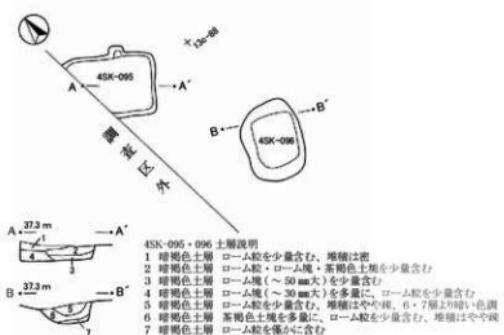
13C-77・87・88・97・98 グリッドに所在する 2 基の方形竪穴である。4SK-095 は、西側が調査区外となるが、平面形は短軸 105cm、長軸 150cm 以上の長方形を呈する。検出面からの深さは 27cm である。北東壁にピット状に張り出す部分があるが、深さは床面には達していない。4SK-096 は、長軸 128cm、短軸 97cm の隅丸方形を呈する。検出面からの深さは 38cm である。

遺物はいずれの遺構からも出土していない。

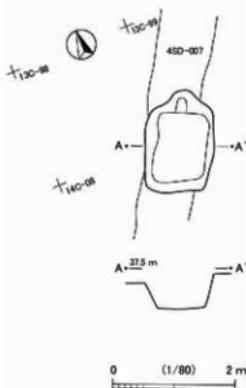
4SK-097 (第 184 図、図版 18)

13C-98・99、14C-08・09 グリッドに所在する。直線的に延びて垂直に屈曲する溝状遺構 4SD-007 の西辺に收まるように、軸方向も同じく存在するが、新旧関係は明らかでない。平面形は、北壁にやや張り出している部分があるが、基本的には隅丸方形を呈し、長軸 168cm、短軸 110cm である。検出面からの深さは 54cm である。なお、4SD-007 底面からの深さは 30cm ほどである。

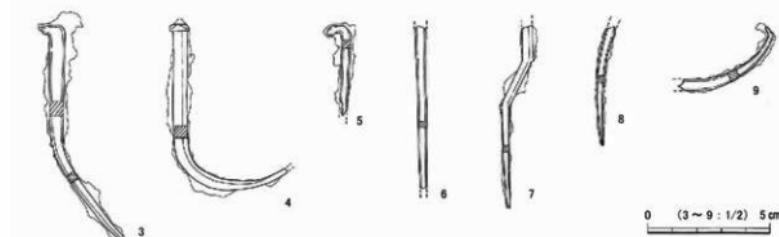
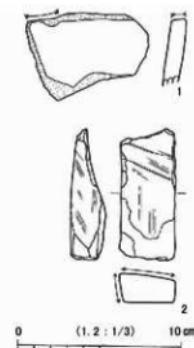
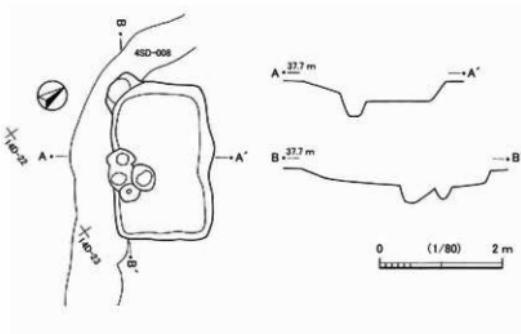
遺物は、図示していないが中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土した。



第183図 4SK-095・096



第184図 4SK-097



第185図 4SK-098と出土遺物

4SK-098（第185図、図版18・109・111・117）

14D-02・03・12・13 グリッドに所在する。溝状遺構4SD-008と重複するが、新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが古い。平面形は長軸257cm、短軸160cmほどの隅丸方形形状を呈する。検出面からの深さは33cmである。なお、西側にピットがみられるが、少なくとも壁際でないものは土層断面の観察から当遺構より新しいものとみられる。覆土は、混入するローム粒・ローム塊・暗茶褐色土塊の量で分層できる暗黄褐色土層が上下2層に堆積していた。

図示した遺物は9点である。第185図1は常滑窯の転用砥石である。破断面の一部が使用されている。2は砥石である。上下端は欠損している。3～9は鉄製品で、3～8は釘である。3は中間部でやや曲がっているが、完形とみられ、全長は8.8cmである。4もほぼ完形だが、中間部で屈曲しており、屈曲していなければ全長は10cmとなる。5・8は下部と上部がそれぞれ欠損する。6は上部と下端部が欠損する。7も、頭部を欠き折れ曲がっているが、釘と考えられるものである。9は、釘の可能性もあるかもしれないが、弧状に曲がるもので、端部が少し屈曲する。把手と考えられる。ほかには、図示していないが近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-099（第186図、図版18）

14D-21・22 グリッドに所在する。平面形は、長軸175cm、短軸113cmの隅丸方形形状を呈する。北辺にピット状に張り出す部分があるが搅乱と考えられる。検出面からの床面の深さは15cmほどであるが、遺構中央に径40cm、床面からの深さ26cmほどのピットが1か所ある。

遺物は出土していない。

4SK-100（第187図、図版18）

14C-19・29、14D-10・20 グリッドに所在する。南側で溝状遺構4SD-037と重複するが、新旧関係ははっきりしない。平面形は、現状で長軸275cm、短軸200cmである。検出面からの床面の深さは58cmである。遺物は出土していない。

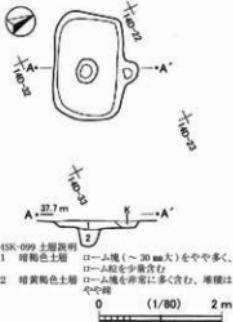
4SK-104・118（第188図、図版18）

14D-52～54・62～64 グリッドに所在する、重複する2基の方形竪穴である。東西方向から南北方向へ屈曲し北へ延びる溝状遺構4SD-006の屈曲部分に重複して同じ軸方向で位置している。新旧関係は、土層断面の観察から4SK-104が4SD-006より古いことは明らかであるが、4SK-104・118の関係ははっきりしない。

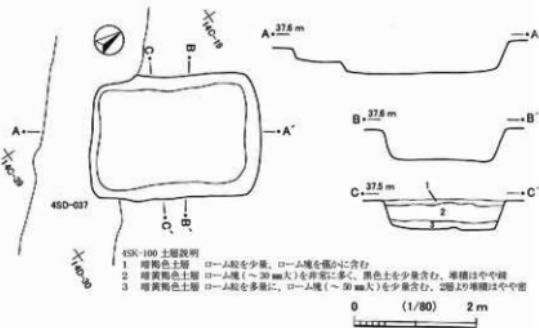
4SK-104は、現状で隅丸方形形状を呈し、短軸185cm、長軸は215cmと復元できる。検出面からの深さは76cmである。覆土はローム粒・ローム塊・茶褐色土塊の混入量によって分層可能な暗褐色土が3層水平堆積していた。

4SK-118は、現状で長軸220cm、短軸130cmほどの長方形を呈している。底面は平坦で、検出面からの深さは109cmである。

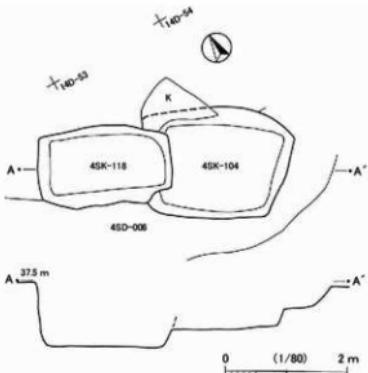
遺物はいずれの遺構からも出土していない。



第186図 4SK-099



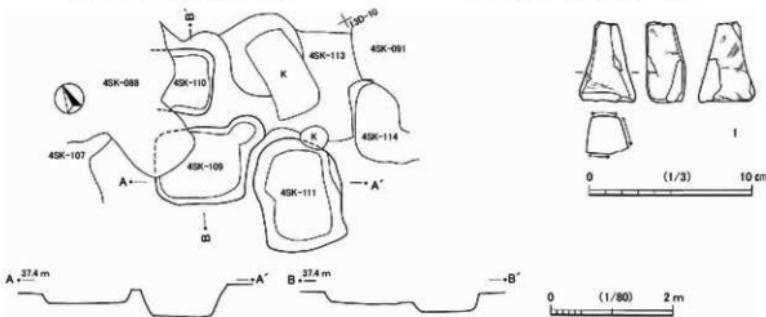
第187図 4SK-100



第188図 4SK-104・118



第189図 4SK-105～108



第190図 4SK-109～111と出土遺物

4SK-105～108（第189図、図版18）

13C-06・07・16・17グリッドに所在する、重複する4基の方形竪穴群である。地下式坑4SK-087・088の南側に隣接する。各遺構の新旧関係は、土層断面の観察から4SK-105より4SK-106のほうが古いことが判明したが、ほかは明らかでない。

4SK-105は長軸113cm、短軸103cmの隅丸方形を呈する。壁に段があるが床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは42cmである。覆土はローム粒・灰色粘土粒・茶褐色土塊の混入量により分層できる暗褐色土が3層水平堆積していた。

4SK-105の北に重複して位置し、更に一部地下式坑4SK-087に食い込むように位置しているのが4SK-106である。4SK-106は東側で4SK-108とも重複し、全体の形状や規模ははっきりしないが、隅丸方形を呈する可能性が高い。検出面からの深さは18cmである。

4SK-107は北西部分で4SK-108と重複するが、長軸110cm、短軸95cmほどの隅丸方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは18cmである。

4SK-108は、形状ははっきりしないが長軸130cm以上、短軸120cmほどの隅丸方形を呈するとみられる。検出面からの深さは50cmである。

遺物は、図示はしていないが4SK-106から中世陶磁器の小破片が少量出土したのみで、ほかの遺構からは出土していない。

4SK-109～111（第190図、図版19・111）

13C-08・18・19・28・29グリッドに位置する方形竪穴群である。4SK-109・110は地下式坑4SK-088と重複している。各遺構の新旧関係は、土層断面の観察から地下式坑4SK-088より4SK-109のほうが新しいが、ほかは明らかでない。

4SK-109は、北西隅で4SK-088の入口部分と重複しているが、平面形は長軸145cm、短軸124cmの隅丸方形を呈するとみられる。北東隅に円形に張り出す部分があるが、土層断面の観察から、当遺構よりも新しい別遺構であることが明らかである。検出面からの床面の深さは22cmである。

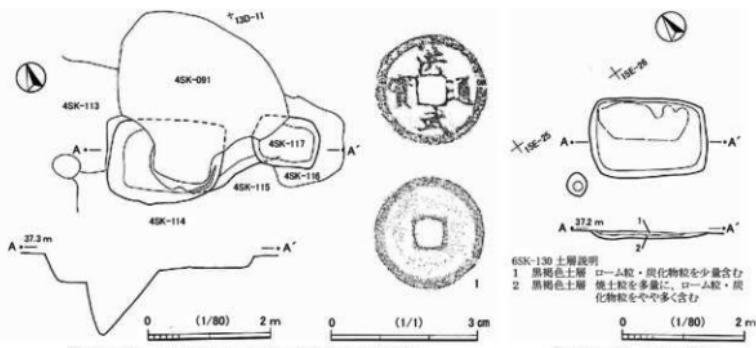
4SK-110は、西側で4SK-088と重複する。平面形は隅丸方形を呈するとみられ、南北軸105cm、東西軸は現存の部分で80cmである。検出面からの床面の深さは30cmである。4SK-088との新旧関係は明らかでない。

4SK-111は長軸185cm、短軸130cmほどの不整隅丸方形を呈している。検出面からの深さは52cmである。図示した遺物は1点である。第190図1は、4SK-110から出土した砥石である。上端は欠損している。ほかは、図示していないが4SK-110から中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土したのみで、4SK-109・111からは出土していない。

4SK-114・115・117（第191図、図版19・122）

13C-19・29、13D-20・21グリッドに所在する、重複する3基の方形竪穴である。互いに重複するだけでなく周囲の土坑や地下式坑とも重複し、やや複雑な状況を呈している。新旧関係はいずれもはっきりしない。

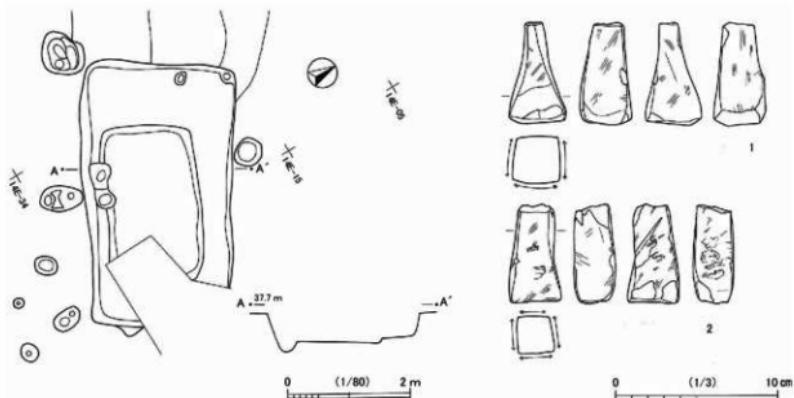
4SK-114は、北東側で地下式坑4SK-091と、西で土坑4SK-113と、東で4SK-115と重複するが、平



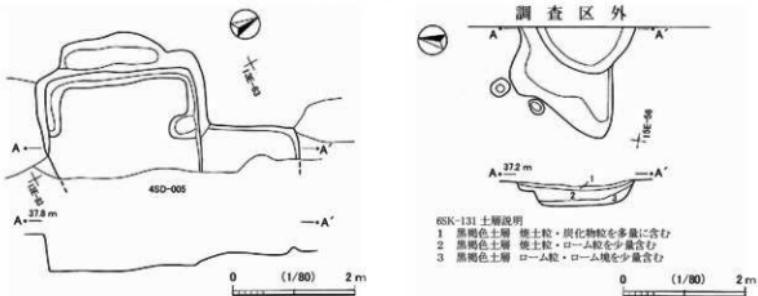
第191図 4SK-114・115・116・117と出土遺物



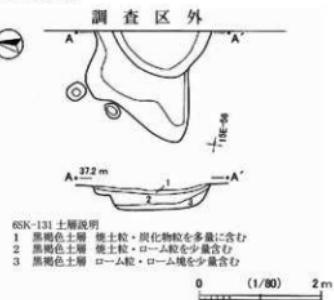
第192図 6SK-130



第193図 6SK-126と出土遺物



第194図 6SK-127



第195図 6SK-131

面形は隅丸方形とみられる。長軸は 180cmほど、短軸は 125cmほどと復元される。検出面からの床面の深さは 62cmである。

4SK-115 は、西で 4SK-114、北西で地下式坑 4SK-091、東で 4SK-117 と重複し、平面形は明確でない。検出面からの深さは 21cmである。

4SK-117 は、西で 4SK-115、北西で地下式坑 4SK-091、東で土坑 4SK-116 と重複するが、平面形は長軸 105cm、短軸 80cmほどの隅丸方形と推定される。検出面からの床面の深さは 40cmほどである。

図示した遺物は 1 点である。第 191 図 1 は銭貨で、洪武通寶である。背面は無文である。遺物はほかには 4SK-117 から中世陶磁器の小破片が少量出土したのみで、4SK-114・115 からは出土していない。

6SK-126 (第 193 図、図版 19・111)

14E-13～15・23～25 グリッドに所在する。平面形は長軸 430cm、短軸 250cm の長方形を呈する。検出面からの床面の深さは 43cm であるが、中央の推定長軸 265cm、短軸 155cm の長方形の範囲がそれより 5cm 前後低くなっている。覆土はローム粒・ロームブロックの混入量で上下 2 層に分層可能な黒褐色土が堆積しており、複数の遺構が重複している痕跡はみられない。床面には、南西壁際に床面からの深さ 20cm 前後のピットがある。また、遺構の周囲にもピットがいくつかあり、遺構に伴う可能性がある。周囲のピットの深さは、西角際のものが 53cm、南西壁際のものが 47cm と深めで、そのほかは 20cm 前後である。

図示した遺物は 2 点である。第 193 図 1・2 は砥石である。いずれも、上端を欠損する。遺物はほかには中世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土したのみで、図示していない。

6SK-127 (第 194 図)

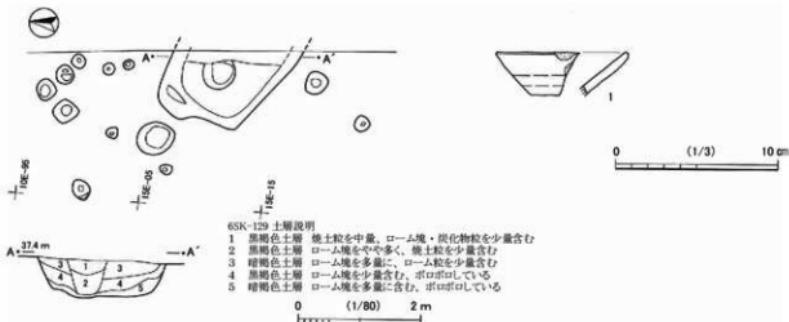
13E-62・63・72・73 グリッドに所在する。東側は溝状遺構 4SD-005 と重複する。複数の遺構が重複している可能性もあるが、平面形は基本的には南北軸 280cm、東西軸 185cm 以上の隅丸方形を呈し、西側に長さ 170cm、幅 45cm ほどの段状に張り出す部分がみられる。また、北側にも張り出す部分があり、同時期に機能したものか別の遺構か不明ではあるが、張り出す部分を含めると、規模は南北軸 440cm、東西軸 230cm 以上となる。検出面からの深さは、床面が 57cm、西側の張り出す部分で 35cm、北側で 34cm である。主体となる部分の床面はほぼ平坦であるが、その西壁際から南壁際・北壁際の一部にかけて、深さ数cm の壁溝が検出された。

遺物は出土していない。

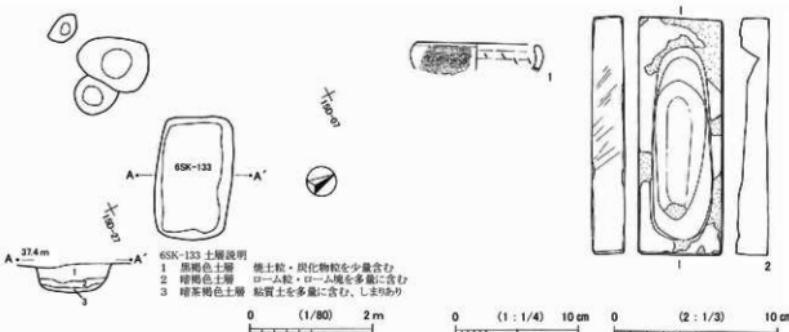
6SK-129 (第 196 図、図版 19・99)

15E-05・06・16 グリッドに所在する。東側は調査区外となる。平面形は、北西隅がやや張り出しが、長軸 160cm 以上、短軸 155cm の隅丸長方形とみられる。検出面からの深さは 63cm である。床面中央にやや凹む部分があるが、土層断面ではちょうどその上に別のピットが絡んでいるのが観察され、遺構と関係のあるものかどうかはっきりしない。周辺のピットとの関連もはっきりしない。

図示した遺物は 1 点である。第 196 図 1 はカワラケ杯である。



第196図 6SK-129と出土遺物



第197図 6SK-133と出土遺物

6SK-130（第192図）

15E-25・26グリッドに所在する。平面形は長軸190cm、短軸130cmの隅丸方形を呈する。検出面からの床面の深さは13cmである。床面には焼土ブロックと炭化物が図の点線の範囲内に散布していた。壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は、カワラケの小破片が少量出土したのみで、図示していない。

6SK-131（第195図）

15E-36・46グリッドに所在する。平面形は不整形を呈し、東側は調査区外へ繋がる。床面には段差があり、一見複数の遺構が重複しているように見えるが、土層断面の観察から、少なくとも遺存部分については重複関係はみられず、一度に埋没したものであることが明らかである。検出面からの深さは、西側の浅い部分で14cm、東側の深い部分で35cmである。遺構の外側西北部に2基のピットがみられ、伴う可能性がある。検出面から深さは、北側のものが35cm、南側のものが5cmである。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

6SK-133 (第 197 図、図版 19・99・111)

15D-06・07・16・17 グリッドに所在する。平面形は長軸 200cm、短軸 123cm の隅丸長方形を呈する。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 38cm である。

図示した遺物は 2 点である。第 197 図 1 は瓦質香炉である。外面には菊の押印文が巡る。内面には、ヘラナデのヘラ当て痕が観察される。胎土には 1mm～2mm 大の白色粒子を含み、色調は暗灰色を呈する。2 は硯である。部分的に剥落・欠損があるがほぼ完形である。よく使い込まれている。

第 4 節 井戸

1 概要

調査区内から検出された井戸は 3 基である。10C～14D グリッドの南北約 85m の範囲内に、3 基が集中して存在している。

2 遺構と遺物

4SE-001 (第 198 図、図版 20・99)

14D-25 グリッドに所在する。平面形は径 125cm の円形を呈する。調査は検出面から約 210cm の深さまで行ったが、更にまだ 1m 以上の深さがあると推定される。壁は垂直に近い角度で、壁の北西側には、足掛けと思われる奥行き 10cm 程度の凹みが 3 か所確認された。凹みから凹みの高さの間隔は、約 60cm である。

図示した遺物は 1 点である。第 198 図 1 はカワラケ杯である。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は比較的良い。近世の所産と考えられる。

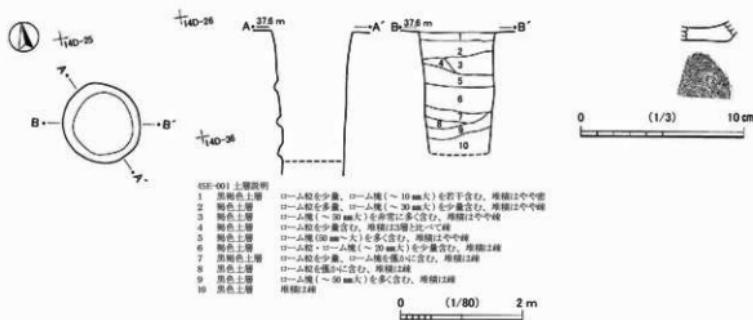
4SE-002 (第 199 図、図版 20・110)

10C-38・47～49・57～59 グリッドに所在する。平面形は径 360cm ほどの円形を呈する。調査は検出面から 240cm の深さまで行ったが、更に深さがある。断面形は漏斗状を呈し、検出面から 60cm 程度の深さまでは緩い傾斜で落ち込み、その下はほとんど垂直の壁である。壁が垂直となっている部分の平面形は、径 125cm の円形を呈する。壁の北西側と南東側には、足掛けと思われる奥行き 15cm 前後の凹みが 3 か所ずつ確認された。凹みから凹みの高さの間隔は 60cm 前後である。

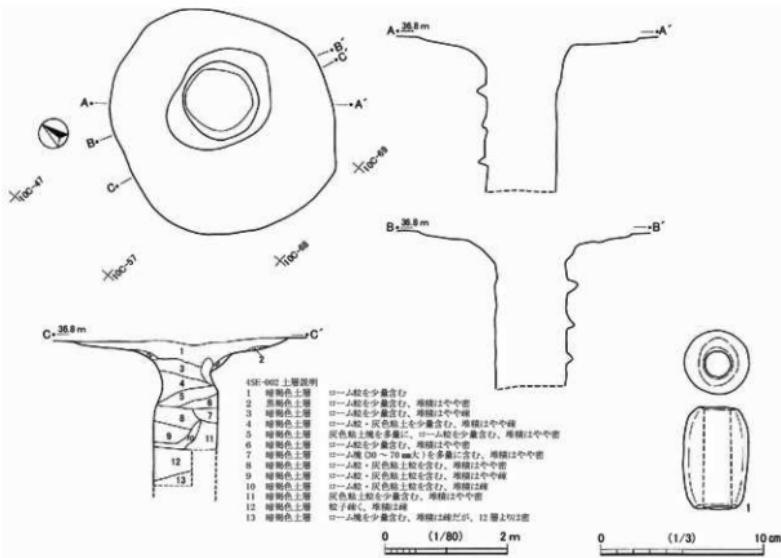
図示した遺物は 1 点である。第 199 図 1 は、土鍤である。上下端は面取りされ、どちらを上にしても安定して立つ。表面は平滑である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好、色調は赤褐色を呈している。このほかには、近世以降土器の小破片が少量出土したのみである。

6SE-005 (第 200 図、図版 20・94)

14D-67・68 グリッドに所在する。溝状遺構 4SD-005 と重複するが、土層断面の観察から当遺構のほうが古いとみられる。現存する電柱により調査不能の部分があるが、平面形は現状で一辺 95cm ほどの隅丸正方形を呈する。検出面からの深さは 230cm ほどである。

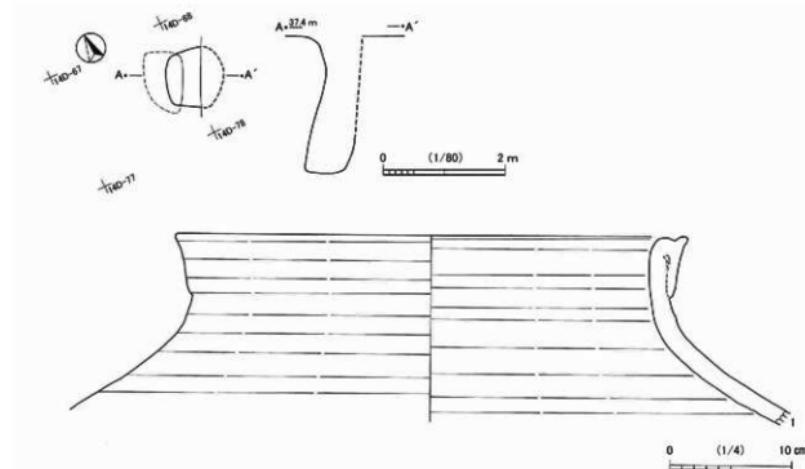


第198図 4SE-001と出土遺物



第199図 4SE-002と出土遺物

図示した遺物は1点である。第200図1は一括で取り上げられた常滑大甕である。口縁部の25%の遺存度で、復元口径は42.0cmである。折返し口縁をもつ。色調は外面が灰色、内面は暗赤褐色を呈する。9型式に比定されるものと考えられる。ほかに、中・近世以降陶磁器の小片も少量出土している。



第200図 6SE-005と出土遺物

第5節 土坑

1 概要

調査区内では多数の遺構が検出されたが、地下式坑・方形竪穴・竪穴状遺構・井戸でないもののうち、柱穴等とは異なり一定規模をもつ遺構を土坑とした。平面形は方形のものや円形のもの、不整形のものなど様々である。分布範囲は地下式坑・方形竪穴・竪穴状遺構・井戸より広く、29K グリッド以北である。土坑の用途や機能は多くは不明であるが、中には銭貨が大量に埋納された4SK-014のような遺構もみられる。なお、4SK-014については第1節にまとめて掲載している。

遺構種別記号には「SK」が付されているものが多いが、「SH」が付されているものもあり、ここでは「SK」を先に、「SH」を後とし、その中でそれぞれ、調査次・番号の若い順に並べて掲載することとした。

2 遺構と遺物

SK-001 (第201図、図版4)

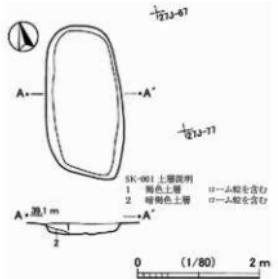
27J-66・76 グリッドに所在する。平面形は長軸 250cm、短軸 123cm の不整圓丸方形状を呈している。底面は平坦で、検出面からの深さは 20cm ほどである。

遺物は出土していない。

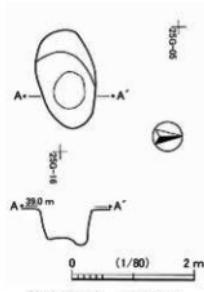
SK-004 (第202図、図版4)

25G-05・15 グリッドに所在する。平面形は長軸 162cm、90cm の梢円形である。検出面からの深さは、深いところで 62cm である。

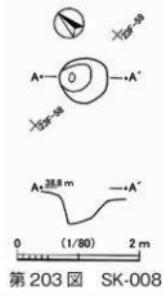
遺物は出土していない。



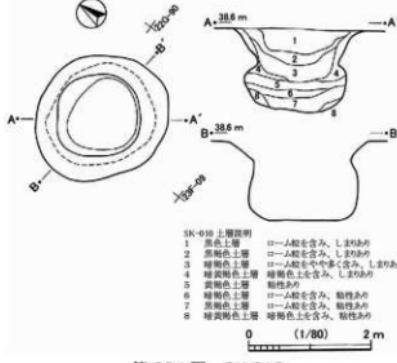
第201図 SK-001



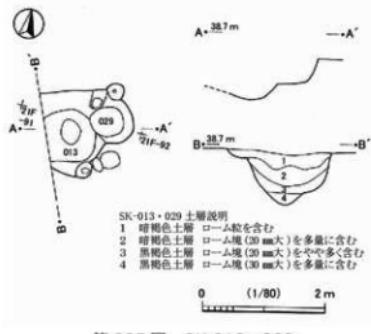
第202図 SK-004



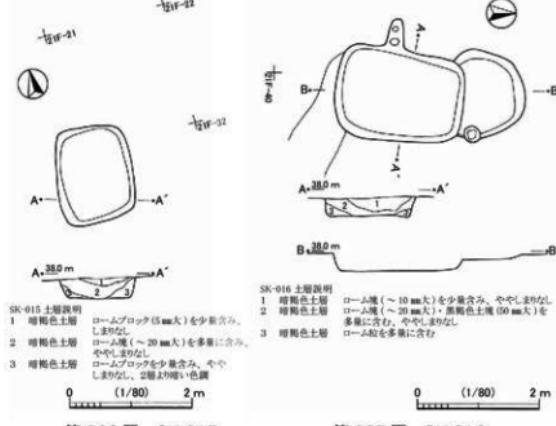
第203図 SK-008



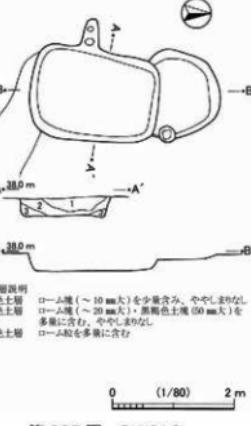
第204図 SK-010



第205図 SK-013・029



第206図 SK-015



第207図 SK-016



第208図 SK-017

SK-008 (第 203 図、図版 4)

23F-48・58 グリッドに所在する。平面形は径約 79cm の円形を呈する。断面形は擂鉢状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで 48cm である。

遺物は出土していない。

SK-010 (第 204 図、図版 4)

22F-88・89・98・99 グリッドに所在する。平面形は長軸 230cm、短軸 200cm の楕円形を呈する。底面は平坦で、断面形は袋状を呈する。検出面からの深さは 136cm である。

遺物は出土していない。

SK-013・029 (第 205 図、図版 6)

21F-81・91 グリッドに所在する、重複する 2 基の土坑であるが、新旧関係は明らかでない。SK-013 は、西側が調査区外となるが、平面形は径約 135cm の円形状、その東側に重複する SK-029 は径約 95cm の円形状を呈するとみられる。いずれも浅いビットが付随するようだが、周辺にはビットが群在しており、これだけで機能したものではない可能性もある。なお、SK-029 の東には、方形竪穴 SK-011 が隣接する。

遺物は、SK-013 から混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-015 (第 206 図、図版 4)

21F-20・21・30・31 グリッドに所在する。平面形は長軸 162cm、短軸 123cm の隅丸方形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 39cm である。方形竪穴とするには底面等があまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-016 (第 207 図、図版 5)

21E-29・39、21F-20・30 グリッドに所在する。平面形は、長軸 212cm、短軸 150cm の隅丸方形の土坑の北側に径 145cm ほどの円形土坑が重複している形である。いずれも底面は平坦で、検出面からの深さは方形部分が 32cm、円形部分が 14cm である。また、方形部分には、西壁中央部分に細く張り出す部分がある。方形部分については方形竪穴に分類することもできるかもしれないが、底面などがあまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は出土していない。

SK-017 (第 208 図、図版 5)

21F-45・46・55 グリッドに所在する。平面形は、長軸 126cm、短軸 88cm の方形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 26cm である。方形竪穴とするには底面等があまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は出土していない。

SK-018・021（第209図、図版5）

21E-09・19、21F-00・10 グリッドに近接して所在する土坑である。平面形は、SK-018 は径約 123cm と径約 105cm の 2 基の円形の土坑が重複したような形状を呈しており、SK-021 は、東側が SH-014 と重複しているが、長軸 182cm、最大幅 155cm の卵形に復元できる。新旧関係は、断面の観察から SH-014 より SK-021 のほうが新しい。検出面からの深さは、SK-018 は深い部分で 33cm、浅い部分で 13cm である。SK-021 は 23cm である。

遺物は、SK-021 から混入品とみられる鉄製品が出土したのみである。

SK-019（第210図）

21F-16・26 グリッドに所在する。平面形は、長軸 116cm、短軸 72cm の隅丸方形の土坑の北側に、径約 30cm の円形のピットが重複しているような形状である。長方形部分の底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 31cm、円形部分の深さは 51cm である。遺構周辺にはピットが群在し、当遺構のみで機能していたのではないか可能性もある。

遺物は出土していない。

SK-022（第211図、図版5）

21F-22・23・32・33 グリッドに所在する。平面形は長軸 168cm、短軸 130cm の隅丸方形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 21cm である。方形竪穴とするには底面等があまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は出土していない。

SK-023（第212図、図版5）

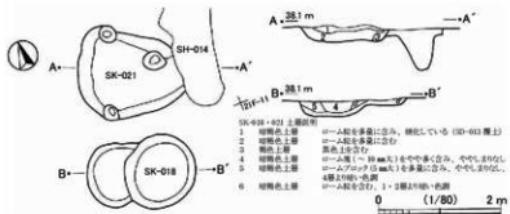
29K-48・57・58 グリッドに所在する。平面形は、長軸 284cm、短軸 68cm の長方形を基本とし、長辺の中間部に 1 か所ピット状の張出し部分がある。検出面からの底面の深さは 21cm、ピット状張出し部分の底面からの深さは 26cm である。溝状遺構 SD-015 の延長線上に位置し、軸方向が一致するが、覆土は SD-015 とは異なる、単独の土坑である。

遺物は、近世以降陶磁器が少量出土したのみである。

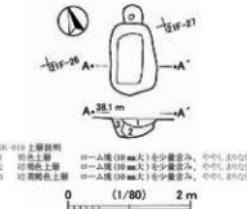
SK-024・025（第213図、図版5）

21F-82・83・92・93 グリッドに所在する、重複する 2 基の土坑であるが、SK-025 は方形竪穴 SK-011 と重複している。また、遺構周辺にはピットが群在しており、これだけで機能したものではない可能性もある。SK-024 は径 95cm ほどのピットと径 50cm ほどのピットが連結したような状態であり、検出面からの深さは、径の大きい方が浅く 40cm、径の小さいほうが深く 69cm を測る。SK-024 の東側で重複する SK-025 は、東側が SK-011 と重複しているが、径約 125cm の円形状と推測することが可能である。検出面からの深さは 43cm である。SK-024・025 と SK-011 の新旧関係はいずれも明らかでない。

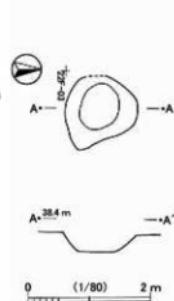
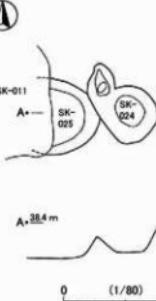
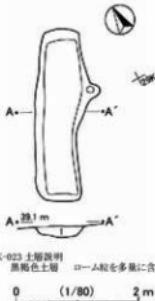
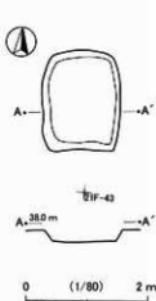
SK-024・025 とも遺物は出土していない。



第209図 SK-018・021



第210図 SK-019

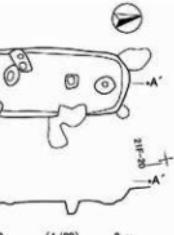
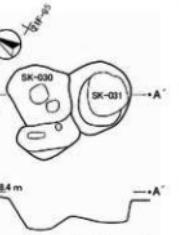
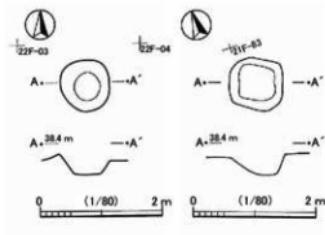


第211図 SK-022

第212図 SK-023

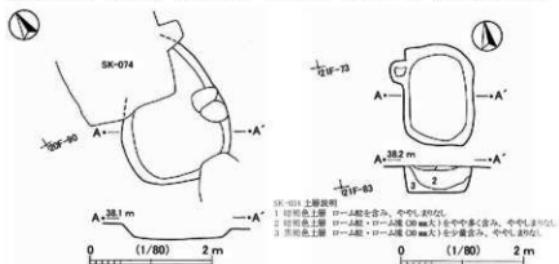
第213図 SK-024・025

第214図 SK-026



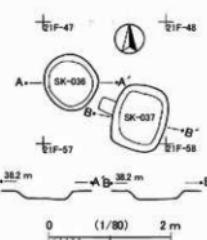
第215図 SK-027 第216図 SK-028 第217図 SK-030・031

第218図 SK-032



第219図 SK-033

第220図 SK-034



第221図 SK-036・037

SK-026 (第 214 図、図版 6)

21F-93 グリッド、SK-024・025 の南に隣接して所在する。平面形は径 120cm ほどの不整円形状を呈する。底面はやや平坦で、検出面からの深さは 34cm である。遺構周辺にはピットが群在しており、当遺構のみで機能したものではない可能性もある。

遺物は出土していない。

SK-027 (第 215 図、図版 6)

22F-03 グリッド、SK-026 の南に隣接して所在する。平面形は径 85cm の円形を呈する。底面はやや平坦で、検出面からの深さは 36cm である。遺構周辺にはピットが群在しており、当遺構のみで機能したものではない可能性もある。

遺物は出土していない。

SK-028 (第 216 図)

21F-82・83 グリッドに所在する。平面形は一辺 85cm ほどの隅丸正方形を呈する。検出面から底面までの深さは 32cm である。

遺物は、アカニシの貝殻が 1 点出土したのみである。

SK-030・031 (第 217 図、図版 6)

21F-94 グリッドに所在する重複する土坑である。平面形は、SK-030・031 とも径 110cm ほどの円形を呈する土坑が重複したところに、長軸 100cm、短軸 55cm の不整形の落込みが更に連結したような形状となっている。検出面からの深さは、SK-030 が 54cm、SK-031 が 39cm である。遺構は土坑 SK-024・026・027 に近接し、周辺にはピットが群在していることから、当遺構のみで機能したものではない可能性もある。

遺物は、SK-030 から混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-032 (第 218 図、図版 6)

21E-28・29・38・39 グリッドに所在する。平面形は長軸 260cm、短軸 115cm の隅丸方形を呈している。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 30cm である。底面や壁際にピットが複数みられるがいずれも底面からの深さは 20cm 前後である。遺構周辺にはピットが群在しており、同時に機能していた可能性もある。

遺物は出土していない。

SK-033 (第 219 図)

20F-90・91 グリッドに所在する。北側で方形竪穴 SK-074 と重複し、平面形は現存部分で長径 232cm、短径 178cm ほどの卵形を呈している。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 19cm である。方形竪穴 SK-074 との新旧関係は明らかでない。

遺物は出土していない。

SK-034（第220図、図版6）

21F-73・74 グリッドに所在する。平面形は長軸165cm、短軸113cmの隅丸方形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは56cmである。北西部に張り出すピット状の部分は、底面からの深さが数cmほどである。遺構は弥生時代の竪穴住居跡を切って構築されており、周囲には竪穴住居跡の柱穴とみられるピットが複数分布している。方形竪穴とするには底面等があまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-036・037（第221図、図版6）

21F-47 グリッドに近接して所在する単独土坑2基である。SK-036は、平面形は径約90cmの円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは15cmほどである。SK-037は、平面形は長軸105cm、短軸87cmの隅丸方形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは15cmほどである。

遺物はSK-036から近世以降土器が少量、SK-037から礫が少量出土したのみである。

SK-039（第222図、図版7）

21F-18・28 グリッドに所在する。平面形は長軸130cm、短軸108cmの隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは23cmである。北壁にピットがあり、底面からの深さは46cmである。

遺物は出土していない。

SK-040・042（第223図）

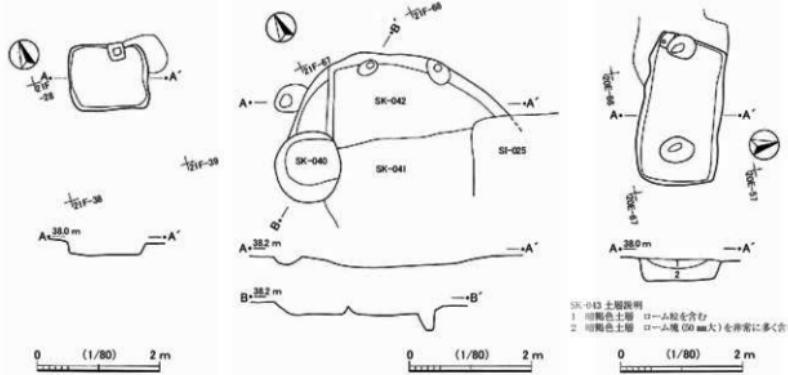
21F-66～68 グリッドに所在する2基の土坑で、方形竪穴SI-025・SK-041と重複する。新旧関係はいずれも明らかではない。SK-040は現状で径115cmほどの円形を呈しているが、もとは橢円形状であった可能性がある。底面はやや平坦で、検出面からの深さは13cmほどである。SK-042は円形を呈し、規模は最も長い部分で約350cmを測る。底面は西側にやや高い部分があるが、なだらかで、検出面からの深さは、最も深いところで25cmほどである。北側の壁面沿い及び遺構の西側に隣接してピットがあり、壁際のピットの底面からの深さは、東側のものは54cm、西側のものは32cmである。遺構の西側に隣接しているピットの検出面からの深さは10cmである。

SK-040からは遺物は出土していない。SK-042からは混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-043（第224図、図版7）

20E-55・56 グリッドに所在する。平面形は長方形を呈し、規模は検出できた部分で長軸240cm、短軸132cmである。底面は平坦で、検出面からの深さは37cmである。底面の東側と西壁にピットがあり、東側のものは底面からの深さ46cm、西壁のものは55cmである。また、南西隅にも、底面からの深さ25cmのピットがある。

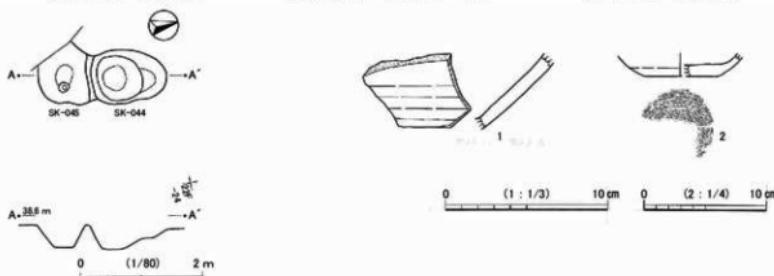
遺物は出土していない。



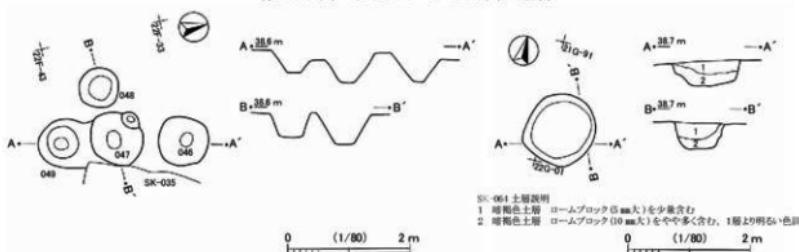
第222図 SK-039

第223図 SK-040・042

SK-043 土層説明
1 喜陶色土層 ローム粒を含む
2 喜陶色土層 ローム塊(50mm大)を非常に多く含む



第225図 SK-044・045と出土遺物



第226図 SK-046～049

第227図 SK-064

SK-044・045 (第225図、図版7・100)

22F-22・23・32・33 グリッドに所在する、重複する2基の土坑である。平面形は、SK-044は長軸 122cm、短軸 88cmの楕円形状、SK-045は東側が調査区外へ続くが、検出された部分で径約 98cmの不整円形状を

呈する。断面形はいずれも底部に平坦面を持ち、SK-044 は段状の部分も認められる。底面の検出面からの深さは SK-044 が 40cm、SK-045 が 37cm である。SK-045 の底面には更に 12cm ほど深くなるピット状の落込みがある。

図示した出土遺物は 2 点である。第 225 図 1 は、SK-044 から出土した瀬戸・美濃製品で、折縁深皿又は直縁大皿と考えられる。外面に灰釉が施されるが、外面の遺存部下端は露胎となっている。古瀬戸後期様式期のものと考えられる。2 は、SK-045 から出土したカワラケ杯である。

SK-046 ~ 049 (第 226 図、図版 7)

22F-23・24・33・34・43 グリッドに所在する土坑 4 基である。いずれも平面形は円形、底面はやや平坦で、SK-046 は径約 80cm・検出面からの深さ 51cm、SK-047 は径約 85cm・検出面からの深さ 50cm、SK-048 は径約 67cm・検出面からの深さ約 40cm である。SK-049 は SK-047 と連結しているが、径約 80cm・検出面からの深さは 38cm である。東側に方形竪穴 SK-035 が隣接し、同時に機能した可能性も考えられる。

遺物は、いずれの土坑からも出土していない。

SK-064 (第 227 図)

21G-91 グリッドに所在する。平面形は径 110cm ほどの不整円形を呈する。底面はやや平坦で、検出面からの深さは 44cm である。

遺物は出土していない。

SK-067・070・085 ~ 088 (第 228 図、図版 8・9・100・122)

19F-50 ~ 54・61 ~ 64・71 ~ 75・81 ~ 85 グリッドに群衆して所在する大小の土坑群である。掘立柱建物跡 SB-001 が隣接し、その柱穴を構成する SH-045 が SK-067 内に位置している。そのほかにも、本土坑群周辺にはピットが群在する。

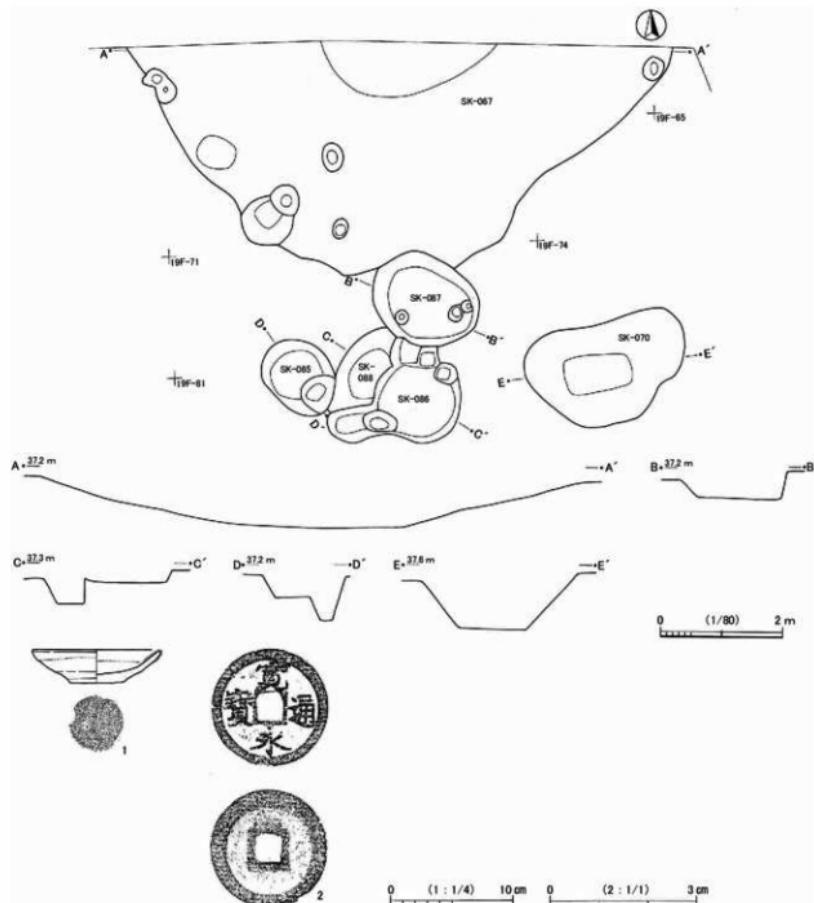
SK-067 は、立ち上がりの緩やかな凹み状を呈する土坑で、北側は本調査区外に続く。確認できた範囲で平面形は径 880cm ほどの不整円形状を呈するとみられる。検出面からの深さは、最も深いところで 83 cm である。壁～底面にかけて、深さ 20cm 前後のピットが散在するほか、SB-001 の柱穴 SH-045 も存在する。

SK-067 の南には、一部重複するように SK-087 が隣接する。SK-087 は、南側が SK-086・088 と重複するが、平面形は長軸 185cm、短軸 135cm の楕円形状を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 56cm である。底面には、深さ 20cm 前後のピットが 3 基ある。

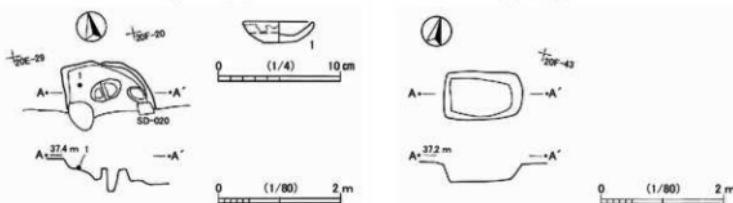
SK-085・086・088 は、SK-067 の南に一部重複しながら存在する。SK-085 は、東側でピット状の落込みを介して SK-088 と重複するが、平面形は長軸 124cm、短軸 106cm の楕円形状を呈する。検出面からの深さは 38cm で、ピット状の部分は更に 38cm ほど深くなる。

SK-086 は、北側が SK-087 と、西側が SK-088 とそれぞれ重複し、更にピットや張出し状の落込みも複雑にからんで全体の形状は不規則であるが、基本的には径約 140cm の円形状を呈するとみられる。ほぼ平坦な底面の、検出面からの深さは 25cm であるが、張出し状の部分は 40cm である。ピットの深さは底面から 54cm ~ 74cm ほどある。

SK-088 は SK-085 と SK-086 に挟まれるように位置する土坑で、平面形は長軸 170cm、短軸 120cm ほ



第228図 SK-067・070・085～088と出土遺物



第229図 SK-072と出土遺物

第230図 SK-075

どの橢円形状と推測される。底面は平坦で、検出面からの深さは40cmである。

SK-070はSK-086の東に位置する。平面形は長軸270cm、短軸160cmほどの不整橢円形状、断面形は壠鉢状を呈する。底面の検出面からの深さは94cmである。

重複するいずれの遺構も新旧関係ははっきりしない。

図示した遺物は2点である。第228図1はSK-067の覆土中から出土した鉄軸の縁軸小皿である。全体の20%程度の遺存度である。器形は瀬戸・美濃製品のようであるが、露胎部分の色調はにぶい赤褐色で、胎土・焼成とも常滑製品のような特徴を呈している。産地ははっきりしないが知多半島系とみられ、時期は15世紀代と考えることができよう。2は銭貨で、寛永通寶である。SK-067の覆土上層から出土した。ほかには遺物は、SK-070から近世以降土器が少量出土したのみである。

SK-072（第229図、図版8・93）

20E-29 グリッドに所在する。南側がSD-020と重複し、全体の規模や形状は明確にならないが、平面形が方形状を呈する土坑とみられる。底面にはピットがある。検出面から底面までの深さは18cmほどである。

図示した遺物は1点である。第229図1は完形の瀬戸・美濃鉄軸豆皿である。内面～外面口唇部まで施釉され、外面はほとんど露胎である。15世紀の所産と考えられる。遺構底面から出土した。

SK-075（第230図・図版8）

20F-42 グリッドに所在する。平面形は長軸120cm、短軸78cmの長方形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは29cmである。竪穴状遺構SK-069の内部に位置するが、SK-069との関係は明らかでない。遺物は出土していない。

SK-076～081（第231図、図版9・118）

21F-29・38・39・48・49、21G-20・21・30・31・40 グリッドに所在する土坑群である。溝状遺構SD-018と重複するが、新旧関係はいずれも明らかではない。

SK-076はSI-023として調査された遺構であるが、整理作業中に遺構名を変更し、調査時の番号を欠番としたものである。東側でSK-077と、西側でSK-079と重複するが、平面形は長軸250cm、短軸200cmの隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは57cmである。

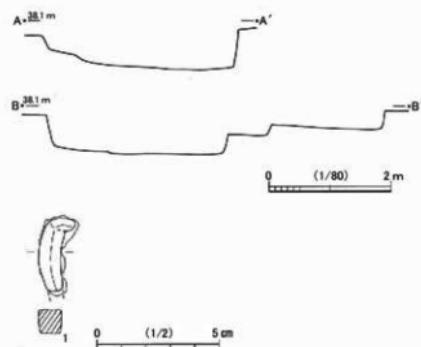
SK-077は北東側でSK-078と、西側でSK-076・079と重複するが、平面形は径約200cmの円形状を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは57cmである。

SK-078は北東側でSK-080・081と、南西側でSK-078と重複するが、平面形は長軸175cm、短軸123cmの隅丸方形とみられる。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは27cmである。

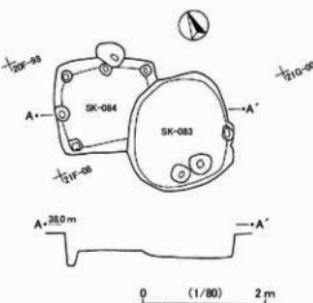
SK-079は遺構のほとんどがSK-076・077と重複し、北西隅を中心とした部分のみしか確認できないが、SK-076とほぼ同規模の隅丸方形を呈する土坑とみられる。検出面からの深さは32cmである。

SK-080はSK-078の東側にあり、北側でSK-081とも重複する。平面形は不整形を呈し、はっきりしない。掘込みは浅く、検出面からの深さは最も深いところで13cmほどである。

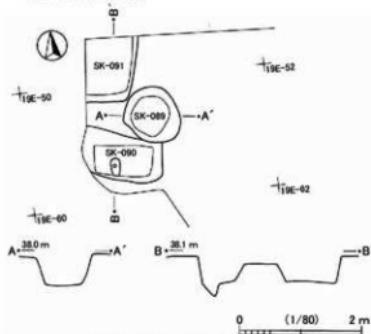
SK-081も不整形を呈する土坑で、短軸は170cmほどである。検出面からの深さは26cmほどである。



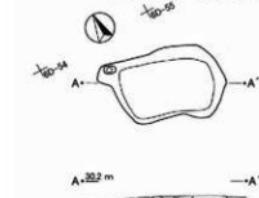
第231図 SK-076～081と出土遺物



第232図 SK-083・084



第233図 SK-089～091



- SK-092 土層説明
 1 黒褐色土層 固くしまりがある
 2 黒褐色土層 ローム塊(10 mm大)を含む
 3 黄褐色土層 ローム塊(20～30 mm大)を含む
 4 黑褐色土層 ローム塊(20～30 mm大)を含み、しまりがある
 5 黑褐色土層 ローム塊(10 mm大)を含み、柔らかい

第234図 SK-092



第235図 SK-093と出土遺物

いずれも方形竪穴もしくは竪穴状遺構を考えることもできるかもしれないが、底面等がそれほどしっかりとしないなどの状況から、土坑とした。ピットを伴っているものもあるが、いずれも底面から10cm前後の深さのものである。

図示した遺物は1点である。第231図1は、SK-076から出土したもので、錫膨れが著しいが、鉄釘の頭部破片とみられる。SK-076からは、ほかに混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。そのほか、SK-077から図示はしていないが中世陶磁器・土器が少量と、SK-078から近世以降土器が少量、SK-081から混入品とみられる土器の小破片が少量出土した。

SK-083・084（第232図、図版9）

20F-98・99、21F-08・09グリッドに所在する重複する土坑2基であるが、新旧関係は明らかでない。平面形は、SK-083が長径192cm、短径158cmの楕円形状を呈し、SK-084が一辺150cmほどの正方形状を呈する。底面はいずれもほぼ平坦で、検出面からの深さはSK-083が48cm、SK-084が34cmである。底面にはいずれもピットがみられ、SK-083のものは、底面からの深さがそれぞれ30cm、39cm、壁際のものは7cmである。SK-084のものは四隅とその間の壁際に配置されており、底面からの深さは10cm～25cmである。SK-084には北側に隣接する、検出面からの深さ51cmのピットもみられるが、遺構周辺にはピットが群在しており、遺構に伴うピットについてははつきりしない面もある。なお、いずれも方形竪穴もしくは竪穴状遺構を考えることもできるかもしれないが、床面がそれほどしっかりとしないことなどから、土坑とした。

遺物は、いずれの遺構からも出土していない。

SK-089～091（第233図、図版10）

19E-40・50・51に所在する、群在する土坑3基である。平面形は、SK-089が径約90cmの円形状、SK-089の南に接するように位置するSK-090が長軸130cm以上、短軸70cmの長方形形状、SK-089の北西に隣接するSK-091が方形形状を呈する。遺構群の西側は調査区外、北側は本調査区外となる。底面はいずれもほぼ平坦で、検出面からの深さは、SK-089が48cm、SK-090が現存部で40cm、SK-091が現存部で33cmである。SK-090には、底面に、底面からの深さ20cmのピットが1か所ある。

遺物は、SK-089から近世以降陶磁器が少量と、SK-090から中世陶磁器の小破片が少量出土したが、図示はしていない。

SK-092（第234図、図版10）

6D-54・55グリッドに所在する。堀SD-027と土塁SA-001の内側に位置し、溝状遺構SD-028の東側に隣接している。平面形は長軸180cm、短軸115cmの不整隅丸方形形状を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの底面の深さは47cmである。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-093（第235図、図版10・100）

6D-35・45グリッドに所在する。堀SD-027及び土塁SA-001の内側に位置し、溝状遺構SD-028の東

側に隣接している。円形ないしは梢円形の複数の土坑が重複しているものとみられ、現状で平面形は不定形である。検出面からの底面の深さも、部分的には異なるが、概ね40cm前後である。

図示した遺物は1点である。第235図1は常滑片口鉢である。

SK-094（第236図、図版10）

6D-34・44グリッドに所在する2基の土坑である。堀SD-027及び土堤SA-001の内側に位置する。北側の1基は、周辺のピットからんでいるが、主体の部分は平面形が長軸130cm、短軸97cmほどの隅丸方形形状を呈するとみられる。検出面からの底面の深さは61cmである。底面にはピット状の部分があり、その深さは底面から37cmである。南側に位置する土坑は、長軸100cm、短軸90cmの隅丸方形形状を呈する。底面のほぼ中心にはピットがあり、検出面から底面までの深さは22cm、底面からのピットの深さは20cmである。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-096・109（第237図）

8C-02・12グリッド、土坑SK-110の南側及び土坑SK-100の西側に隣接して所在する、重複する土坑である。弥生時代竪穴住居跡のプラン内に位置し、どちらも西側は調査区外へ続くが、平面形は、SK-096は径約115cmの円形、SK-109は径約130cmの円形又は梢円形と推定される。検出面からの深さは、SK-096が53cm、SK-109が41cmである。

遺物は、SK-096から混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-100・102・108（第239図、図版115・122）

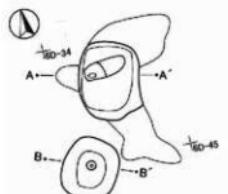
8C-12・13グリッドに所在する、重複する土坑である。北側のSK-100・108はそれぞれ別の円形土坑であったとみられるが、現状では一体化し、長径190cm、短径130cmの梢円形形状を呈している。検出面からの深さはSK-100が53cm、SK-108が60cmである。覆土はどちらもローム塊を含み粘りのある黒褐色土層であった。SK-102はSK-100・108の南側に重複する、径約115cmの円形の土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの底面の深さは68cmである。新旧関係はいずれも明確に捉えられなかった。

図示した遺物は3点である。3点ともSK-100から出土したもので、ほかには遺物はいずれの土坑からも出土していない。第239図1は、接合しない2破片の鉄製品で、毛抜きとみられる。2・3は錢貨で、2は皇宋通寶である。書体は篆書である。3は約半分が欠損しているが「祥」「符」「寶」の字が確認できることから、祥符元寶か祥符通寶のいずれかと考えられる。

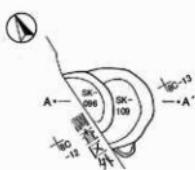
SK-104（第238図）

8D-86・87・96・97グリッドに所在する。平面形は長軸120cm、短軸90cmの隅丸方形形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは38cmである。覆土はローム塊を含む赤褐色土層で、土坑SK-106と類似する。掘立柱建物跡群の東に隣接しており、掘立柱建物との関連も考えられる。

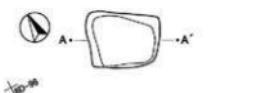
遺物は、鉄製品の小破片が少量出土したのみである。



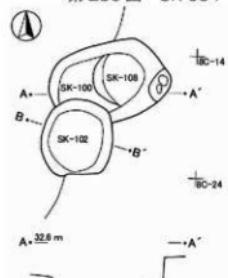
A SD-34
B SD-45
A 30.3 m B 30.3 m
第236図 SK-094



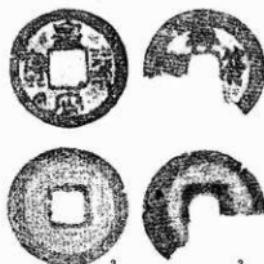
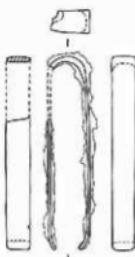
A SD-13
B SD-86 SD-109
A 32.2 m B 32.2 m
第237図 SK-096・109



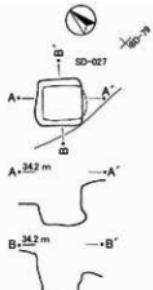
A SD-10
A 34.3 m B 34.3 m
第238図 SK-104



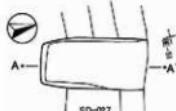
A SD-14
B SD-100 SD-108 SD-102 SD-24
A 32.8 m B 32.8 m
第239図 SK-100・102・108 土壌剖面
1 喀斯特色土層 (20 ~ 30 mm厚) を含み、粘性が大きい
2 黒褐色土層 (10 ~ 20 mm厚) を含み、粘性が小さい
3 黑褐色土層 (20 ~ 30 mm厚) を含み、むしろ



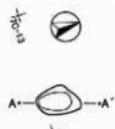
SK-100・102・108 土壌剖面
1 喀斯特色土層 (20 ~ 30 mm厚) を含み、粘性が大きい
2 黒褐色土層 (10 ~ 20 mm厚) を含み、粘性が小さい
3 黑褐色土層 (20 ~ 30 mm厚) を含み、むしろ
0 (1/80) 2 m 0 (1 : 1/2) 5 cm 0 (2.3 : 1/1) 3 cm
第239図 SK-100・102・108 と出土遺物



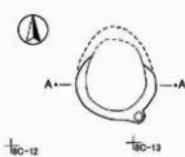
A SD-027
B SD-12
A 35.2 m B 34.2 m
0 (1/80) 2 m 0 (1/80) 2 m
第240図 SK-105



A SD-027
A 33.5 m
0 (1/80) 2 m 0 (1/80) 2 m
第241図 SK-106



A SD-12
A 30.8 m
0 (1/80) 2 m 0 (1/80) 2 m
第242図 SK-107



A SD-13
A 32.2 m
0 (1/80) 2 m 0 (1/80) 2 m
第243図 SK-110

SK-105 (第 240 図)

8D-68・78 グリッド、堀 SD-027 の壁面の部分で検出された土坑である。堀に削平されているが、現状で平面形は一辺 80cm ほどの正方形である。底面はほぼ平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる壁の高さは最も高い部分で 68cm である。

遺物は出土していない。

SK-106 (第 241 図)

8E-50・51 グリッド、堀 SD-027 の底面～壁面の部分で検出された土坑である。平面形は、堀に削平されているが長方形を呈するとみられ、現存値で短軸 85cm、長軸は 175cm である。底面は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる壁の高さは最も高い部分で 78cm である。覆土はローム塊を含む赤褐色土の單一層で、堀とは異なり土坑 SK-104 と類似している。

遺物は出土していない。

SK-107 (第 242 図)

7C-03 グリッドに所在する。平面形は長軸 73cm、短軸 50cm の不整橢円形状を呈する。底面は北側のほうが南側より低く、検出面からの深さは北側で 33cm である。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-110 (第 243 図)

8C-02・03 グリッド、土坑 SK-100・109 の北側に隣接する土坑である。弥生時代の竪穴住居跡のプラン内に位置し、北側は更に別の竪穴住居跡と重複しているが、平面形は径約 110cm の円形を呈ると推定できる。検出面からの深さは 20cm 前後である。

遺物は出土していない。

SK-111 (第 244 図)

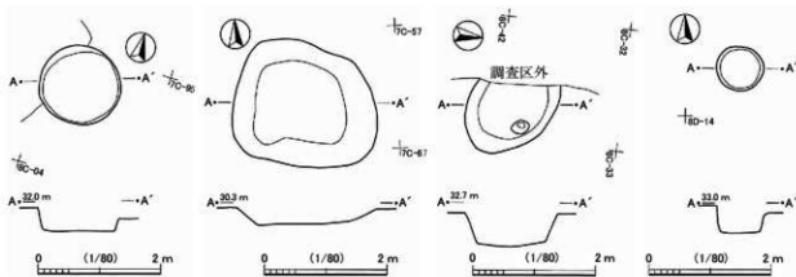
7C-94 グリッド、溝状遺構 SD-030 の南に隣接し、弥生時代竪穴住居跡と一部重複する土坑である。平面形は径 130cm の円形で、平坦な底面の検出面からの深さは 50cm ほどである。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-112 (第 245 図)

7C-55・56 グリッド、堀 SD-027 が二叉に分かれる地点の外側に所在する。平面形は長軸 238cm、短軸 200cm の不整橢丸方形形状を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 28cm である。

遺物は、混入品とみられる鉄製品の小破片と、近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

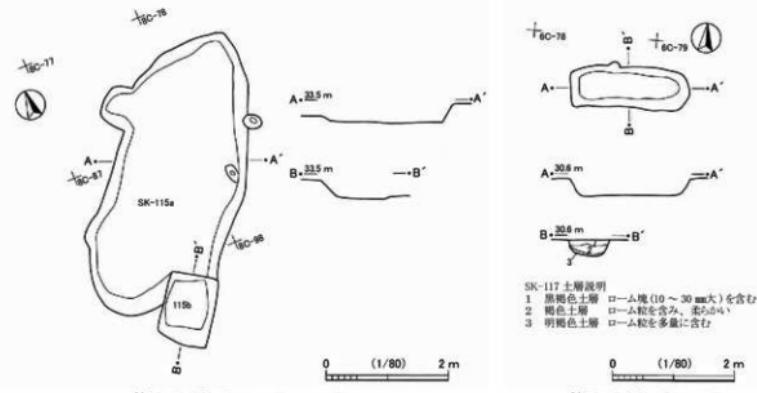


第244図 SK-111

第245図 SK-112

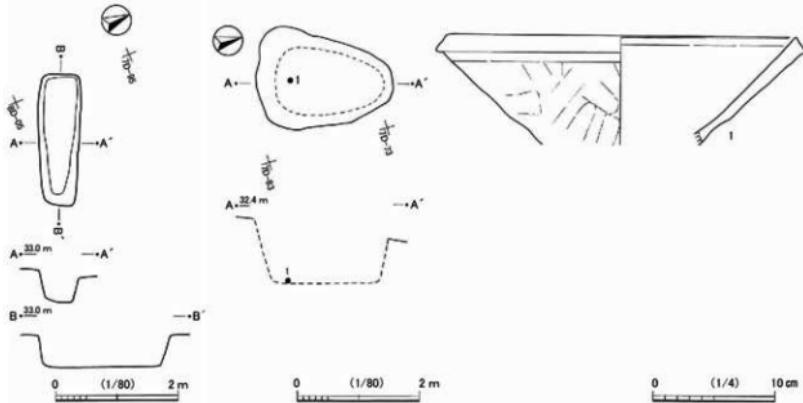
第246図 SK-113

第247図 SK-120



第248図 SK-115a・115b

第249図 SK-117



第250図 SK-118

第251図 SK-119と出土遺物

SK-113 (第 246 図)

8C-32・33・42・43 グリッドに所在する。西側は調査区外に続くが、平面形は、推定長軸 190cm、短軸 135cm の楕円形とみられる。検出面からの深さは 57cm である。底面にはピットが 1 か所あり、底面からの深さは 25cm である。

遺物は出土していない。

SK-115a・115b (第 248 図)

8C-77・78・86～88・96・97 グリッドに所在する重複する 2 基の土坑で、調査時に既に「SK-115a」「SK-115b」として調査されたものである。新旧関係ははっきりしないが、どちらも柵列 SA-002 の標高差約 70cm の段差下部分に位置している。北側の SK-115a は、平面形は概ね長径 490cm、短径 217cm ほどの楕円形状を呈しており、長軸方向は段差面に対して平行方向である。底面は、ほぼ水平で平坦である。検出面は、遺構の東側が段差の高い部分、西側が低い部分であるが、検出面からの深さは、高い方からで 28cm ほどである。SK-115b は、SK-115a の南に重複している。平面形は長軸 115cm、短軸 84cm の長方形で、長軸方向は段差面に対して平行方向である。底面は、ほぼ水平で平坦である。検出面は、遺構の東側が段差の高い部分、西側が低い部分であるが、検出面からの深さは、高い方からで 43cm ほどである。底面のレベルは、SK-115a より 10cm 前後低い。

遺物はいずれの土坑からも出土していない。

SK-117 (第 249 図)

6C-78・79 グリッドに位置する土坑で、土壘 SA-001 下から検出された。平面形は長軸 195cm、短軸 65cm の隅丸方形を呈する。底面は平坦で、検出面から底面までの深さは 27cm である。覆土は、下層がローム粒を含み柔らかい褐色土、上層はローム塊を含む黒褐色土が水平に堆積していた。

遺物は、土器の小破片が少量出土したのみで、混入品とみられる。

SK-118 (第 250 図、図版 10)

7D-94・95 グリッドに所在する。平面形は長軸 230cm、短軸 65cm の隅丸方形を呈する。底面は平坦で、検出面から底面までの深さは 57cm である。覆土は、砂利やローム塊を含む赤褐色土の単層であった。

遺物は、瓦の小破片が少量出土したのみである。

SK-119 (第 251 図、図版 100)

7D-62・71・72 グリッドに所在する土坑で、土壘 SA-001 下から検出された。堀 SD-027 「虎口」部分の南に隣接している土坑で、検出面は南から北に向かって傾斜している。平面形は長軸 222cm、短軸 162 cm の卵形を呈する。底面の状態や深さは記録がないが、第 251 図 1 が遺構南側の検出面から 101cm の深さで出土していることから、少なくともそれ以上の深さがあったと考えられる。覆土はローム塊を含む赤褐色土の単層であった。

図示した遺物は 1 点である。第 251 図 1 は常滑片口鉢である。9 型式に比定されるものと考えられる。外面に重ね焼き痕が認められる。内面には自然釉がかかっている。

SK-120（第247図）

8D-04 グリッドに所在する。平面形は径約75cmの円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは47cmである。覆土は砂や砂利を含む褐色土で、近接する土壠SA-001の盛土と類似するものであった。
遺物は出土していない。

SK-125（第252図）

7C-09・19、7D-00・10 グリッドに所在する土坑で、土壠SA-001下から検出された。平面形は、長軸186cm、短軸92cmの長方形状である。底面は平坦で、検出面から底面までの深さは24cmである。掘立柱建物跡SB-008と重複し、軸方向もほぼ一致することから、関連性も考えられる。
遺物は出土していない。

SK-126・127（第255図）

6C-59・68・69、6D-40・50 グリッドに位置する2基の土坑で、土壠SA-001下から検出された。豊穴状遺構SI-045とそれぞれ重複するが、いずれも新旧関係は明らかでない。

SK-126は、長径110cm、短径70cmの楕円形状を呈する。底面から壁面にかけてピットがいくつかみられるが、検出面から底面までの深さは39cmである。SK-127は、長軸250cm、177cmの卵形を呈し、検出面からの深さは56cmである。

遺物は、SK-127から土器の小破片が少量出土したのみで、混入品とみられる。SK-126からは出土していない。

SK-128（第253図）

6D-30・31 グリッドに位置する土坑で、土壠SA-001下から検出された。平面形は、東側が若干削平されているが現存値で長軸145cm、短軸124cmの隅丸方形状を呈している。底面は平坦で、検出面からの深さは17cmである。

遺物は出土していない。

SK-129（第254図、図版10）

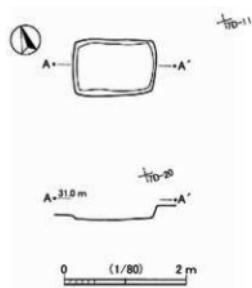
6C-79・89、6D-70・80 グリッドに位置する土坑で、土壠SA-001下から検出された。平面形は、長径297cm、短径155cmの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは38cmである。壁面にピットが4基みられる。

遺物は土器の小破片が少量出土したのみで、混入品とみられる。

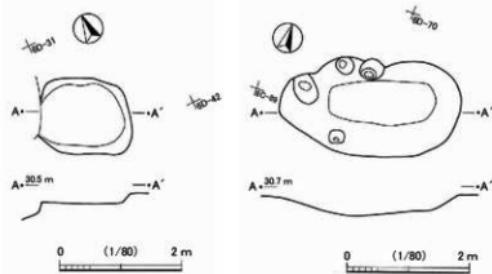
2SK-002（第256図、図版11）

24G-28・38 グリッドに所在する土坑である。東側と西側の一部が攪乱により失われているが、平面形は、長径150cm、短径95cmほどの不整楕円形を呈するとみられる。検出面から底面までの深さは最も深い部分で51cmである。

遺物は出土していない。

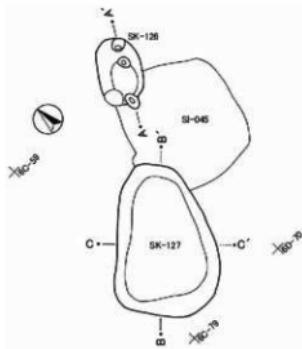


第252図 SK-125



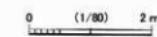
第253図 SK-128

第254図 SK-129

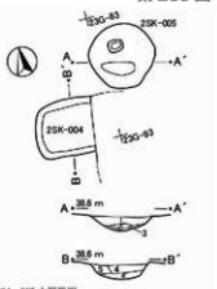


第255図 SK-126・127

SK-002 土層説明
 1 増殖色土層 ローム粘(1 mm大)を僅かに含む
 2 黒褐色土層 ローム粘を僅かに含む、1層より他の色調
 3 增殖黒褐色土層 ローム粘を多く含む、主として土層
 4 黄褐色土層 ローム粘を中程度含む
 5 増殖色土層 ローム粘を中程度含む
 6 増殖黒褐色土層 ローム粘を主として、黒褐色土を含む



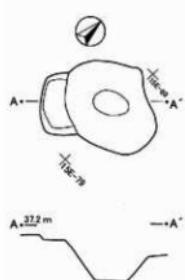
第256図 2SK-002



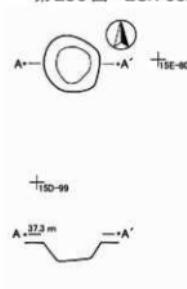
2SK-004・005 土層説明
 1 黒褐色土層 ローム粘を僅かに含む
 2 黒褐色土層 ローム粘を僅かに含む、1層より他の色調
 3 増殖黒褐色土層 ローム粘を多く含む、主として土層
 4 黄褐色土層 ローム粘を中程度含む
 5 増殖色土層 ローム粘を中程度含む
 6 増殖黒褐色土層 ローム粘を主として、黒褐色土を含む



第257図 2SK-004・005



第258図 4SK-004



第259図 4SK-007

2SK-004・005（第 257 図、図版 11）

23G-82・83 グリッドに所在する 2 基の土坑である。2SK-004 は、東側が古墳時代の竪穴住居跡と重複するが隅丸方形の土坑とみられ、短軸は 93cm、長軸は現存値で 100cm ほどである。検出面から底面までの深さは 31cm である。2SK-005 は、2SK-004 の北東方向に位置する土坑で、径 110cm ほどの円形の土坑である。検出面から底面までの深さは 33cm である。底面にはピットがみられ、ピットの底面からの深さは 17cm である。

遺物は、2SK-004 から土器の小破片が出土したのみで、混入品とみられる。

4SK-004（第 258 図、図版 11）

15E-68・69 グリッドに所在する。平面形は、径 150cm ほどの円形の土坑に、長軸 100cm、短軸 40cm ほどの隅丸方形状の段状部分が付随したような形状を呈している。底面は平坦で、検出面からの深さは 81cm、段状部分は 10cm ほどである。

遺物は中世陶磁器・土器の小破片が少量出土したが、図示していない。

4SK-006（第 260 図、巻頭図版 7、図版 100）

15D-87・88 グリッドに所在する。平面形は、長径 150cm、短径 125cm の楕円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 11cm である。

図示した遺物は 6 点である。第 260 図 1 は青磁の洗である。口縁部は玉縁状である。内外面に施釉され、色調はオリーブ灰色を呈している。2 は瀬戸・美濃縁釉小皿である。遺存部分のはほとんどは露胎であるが、内外面上端部にそれぞれ僅かに灰釉が認められる。内面にごく一部鉄釉の付着もあるが、鉄釉製品と同じ窯で焼成して付いたものかもしれない。3～6 は常滑製品である。3・4 は片口鉢である。4 は外面に重ね焼き痕が認められる。9 型式に比定されるものと考えられる。5・6 は甕である。5 は、外面は灰色、内面は暗赤褐色を呈し、外面と口唇部に自然釉がかかっている。9 型式に比定されるものと考えられる。6 は内外面とも灰色を呈し、外面には押印文がある。

4SK-007（第 259 図）

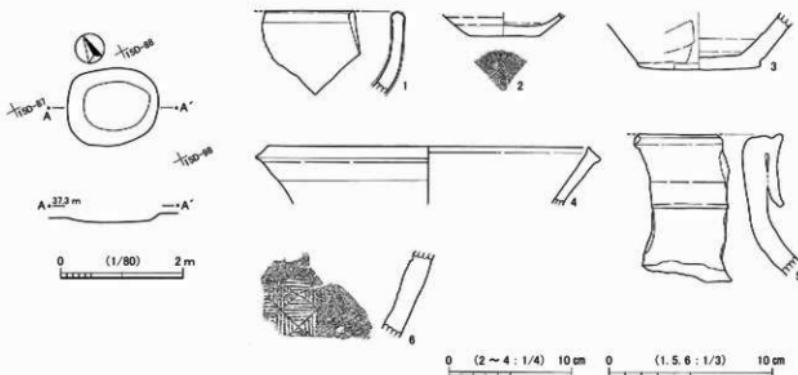
15D-79・89 グリッドに所在する。平面形は径 90cm ほどの円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 33cm である。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-017（第 261 図・図版 122）

15E-04・05 グリッドに所在する。調査区の境界部分に位置し一部調査できなかったが、平面形は長軸 130cm、短軸 115cm ほどの隅丸方形状を呈するとみられる。底面はほぼ平坦であるが、ピットが 1 か所みられる。検出面からの底面の深さは 33cm、床面からのピットの深さは 11cm である。

図示した遺物は 1 点である。第 261 図 1 は覆土中から出土した銭貨で、開元通寶である。背面は無文である。ほかには、図示していないが混入品とみられる中世土器の小破片が少量出土した。



第260図 4SK-006と出土遺物

4SK-023 (第262図、図版12)

13D-73・74 グリッドに所在する。平面形は径約 150cm の不整円形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 53cm である。

遺物は出土していない。

4SK-040 (第263図)

11E-00・01 グリッドに所在する。竪穴状遺構 4SK-047 の範囲内で検出された土坑である。4SK-047 の一部とみることも可能かもしれないが、調査時の状況等から別の土坑と考えた。また、東側で方形竪穴 4SK-041 と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面形は、径 190cm ほどの楕円形と考えられる。検出面からの深さは 64cm である。

遺物は出土していない。

4SK-042 (第264図、図版14)

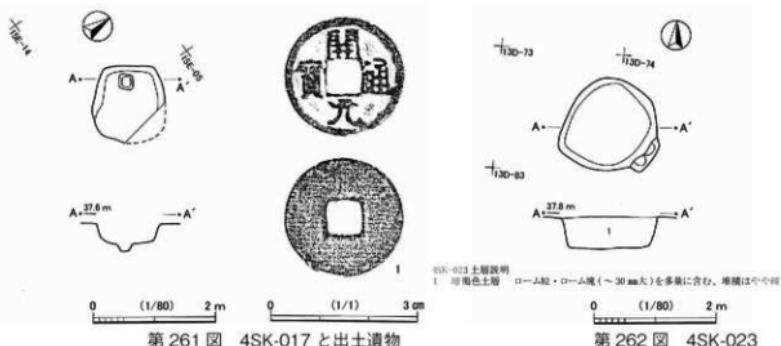
11D-97・98、12D-07・08 グリッドに所在する。平面形は、搅乱を受けているが長径 155cm、推定短径 135cm の不整楕円形状とみられる。底面は平坦で、検出面からの深さは 30cm である。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

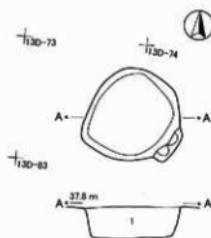
4SK-043 (第266図、図版14・100)

11D-97・98、12D-07・08 グリッドに所在する。平面形は、長径 211cm、推定短径 180cm の不整楕円形状を呈する。検出面からの深さは 37cm である。

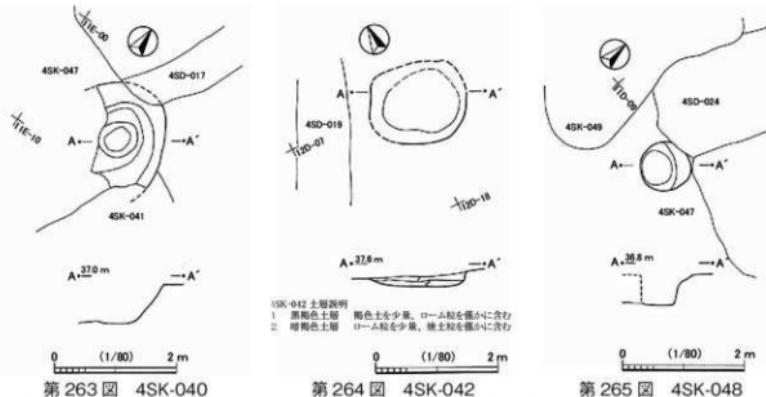
図示した遺物は 1 点である。第266図 1 は常滑片口鉢である。外面に重ね焼き痕が認められる。10型式に比定されるものと考えられる。



第261図 4SK-017と出土遺物



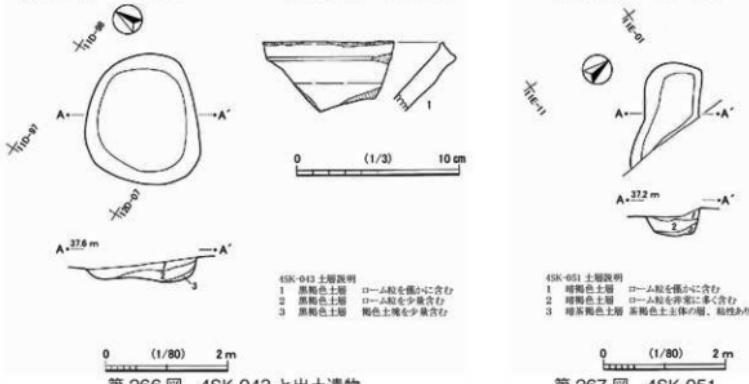
第262図 4SK-023



第263図 4SK-040

第264図 4SK-042

第265図 4SK-048



第266図 4SK-043と出土遺物

第267図 4SK-051

4SK-048（第 265 図）

11D-09 グリッドに所在する。竪穴状遺構 4SK-047 の範囲内で検出された土坑である。土層断面の観察から、4SK-047 を切って構築されたものとみられる。平面形は、径 80cm ほどの円形と復元できる。検出面からの深さは 54cm である。

遺物は出土していない。

4SK-049（第 268 図、図版 14・100・112・118）

10D-88・89・98・99、11D-08・09 グリッドに、竪穴状遺構 4SK-047 と重複して所在する。新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが新しい。平面形は長軸 435cm、短軸 200cm ほどの不整形を呈する。底面は捕鉢状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで 60cm ほどである。

図示した遺物は 4 点である。第 268 図 1・2 は常滑片口鉢である。1 は外面に重ね焼き痕が認められる。10 型式に比定されるものと考えられる。3 は砥石で、近接する方形竪穴 4SK-050 から出土した破片と接合した。上下端は欠損しているとみられる。4 は環状を呈する鉄製品である。錆膨れが著しいが、断面形は四角形とみられる。

4SK-051（第 267 図、図版 15）

10E-91、11E-01 グリッドに所在する。東側は調査不能であった。平面形は現存値で長軸 150cm 以上、短軸 90cm ほどの長方形を呈している。検出面からの深さは 40cm である。

遺物は出土していない。

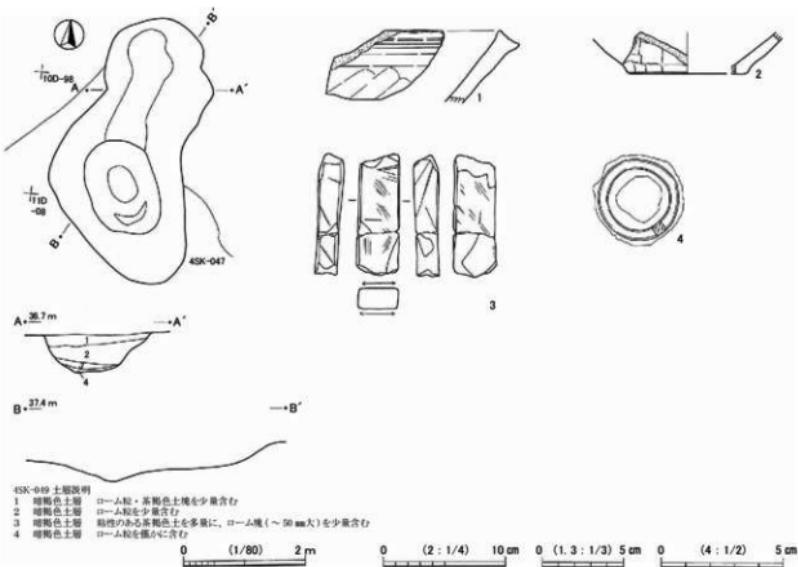
4SK-053（第 269 図、巻頭図版 7、図版 15・93・100）

11D-15・25・34・35 グリッドに位置する。正方形を描く溝状遺構 4SD-019 の北辺中心部あたりに直交するように存在する土坑であるが、新旧関係は明らかでない。平面形は、全体的には長軸 430cm、短軸 130cm ほどの隅丸方形を呈するが、南北 2 基の楕円形または隅丸方形の土坑が繋がったような状態である。土坑状の部分は、いずれも底面は平坦である。北側の土坑状の部分は壁がややオーバーハングして立ち上がり、検出面からの深さは 153cm である。南側の部分は壁がほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは 149cm である。土坑状の部分を繋ぐ部分は、検出面から 94cm の深さがある。溝状遺構 4SD-019 の北辺底面にはビットがいくつか並んでいるが、当遺構の両脇の部分にもそれぞれビットがあり、同時に機能した可能性もあるだろう。

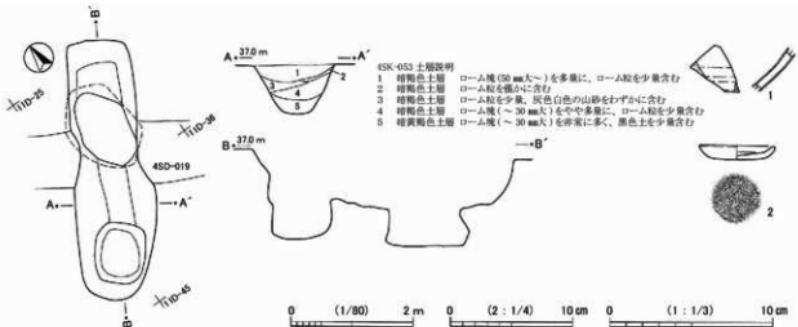
図示した遺物は 2 点である。第 269 図 1 は青磁碗である。内面には僅かに陰刻文が認められるが、文様は不明である。釉はオーリーブ灰色を呈する。2 はカワラケ小皿である。全体の 70% 程度の遺存度である。器面は摩耗している。

4SK-054（第 270 図、図版 15・122）

10D-53・54・63・64・73 グリッドに所在する。複数の土坑が重複しているとみられ、現状は長軸 300cm、短軸 170cm ほどの不整形を呈する。検出面からの深さは、最も深い北東の部分で 70cm ほどである。底面には浅いビットがいくつかみられる。



第268図 4SK-049と出土遺物

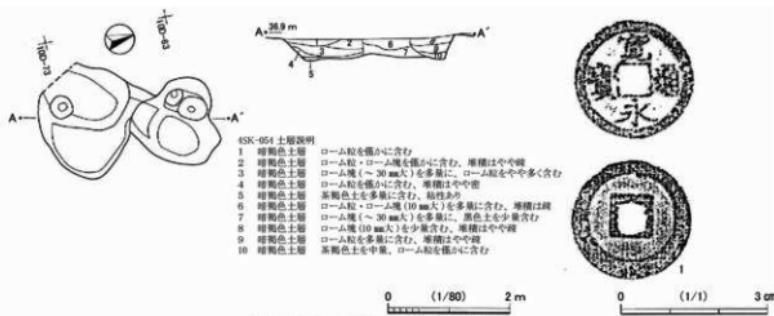


第269図 4SK-053と出土遺物

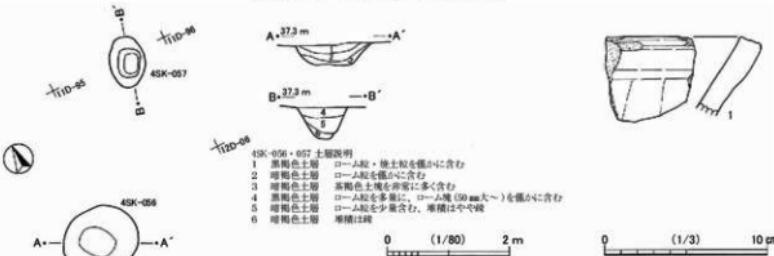
図示した遺物は1点である。第270図1は銭貨で、寛永通寶である。ほかには近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-056・057 (第271図、図版15・100)

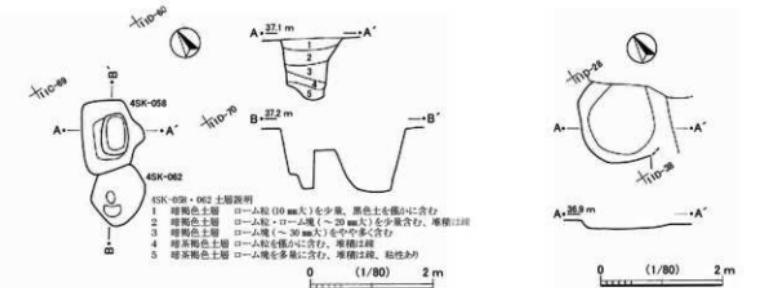
2mほど離れて存在する2基の土坑で、4SK-056は12D-04・05グリッドに、4SK-057は11D-85・95グリッドにそれぞれ位置する。4SK-056は径120cmほどの円形を呈する土坑である。底面はやや平坦で、



第270図 4SK-054と出土遺物



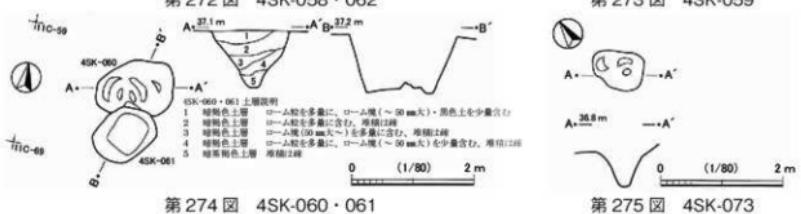
第271図 4SK-056・057と出土遺物



第272図 4SK-058・062



第273図 4SK-059



第274図 4SK-060・061



第275図 4SK-073

検出面からの深さは 37cm である。4SK-057 は長径 86cm、短径 60cm の梢円形状を呈する土坑で、底面までの深さは 70cm である。両土坑は溝状遺構 4SD-024 の延長線上にあり、また 2 基をつなぐラインは、東側にある溝状遺構 4SD-019 の一邊及び西側にある 4SD-020 とほぼ同じ軸方向となっている。これらと何らかの関係がある可能性も考えられるかもしれない。

図示した遺物は 1 点である。第 271 図 1 は常滑片口鉢である。内面には自然釉がみられる。4SK-056 から出土した。4SK-057 からは遺物は出土していない。

4SK-058・062（第 272 図、図版 15）

11C-68・69・78・79 グリッドに所在する、重複する土坑 2 基である。新旧関係は明らかでない。4SK-058 は現状で長軸 120cm、80cm ほどの長方形形状を呈し、検出面からの深さは 103cm である。その南側に連なる 4SK-062 は長径 100cm、短径 80cm ほどの梢円形状を呈し、検出面からの深さは 98cm である。正方形形状に屈曲する溝状遺構 4SD-019 の内部に位置し、軸方向も一致していることから、4SD-019 との関連性も考えられるだろう。

遺物は、図示していないが 4SK-058 から中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。4SK-062 からは遺物は出土していない。

4SK-059（第 273 図）

11D-27・28 グリッドに所在する。竪穴状遺構 4SK-047 と溝状遺構 4SD-024 と重複する。新旧関係は、4SK-047 とは明らかでないが、4SD-024 とは土層断面の観察から当遺構のほうが古い。平面形は径 140cm ほどの円形と復元できる。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 16cm ほどである。

遺物は出土していない。

4SK-060・061（第 274 図、図版 15）

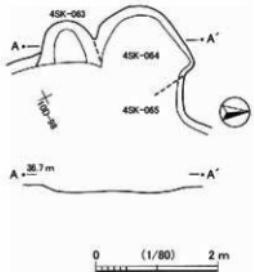
11C-59、11D-50 グリッドに所在する、重複する土坑 2 基である。新旧関係は明らかでない。4SK-060 は長径 130cm、短径 95cm の不整梢円形状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで 92cm である。その南側に連なる 4SK-061 は長径 100cm、短径 80cm の梢円形状を呈し、検出面からの深さは 92cm である。正方形形状に屈曲する溝状遺構 4SD-019 の内部に位置し、軸方向も一致していることから、4SD-019 との関連性も考えられるだろう。

遺物は 4SK-060 から近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみで、4SK-061 からは出土していない。

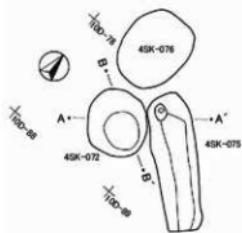
4SK-063・064（第 276 図）

10D-77・78・87・88 グリッドに所在する、重複する土坑 2 基である。両遺構とも、竪穴状遺構 4SK-065 とも重複するが、新旧関係は明らかでない。4SK-063 は梢円形状を、4SK-064 は闊丸方形形状を呈するとみられ、ともに底面は平坦で、検出面からの深さは 15cm 前後である。

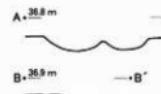
遺物は、図示していないが 4SK-064 から中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土した。4SK-063 からは遺物は出土していない。



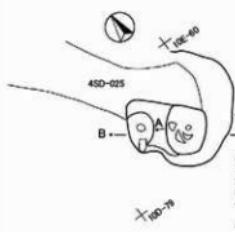
第276図 4SK-063・064



第277図 4SK-072・075・076



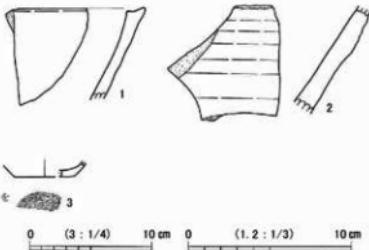
4SK-072 土層説明



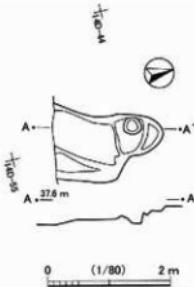
4SK-074 土層説明	
1 緑褐色土層	ローム粒を多量に含む。準積は純
2 緑褐色土層	ローム粒をやや多く含む
3 緑褐色土層	ローム粒を少し含む
4 緑褐色土層	ローム粒を多量に。ローム塊(～30mm) 少量含む
5 緑褐色土層	ローム粒をやや多く含む



第277図 4SK-072・075・076



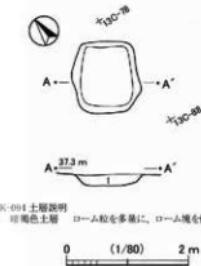
第278図 4SK-074 と出土遺物



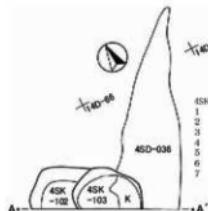
第279図 4SK-077と出土遺物



第280回 4SK-080



第281回 4SK-094



第282図 4SK-102・103と出土遺物

4SK-072・075・076（第277図）

10D-68・78・79グリッドに隣接して所在する3基の土坑である。

4SK-072は、平面形は長径15cm、短径100cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは27cmである。

4SK-075は、4SK-072の北東に接するように位置し竪穴状遺構4SK-065と重複している。平面形は現状で長軸220cm、短軸90cmほどの隅丸方形状を呈する。検出面からの深さは22cmである。北西隅に床面からの深さ28cmのピットが1か所認められる。

4SK-076は、長径135cm、短径105cmほどの楕円形状を呈する、深さ5cm前後の浅い土坑である。

遺物は、4SK-075・076から近世以降陶磁器の小破片がそれぞれ少量出土したのみで、4SK-072からは出土していない。

4SK-073（第275図、図版16）

10D-58・59・68・69グリッドに所在する。方形竪穴4SK-069と重複しており、現状で平面形は長軸85cm、短軸60cmほどの不整楕円形状を呈している。新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが古い。検出面からの深さは北側で22cm、東側で42cm、最も深い南側で71cmである。

遺物は出土していない。

4SK-074（第278図・図版100）

10D-69グリッドに所在し、溝状遺構4SD-025を切って構築されている。平面形は長径130cm、短径70cmほどの楕円形状を呈するが、2基の土坑が重複しているとみられ、底面の深さは西側で75cm、東側で64cmである。

図示した遺物は3点である。第278図1は在地産擂鉢である。胎土に白色針状物質や砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。内面にごく僅かに擂目が残る。時期は古瀬戸後期様式IV期併行と考えられる。2は備前擂鉢である。内面には擂目があるが、使用によりほとんど平滑になっている。近世の所産と考えられる。3はカワラケ小皿である。

4SK-077（第279図、図版112）

14D-34・35・44・45グリッドに所在する。現状で長軸180cm、短軸105cmの不整形を呈する土坑である。複数の遺構が重複している可能性もある。検出面からの深さは一様ではなく、最も深いところで28cmである。

図示した遺物は1点である。第279図1は砥石である。上下端は欠損する。ほかには、近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-080（第280図、図版16）

9D-81グリッドに所在する。平面形は長径143cm、短径121cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは34cmである。

遺物は出土していない。

4SK-094（第 281 図、図版 18）

13C-77・78 グリッドに所在する。平面形は、長軸 117cm、短軸 110cm の隅丸方形状を呈する。検出面からの深さは 19cm である。方形竪穴 4SK-095 に隣接しており、軸方向も一致することから、当遺構も方形竪穴と考えることも可能かもしれないが、床面のしまりのなさや壁の立ち上がりの角度の緩やかさ等から土坑とした。

遺物は出土していない。

4SK-102・103（第 282 図、図版 18・100）

14D-65 グリッドに所在する、重複する 2 基の土坑である。溝状遺構 4SD-036 と重複する。新旧関係は、土層断面の観察から、4SK-102 のほうが 4SK-103 より新しく、また 4SK-103 より 4SD-036 のほうが新しいとみられる。4SK-102 は現状では径 65cm ほどの不整円形を呈する。検出面からの深さは 28cm である。4SK-103 は径 115cm ほどの不整円形を呈し、検出面からの深さは 83cm である。

図示した遺物は 1 点である。第 282 図 1 は、4SK-103 から出土した瀬戸・美濃折縁深皿で、口縁部の破片及び接合しない脛部破片から復元したものである。ハケ塗りによって灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。

4SK-112・113（第 283 図、図版 19・100）

13C-09・19 グリッドに所在する 2 基の土坑である。互いに重複するだけでなく、周間に 4SK-108・109・110・111・114 といった方形竪穴群が重複しており、複雑な様相を呈している。新旧関係はいずれも明らかではない。

4SK-112 は東側に 4SK-113 があり、西には 4SK-110、南西には 4SK-109、南には 4SK-111 が重複し、その上中央部分に大きな搅乱が入っているが、平面形は径 130cm ほどの円形と推定できる。検出面からの深さは、63cm である。

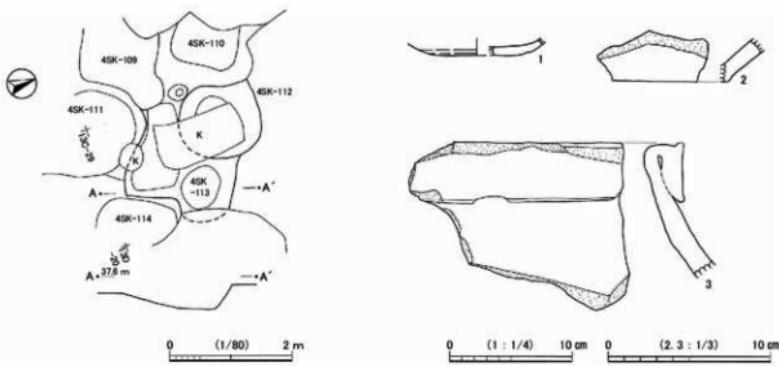
4SK-113 は西側に 4SK-112 があり、南西には 4SK-111、南には 4SK-114、東には地下式坑 4SK-091 が重複しているが、平面形は径 90cm ほどの円形と推定される。検出面からの深さは 38cm である。

図示した遺物は 3 点である。第 283 図 1・2 は瀬戸・美濃製品で、1 は縁釉小皿、2 は擂鉢である。1 は遺存部分には釉はみられない。内外面とも器面が摩耗しており、転用砥石として使用された可能性もある。2 は、内面に擂目は認められるが摩耗が著しく、錫釉もほとんど飛げてしまっている。3 は常滑窯である。焼成が不良で、外面の摩滅、内面の剥落が著しい。9 型式に比定されるものと考えられる。いずれも 4SK-113 から出土したもので、4SK-112 からは遺物は出土していない。

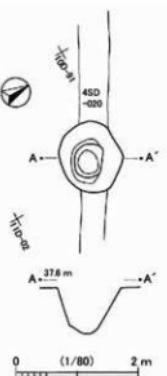
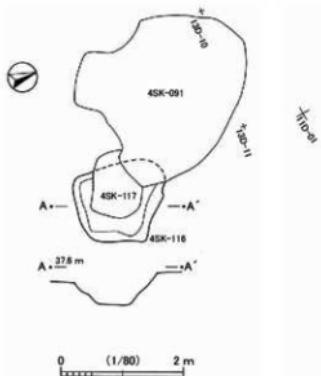
4SK-116（第 284 図、図版 19）

13D-11・21 グリッドに所在する。方形竪穴 4SK-117 と重複し、北西には地下式坑 4SK-091 が重複するが、新旧関係はいずれも明らかでない。平面形ははっきりしないが、130cm、120cm ほどの不整方形状を呈するとみられる。検出面からの深さは、重複する方形竪穴 4SK-117 のほうが深くはっきりしないが、現存部分で 31cm である。

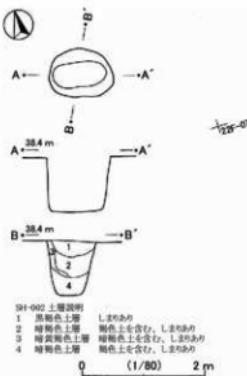
遺物は出土していない。



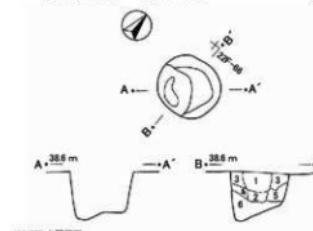
第283図 4SK-112・113と出土遺物



第285図 4SK-120



第286図 SH-002

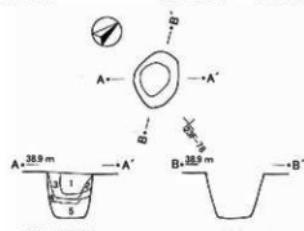


SH-003 土層説明

1. 塗褐色土層 (10 mm) ローム粒を少量含む。L.よりなら。
2. 塗褐色土層 (20 mm) ローム粒を多く含む。L.よりなら。
3. 塗褐色土層 (30 mm) ローム粒を多く含む。L.よりなら。
4. 塗褐色土層 (20 mm) ローム粒を少々含む。3層より明るい色調。L.よりなら。
5. 塗褐色土層 (10 mm) ローム粒をやや多く含む。L.よりなら。

0 (1/80) 2 m

第287図 SH-003



SH-004 土層説明

1. 黒褐色土層 ローム粒を含む
2. 塗褐色土層 黒褐色土を含む
3. 塗褐色土層 ローム粒を含む
4. 塗褐色土層 (10 mm) ローム粒をやや多く含む。3層より明るい色調
5. 黑褐色土層 ローム粒をやや多く含む

第288図 SH-004

4SK-120（第 285 図、図版 19）

10D-91・92 グリッドに所在する土坑である。溝状遺構 4SD-021 と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面形は径約 110cm の円形状を呈する。検出面からの深さは 74cm である。
遺物は、掲載していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

SH-002（第 286 図、図版 20）

21F-95・96 グリッドに所在する。調査時はピットとして調査したが、比較的規模が大きく、土坑として掲載することとした。平面形は長径 105cm、短径 78cm の橢円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 94cm である。覆土は全体にしまりがあった。

遺物は出土していない。

SH-003（第 287 図、図版 20）

22F-65・66 グリッドに所在する。調査時はピットとして調査したが、比較的規模が大きく、土坑として掲載することとした。平面形は径約 100cm の円形を呈する。検出面からの深さは最も深いところで 78 cm である。覆土は全体にしまりに欠ける状況であった。

遺物は、混入品とみられる土器の小片が少量出土したのみである。

SH-004（第 288 図、図版 20）

23F-67・77 グリッドに所在する。調査時はピットとして調査したが、比較的規模が大きく、土坑として掲載することとした。平面形は長径 93cm、短径 72cm の橢円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 74cm である。

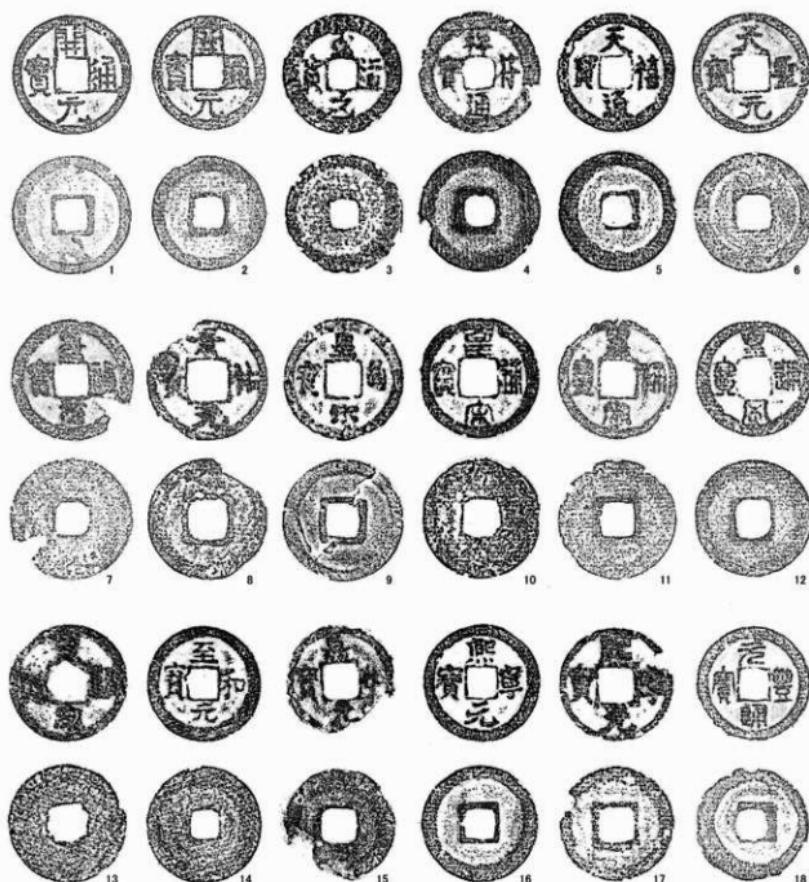
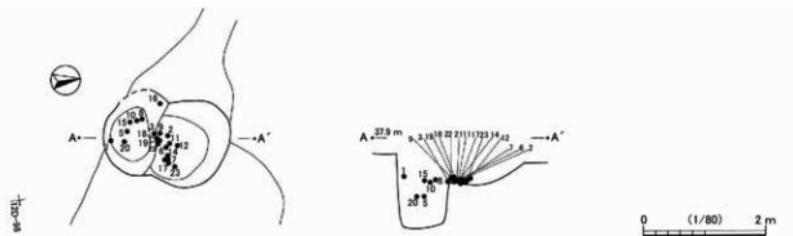
遺物は出土していない。

4SH-012（第 289・290 図、図版 20・122・123）

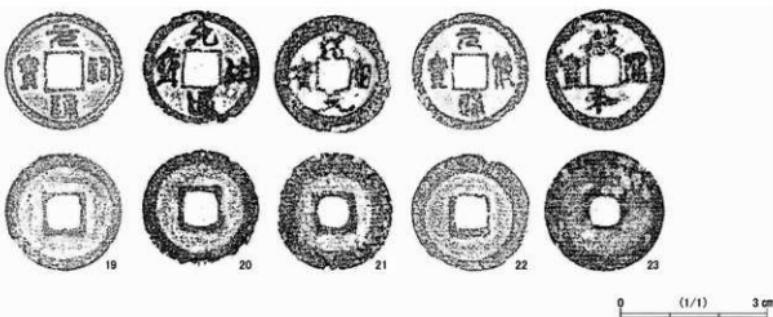
12D-77・78・87 グリッドに所在する。調査時はピットとして調査したが、比較的規模が大きく、また銭貨が多数出土したため、土坑として掲載することとした。溝状遺構 4SD-010・027 が重複する場所に重複して位置するが、それらとの新旧関係等は明らかでない。南北に 2 基のピットが連なったような形状で、全体として平面形は長径 113cm、短径 72cm の橢円形状を呈するが、検出面からの深さは段差があり、南側が 60cm、北側は 18cm である。

当遺構からは 23 点の銭貨が出土し、第 289・290 図 1～23 として全て掲載した。銭種は、唐銭の開元通寶のほかは全て北宋銭で、皇宋通寶が最も多く 5 枚出土している。

1・2 は開元通寶である。1 の背面下には月文がある。3 は至道元寶である。書体は行書である。4 は祥符通寶である。5 は天禧通寶である。6 は天聖元寶である。書体は真書である。7・8 は景祐元寶である。書体は 7 は篆書、8 は真書である。9～13 は皇宋通寶である。書体は、9 は真書、10～13 は篆書である。14 は至和元寶である。書体は真書である。15 は嘉祐元寶である。書体は真書である。16・17 は熙寧元寶である。書体はいずれも真書である。背文はいずれも認められない。18 は元豐通寶である。書体は篆書である。背文はない。19・20 は元祐通寶である。書体は 19 は篆書、20 は行書である。21 は紹聖元



第289図 4SH-012と出土遺物（1）



第290図 4SH-012と出土遺物（2）

寶である。書体は行書である。22は元符通寶である。書体は篆書である。背面は無文とみられる。23は政和通寶である。書体は分楷である。

遺物は、銭貨のほかには、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

第6節 堀・土塁

1 概要

調査区の北端に、堀 SD-027 が検出された。堀の内側には、堀に沿うように土塁 SA-001 が存在し、堀と土塁はほぼ同時に機能していたと考えられるが、堀覆土や土塁の土の様相が部分的に異なっており、検出された部分の全てが同時期に機能していたわけではない可能性もある。

2 遺構と遺物

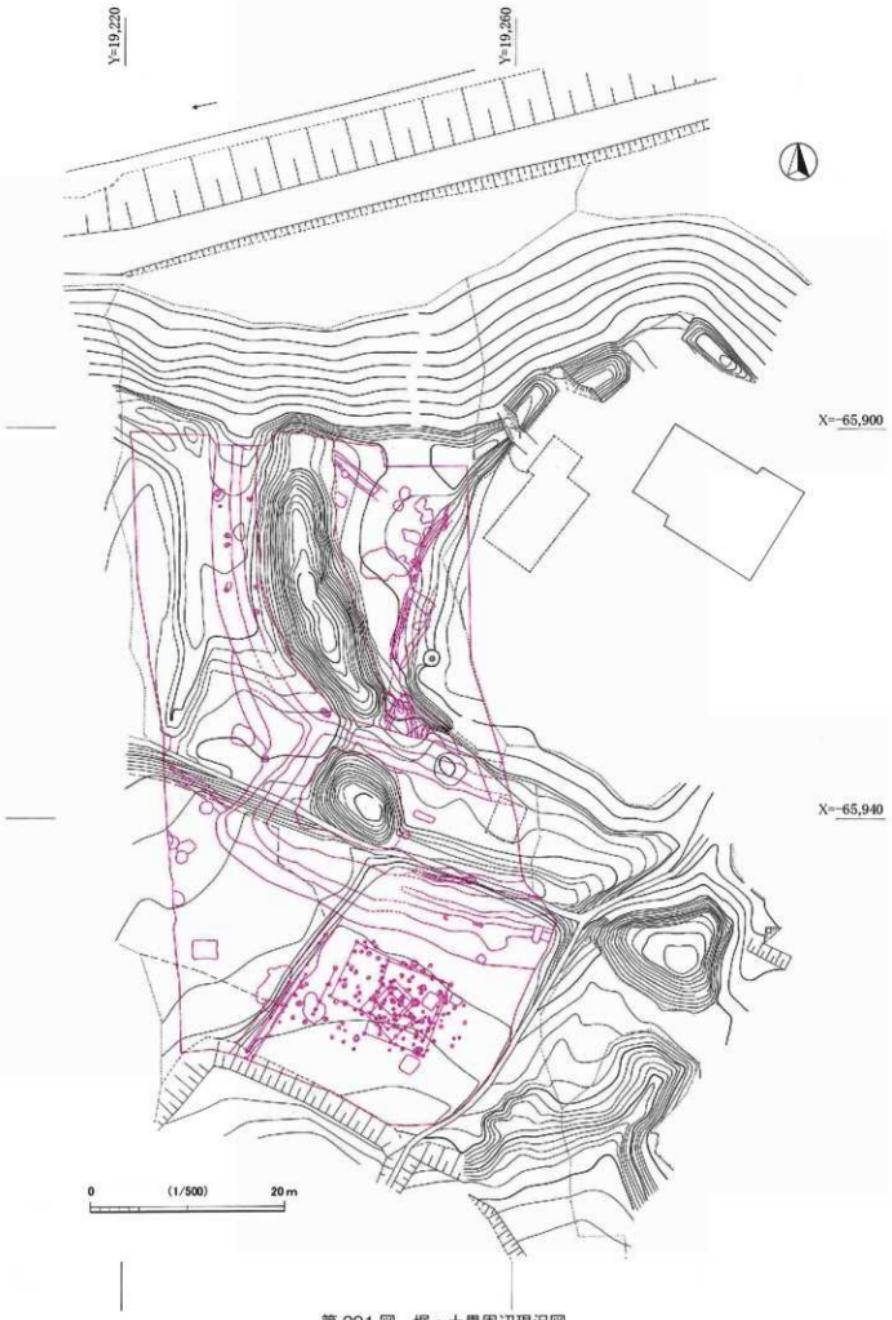
SD-027 (第291～295図、巻頭図版7、図版24・94・99・109・112・114・118)

6C・7C・7D・8C・8D・8E グリッドに所在する堀である。カーブを描きながら南北方向に延び、南で二叉に分かれながら東へと屈曲し、2条となった堀が平行に調査区外へと続いている。北端は本調査区外へ続くとみられるが、急斜面となっており、その下には松川が東から西へと流れている。

当遺構は長大なため、調査時には便宜的に分割し、それぞれの部分に名称をつけて調査を行った。名称は、断面 C-C' から北側の部分を「北側堀」、C-C' ～ D-D' の部分を「南側堀」、D-D' から東側の部分を「東側堀」、E-E' から東側の部分を「虎口」とした(第292図)。遺構の様子はそれぞれで異なっており、説明にあたって便利であることから、報告においてもこの名称を用いることとする。

「北側堀」は、若干のカーブを描きながらほぼ南北方向に延びる部分である。検出された長さは約 25 m、幅は約 5 m で、断面形は底面が幅 1 m ほどの平坦面を呈する箱堀状である。検出面からの深さは 200 cm 前後である。壁面には径 50 cm 程度のピットがいくつか検出されたが、杭が残存しているものもみられた。遺構の東側には、沿うように土塁 SA-001 が存在している。

「南側堀」は、屈曲しながら二叉に分かれ、南北方向から東西方向へと延びる部分である。沿うように存在する土塁 SA-001 は、この部分まで途切れる。「南側堀」の検出された長さは約 35 m、幅は南北方



第291図 堀・土壘周辺現況図

向より東西方向の部分のほうが広く、約5m～7mである。断面形はU字形で、東西方向の部分のほうが緩やかな形状を呈している。検出面からの深さは、「北側堀」に近い南北方向の部分で180cm前後、「東側堀」に近い東西方向の部分では60cm前後である。南北から東西方向に屈曲する部分で、東西方向のV字溝SD-030と交わっているが、同時に機能したものかどうか不明である。覆土は、「北側堀」とは異なり、砂や砂利が含まれ、堅く締まっている部分もみられた。上層部には、宝永の火山灰も検出された。また、虎口との分岐点周辺の底面付近からは、ウマの全身骨とウシの頭骨が出土した（第3章第2節3及び付章参照）。

「東側堀」は、「南側堀」に引き続き東西方向に延びる部分である。検出された長さは約15m、幅は8m前後で、断面形は緩やかなU字状を呈するが、底面は更にやや掘り窪められたようになっている。検出面から底面までの深さは140cm前後で、覆土には砂利を含んでいる。遺構のすぐ南側は台地整形面となつており、掘立柱建物跡群や柵列等が存在する。堀と軸方向がほぼ合致しているものもあり、関連性も考えられよう。なお、底面及び壁面から土坑SK-105・106が検出されたが、覆土の状況から、当遺構より古いものとみられる。

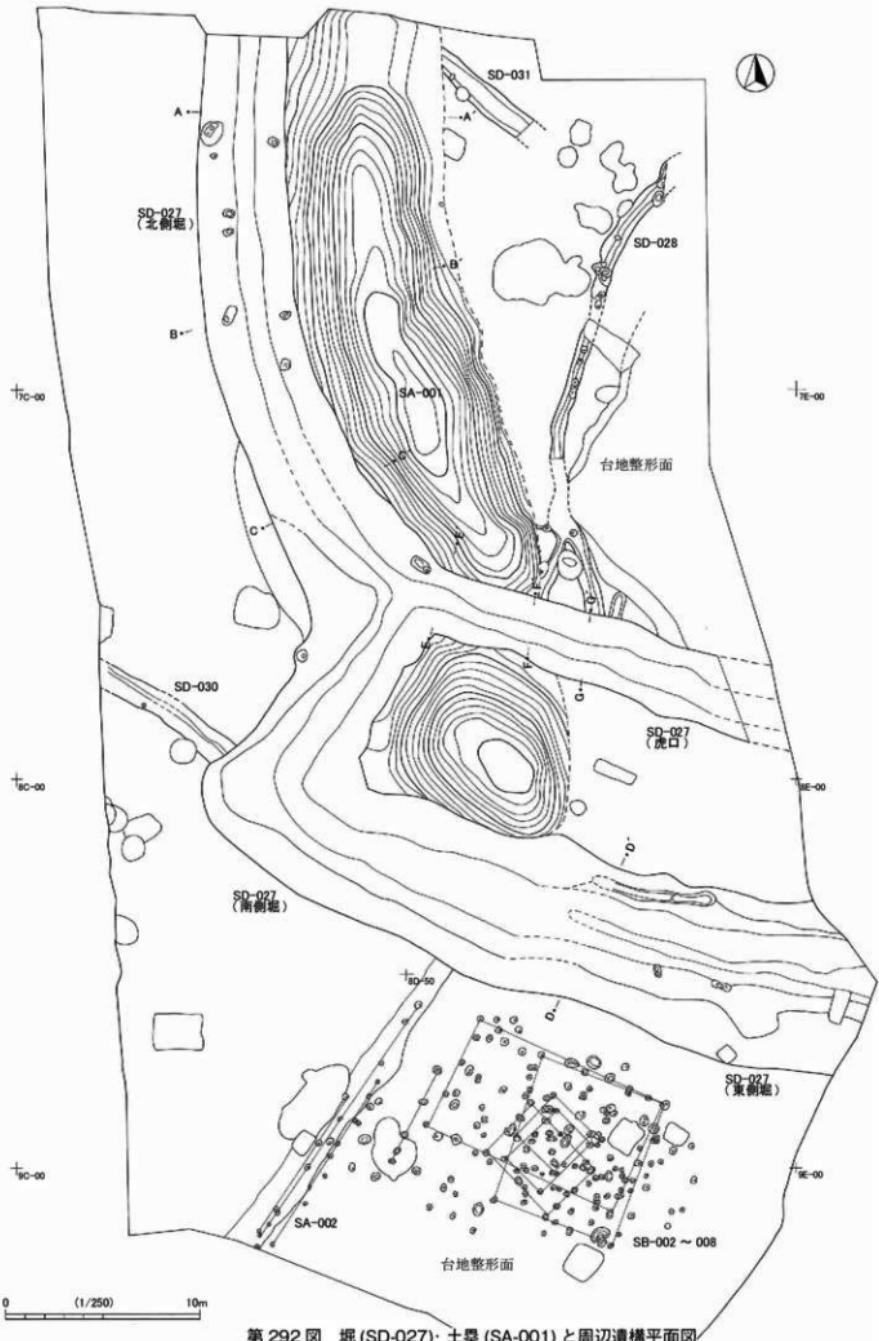
「虎口」は、「南側堀」から二叉に分かれ、土壘を切って東西方向に延びる部分である。検出された長さは約26m、幅は3.5m前後で、断面形は「北側堀」と同様、底面が幅1mほどの平坦面となっているが、壁は「北側堀」よりも急斜度で、検出面からの深さも250cm前後と深い。覆土は水平堆積で、下層はローム塊や黒土を含む明褐色土、上層は砂と砂利を多量に含む明褐色～暗黃褐色土であった。北側には南北方向の溝状遺構SD-028があり合流しているが、同時に機能したものかどうかははっきりしない。

SD-027の規模は、検出された部分の北端～南端で約45m、東端～西端で約35m、全長は延べ101mに及ぶ。この範囲の検出面の標高は一定ではなく、松川に面した北側のほうが南側より概して低い。SD-027底面の標高も検出面の標高と同様な傾向で、北側が低く、南側にいくほど高くなっている。具体的な数値を示すと、SD-027底面の標高は、北端部で28.052m、「北側堀」と「南側堀」の境界（C-C'）付近で28.243m、「南側堀」が東西方向に屈曲する付近で31.397m、「南側堀」と「東側堀」の境界（D-D'）付近では32.375mで、南端と北端とでは底面の標高に4m以上の差が生じている。なお、東西方向は、東側に比べて西側のほうがやや低い。

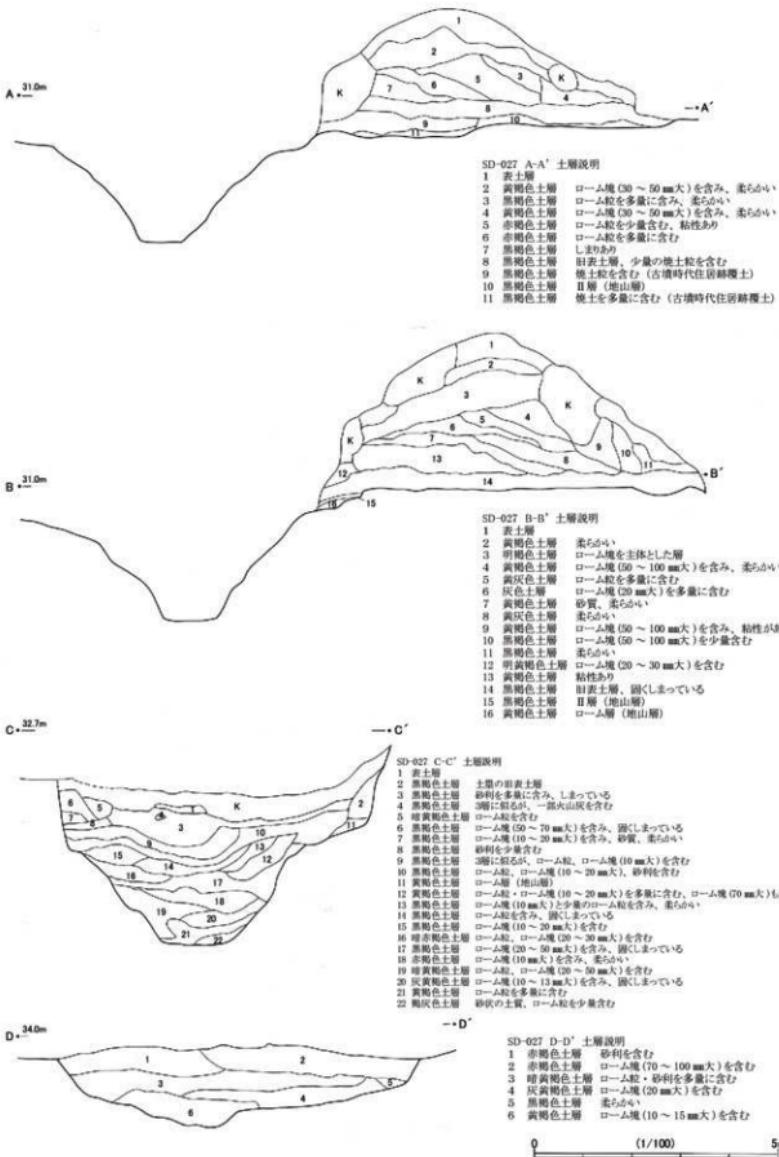
SD-027は、遺構は長大であるが、出土遺物はそれほど多くはない。また、出土遺物を見ても、地点や層位によって時期が異なる様子は特にみられなかった。

出土遺物のうち、19点を図示した。第295図1は青磁の酒会壺である。緑灰色を呈する軸が内外面に厚く施されるが、口唇部の軸は拭き取られ、露胎となっている。受口部は玉縁状にはならない。

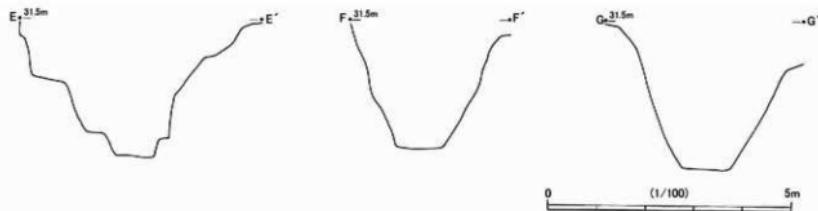
2～6は瀬戸・美濃製品である。2は天目茶碗である。内外面に黒褐色の鉄釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。3は灰釉の縁軸小皿である。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。4は折縁皿である。全体の50%の遺存度である。削り出し高台をもつ。内外面全体に灰釉が施されるが、見込み部分と高台内にそれぞれ輪状に重ね焼き痕が認められる。大窯第4段階後半の所産と考えられる。5は志野丸皿である。削り出し高台をもつ。内外面全体に釉が施され、色調は灰色を呈している。大窯第4段階末に位置づけられるものと考えられる。6は直縁大皿である。口縁部破片で、口径は30.0cmと復元できる。内外面全体に灰釉が施され、色調は灰オリーブ色を呈している。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。



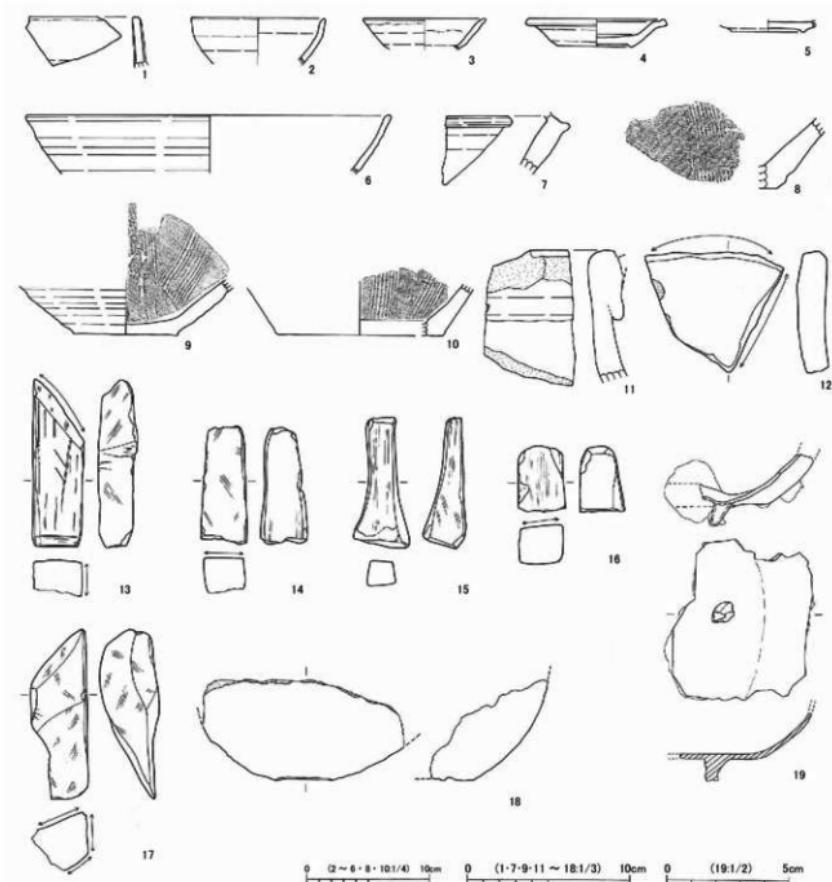
第292図 堀(SD-027)・土塁(SA-001)と周辺遺構平面図



第293図 堀 (SD-027)・土壌 (SA-001)断面図 (1)



第294図 堀 (SD-027)・土型 (SA-001) 断面図 (2)



第295図 堀 (SD-027) 出土遺物

7は常滑片口鉢である。外面に重ね焼き痕が認められる。10型式に比定されるものと考えられる。

8・9は瀬戸・美濃播鉢である。8は古瀬戸後期様式IV期に位置づけられるものと考えられる。9は底部の50%の遺存度である。古瀬戸後期様式IV期新段階に位置づけられるものと考えられる。

10は備前播鉢である。色調は内外面とも暗灰色、断面は暗赤褐色を呈する。

11は常滑窯の破片である。図の右破断面と下破断面に、漆接ぎの痕跡がある。内面は著しく摩滅している。10型式に比定されるものと考えられる。

12は常滑窯を転用した転用砥石で、破断面及び内外面も使用されている。

13～17は砥石である。13は完形である。14は上下端が欠損している。15も上端は欠損しているとみられる。16は下端を欠損する。17は、左側面の下部を欠損しているようである。18は五輪塔の断片と考えられる。球状を呈するが、径4cmほどの平坦部分が認められ、水輪の可能性がある。被熱しているとみられ、全体がやや赤みがかっている。なお、土器SA-001からも水輪の破片とみられるものが出土しているが、石質が異なることから、同一個体ではないと考えられる。

19は鉄鍋の破片と考えられる。脚が1か所確認できる。鍛鉄製とみられる。

それぞれの遺物の出土地点は、「北側堀」の壁際が8、「虎口」が4・13～16、「東側堀」の壁際が9・11である。また、「南側堀」から出土したもののうち、覆土下層が1・2・5～7・12、覆土上層が17・19、壁際が3・10・18である。

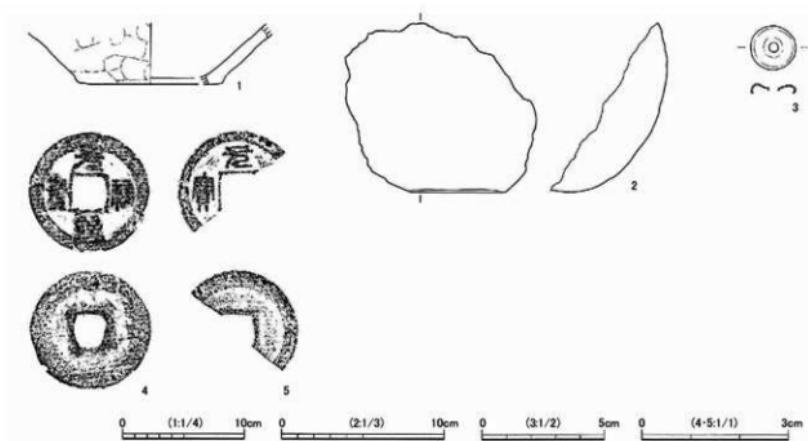
SA-001（第291～294・296図、図版23・99・114・118・123）

堀SD-027に沿うように、6C・6D・7C・7D・8Dグリッドにかけて直線上に位置する土器である。現状では調査区の北端部からSD-027「南側堀」が東西方向に屈曲する部分まで確認されているが、SD-027によって分断される場所があり、その周辺を「虎口」と称した。

検出された長さは、北側、つまり調査区北端から堀SD-027「虎口」までが約29m、南側、つまり「虎口」から南が約9mである。幅は、北側で約8m、南側で約10mである。高さは、調査前の測量図では周辺に比べて3m以上高くなっているが、調査の結果、旧表土上に約150cm～240cmの盛土をして構築されていることが明らかとなった。堀の底から測ると、土器上まで5m以上の高さとなる部分もある。

土器は、ローム粒や焼土粒を含む黄褐色土・黒褐色土・赤褐色土などで構築されている。焼土は、土器下の竪穴住居跡等の遺構が破壊されたことに由来するものと考えられる。土層断面を観察すると、下層では東側に垂直方向の境界線がみられ、その境界線に向けて堀SD-027の方向から堆積させられている様子が窺える。垂直方向の境界線は、板などを立てた土留めの痕跡とみられる。そしてその上には、別の盛土が水平方向になされており、堀を掘削し、土を盛りながら土器を構築したことが推測される。なお、「虎口」から北側と南側とでは土器の盛土も堀の覆土も異なり、特に南側では砂や砂利が多く含まれるとの調査時所見がある。「虎口」を境として、堀や土器の機能した時期が異なる可能性が考えられる。

土器下からは、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡のほか、中世と考えられる掘立柱建物跡SB-008や竪穴状遺構SI-045、土坑SK-117・119・125～129などの遺構が検出された。SK-119からは9型式に比定される常滑片口鉢（第251図1）が出土している。また、土器下の7D-10グリッド、7D-00グリッドから、それぞれ古瀬戸後期様式II～III期頃とみられる瀬戸・美濃灰釉平碗（第351図4）と古瀬戸後期様式III期に位置づけられると考えられる瀬戸・美濃灰釉盤類の破片（第351図25）が出土している。こ



第296図 土壘(SA-001)出土遺物

れのことから、土壘の構築は概ね15世紀半ば以降と考えることができるだろう。なお、盛土下から検出された掘立柱建物跡SB-008の周辺では、アカニシの貝殻が4点ほど出土している。アカニシの貝殻は堀を挟んだ対岸付近でも1点出土しており、掘立柱建物の廃絶に関係するものか、或いは土壘構築に関連する可能性も考えられるだろう。

図示した遺物は、いずれも北側の土壘の盛土下部から出土したものである。第296図1は常滑片口鉢である。底部の20%程度の破片である。2は五輪塔の破片と考えられる。球状を呈するがやや平坦な部分が一部認められ、水輪の可能性がある。なお、堀SD-027からも水輪と考えられる破片が出土しているが、(第295図18)、石質が異なることから同一個体ではないとみられる。3は銅製品だが、何かの部品の可能性もある。厚さは0.5mmとごく薄い。4・5は銭貨で、4は元祐通寶である。書体は篆書である。背面は無文とみられる。5は半分ほど欠損しているが、篆書体の「元」「寶」が読めることから、4と同じ元祐通寶の可能性もあるが、元豊通寶や元符通寶の可能性もあるだろう。遺存部分の背面は無文である。

第7節 掘立柱建物跡・柵列

1 概要

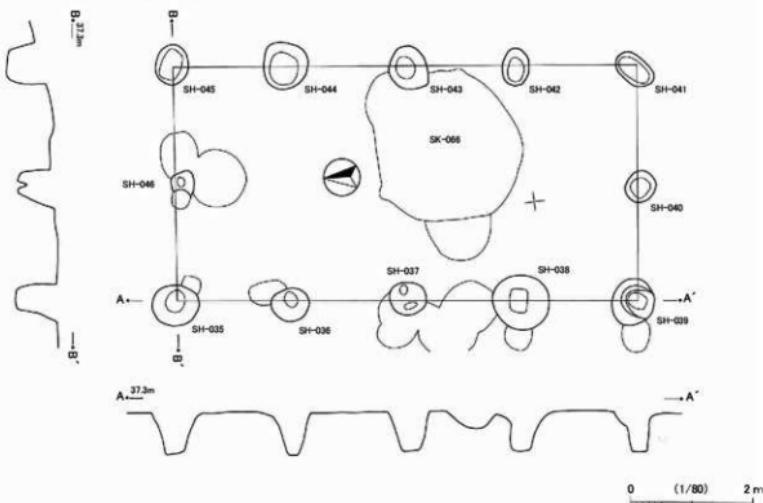
柱穴とみられるピットが集中して存在する地点はあるが、調査時点での掘立柱建物跡や柵列として把握できた遺構は多くはない。把握できた遺構は、掘立柱建物跡9棟及び柵列3条であった。報告にあたっては、これらのみ本節に掲載することとし、把握できなかったものについては、ピット群として第8節に掲載することとした。なお、遺構番号は、報告にあたって改めて通し番号に振り替えている。調査時と報告時の遺構対照表は第1表を参照されたい。

2 遺構と遺物

SB-001 (SH-035 ~ 046) (第 297 図、図版 21)

19E-59・69・79・89・99、19F-60・61・71・81・90・91 グリッドに所在する、SH-035～046 の柱穴で構成される掘立柱建物跡である。桁行 4 間 (7.6 m)、梁行 2 間 (3.8m) の建物と考えられる。柱間隔は、桁行・梁行ともにほぼ 1.9 m と等間隔である。柱穴の直径は約 50cm (SH-040)～約 90cm (SH-038) で、検出面からの深さは 59cm (SH-043)～77cm (SH-041) である。遺構中央部には円形の竪穴状遺構 SK-066 が存在し、当遺構との関連も考えられるかもしれない。また、北東隅の柱穴 SH-045 は土坑 SK-067 と重複している。周辺にはピットや土坑が群在しており、建替えが行われた可能性や別の掘立柱建物跡があった可能性も考えられる。

遺物はどの柱穴からも出土していない。

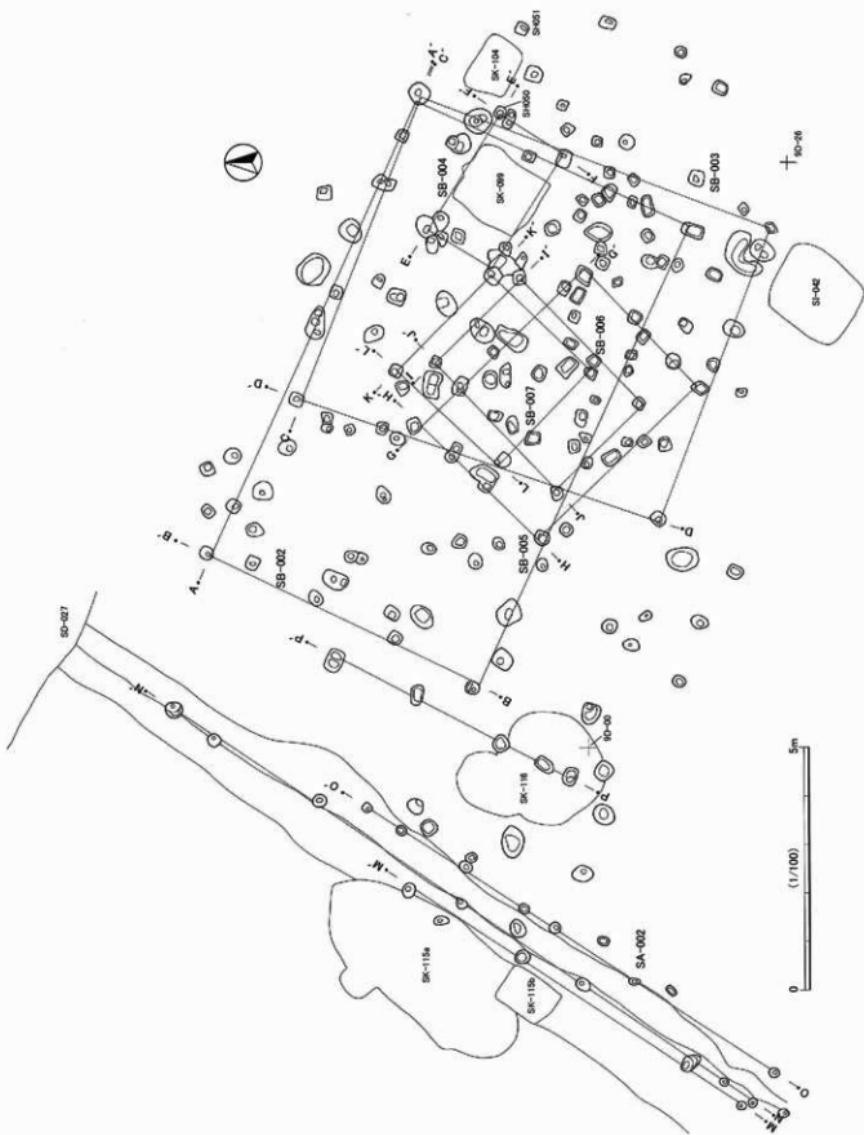


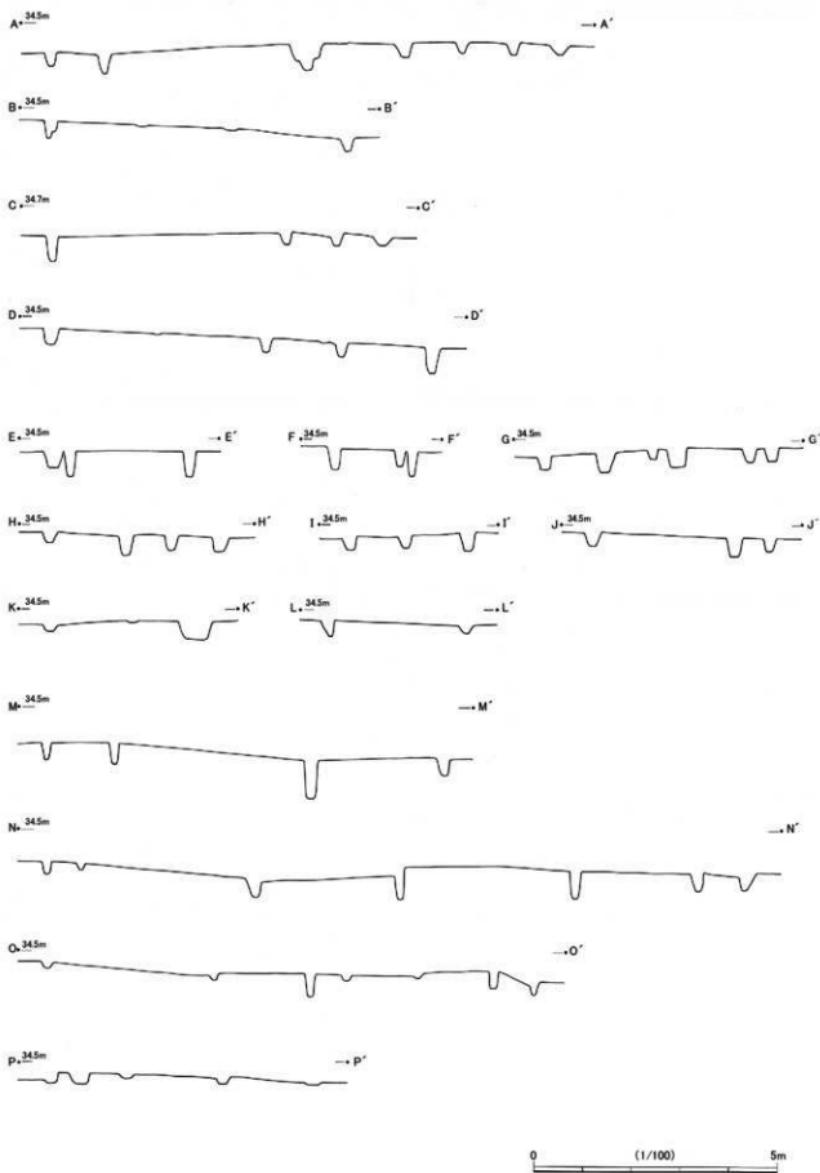
第 297 図 SB-001

SB-002～007 (第 298・299 図、図版 21)

堀 SD-027 の南側、8D-62～9D-15 グリッド付近に所在する掘立柱建物跡群である。柱穴とみられるピットが多数検出されたもので、建物としての把握は困難ではあったが、直線的に並ぶ配置等から、調査時に 6 棟の重複する建物を確認したものである。柱間等は不規則なものもあるが、検出面が多少傾斜している部分があり、歪みが出ていていることも考えられる。建物は、確認したもの以外にも重複していた可能性が高いが、軸方向について概ね堀 SD-027 と同一或いは直交方向のもの (SB-002～004) と、45°前後ずれるもの (SB-005～007) があるようである。なお、建物跡群の西側は約 70cm の段差をもって低くなっている。台地整形がなされているとみられる。段差部分には柵列 SA-002 や土坑 SK-115a・115b が SD-027 に対して直交方向に位置しており、建物を区画等する構築物として、建物と同時に機能していた可能性も考えられる。

第298図 SB-002～007とSA-002平面図





第299図 SB-002～007とSA-002断面図

SB-002は、桁行6間（10.4m）、梁行4間（6.1m）程度の建物で、最も大型である。梁方位はN-75°-Wの東西棟とみられ、北側に隣接する堀SD-027の軸方向とほぼ一致している。

SB-003は、桁行4間（7.7m）、梁行4間（6.8m）程度の建物で、ほとんどSB-002と重複するが、南北棟の建物になるとみられる。梁方位はN-18°-Eである。南側には隣接して方形窓穴SI-042があるが、軸方向がほぼ一致しており、同時に機能した可能性も考えられる。

SB-004は桁行1間（2.57m）、梁行1間（1.6m）の建物と想定した。梁方位はN-27°-Wである。範囲内には方形窓穴SK-099がちょうど収まり、軸方向もほぼ一致することから、SK-099の上屋などとして同時に機能した関連性も考えられる。

SB-005は、桁行3間（4.7m）、梁行2間（3.3m）の建物と想定した。SB-002・003とは軸方向が異なり、梁方位はN-45°-Wである。

SB-006はSB-005と重複するが、桁行3間（3.7m）、梁行2間（2.5m）の建物と想定した。梁方位はN-45°-Eである。

SB-007は1間（3m）、1間（2.8m）もしくは2間、2間の建物と想定した。梁方位はN-45°-Eである。いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

SB-008（第300図）

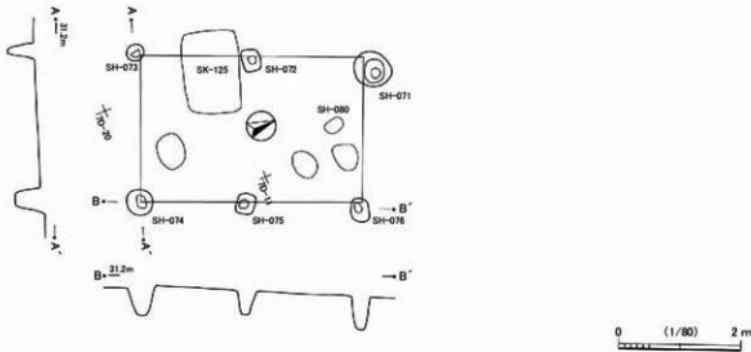
6D-90、7C-19、7D-00・01・10・11・20グリッドに所在する。SH-071～076の柱穴で構成される掘立柱建物跡である。土壘SA-001下から検出された。周辺は柱穴とみられるピットが群在しているが、ピットの規模や並びから桁行2間（3.6m）、梁行1間（2.4m）の建物を把握したものである。柱間間隔は、桁行が1.8m、梁行は2.4mである。柱穴の直径は約30cm（SH-073）～約65cm（SH-071）で、検出面からの深さは39cm（SH-075）～72cm（SH-071）である。SH-072・073の間に土坑SK-125が所在する。軸方向がほぼ一致しており、当遺構との関連も考えられるかもしれない。

遺物は出土していないが、柱穴周辺からアカニシの貝殻が4点出土している。当遺構の廃絶に関係するか、或いは土壘の構築に関係する可能性が考えられるだろう。

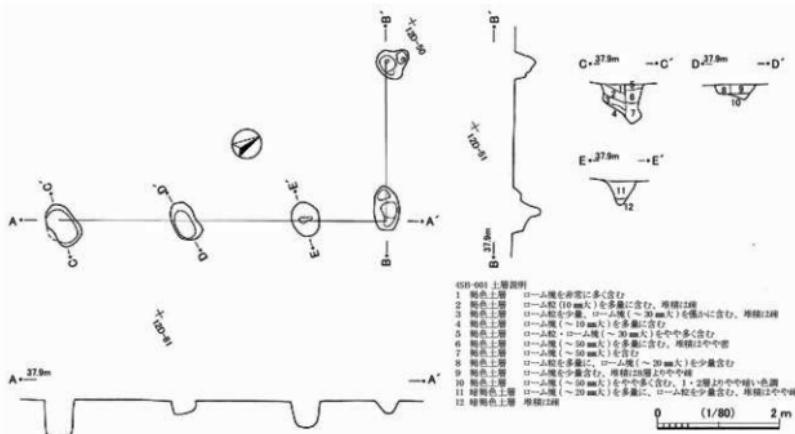
4SB-001（第301図、図版21）

12C-89、12D-50・51・60・61・70・80グリッドに所在する掘立柱建物跡である。5基のピットがL字状に並んで検出されたもので、周辺にはほかにピットは検出されなかつたが、桁行3間（5.4m）以上、梁行1間（2.6m）以上の建物跡と考えられる。柱穴の平面形は、いずれも長径60cm前後の歪な梢円形状を呈し、検出面からの深さは21cm～61cmである。

遺物は、図示していないがカワラケの小破片が少量出土した。



第300図 SB-008



第301図 4SB-001

SA-002 (第298・299図、図版22)

8C・8D・9C グリッド、堀 SD-027 の南に直交方向に延びている柱穴列で、複数条の柵列と考えられる。いずれも掘立柱建物跡群の西側に位置し、間隔が不揃いな部分もあるが、掘立柱建物跡に隣接するもの1条 (第298図 P-P') と、標高差約70cmの台地整形の段差部分に、段差面に対して平行方向に延びるもの3条 (第298図 M-M'・N-N'・O-O') の計4条が想定できた。掘立柱建物跡に隣接する1条のピットは、地下式坑 SK-116 の天井部上で一部重複している。掘立柱建物を区画等する構築物の可能性が考えられる。なお、段差部分には土坑 SK-115a・115b もあり、関連する可能性もある。

遺物は出土していない。

2SA-001 (第302図、図版22)

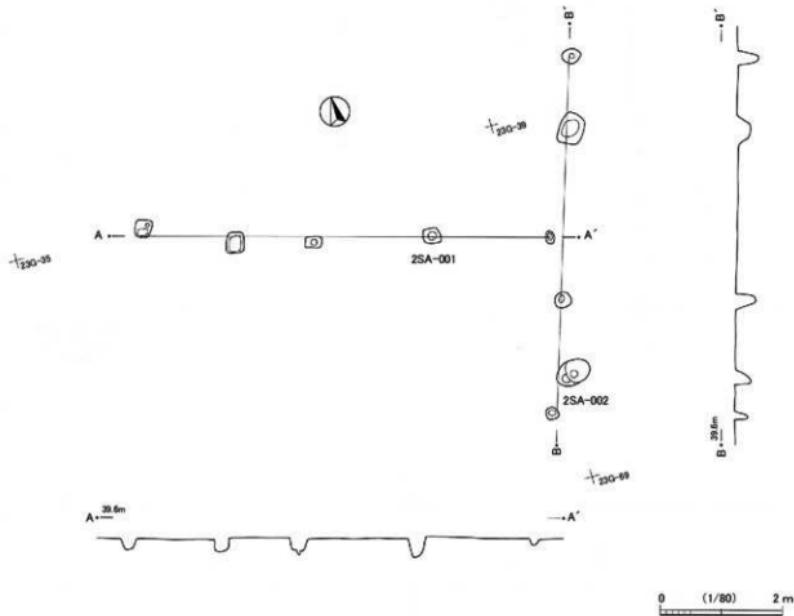
23G-36~39グリッドに所在する。ピットが群在する中、長軸30cm前後のやや方形を呈する柱穴が5基、東西方向に一直線に並ぶことから、柵列と判断したものである。柱穴の検出面からの深さは11cm~34cmである。遺構の東側に位置する柵列2SA-002や西側に位置するSD-026とは直交方向に、南側に位置する溝状遺構SD-012とは平行方向に延びており、それらと関連する可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

2SA-002 (第302図、図版22)

23G-29・39・49・58・59グリッドに所在する。ピットが群在する中、長軸25cm~50cm程度の円形からやや方形を呈する柱穴が南北方向に一直線に並ぶことから、柵列と判断したものである。柱穴の検出面からの深さは21cm~35cmである。遺構のすぐ西側に位置する2SA-001や南側に位置するSD-012とは直交方向に、西側15mほど離れたところに位置するSD-026とは平行方向に延びており、それらと関連する可能性も考えられる。

遺物は出土していない。



第302図 2SA-001・2SA-002

第8節 ピット群

1 概要

調査区内では、柱穴等と考えられるピットが多数検出された。それらは集中する地点はあるものの、構造物として明確に捉えることは難しい状況であった。そこで、掘立柱建物跡や柵列、或いは方形竪穴や溝状遺構等に伴うものとして調査段階で把握できたピットについてはそれぞれの節で扱い、本節ではそれ以外をピット群としてまとめて扱うこととした。

2 遺構と遺物（第303～309図、図版8・20・94・101・112・118・123）

第303図～第308図は、調査区内で検出されたピットの全てを網羅したものである。調査時に「ピット群」として記録された地点もあり、また、それぞれ番号が付されたものと付されなかったものがある。

ピットは、中・近世遺構の周辺に集中する傾向があり、特に掘立柱建物跡や柵列の周辺及び方形竪穴や地下式坑などが多い地点の近くに密集する傾向がみられる。遺物が出土したピットは多くはないが、出土したものはほとんど中・近世の遺物である。このような状況から、調査時には把握できなかったものの、中・近世の建物やそれに伴う構造物、柵列などの痕跡と推測することができよう。

検出された各ピットの遺構番号は、調査年次によって付し方が異なっている。記録された全てのピットに遺構番号があるわけではなく、付してあるものも、検出した全てのピットに付してある場合や、遺物の出土したものの場合等があり、更に番号の付し方も、前年度からの連番の場合や新たに001から振り直している場合がある。また、遺構種別記号は、基本的には「SH」を使用しているが、平成27年度調査次は「SP」を使用している。報告に当たっては、平面図は任意のエリアで区切り、全測図的に掲載することとした。そして遺構番号は、原則として遺物が出土したピットのみ付して、平面図と遺構一覧表（第1表）に記載し、ほかは削愛することとした。

なお、調査年次ごとのピットの取扱いについては、以下のとおりである。

平成19年度調査：「ピット群」として調査を行ったが、調査段階で各ピットには番号を付していないため、報告にあたっても付していない。

平成20年度調査：多数のピットが検出され、調査段階でSH-001～SH-047を付したピットがある。そのうちSH-002～004は報告時に土坑として扱うこととし、第5節に掲載した。それら以外は、遺物が出土したピットと掘立柱建物跡を構成するピット（SH-035～046）のみ、遺構番号をそのまま掲載した。なお、掘立柱建物跡を構成するピットは、掘立柱建物跡SB-001として第7節に掲載した。

平成21年度-1調査：多数のピットが検出され、平成20年度調査からの連番を付して調査を行ったが、遺物が出土したのは2基のみ（SH-050・051）であり、これらのみ遺構番号をそのまま掲載した。

平成21年度-2調査：「ピット群」として、平成21年度-1調査からの連番を付して調査を行った。それらのうち、遺物が出土したピットと掘立柱建物跡を構成するピット（SH-071～076）のみ、遺構番号をそのまま掲載した。なお、掘立柱建物跡を構成するピットは、掘立柱建物跡SB-008として第7節に掲載した。

平成21年度-3調査：「ピット群」として検出された各ピットに001から番号を付して調査を行ったが、遺物が出土したのは2基のみ（SH-001・002）であり、これらのみ遺構番号を振り替えて掲載した。振

替えは、ほかの当該年次調査遺構と同様に、遺構種別記号の前に「2」を付けた番号とした。

平成 22 年度調査：多数のピットが検出されたが、遺物が出土したピットのみ 001 から番号を付して調査を行ったため、全て遺構番号を振り替えて掲載することとした。振替えは、ほかの当該年次調査遺構と同様に、遺構種別記号の前に「4」を付けた番号とした。なお、SH-012 は報告時に土坑として扱うこととし、第 5 節に掲載した。

平成 23 年度調査：ピットは検出されていない。

平成 24 年度調査：多数のピットが検出されたが、遺物が出土したものや特殊なものの平成 22 年度からの連番を付して調査を行った。報告にあたっては、遺物が出土した 2 基のみ (SH-021・022)、遺構番号を振り替えて掲載することとした。振替えは、ほかの当該年次調査遺構と同様に、遺構種別記号の前に「6」を付けた番号とした。

平成 27 年度調査：多数のピットが検出され、各ピットに 001 から番号を付して調査を行ったが、遺物が出土したのは 3 基のみ (7SP-009・013・016) であり、これらののみ遺構番号をそのまま掲載した。

遺物が出土したピットは多くはない。ピット群から出土した遺物のうち、15 点を第 309 図に図示した。出土したピットは、それぞれ挿図番号の横に明記した。

第 309 図 1～4 は瀬戸・美濃製品である。1 は折縁深皿である。内外面に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。2・3 は直線大皿である。2 は内外面に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅳ期古段階に位置づけられるものと考えられる。3 も内外面に灰釉が施されるが、内面の下端部は露胎となっている。外面の下端部も僅かに露胎となっている。古瀬戸後期様式Ⅱ期に位置づけられる可能性がある。4 は瓶子で、Ⅱ類に分類されるものである。外面にはオリーブ黄色の灰釉が少しみられる。露胎部の色調は灰色である。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。

5 は常滑大甕である。頸部下から肩部にかけての破片で、外面には自然釉がみられる。

6・7 はカワラケ杯、8～11 はカワラケ小皿である。8 は完形で、20E-28・29 グリッドに所在する SH-034 から出土したものである。色調は内外面とも暗褐色を呈している。9 は全体の 60% 程度の遺存度で、21F-05・06 グリッドに所在する SH-007 から出土したものである。遺存部分の口唇部 3か所に煤が付着している。10・11 は同じ遺構から出土したもので、どちらも遺存度は全体の 20% 程度である。胎土や色調はよく似ているが、別個体と考える。

12 は砥石である。上端部は欠損している。13 も砥石の欠損品とみられる。表面と裏面に擦痕が認められる。

14 は鉄釘で、錆膨れが著しいが完形とみられる。

15 は銭貨で、元祐通寶である。書体は篆書である。遺存状態が悪く、腐食し破損している。背文はないとみられる。

そのほか、SH-014 からアカニシの貝殻が 1 点出土した。



SH052
SH054
SH055
SH056
SH057
SH058
SH059
SH060
SH061
SH062
SH063
SH064
SH065
SH066
SH067
SH068
SB-008

SD-027

SD-028

+ SD-55

SD-030

- SD-00

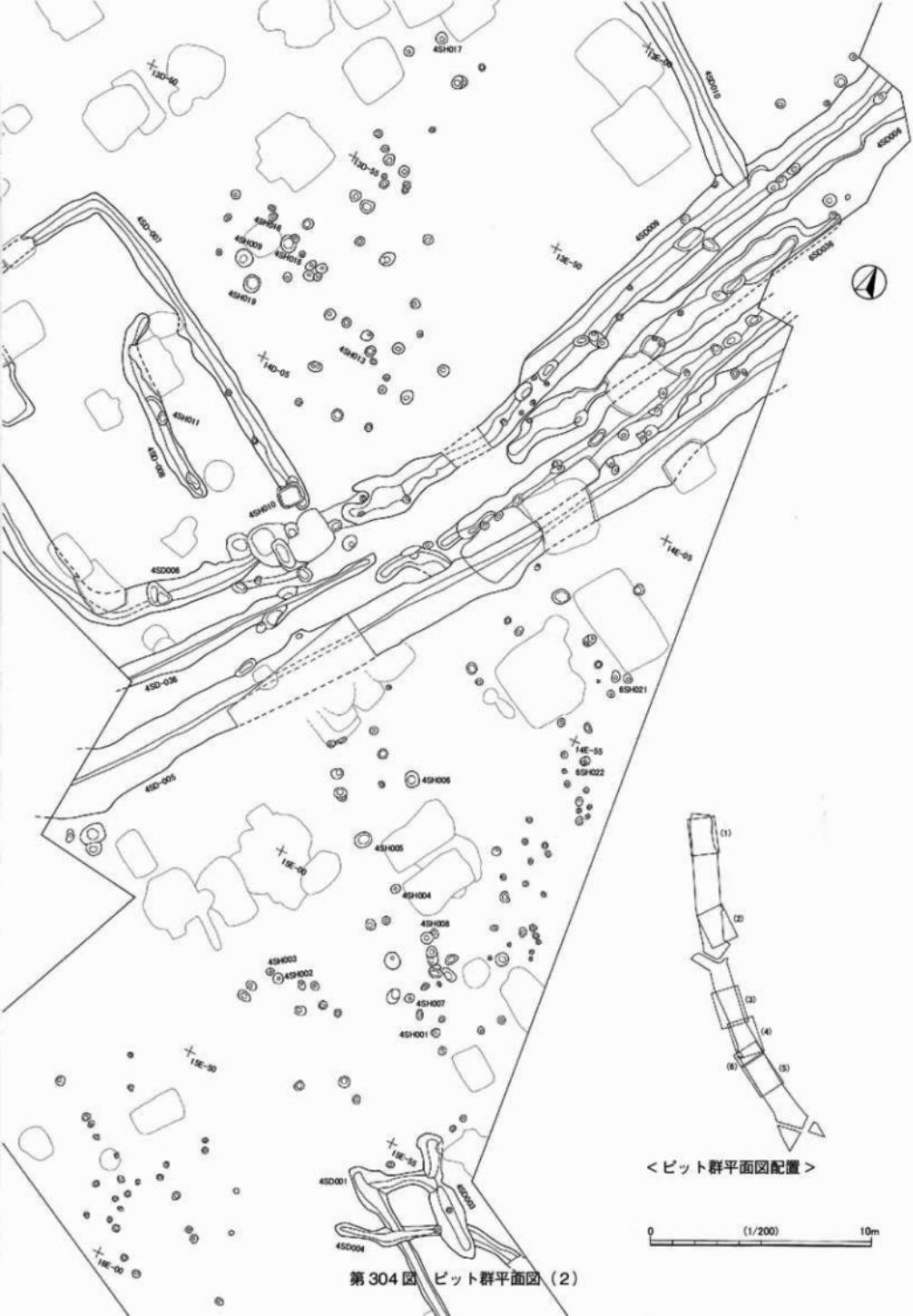
+ SD-05

+ SD-55

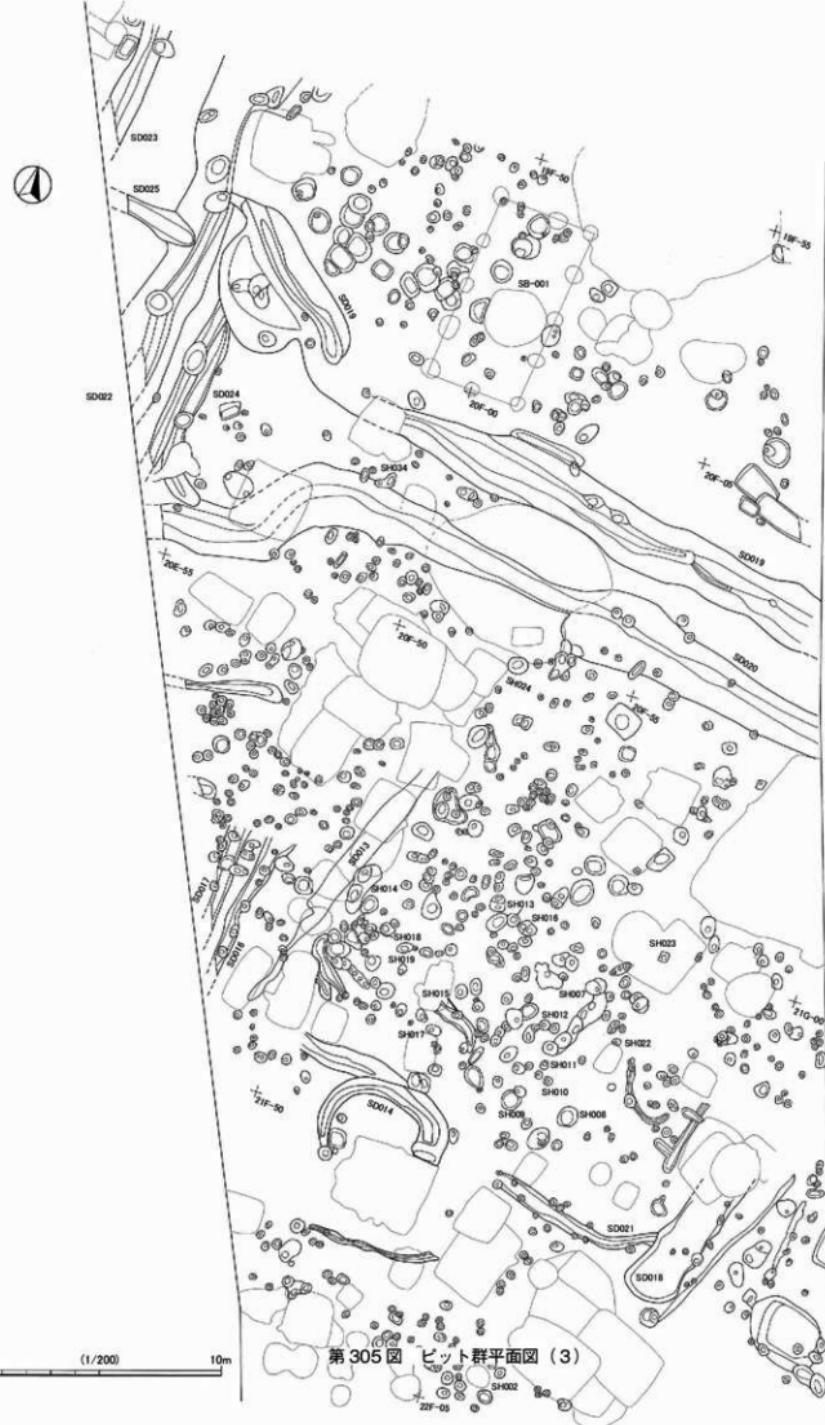
+ SD-50

第303図 ピット群平面図(1)

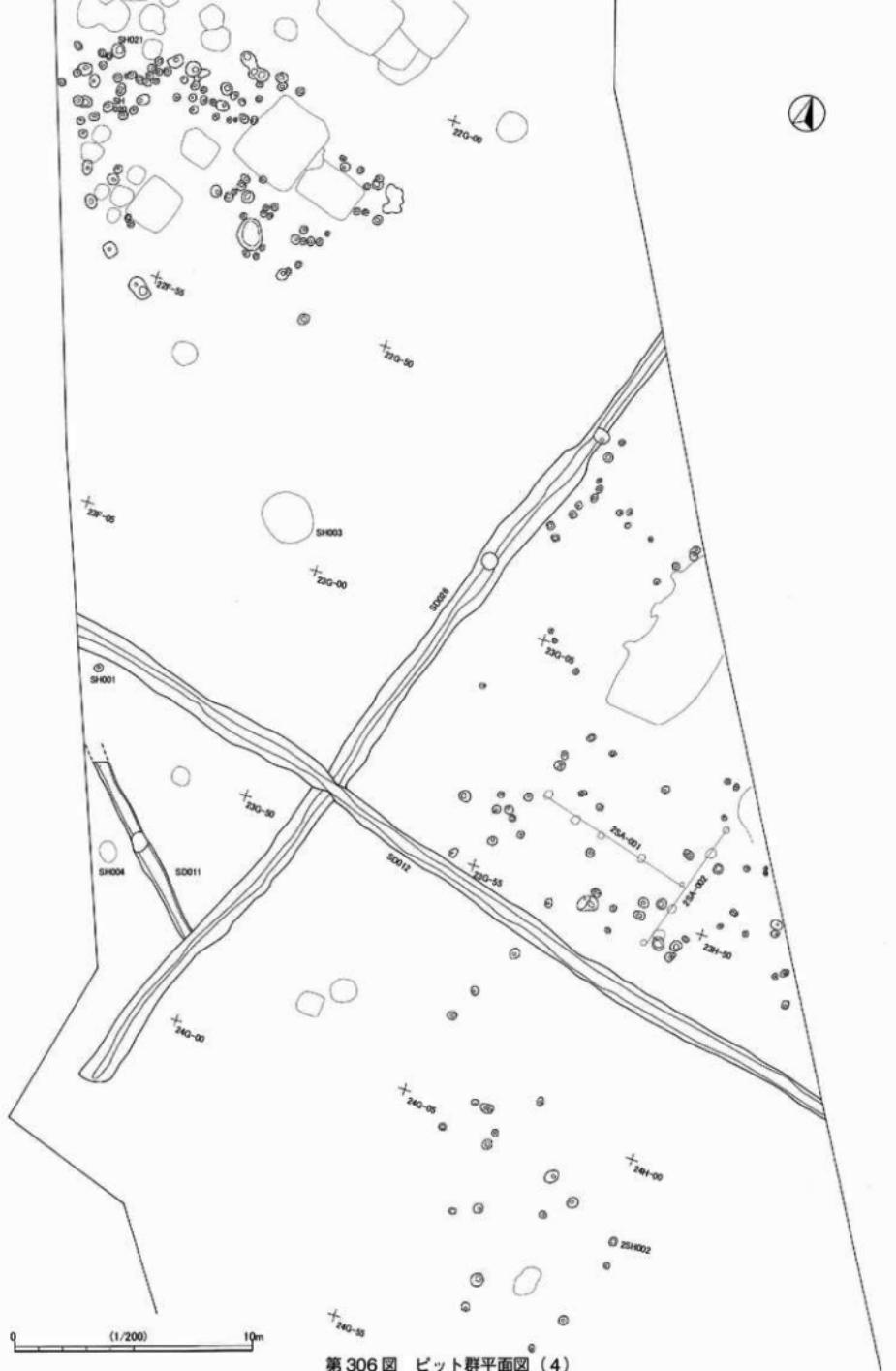
0 (1/200) 10m



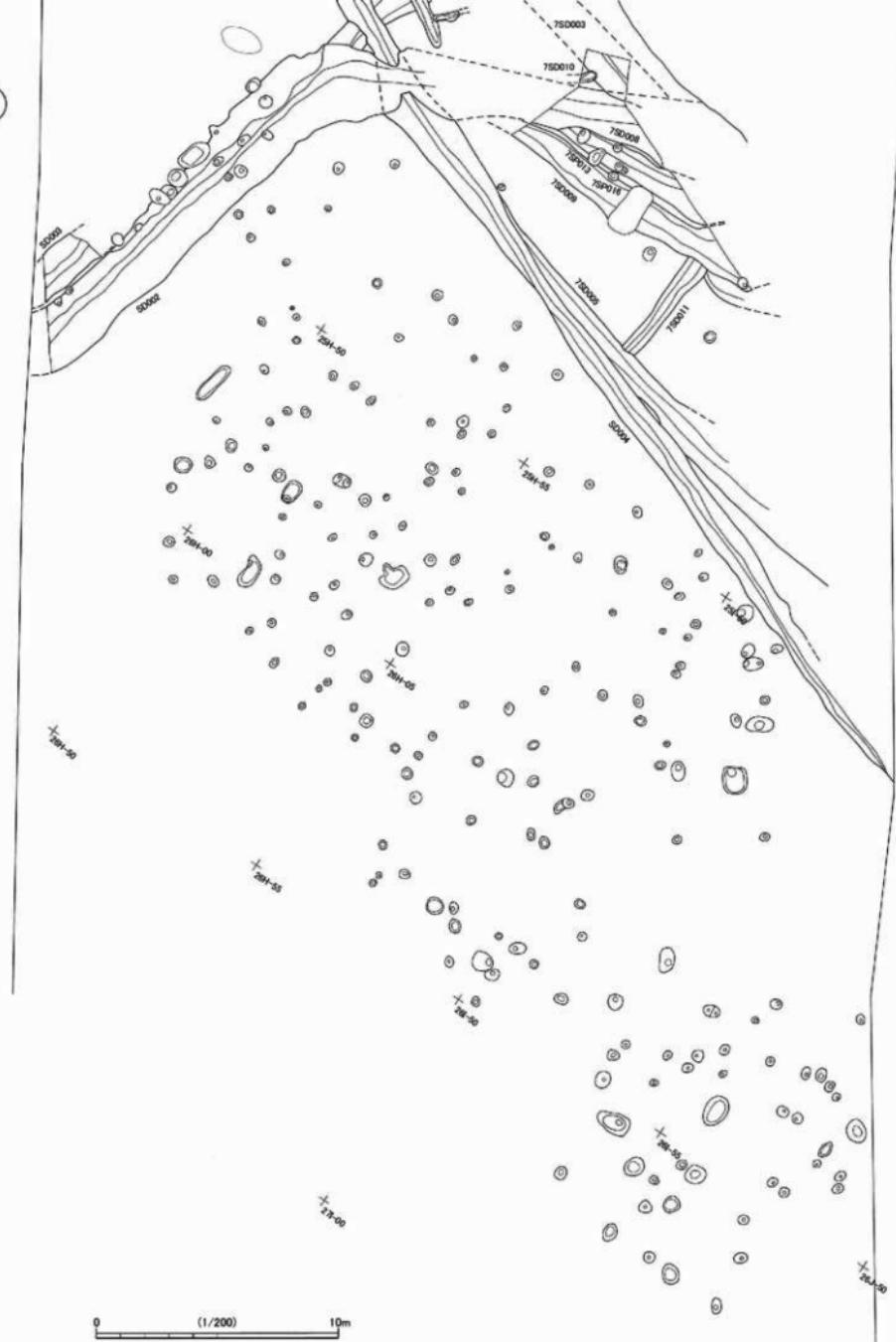
第304図 ピット群平面図(2)



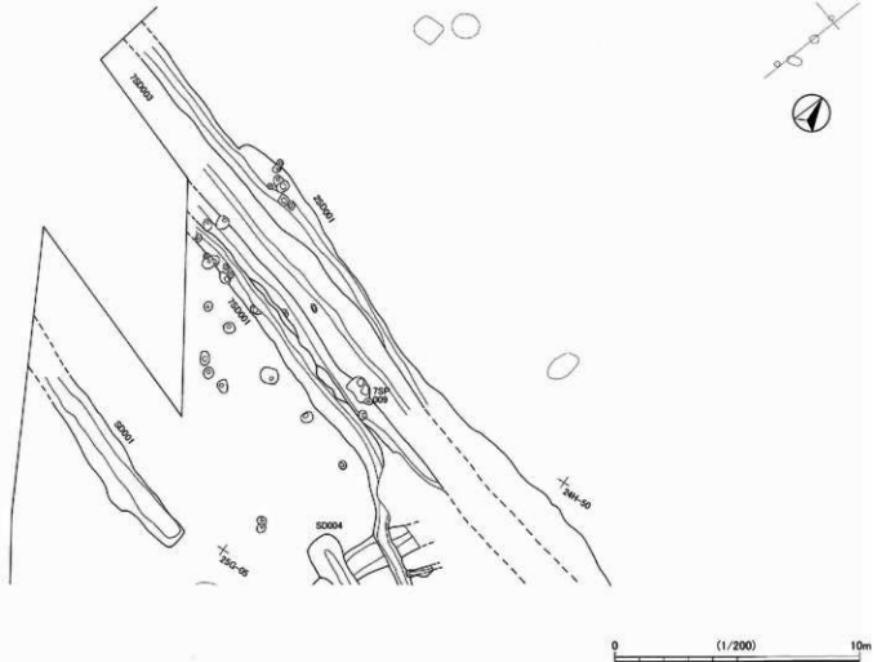
第305図 ピット群平面図(3)



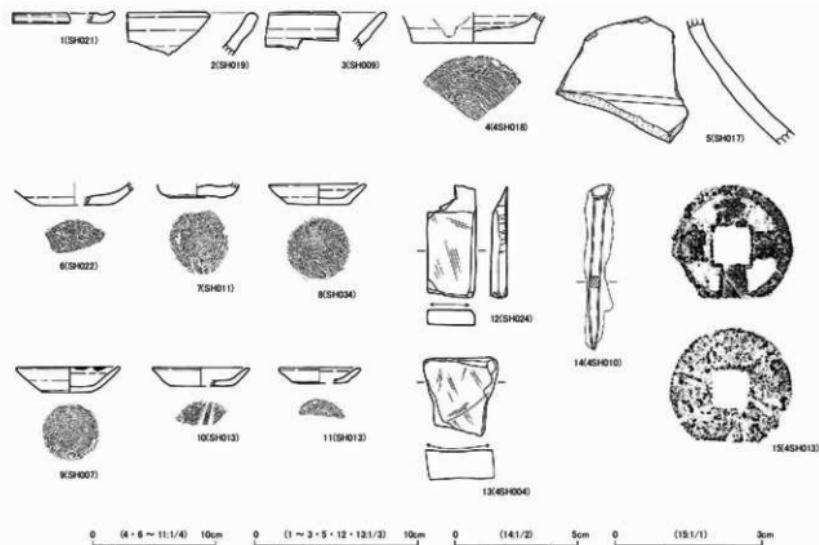
第306図 ピット群平面図(4)



第307図 ピット群平面図(5)



第308図 ピット群平面図（6）



第309図 ピット内出土遺物

第9節 溝状遺構

1 概要

溝状遺構は、長大なもの、土坑状のもの、深いもの、浅いもの、硬化面をもつもの等様々あるが、軸方向はいずれもほぼ揃っており、概ね N – 20° – E となる南北方向のものと、直交方向の東西方向に延びるものとがある。分布は調査区全体に及んでおり、現道と近い方向・位置に存在するものも多い。現代にも繋がる道路や区画溝として機能していたものが多いとみられる。

なお、長大な溝状遺構については、年次をまたいで調査が行われたものがある。調査時に別の遺構番号を付して調査を行った後、同じ遺構であることが判明することもあり、報告にあたっては先に調査したほうの遺構番号に統合することとした。

2 遺構と遺物

SD-001 (第 10・310 図・図版 25・101)

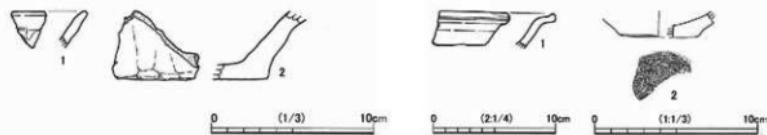
24G・25G グリッドに所在する、東西方向に直線的に延びる溝状遺構で、西端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは 8.5 m で、幅は 120cm 前後である。断面形は U 字形で、検出面からの深さは 50 cm 前後である。覆土は、下層にローム粒を含む暗褐色土が堆積し、上層に黒褐色土が堆積していた。

図示した遺物は 2 点である。第 310 図 1 は瀬戸・美濃縁釉小皿である。灰釉が施されている。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。2 は常滑片口鉢である。時期は 15 世紀代と考えられる。

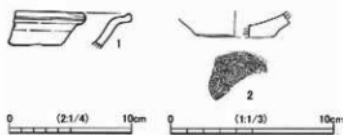
SD-002 (第 10・312 図、図版 25・28・101)

24G・24H・25G グリッドに所在する溝状遺構である。平成 19 年度に南北方向に延びる溝状遺構として調査を行ったが、北側に続く部分が平成 27 年度に検出された結果、北東方向に屈曲して延び、東西方向の溝状遺構 7SD-003 に合流することが明らかとなった。なお、平成 27 年度には「7SD-007」として調査を行ったが、報告にあたり統合して欠番とした。屈曲部分付近で SD-004 と交差し、その北側で 7SD-008 と交差する。南端は、SD-003 が沿うように重複しながら調査区外へと続く。検出された長さは約 31 m で、幅は広い部分で 300cm ほどある。断面形は V 字形であるが、底面は幅 35cm 前後平坦になっており、検出面からの深さは 125cm 前後である。一部壁面には、ピットがみられる。覆土は全体にしまりのない土で、下層にローム塊を少量含む黒褐色土が堆積し、上層にはローム塊やローム粒の量で 3 層に分層できる暗褐色土が堆積していた。新旧関係は、合流する 7SD-003 とは当遺構のほうが新しい。また、交差する SD-004・008 とは、いずれよりも当遺構のほうが古い。また、南端で重複する SD-003 とも当遺構の方が古い。

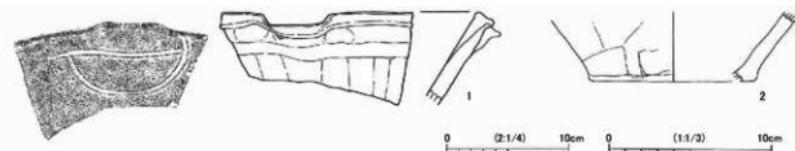
図示した遺物は 2 点である。第 312 図 1・2 はともに常滑片口鉢である。1 は平成 27 年度調査で出土したもので、片口部分内面にヘラ描きがある。色調は内外面とも灰褐色を呈する。破片の破断面全てに、漆接ぎの痕跡が残る。10 型式に比定されるものと考えられる。2 は平成 19 年度調査で出土したものである。色調は内面が灰白色、外面は白褐色を呈している。そのほか、平成 27 年度調査で、覆土上面からウマとみられる獸骨・歯が出土した。



第310図 SD-001出土遺物



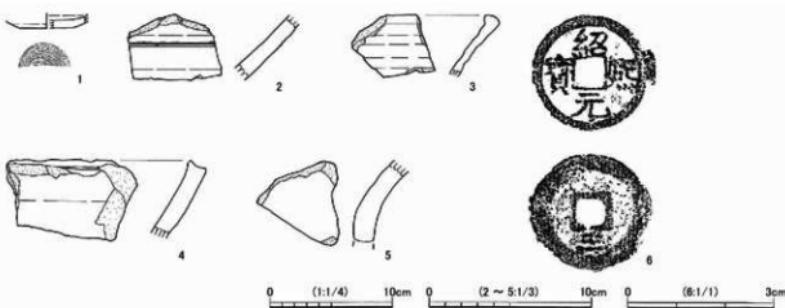
第311図 SD-005出土遺物



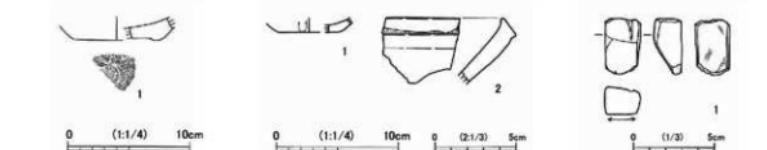
第312図 SD-002出土遺物



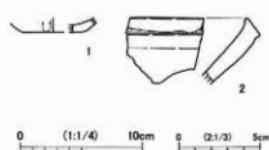
第313図 SD-003出土遺物



第314図 SD-004出土遺物



第315図 SD-012出土遺物



第316図 SD-013出土遺物



第317図 SD-018出土遺物

SD-003（第 10・313 図、巻頭図版 7、図版 25・101）

25G グリッドで、SD-002 に沿うように重複して検出された、南北方向に延びる溝状遺構である。南端は調査区外へ続き、北端は弥生時代の竪穴住居跡と重複し明らかでないが、SD-002 と合流している可能性もある。検出された長さは約 3m、幅は約 170cm とみられる。断面形は V 字状であるが、底面は 30cm 前後の平坦部分があり、検出面からの深さは 111cm 前後である。土層断面の観察から、SD-002 より新しいと判断される。覆土は、ローム粒の量で分層できる暗褐色土層が 4 層堆積していた。

図示した遺物は 3 点である。第 313 図 1 は龍泉窯系青磁の鍋蓮弁文碗である。2・3 は常滑片口鉢である。2 は口唇部が少し破損しているが、9 型式に比定されるものと考えられる。3 も恐らく 15 世紀代の所産であろう。遺物はそのほかにも、中・近世以降陶磁器が出土した。

SD-004（第 10・314 図、図版 28・101・109・123）

24G・25G・25H・25I グリッドに所在する溝状遺構である。平成 19 年度に、東西方向に延びる溝状遺構の一端を調査後、平成 27 年度に続きの部分を検出し調査した。平成 27 年度は「7SD-004」として調査を行ったが、報告にあたり統合して欠番とした。ほぼ同軸方向で並走する 7SD-005 と合流するが、新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが新しい。検出された長さは約 40m で、幅は平均的な部分で 130cm ほどである。断面形は V 字状であるが、底面は幅 30cm 前後平坦になっている。検出面からの深さは 80cm 前後ある。覆土はローム粒・ロームブロック・褐色土粒の含有量で分層可能な黒褐色土層が複数堆積していた。調査所見では、小石等も含む覆土が新しい様相であることから、中世の遺物が出土しているものの、近世の所産である可能性が高いとしている。なお、溝状遺構 SD-002、7SD-006 とほぼ直交方向で交わるが、新旧関係はいずれよりも当遺構のほうが新しい。

図示した遺物は 6 点である。第 314 図 1～3 は瀬戸・美濃製品である。1 は縁軸小皿で、オリーブ灰色の灰釉が内外面に点状にみられる。露胎部分は暗黒褐色を呈している。2 は盤類で、白色を呈する灰釉が外側の上部と内面全体的にみられるが、内面はハケ塗りされている。折縁深皿又は直縁大皿とみられる。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。3 は擂鉢である。内外面に銷軸が施されている。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。4 は常滑片口鉢である。10 型式に比定されるものと考えられる。後代の傷が多くみられる破片である。5 は常滑瓶頸部の転用砥石で、外面には自然軸がかかっている。破断面が使用されている。6 は銭貨で紹熙元寶である。背文には「三」が認められる。ほかには、遺構の西端部の覆土中から獸骨が、東部でアカニシの貝殻が 2 点出土している。

SD-005（第 11・311 図、図版 25・101）

29K・30K・31J グリッドに所在する、南北方向に直線的に延びる溝状遺構で、平成 19 年度に検出された後、続きをみられる部分が平成 20 年度に検出された。北端と南端は調査区外へ続く。検出された長さは約 60m、幅は 150cm 前後である。断面形は V 字状だが、底面は幅 30cm 前後の平坦面で、検出面から底面までの深さは 92cm ほどである。覆土は、ローム塊やローム粒を含む暗褐色土層が何層にも水平堆積しており、覆土上層部分の上面が硬化していたことから、少なくとも新しい時期には道路として機能していたものと考えられる。遺構の東側には SD-015 が並走し、SD-007～009 と直交する。新旧関係ははっきりしないが、同時に機能した可能性も考えられる。

図示した遺物は2点である。第311図1は瀬戸・美濃折線中皿である。内外面全体的に灰釉が施される。釉の色調は灰白色である。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。2はカワラケ杯である。器面は摩耗している。

SD-006（第11図）

31Jグリッドに所在する、北東～南西方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは約3mである。

南西隅でSD-005と並走または重複するとみられるが、弥生時代の竪穴住居跡と重複しており、明らかでない。幅は、検出された部分では北東部ほど広がっており、最も広いところで100cmほどとなる。検出面からの深さは10cm前後である。

遺物は出土していない。

SD-007（第11図、図版25）

30J・30Kグリッドに所在する、東西方向に直線的に延びる溝状遺構である。検出された長さは約23mで、東端は君津都市によって調査・報告された「12号溝」へ続き、西端は調査区外へ続くとみられる。SD-005と直交する。幅は西側ほど広く、平均的な部分で140cm前後であるが、西側は200cmほどある。断面形は緩いU字形である。検出面からの深さも西側ほど深く、平均的な部分で25cm前後であるが、西側では45cm前後となる。覆土は、ローム塊やローム粒の量で2～3層に分層できるややしまりのない暗褐色土層が堆積していた。

遺物は出土していない。

SD-008（第11図、図版25）

30J・31Kグリッドに所在する、南北方向から東西方向に屈曲して延びる溝状遺構である。検出された長さは13.5mで、東へ延びる東端は君津都市によって調査・報告された「14号溝」へ続くとみられる。SD-005と直交し、西側で北方向に折れるが、SD-007とは合流せずに止まる。幅は、平均的な部分で60cmほどである。断面形はU字形で、検出面からの深さは10cm～20cmである。覆土はいずれもローム粒を含む土層で、下層に黒褐色土、上層に暗褐色土が堆積していた。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SD-009（第11図）

30Kグリッドに所在する、東西方向に直線的に延びる溝状遺構である。検出された長さは1.2mで、東端は君津都市によって調査・報告された「13号溝」へ続き、西端は直交するSD-005に合流する。幅は60cm、検出面からの深さは20cm前後である。

遺物は出土していない。

SD-010（第11図）

32Jグリッドに所在する、北東～南西方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは2.5mで、東端は君津都市によって調査・報告された「15号溝」へ続き、西端は調査区外へ続くとみられる。幅は100

cm前後、検出面からの深さは20cm前後である。

遺物は出土していない。

SD-011（第9・10図、図版28）

23Fグリッドに所在する、北西～南東方向に直線的に延びる溝状遺構で、南東端は溝状遺構SD-026と合流し、北西端は調査区外へ続く。SD-026との新旧関係は明らかでない。検出された長さは8.4m、幅は60cm前後である。底面はやや平坦で、検出面から底面までの深さは10cmほどである。覆土は暗褐色土の單一層であった。

遺物は、近世以降陶磁器が少量出土したのみである。

SD-012（第9・10・315図、図版25・101）

23F・23G・23Hグリッドに所在する、東西方向に直線的に延びる溝状遺構で、溝状遺構SD-026と直交し、東端と西端は調査区外へ続く。SD-026との新旧関係は明らかでない。検出された長さは約38mで、幅は西側の広い部分で115cmほどである。断面形はV字状だが、底面は幅25cm前後の平坦面となっている。検出面から底面までの深さは60cmほどである。覆土は、下層にローム粒を多量に含む暗黃褐色土が少し堆積していたが、ローム粒を含む暗褐色土のほぼ單一層と言える状況で、一気に埋め戻されたものとみられる。

図示した遺物は1点である。第315図1は在地産カワラケ杯である。器面は摩耗している。

SD-013（第9・316図、図版101）

20F・21Fグリッドに所在する。掘込みはほとんどなく、全面的に硬化しており、道路として機能していたものと考えられる。土坑SK-018・021・033及び方形竪穴SK-074の上部に重複して検出された。検出された長さは約9m、幅は最も広いところで108cm、掘込みの深さは深いところで5cm前後である。覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土層の單一層であった。

図示した遺物は2点である。第316図1は瀬戸・美濃縁釉小皿である。外面に鉄軸が一部みられる。古瀬戸後期様式IV期頃に位置づけられるものであろうか。2は常滑片口鉢である。9型式に比定されるものと考えられる。

SD-014（第9図、図版25）

21Fグリッドに所在する。平面形は弧状を呈し、方形竪穴SI-020の北側に隣接するように位置する溝状遺構である。幅は広いところで105cmほどである。断面形は基本的に平坦で、中央部分が更に平坦に一段下がる。検出面からの深さは、中段部分が17cm、中央部分が27cmである。覆土は、ローム粒を含むやや粘質な褐色土層であった。

遺物は、礫が少量出土したのみである。

SD-015（第11図、図版25）

29K・30Kグリッドに所在する、南北方向に直線的に延びる溝状遺構で、溝状遺構SD-005に並走する

ように位置している。検出された長さは 7.7 m で、南端は未調査区内となる。幅は 130cm ほどである。断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。検出面から底面までの深さは 20cm 前後で、覆土はローム塊やローム粒を含む、ややしまりのない暗褐色土であった。

遺物は、近世以降陶磁器が少量出土したのみである。

SD-016（第9図）

21E グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構で、SD-013・017 と並走するように位置している。検出された長さは約 5 m で、幅は 70cm 前後である。断面形は緩い U 字状で、検出面からの深さは 22cm である。覆土は下層に暗褐色土を含む暗黄褐色土層、上層にローム粒を含む暗褐色土層が堆積していた。

遺物は出土していない。

SD-017（第9図）

21E グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構で、SD-013・016 と並走するように位置している。検出された長さは約 4 で、幅は 70cm 前後である。断面形は緩い U 字状で、検出面からの深さは 25cm である。覆土は、ローム粒をやや多く含む暗褐色土層であった。

遺物は出土していない。

SD-018（第9・317図、図版 112）

21F・21G グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構である。北端は土坑 SK-076 ~ 081 と重複する。また、SD-021 とほぼ直交している。検出された長さは約 8 m、幅は 480cm ほどである。東側が段状に高いが、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 10cm 程度である。

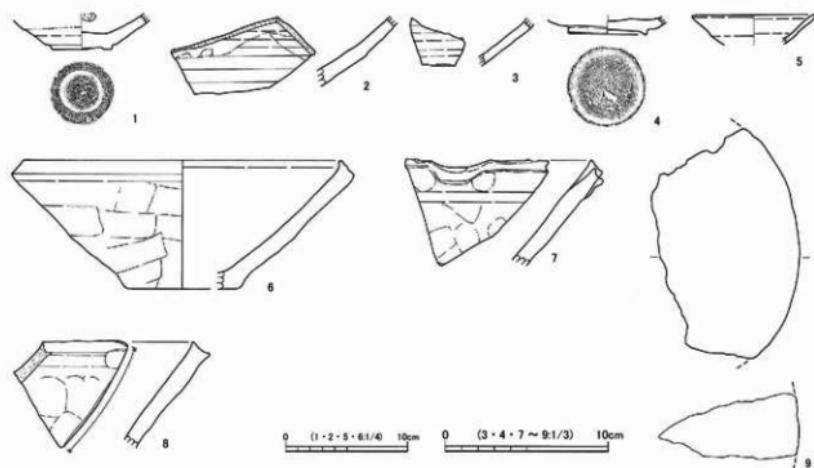
図示した遺物は 1 点である。第 317 図 1 は砥石である。上下端は欠損している。

SD-019（第9・318図、図版 26・102・114）

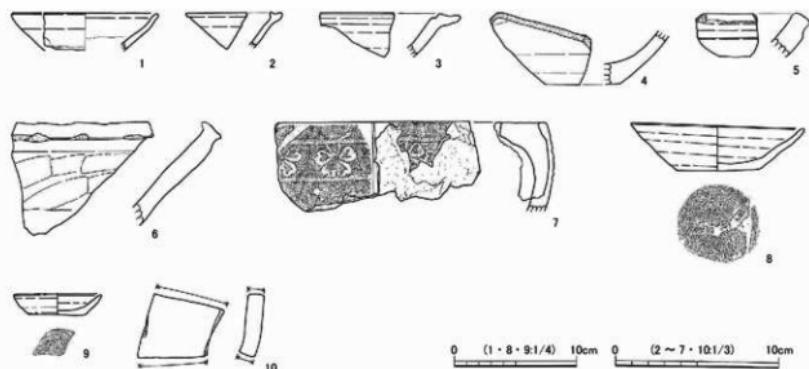
19E・20E・20F グリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構で、SD-020 と並走するように位置している。東端は調査区外へ続く。検出された長さは約 19 m、幅は約 200cm である。断面形は緩い U 字状で、検出面からの深さは 50cm である。覆土は、ローム粒の量で分層できる暗褐色土層が上下層に堆積していた。

図示した遺物は 9 点である。第 318 図 1 ~ 3 は瀬戸・美濃製品である。1 は平碗である。外面の上端部と内面全体に灰釉が施され、内面には重ね焼き痕が 2 か所残る。削り出し高台をもつ。古瀬戸後期様式Ⅲ期頃に位置づけられるものと考えられる。2 は盤類で、折縁深皿か直縁大皿とみられる。外面上部及び内面は下部を中心に全体的に灰釉がみられる。内面下部の釉はハケ塗りで施釉されている。露胎部分の色調は淡褐色を呈している。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。3 も盤類で、折縁深皿か直縁大皿とみられる。内外面全体にオリーブ灰色の灰釉が施される。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。

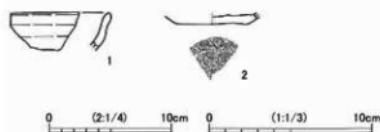
4 は在地産土師質土器とみられるが、焼成が非常に良く、陶器のように硬質である。底部は回転糸切り後、高台が貼り付けられている。美濃皿を模倣したものかもしれないが、古代に遡る可能性もあるかもしれない。



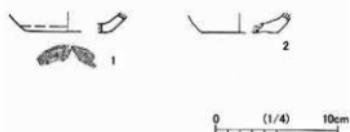
第318図 SD-019出土遺物



第319図 SD-020出土遺物



第320図 SD-021出土遺物



第321図 SD-026出土遺物

5は在地産カワラケ小皿である。

6～8は常滑片口鉢である。6は全体の20%程度の破片である。口唇部は上方に張り出している。9型式に比定されるものと考えられる。7は片口部分が遺存する破片である。外面には重ね焼き痕が認められる。8～9型式に比定されるものと考えられる。8は、口縁部の外面右端に指頭圧痕が認められ、右側に片口部分が続いていることが推定される。図の右破断面が平滑になっており、転用砥石として使用されたようである。10型式に比定されるものであろうか。

9は円柱状又は球状の石製品断片で、五輪塔の空風輪か水輪の破片と考えられる。復元径は18.8cmである。

SD-020（第9・319図、図版26・94・102・109）

20E・20Fグリッドに所在する。西側で若干蛇行するが、概ね東西方向に延びる溝状遺構で、SD-019と並走するように位置している。方形竪穴SI-033や竪穴状遺構SK-069、土坑SK-072と重複する。検出された長さは約31m、幅は平均的な部分で200cmほどである。断面形は緩いU字状で、検出面からの深さは52cmである。覆土は、ローム粒の量で分層できる暗褐色土層が上下層に堆積していた。

図示した遺物は10点である。第319図1～4は瀬戸・美濃製品である。1は浅碗である。口縁部内外面に鉄釉が施されている。下部は露胎で、露胎部分の色調は灰色である。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。2は鉢である。内外面に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期頃に位置づけられるものであろうか。3は折縁深皿である。内外面に灰釉がハケ塗りで施されている。釉の色調は白色を呈している。瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。4は盤類で、折縁深皿か直線大皿と考えられる。内外面のそれぞれ上端部にのみ、僅かに灰釉がみられる。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。

5・6は常滑片口鉢である。5の口唇部は特に摩滅している。8型式に比定されるものであろうか。6も口唇部が摩滅しているが、上方に突起が出ているのが確認できる。9～10型式に比定されるものと考えられる。

7は瓦質火鉢である。外面に花形押印文が巡る。胎土には赤色スコリアや砂粒を多く含む。外面は丁寧にミガキが施され、色調は黒褐色を呈する。8はカワラケ杯である。全体の70%程度の遺存度である。9はカワラケ小皿で、全体の30%程度の遺存度である。口唇部に1か所、煤が付着している。

10は、常滑窯の破片を転用した転用砥石である。破断面及び外面が使用されている。

出土遺物としては、ほかにアカニシの貝殻1点、ウシの歯1点がある。

SD-021（第9・320図、図版26・102）

21Fグリッドに所在する、ややカーブを描きながら東西方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは約7mで、幅は50cm前後、検出面からの深さは10cm前後である。東端は溝状遺構SD-018と合流する。

図示した遺物は2点である。第320図1は瀬戸・美濃の端反碗である。内外面に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期頃に位置づけられるものと考えられる。2はカワラケ杯である。底部の25%程度の遺存度である。遺物としてはこのほか、アカニシの貝殻が1点出土した。

SD-022 (第9・322図、図版94・103)

19E・20Eグリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは約7.5mで、幅は80cm前後、検出面からの深さは10cm前後である。覆土はローム粒を含む暗褐色土層であった。同位置で同方向に延びる幅200cmほどの溝状遺構と重複しているよう、土層断面の観察から、これを掘り直して構築されたものとみることができる。

図示した遺物は3点である。第322図1は常滑片口鉢である。破片の外側下部は平滑になっており、転用されたとみられる。10型式に比定されるものと考えられる。2・3はカワラケ杯である。2は全体の20%程度、3は30%程度の遺存度で、いずれも器面が摩耗している。

SD-023 (第9図、図版26)

19Eグリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構で、北端は本調査区外へ、南端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは約4mで、幅は120cmほどである。断面形はV字形で、底面は幅25cmほど平坦面となっている。検出面から底面までの深さは40cmほどである。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SD-024 (第9図、図版26)

20Eグリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構である。同方向に並走する2本の溝が結合しているよう、検出された長さは約7m、幅は140cm前後、検出面からの深さは10cm前後である。

遺物は出土していない。

SD-025 (第9図、図版26)

19Eグリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構である。東端は溝状遺構SD-022に接し、西端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは3.3m、平均的な幅は80cmである。断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。検出面から底面までの深さは40cmほどである。

遺物は出土していない。

SD-026 (第10・321図、図版26・102)

22G・23F・23G・24Fグリッドに所在する、南北方向に直線的に延びる溝状遺構である。検出された長さは約40mで、北端は調査区外へ続く。幅は70cm前後、検出面からの深さは110cm前後である。断面形はV字状だが、底面は幅30cm前後の平坦面となっている。検出面から底面までの深さは42cmである。覆土は、ローム塊・ローム粒の混入量により分層可能だがほぼ黒褐色土の単一層と言える状況であった。溝状遺構SD-012と直交するが、新旧関係ははっきりしない。

図示した遺物は2点である。第321図1・2はともにカワラケ杯である。いずれも底部の20%程度の遺存度である。2は器面が著しく摩耗している。

SD-028（第7図、図版26）

6D・7D グリッドに所在する。ややカーブを描きながら南北方向に延びる溝状遺構である。北端部は調査区外へ続くとみられる。南端はいったん途切れ、その先で二叉に分かれて堀 SD-027 に合流するとみられるが、調査時には、二叉部分から南は別に「虎口曲輪内遺構」と称した。報告に当たっては、一連の遺構 SD-028 と捉えることとする。検出された長さは、全体で 23 m ほどとなる。幅は 80cm 前後、検出面からの深さは、二叉に分かれた部分で 50cm 前後、北側の部分で 20cm 前後である。但し、底面の標高は、南側の堀に接する部分が最も高く、北端部へいくほど低くなっている。覆土は、主としてローム粒・ローム塊を含む明褐色土であった。底面には深さ 10cm 前後のピットが並ぶ部分もみられる。また、二叉に分かれる部分には、長径 150cm、短径 120cm、深さ 97cm ほどの楕円形状の落込みがある。いずれも機能等はつきりしないが、当遺構の東側にはほぼ平行するよう台地整形区画の段差がみられ、区画に関連する遺構であった可能性も考えられるかもしれない。

遺物は出土していない。

SD-030（第7図、図版27）

7C グリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構である。東端は堀 SD-027 に合流し、西端は調査区外へ続く。検出された長さは約 8 m、幅は 150cm 前後である。断面形は V 字形状だが、底面は幅 20cm ほど、平坦面となっている。検出面からの深さは、SD-027 と合流する東側のほうが深く約 80cm、西側は 30cm 前後である。覆土は褐色土で、上層はローム塊を含んで堅く、下層はローム塊を含まず粘りのある土であつた。

遺物は近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

2SD-001（第10図）

24G・24H グリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構である。平成 21 年度に調査を行った後、平成 22 年度に西側の部分を調査した。西端は更に調査区外へ延びるが、東端は現道の存在により調査不能であった。また、遺構の南側の部分は平成 27 年度調査の 7SD-003 と重複し、更に南側には現道が存在する。調査できた部分の長さは約 20 m、幅は広い部分で 80cm ほどである。断面形は緩い U 字形で、検出面からの深さは 90cm ほどである。覆土には硬化面が複数面みられ、道路として機能したと推測されるが、硬化面以外は総じて柔らかく、遺構の時期は近世以降の可能性が高い。7SD-003 とは部分的に同じ遺構と考えられるところもあり、新旧関係は明確にはならなかった。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみであった。

4SD-001（第8図）

15E・16E グリッドに所在する。東へ向かって南北二叉に分かれて延びる溝状遺構である。北側のほうは溝状遺構 4SD-003 と合流する。南側のほうは溝状遺構 4SD-004 と直交し、同軸方向の溝状遺構 4SD-002 と重複する。東端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは、北側のほうは約 3 m、南側のほうは約 13 m である。幅は平均的な部分で 60cm ほどで、検出面からの深さは 10cm ほどである。

遺物は、図示はしていないが、銭貨の小破片が出土している。銭貨は大破しており、銭種も不明である。

そのほかには、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SD-002 (第8・323図、図版103)

15E・16Eグリッドに所在する、東西方向の溝状遺構である。西端は方形竪穴4SK-003と重複し、東端は調査区外へ続くとみられる。北側は同軸方向の溝状遺構と4SD-001と重複するが、新旧関係は明らかでない。検出された長さは3.6m、幅は最大230cmである。検出面からの深さは15cm前後である。

図示した遺物は2点である。第323図1・2は瀬戸・美濃縁釉小皿である。いずれも内外面に灰釉がみられる。

4SD-003 (第8・324図、図版109)

15Eグリッドに所在する、東西方向の溝状遺構である。溝状遺構4SD-001・004と交差するが、新旧関係は明らかでない。検出された長さは約6m、幅は広いところで125cmである。検出面からの深さは25cm前後である。

図示した遺物は1点である。第324図1は常滑窯底部の転用砥石である。破断面を使用している。

4SD-004 (第8図)

15Eグリッドに所在する、東西方向の溝状遺構である。溝状遺構4SD-001・003と交差するが、新旧関係は明らかでない。また、東端は土坑4SK-004に繋がる。検出された長さは約8m、幅は60cmほどである。検出面からの深さは僅かに5cm前後である。

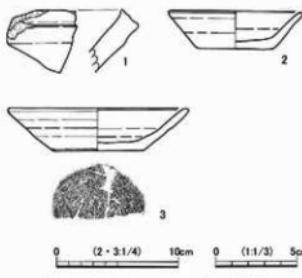
遺物は出土していない。

4SD-005 (第8・325・326図、図版94・103・104・109・114)

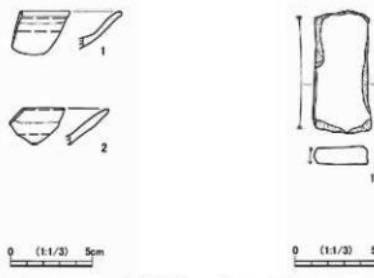
13E・14D・14E・15Dグリッドに所在する、南北に延びる溝状遺構である。平成22年度に現存の道路や住宅、電柱等の構築物に阻まれながら主に南側の調査を行い、それらが撤去された後、平成24年度に更に調査を行った。平成24年度には「SD-005」として調査を行ったが、報告にあたり遺構番号を統合した。北側では2条に分かれ、北端は調査区外へと続く。南端は確認調査区から調査区外へ続くとみられる。方形竪穴6SK-127や地下式坑6SK-128、井戸6SE-005等の遺構と重複するが、土層断面の観察から6SK-127・128より新しく、SE-005とは不明である。検出された遺構の長さは約40m、幅は南端付近で230cmほど、2条となっている北端付近ではそれぞれ西寄りが130cm程度、東寄りが180cm程度である。断面形はV字状であるが、底面は15cm～20cmほどの幅で平坦になっている。検出面からの深さは、南端付近で122cm、北端付近の西寄りで81cm、東寄りで142cmである。覆土は、ローム粒を含みしおりがあつて堅い黒褐色土や黒色土が互層に堆積していた。道路として機能したものと考えられる。

遺物は、中世～近世以降の陶磁器片が比較的多く出土した。図示した遺物は28点である。第325図6を除き、全て平成24年度調査において出土したものである。

第325図1～9は瀬戸・美濃製品である。1は平碗である。削り出し高台をもつ。内面全面に灰釉が施されており、外面は露胎である。古瀬戸後期様式Ⅲ期頃に位置づけられるものと考えられる。2・3は縁釉小皿である。2は全体の60%程度、3は40%の遺存度である。いずれも内外面に灰釉が施される。



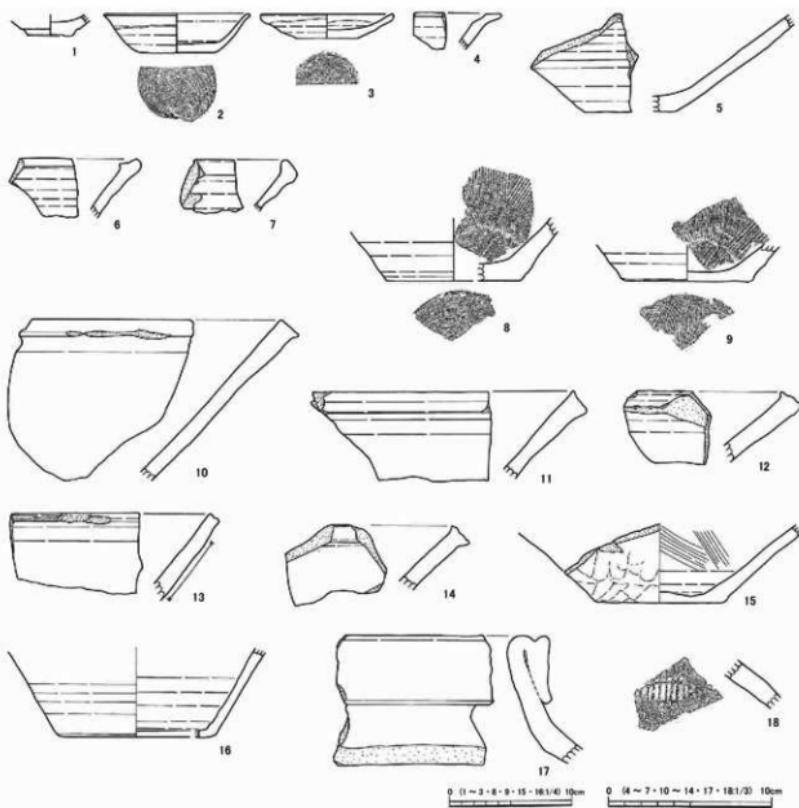
第322図 SD-022出土遺物



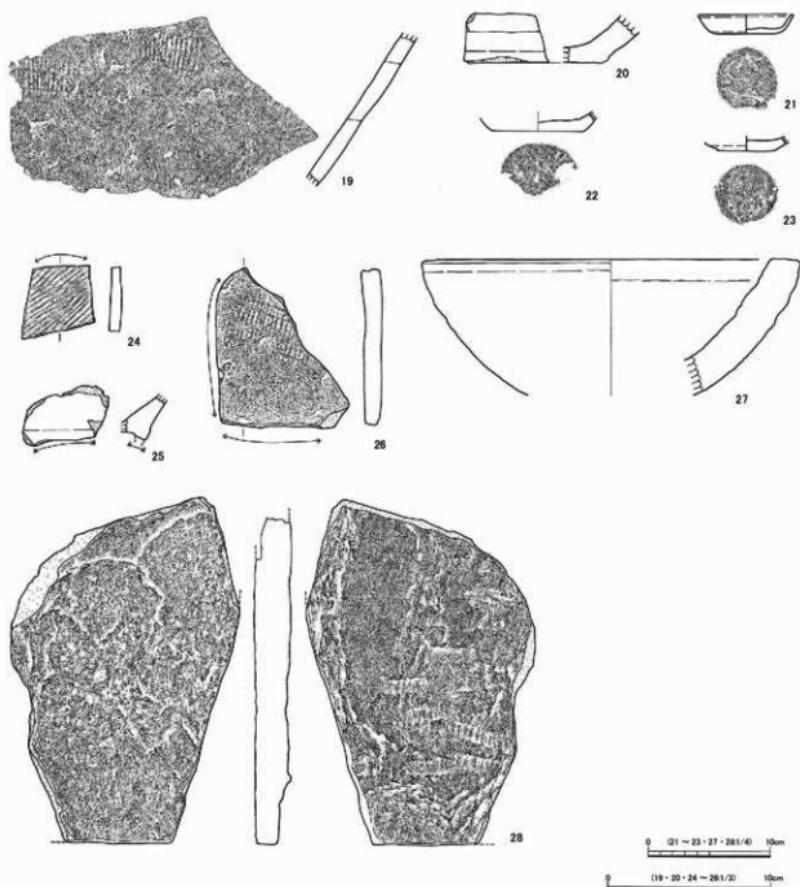
第323図 4SD-002出土遺物



第324図 4SD-003出土遺物



第325図 4SD-005出土遺物(1)



第326図 4SD-005出土遺物(2)

3の露胎部分の色調は灰色を呈している。4は折縁深皿である。内外面とも灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。5は盤類で、折縁深皿又は直縁大皿とみられる。内外面に灰釉が施される。外面は、遺存部上部のみツケガケで施釉され、下部は露胎である。内面は上部がツケガケ、見込みはハケ塗りで施釉されている。6～9は擂鉢である。6は内外面に銷釉が施される。大窯第4段階の所産と考えられる。7はI類に分類されるもので、内外面に銷釉が施される。8・9は底部の破片で、いずれも遺存部の内外面全面に銷釉が施されている。

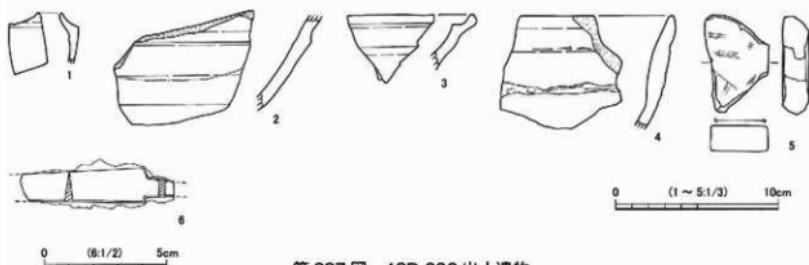
10～19は常滑製品で、10～16は片口鉢、17～19は甕である。10～12の内面は使用により摩耗

している。いずれも 10 型式に比定されるものと考えられる。13 は 8 型式に比定されるものと考えられる。外面下部が二次的な使用により平滑になっている。14 の口唇部はごく僅かしか遺存していないが、10 型式に比定されるものと考えられる。15 は、重複する地下式坑 6SK-128 覆土から出土した破片と接合したもので、底部の 30% 程度の遺存度である。内面にはハケ目状の調整痕がみられる。見込み部分はヨコナデ調整である。16 は底部の 20% 程度の遺存度である。全体に薄手で丁寧な作りである。外面底部の縁辺が転用砥石として使用されている。17 は折返し口縁をもつ甕である。9 型式に比定されるものと考えられる。18 は胴部の破片で、全体に自然釉がかかる。外面には押印文がみられる。第 326 図 19 は大甕の胴部破片で、外面には押印文が 2 か所みられる。20 は在地産内耳土鍋の底部破片である。胎土には白色粒と砂粒を少量含む。色調は褐色であるが、外面と内面見込み部分は黒褐色である。21 はカワラケ小皿である。全体の 70% 程度遺存している。口縁部は約 30% の遺存度であるが、遺存部分の口唇には点々と煤の付着が観察される。胎土は少量の砂粒や白色針状物質を含み、色調は淡暗褐色を呈する。器面は摩耗し、一部剥落している。22・23 はカワラケ杯である。22 は底部の 40% 程度の遺存度である。胎土に赤色スコリアを多量に含み、色調は橙色を呈する。器面が著しく摩耗している。23 は底部のみ全部遺存している。胎土に砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。器面が摩耗している。

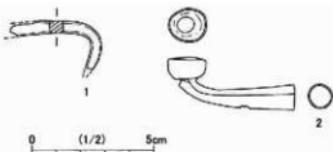
24～26 は転用砥石で、24 は須恵器甕の転用である。破断面を使用しているが、内面も平滑になっており、使用されている可能性がある。25 は I 類に分類される常滑片口鉢の底部破片を転用したものである。外面体部と高台部が使用されている。26 は常滑甕を転用したものである。外面には押印文がみられる。破断面が使用されている。27 は石臼の破片とみられる。鉢状を呈し、径の 20% 程度の遺存度であるが、復元口径は 30.8cm、復元現存器高は 11.1cm である。内面は使用により平滑になっている。28 は板磚の基部片である。左側面及び上部は欠損しているが、下面及び右側面下半は丁寧に平らに整形されているのが観察できる。表面は無文である。裏面にはノミ加工痕が顕著にみられる。遺物はほかに、図示はしていないが、錢貨の小破片が出土している。錢貨は大破しており、錢種も不明である。

4SD-006（第 8・327 図、図版 27・105・112・118・121）

12E・13E・14C・14D グリッドに所在する。現道である平成 22 年度調査区と 24 年度調査区の境界に沿う形で存在するため詳細が不明な部分もあるが、平成 22 年度の調査において東西方向から東端で南北方向へ屈曲し北へ延びる溝状遺構であることが確認され、更に平成 24 年度の調査で 4SD-009 と重複しながら北へ延びて調査区外へ続くことが明らかとなった。平成 24 年度には「SD-006」として調査を行ったが、報告にあたり遺構番号を統合した。4SD-009 とは、土層断面の観察から当遺構のはうが新しいとみられる。西端は調査区外へ続くとみられるが、東西方向から屈曲して南下する 4SD-007 と調査区外で繋がる可能性もある。西端では地下式坑 4SK-101 と重複するが、新旧関係は、4SK-101 の天井崩落土とみられる土の上に掘り込まれていることから 4SK-101 より新しいと考えられる。ほかに重複する遺構としては、屈曲部分に方形竪穴 4SK-118・104 があるが、新旧関係は土層断面の観察から 4SK-104 より新しいことが明らかである。検出された長さは、東西方向の部分が約 16 m、南北方向の部分は約 44 m である。幅は 160cm ほどで、検出面からの深さは東西方向の部分で 40cm ほど、4SD-009 と重複する北端付近では 10cm 前後である。覆土は、ローム粒の混入量で分層できる暗褐色土層が上下層に堆積しており、上層は硬化していた。道路として機能していたものと考えられる。なお、4SK-101 と重複する部分の底部から、厚さ



第327図 4SD-006出土遺物



第328図 4SD-007出土遺物

10cm前後の貝層が50cm×25cmほどの範囲で検出された(第117図)。構成貝種は記録がなく不明である。

図示した遺物は6点である。第327図1~3は瀬戸・美濃製品である。1は茶入である。外面全体に灰褐色の鉄釉が施されている。内面頸部にも僅かに釉が認められる。2は鉢類である。内外面に灰釉がみられる。外面は上部にツケガケで施釉され、下部は露胎である。内面は、見込みはハケ塗りで上部はツケガケで施釉されている。3は擂鉢である。内外面に鉛釉が施されている。遺存部に擂目はない。古瀬戸後期様式IV期に位置づけられるものと考えられる。4は内耳土鍋である。胎土に雲母を多く含む。色調は、内面は褐色で、外面は煤けて黒色~暗褐色を呈している。近世の所産かもしれない。5は砥石とみられる。

6は小柄小刀である。切先と茎の端部をそれぞれ欠く。現存長は6.3cmで、刀身長は5.1cm、茎長は1.2cmである。6は平成22年度調査で遺構南側の部分から出土したものであるが、それ以外は平成24年度の調査で遺構北側の部分から出土したものである。

4SD-007(第8・328図、図版27・118)

14C・14Dグリッドに所在する。東西方向から西端で南北方向へ屈曲し南へ延びる溝状遺構である。東端は方形状のピット4SH-010と重複する。その僅かな先には南北方向に位置する4SD-006があるが、合流しない。南端は調査区外へ続く。溝状遺構4SD-037や方形竪穴4SK-097と重複するが、新旧関係ははつきりしない。検出された長さは、東西方向の部分が約17m、南北方向の部分が約9mである。幅は100cmほどである。断面形はU字形を呈し、検出面からの深さは20cm前後である。覆土はローム粒やローム塊、茶褐色土塊の混入量で分層できる暗褐色土が上下層に堆積していた。

図示した遺物は2点である。第328図1は鏡膨れがひどいが、鏡の破片と考えられる。2は煙管である。ほかには中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土したのみである。

4SD-008（第8・329図、巻頭図版7、図版104）

14D グリッドに所在する。北西—南東方向にややカーブして延びる溝状遺構である。3mほど北側にほぼ並行して延びる 4SD-007 とは、径 160cmほど、深さ 10cmほどの浅い落込みを介して繋がるようである。また、方形竪穴 4SK-098 と重複しているが、土層断面の観察から当遺構のほうが新しい。検出された長さは約 9m、幅は 90cmほどである。検出面からの深さは 15cm前後である。覆土は、ローム粒のほか、炭化物粒・焼土粒を僅かに含む暗褐色土の単層であった。

図示した遺物は 3 点である。第 329 図 1 は青白磁の壺で、口縁部の 20%程度の破片である。内外面に施釉されるが、口唇部は拭取りされている。二次的に被熱したとみられ、表面はざらついている。色調は灰白色である。17世紀初め頃の所産であろうか。2 は瀬戸・美濃丸皿である。全体の 20%程度の遺存度である。内面と外面の上半に灰釉が施され、基盤底の底部は露胎である。色調は釉がオリーブ褐色、露胎部分は灰褐色である。大窯第 4 段階の所産と考えられる。3 は常滑片口鉢である。

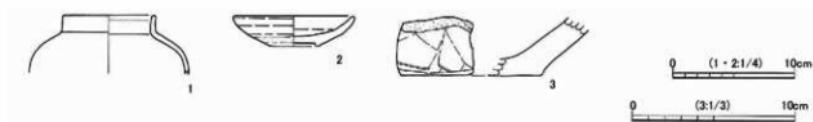
4SD-009（第8・330図、巻頭図版7、図版94・104・109）

12E・13E・14D グリッドに所在する。南北方向に延びる溝状遺構で、調査は平成 22 年度と平成 24 年度に実施した。平成 24 年度には「SD-009」として調査したが、報告にあたり遺構番号を統合した。現道である平成 22 年度調査区と平成 24 年度調査区の境界線に沿う形で存在するため、詳細が明らかにならない部分もあるが、南東側で 4SD-006 と重複し、更に東側には 6SD-036 が隣接して並走している。北端は調査区外へ続くとみられる。重複する 4SD-006 とは、土層断面の観察から当遺構のほうが古いとみられる。検出された長さは約 22m、現存幅は 150cm である。検出面からの深さは 20cm~50cm ほどである。覆土は、ローム粒を含みしまりのある暗褐色土と黒褐色土が 3 層ほど堆積していた。道路として機能していたものと考えられる。

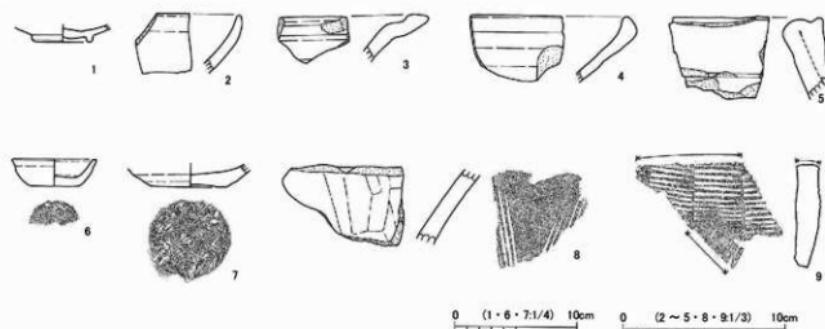
図示した遺物は 9 点である。第 330 図 1 は青白磁の碗である。底部の 50%程度の遺存度である。見込み部分には細い沈線が 1 本巡る。高台は削り出し高台である。釉は内外面に施されるが、高台内部は露胎である。2~4 は瀬戸・美濃製品である。2 は天目茶碗である。内外面に鉄釉が施されるが、遺存部の下端のみ僅かに露胎になっているのが認められる。釉の色調は、口縁部は光沢のある暗茶褐色で、その下は光沢のない黒褐色を呈している。古瀬戸後期様式Ⅱ期に位置づけられるものと考えられる。3 は折縁深皿である。内外面に灰釉が施されている。古瀬戸中期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。4 は擂鉢である。内外面に銷釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。5 は常滑窯の口縁部破片である。色調はにぶい赤褐色を呈する。9 型式に比定されるものと考えられる。6~8 は在地産で、6 はカワラケ小皿である。全体の 40%程度の遺存度である。7 はカワラケ杯である。比較的の焼成が良く、硬質である。8 は擂鉢である。外面の調整は縱方向のヘラナデである。胎土には砂粒を少量含む。焼成は良好で、比較的の硬質である。色調は褐色を呈する。9 は常滑窯の転用砥石である。外面に押印文がみられる。破断面を使用している。

4SD-010（第8図、図版27）

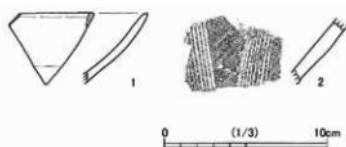
12D・12E グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、東端は 4SD-009 と直交し、西端は、同じ軸方向で東西に延びる 4SD-027 へ重複しながら続く。重複部分には土坑 4SH-012 が存在する。4SD-



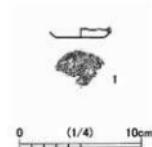
第329図 4SD-008出土遺物



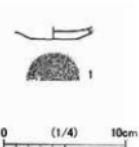
第330図 4SD-009出土遺物



第331図 4SD-011出土遺物



第332図 4SD-014出土遺物



第333図 4SD-015出土遺物

027との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが4SD-027よりも古い。検出された長さは約13mである。幅は150cmほどで、検出面からの深さは30cmである。覆土はローム粒と褐色土塊の量で分層可能な暗褐色土層が上下2層に堆積していた。

遺物は出土していない。

4SD-011(第8・331図、図版104)

12D・12Eグリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、東端は調査区外へ続くとみられる。4SD-014と直交し、新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが4SD-014より古い。検出された長さは約13mである。幅は広い部分で170cmほど、検出面からの深さは31cmである。覆土はローム粒と褐色土塊の量で分層可能な暗褐色土層が上下3層に堆積していた。

図示した遺物は2点である。第331図1は、瀬戸・美濃平碗である。内面全体と外面の上半に灰釉が

施されるが、釉は二次的に被熱しているとみられ、表面がざらついている。古瀬戸後期様式Ⅱ期に位置づけられるものと考えられる。2は在地産擂鉢である。胎土に白色粒を含む。色調は、内面は灰色、外面は黒褐色を呈している。

4SD-012（第8図）

12C・12D・12E グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、東側で4SD-013と分岐し、分歧点付近で4SD-014と直交している。新旧関係は、土層断面の観察から、当遺構のほうが4SD-013・4SD-014より古い。東端は調査区外へ続く。西側は4SD-019と合流し、西端は調査区外へ続く。検出された長さは約35mである。幅は90cmほど、検出面からの深さは41cmほどである。覆土はローム粒と褐色土の含む量で分層可能な黒褐色土が上下4層に堆積していた。

遺物は出土していない。

4SD-013（第8・334図、図版27・104・112・114・124）

12C・12D・12E グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、4SD-012と同方向で重複するように存在している。新旧関係は、土層断面の観察から、当遺構のほうが4SD-012より新しい。東側で4SD-014と直交し、東端は調査区外へ続く。検出された長さは、完全に4SD-012と重複する部分も含めて約28mである。幅は70cmほど、検出面からの深さは15cmほどである。覆土はローム粒の含む量で分層可能な黒褐色土が上下層に堆積していた。

図示した遺物は5点である。第334図1は瀬戸・美濃直線大皿である。内外面全体に灰釉が施される。釉の色調は灰白色を呈している。古瀬戸後期様式Ⅱ期に位置づけられるものと考えられる。2は火打石とみられる。3は砥石である。ほぼ全面に使用されている。4は石臼の破片である。5は錢貨で元豊通寶である。書体は行書である。背面は無文とみられる。

4SD-014（第8・332図、図版104）

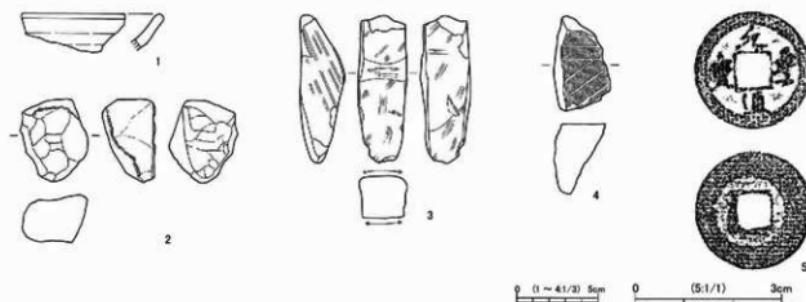
12D・12E グリッドに所在する。南北方向に延びる溝状遺構で、北から4SD-013・012・011とそれぞれ直交するが、新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが4SD-011より新しい。南端は4SD-010に接する。北端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは約17mである。幅は80cmほど、検出面からの深さは25cmほどである。覆土はローム粒の含む量で分層可能な黒褐色土が上下層に堆積していた。

図示した遺物は1点である。第332図1は、カワラケ小皿である。底部の30%の遺存度である。

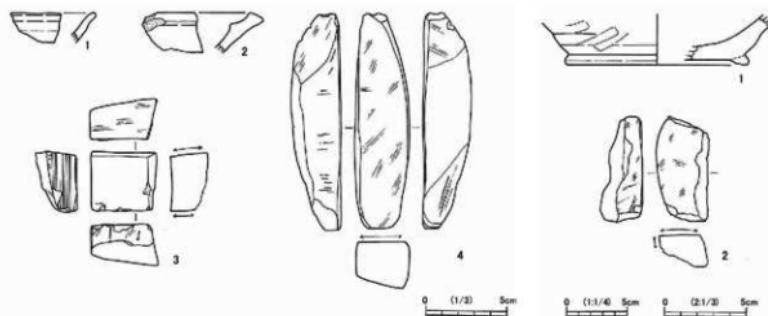
4SD-015（第8・333図、図版104）

12E グリッドに所在する。ややカーブしながら南北方向に延びる溝状遺構で、4SD-016と直交する。新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが4SD-016より古い。南端は4SD-013に接する。北端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは6.5mである。幅は100cmほど、検出面からの深さは20cmほどである。覆土はローム粒の含む量で分層可能な黒褐色土が上下層に堆積していた。

図示した遺物は1点である。第333図1は、瀬戸・美濃縁輪小皿である。底部の50%の遺存度で、遺存部分には釉はみられない。内面は二次的な使用によるものか、平滑になっている。

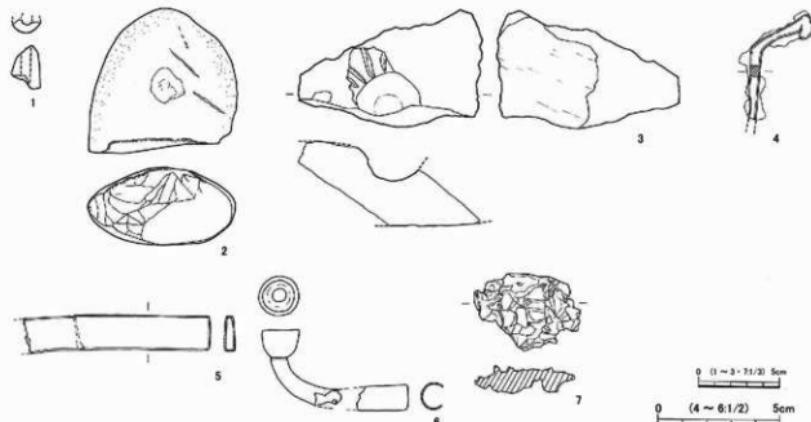


第334図 4SD-013出土遺物



第335図 4SD-016出土遺物

第336図 4SD-018出土遺物



第337図 4SD-017出土遺物

4SD-016 (第8・335図、図版104・112)

11D・12E グリッドに所在する。ややカーブしながら東西方向に延びる溝状遺構で、4SD-015と直交し、東端は4SD-014に合流する。新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが4SD-015より新しい。西端は削平されている。検出された長さは約10mである。幅は80cmほど、検出面からの深さは15cmほどである。覆土はローム粒の含む量で分層可能な黒褐色土が上下2層に堆積していた。

図示した遺物は4点である。第335図1・2は瀬戸・美濃製品である。1は志野丸皿で、内外面とも黄白色の釉が施されている。大窯第4段階の所産と考えられる。2は擂鉢である。内外面とも錫釉が施される。近世の所産と考えられる。3は砥石とみられる。4も砥石で、ほぼ完形である。

4SD-017 (第7・337図、図版110・112・114・118・120)

10E・11D グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構である。南端は、方形を描く溝状遺構4SD-019の東辺に繋がるが、土層断面の観察から、当遺構のほうが4SD-019より新しいとみられる。また、竪穴状遺構4SK-047とも重複するが、新旧関係は明らかでない。検出された長さは約18mである。幅は80cmほどで、検出面からの深さは35cmほどである。覆土はローム粒を少量含む黒褐色土を主体とする土層であった。

図示した遺物は7点である。第337図1は土錘の破片である。長さは不明であるが、復元幅は1.8cm、復元孔径は0.6cmである。胎土は緻密で色調は黄橙色を呈する。2は火打石とみられる。チャートの礫片を利用したもので、折れ面の縁辺が微細に潰れているのが観察される。3は石臼の破片である。4は全体にく字状に曲がり下端部を欠損した鉄釘である。5は小柄小刀の柄の部分で銅製である。中は空洞で、中間部で折れ曲がり、刀身側は折損している。表裏面とも文様はみられない。6は煙管である。接合しない2破片となっており、復元現存長は6.0cmである。7は鉄滓である。

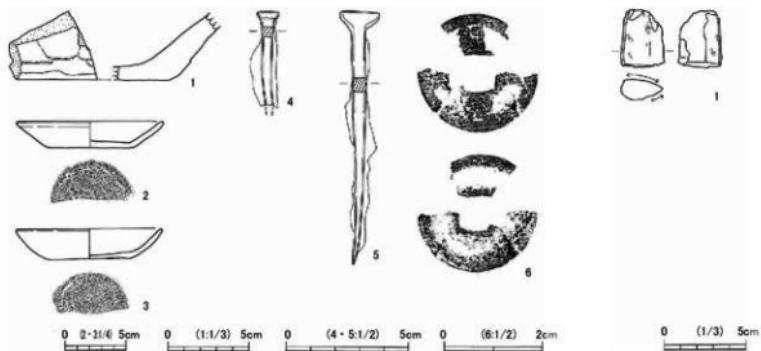
4SD-018 (第7・336図、図版27・94・112)

9D・10D・10E グリッドに所在する。南北方向に延びるが、北端で屈曲して西へ延びる溝状遺構である。南端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは、全体で約18mである。幅は広い部分で130cmほどで、検出面からの深さは65cmほどである。断面の観察から、一度埋まった後、掘り返されたとみられる。覆土は、古い部分はローム粒を含む暗褐色土で、新しい部分はローム粒を少量含む黒褐色土であった。

図示した遺物は2点である。第336図1は常滑片口鉢である。底部の15%程度の破片であるが、貼付高台をもち、底径は14.8cmと復元される。色調は灰色を呈する。摩滅・剥落など器面の劣化が著しい。3型式に比定されるものと考えられる。2は砥石の欠損品である。表面と左側面に使用痕がある。

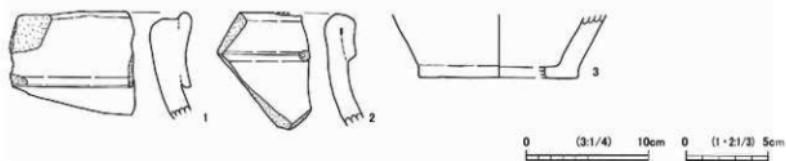
4SD-019 (第8・338図、図版27・28・94・104・119)

11C・11D・12C・12D グリッドに所在する。一辺約18mの正方形を描くように屈曲している溝状遺構で、正方形の西隅部は調査区外にあるとみられる。遺構の幅は90cmほどである。底面はほぼ平坦であるが、深さ10cm~30cmほどのピットが底面にみられる部分もある。検出面からの底面までの深さは50cm前後である。覆土は、ローム粒や茶褐色土粒・塊の含む量によって分層できる暗褐色土層が3~4層堆積していた。東隅部は、南北方向の溝状遺構4SD-017と重複するが、土層断面の観察から当遺構のほうが古い

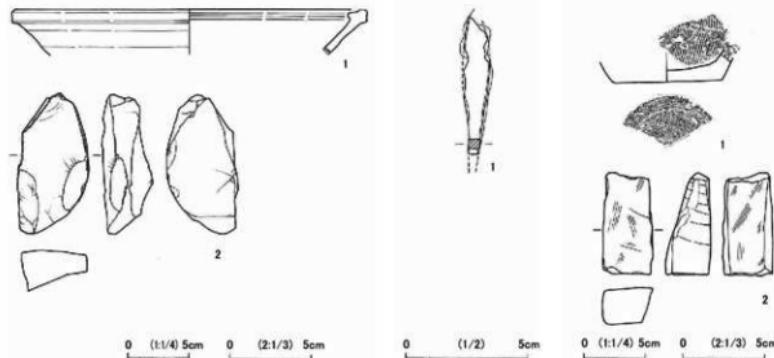


第338図 4SD-019出土遺物

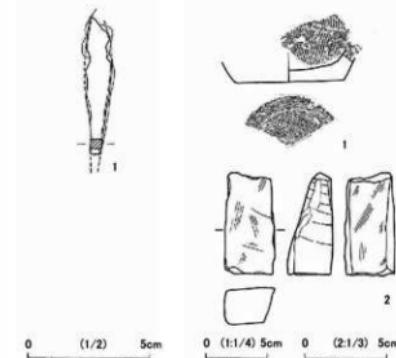
第339図 4SD-020出土遺物



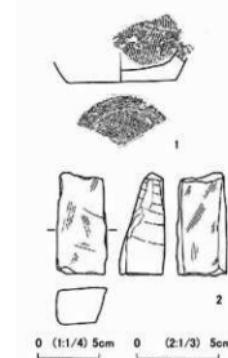
第340図 4SD-024出土遺物



第341図 4SD-026出土遺物



第342図 4SD-034出土遺物



第343図 4SD-035出土遺物

とみられる。北隅部には4SD-021が連結する。このほか、溝状遺構4SD-012や方形窓穴4SK-035、土坑4SK-053等とも一部重複している。また、正方形に囲まれた内部には、溝状遺構や一列に並ぶ土坑群及び地下式坑4SK-039や方形窓穴4SK-038などがあるが、ほぼ全て当遺構と軸方向を同じくしており、関係する可能性もあるが、はっきりしない。

図示した遺物は6点である。第338図1は常滑片口鉢である。2・3はカワラケ杯である。2は全体の40%程度の遺存度である。胎土に赤色スコリアを多く含む。色調は橙色を呈する。器面が摩耗している。3は遺構の西辺に並走する溝状遺構4SD-034から出土した破片と接合したもので、全体の25%程度の遺存度である。胎土に赤色スコリアを多量に含む。色調は淡褐色を呈する。4・5は鉄釘である。4は下端を欠損する。5はほぼ完形とみられ、全長10.4cmである。6は銭貨で、遺存状態が非常に悪く、破損し全体の3分の1が欠損しているが、紹聖元寶である。書体は篆書である。遺存部分には背文は認められない。

4SD-020（第8・339図、図版27・112）

11Dグリッドに所在する。北東-南西方向に直線的に延びる溝状遺構である。正方形に廻る溝状遺構4SD-019に囲まれた内部に位置し、軸方向も一致するが、関連性は明らかでない。検出された長さは約6m、幅は80cmほど、検出面からの深さは10cm前後である。覆土は、ローム粒や褐色土粒等の混入物によって分層できる暗褐色土が3層堆積していた。

図示した遺物は1点である。第339図1は、砾石とみられる。下端は欠損している。

4SD-021（第7図、図版28）

10D・11D・11Eグリッドに所在する。一部、縦続が明らかでない部分もあるが、位置関係や遺構の状況等から調査時に同遺構と判断したもので、東西方向に延び、西端で屈曲して4SD-019に連結する溝状遺構である。東側では南北方向の溝状遺構4SD-022が合流し、東端は調査区外へ続くとみられる。断面の観察から、当遺構のほうが4SD-022よりも新しい。西側では土坑4SK-120と重複するが、新旧関係は明らかではない。検出された長さは、東西方向が推定で約24m、南北方向は約2mである。幅は東側の部分で約50cm、検出面からの深さは同じく約15cmである。

遺物は図示していないが、近世以降陶磁器の小破片が少量出土した。

4SD-022（第8図、図版28）

11Eグリッドに所在する。南北に延びる溝状遺構であるが、南端は4SD-021に合流し、北端は弥生時代の竪穴住居跡と重複するが、詳細は明らかでない。4SD-021との新旧関係は、断面の観察から当遺構のほうが古い。検出された長さは約2m、幅は約80cmである。検出面からの深さは15cm前後である。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SD-023（第8図）

11D・11Eグリッドに所在する。南北方向に延びる溝状遺構で、検出された長さは6.4m、幅は70cm、断面形はU字形を呈し、検出面からの深さは23cmほどである。覆土は上層にローム粒を僅かに含む黒褐色土が、下層にはローム塊をやや多く含む黒褐色土が堆積していた。

遺物は図示していないが、中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。

4SD-024 (第7・340図、図版105)

10D・10E・11Dグリッドに所在する。南北方向に延びるが、北端で西方向に屈曲して延びる溝状遺構である。南北方向の部分は、竪穴状遺構4SK-047・土坑4SK-059と一部重複し、4SD-019と直交する。このうち、土坑4SK-059との新旧関係は、土層断面の観察により当遺構のほうが新しい。西端は確認できなかったが、延長上にある同軸方向の溝状遺構4SD-025に合流する可能性もある。検出された長さは、南北方向の部分が約24m、東西方向の部分が約5mである。幅は50cm、検出面からの深さは10cmほどである。

図示した遺物は3点である。第340図1～3はいずれも常滑製品である。1・2は甕の口縁部破片で、いずれも9型式に比定されるものと考えられる。1の色調は、外面が灰色、内面はにぶい黄褐色を呈している。2の外面には自然釉が厚くかかっている。3は壺又は甕の底部で、20%程度の遺存度である。色調は内外面とも灰色を呈する。

4SD-025 (第7図)

9D・10Dグリッドに所在する。やや屈曲しながら北西一南東方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは約17mである。幅は80cmほど、検出面からの深さは20cmほどである。覆土は、下層に硬化した暗褐色土層が3層認められ、上層は黒褐色土が堆積していた。道路として機能していた遺構と考えられる。

遺物は出土していない。

4SD-026 (第7・341図、図版105・112)

10Dグリッドに所在する。東西方向の溝状遺構である。検出された長さは4.7mである。幅は100cmほど、検出面からの深さは15cmほどである。覆土は、ローム粒と茶褐色土塊の混入程度で分層可能な暗褐色土層が上下2層に堆積していた。

図示した遺物は2点である。第341図1は瀬戸・美濃擂鉢である。口縁部の15%程度の遺存度である。内外面とも鏡釉が施される。口唇部は使用により著しく摩耗している。大窯第4段階の所産と考えられる。2は火打石である。チャートの小礫片を利用したもので、剥離面の縁辺が微細に潰れているのが観察される。

4SD-027 (第8図)

12Dグリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、西端は削平されているが、東端は同方向に延びる溝状遺構4SD-010と重複する。4SD-010との新旧関係は、土層断面の観察から、当遺構のほうが4SD-010より新しい。また、重複部分には土坑4SH-012が存在し、北側には溝状遺構4SD-028が並走する。検出された長さは約19mである。幅は40cm、検出面からの深さは11cmほどである。覆土はローム粒と褐色土塊の量で分層可能な暗褐色土層が上下2層に堆積していた。

遺物は出土していない。

4SD-028（第8図）

12C・12D グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、西端は調査区外へ続く。南側には 4SD-027 が並走する。検出された長さは約 27 m である。幅は 90cmほどで、検出面からの深さは 12cm である。覆土は含まれる褐色土の量で分層可能な暗褐色土層が上下 2 層に堆積していた。

遺物は出土していない。

4SD-034（第8・342図、図版 27・119）

11C グリッドに所在する。正方形を描く溝状遺構 4SD-019 の西辺外側に沿うように延びる南北方向の溝状遺構である。南端は調査区外に続くとみられる。検出された長さは約 17 m、幅は 90cmほどである。検出面からの深さは 30cm 前後である。断面形は U 字形で、覆土はローム粒・塊の量によって分層可能な暗褐色土層が上下 2 層に堆積していた。

図示した遺物は 1 点である。第 342 図 1 は棒状の鉄製品である。錆膨れと剥落がひどく、上部と下部を欠損しているとみられるが、断面形は遺存部上端も四角形とみられる。このほか、中世陶磁器・土器の小破片が少量出土し、そのうちカワラケ片は 4SD-019 から出土した破片と接合したため 4SD-019 として掲載した（第 338 図 3）。

4SD-035（第7・343図、図版 105・112）

10D グリッドに所在する北西—南東方向の溝状遺構で、長さは 4.2 m、幅は 60cm である。南東端が土坑状の落込みとなっており、これが 4SD-021 と重複する土坑 4SK-120 と接する。検出面からの深さは 25cm 前後であるが、土坑状の部分は 49cm である。

図示した遺物は 2 点である。第 343 図 1 は瀬戸・美濃播鉢である。内外面に錆軸が施される。2 は砥石である。上下端は欠損している。

4SD-036（第8図）

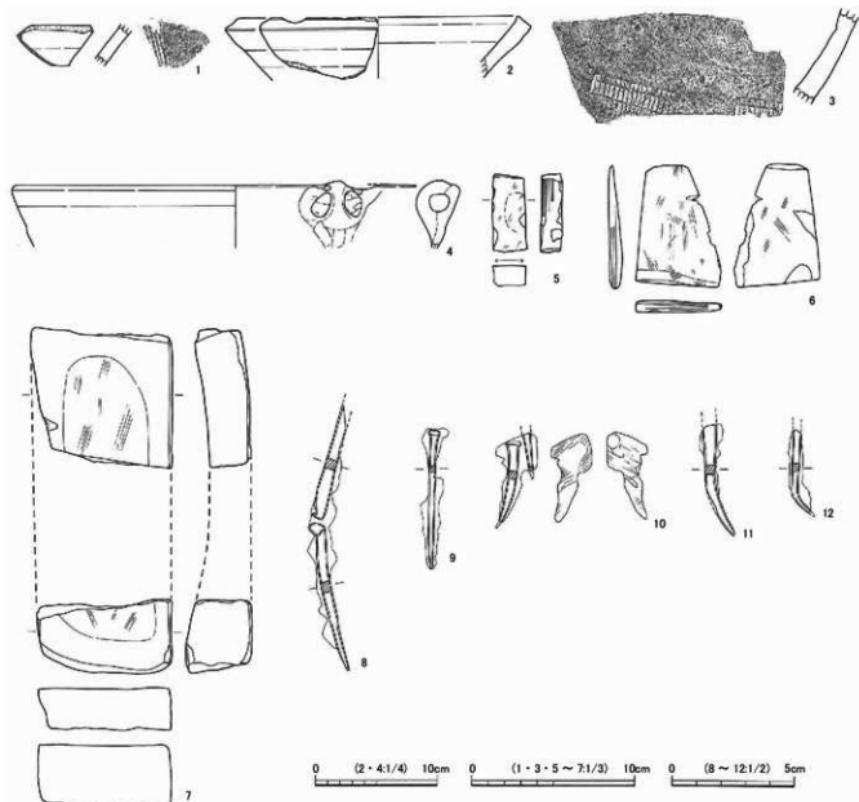
14D グリッドに所在する、南北に延びる溝状遺構である。北方向の延長線上には 6SD-036 があり、繋がっていた可能性がある。土坑 4SK-103 と重複するが、当遺構のほうが新しいとみられる。検出された長さは約 12 m、幅は 100cmほどである。検出面からの深さは 60cm ほどである。断面形は V 字状であるが、底面が幅 10cmほど平坦面となっている。覆土はローム粒や黒色土、茶褐色土塊の混入物の量等によって分層できる暗褐色土が上下 2 層に堆積していた。

遺物は出土していない。

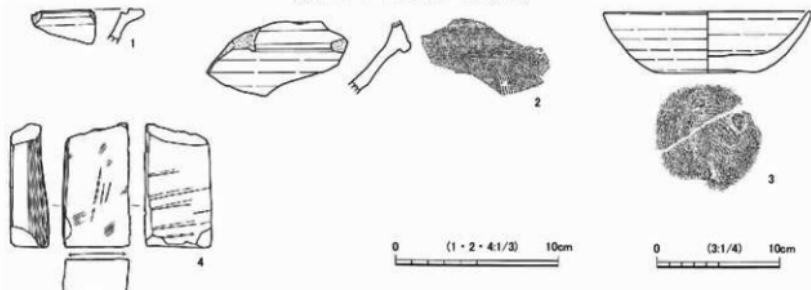
4SD-037（第8・344図、図版 28・105・112・113・119・121）

14C・14D グリッドに所在する。東西方向の溝状遺構で、長さ 7.4 m、幅 150cm 前後である。西側で 4SD-007 と重複するが、新旧関係は明らかでない。断面形は緩い U 字形であるが、底面はやや平坦である。検出面からの深さは 15cm 前後、覆土はローム粒と炭化物粒を少量含む暗褐色土の単層であった。

遺物は中・近世陶磁器・土器が比較的多く出土した。図示した遺物は 12 点である。第 344 図 1 は瀬戸・美濃播鉢である。内外面に錆軸が施される。2・3 は常滑製品である。2 は片口鉢である。外には重ね



第344図 4SD-037出土遺物



第345図 6SD-036出土遺物

焼き痕が認められる。9型式に比定されるものと考えられる。3は甕である。自然釉に覆われた外面には、押印文が認められる。4は内耳土鍋である。胎土に白色針状物質や雲母を少量含む。色調は淡褐色である。5は砥石である。上下端が欠損する。表面と右側面がよく使用されている。6は扁平な形状であるが、砥石とみられる。上部と右側面の大半を欠損しているが、右側面の下端部に僅かに使用面が残されている。7も砥石である。黄褐色を呈し縞目模様が特徴的な石材で、接合しない2破片であるが同一個体と考えられる。厚さと縞目模様から長さ21.1cm、幅8.3cmと復元されるが、上端は欠損している。8～12は鉄釘である。8は2本の釘が頭部同士で接着したもので、1本は完形、もう1本は下端が欠損しているとみられる。9は完形とみられる。10は並行の2本の釘が接着したもので、表裏面に木質が付着している。11は頭部を欠損する。12も頭部を欠損しており、下端は少し屈曲している。

6SD-036（第8・345図、図版94・104・113）

12E・13Eグリッドに所在する。南北方向に延びる溝状遺構で、南方向の延長線上には4SD-036があり、繋がっていた可能性がある。西側には4SD-006・009が、東側には4SD-005が隣接して並走している。方形窓穴6SK-127と重複するが、土層断面の観察から当遺構のほうが古いとみられる。検出された長さは約18mで、幅は最も広い部分で150cmほどである。検出面からの深さは15cm前後である。覆土はしまりのある黒褐色土層と暗褐色土層が堆積しており、道路として機能したものと考えられる。

図示した遺物は4点である。第345図1・2は瀬戸・美濃製品で、1は折縁深皿である。内外面に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。2は擂鉢である。内外面に錆釉が施されている。大窯期の所産と考えられる。3はカワラケ杯である。全体の30%程度の遺存度である。口唇部はほとんど遺存していないが、復元口径は17.0cmほどとなる。器面はやや摩耗している。4は砥石である。上端は欠損している。

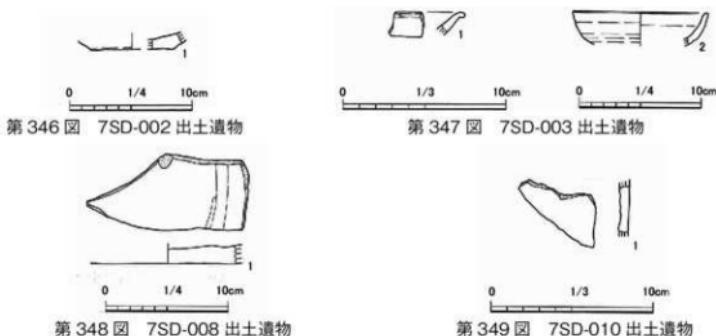
7SD-001（第9・10図、図版28）

24Gグリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、西側は調査区外へ続く。東側はやや南へ屈曲する。電柱等による調査不能部分を挟み、7SD-009と繋がる可能性が高い。検出された長さは約19m、幅は100cmほどである。断面形は緩いU字形であり、検出面からの深さは20cm前後である。覆土はローム塊を含む黒褐色土層が上下2層堆積していた。部分的に重複しながら北側に並行して存在する7SD-002とは、土層断面の観察から当遺構のほうが古く、また屈曲部分付近で交わる南北方向の溝状遺構7SD-006とともに当遺構のほうが古い。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土した。また、24G-51グリッド付近のほぼ底面から、サルボオを主体とし、少量のハマグリやツメタガイを含む小規模な貝ブロックが検出された。

7SD-002（第9・10・346図、図版28・105）

24Gグリッドに所在する。北側の7SD-003と重複しながら東西方向に延びる溝状遺構で、西側は調査区外へ続く。東側も、電柱等による調査不能部分に阻まれるが、調査区外へ続いているものと推測される。検出された長さは約23mである。幅は210cmほどであったと推定される。断面形は緩いU字形で、検出面からの深さは25cmほどである。覆土は、ロームブロックやローム粒を含む暗褐色土が2層堆積しており、



底面は硬化していた。道路として機能したものと考えられる。同じく道路として機能したと考えられる溝状遺構 7SD-003 とは土層断面の観察から当遺構のほうが新しく、7SD-003 を埋めて新たに構築したとみられる。

図示した遺物は 1 点である。第 346 図 1 はカワラケ杯である。器面は摩耗が著しく調整痕がはっきりしないが、ロクロ調整で、底部の切離しは回転糸切りと考えられる。

7SD-003 (第 9・10・347 図、図版 28・105)

24F・24G・24H グリッドに所在する。北側は平成 21 年度調査の 2SD-001 と、南側は 7SD-002 と重複しながら東西方向に延びる溝状遺構で、西側は調査区外へ続くとみられる。東側は、電柱等による調査不能部分に阻まれた先で、南北方向から南西—北東方向へ屈曲して延びる溝状遺構 SD-002 と合流し、更に東の調査区外へ現道に沿って続き、君津都市によって調査・報告された「1 号道路状遺構・8 号溝」へ続くとみられる。SD-002 との合流地点付近では、7SD-010 とも合流する。検出された長さは約 34 m、復元幅は 180cm ほどである。断面形は V 字形であるが、底面は幅 30cm ほどの平坦面となっている。検出面からの深さは 80cm 前後で、覆土はローム粒やロームブロックを含む硬化面をもつ黒褐色土が複数枚堆積していた。当遺構は、土層断面の観察から、同じく硬化面をもつ 7SD-002 に先行する溝状遺構とみられる。なお、合流する SD-002・7SD-010 とは、当遺構のほうが古い。2SD-001 とは、部分的に同じ遺構と考えられるところもあり、新旧関係は明確にはならなかった。

図示した遺物は 2 点である。第 347 図 1 は瀬戸・美濃製品で、志野端反皿である。口縁部は玉縁状になっている。内外面にはやや厚く釉が施されている。2 はカワラケ杯とみられる。これらのほか、SD-002 との交差部分付近の覆土中から、ウマとみられる獸骨と歯がまとまって出土した。近世のものとみられる。

7SD-005 (第 10 図、図版 28)

25H・25I グリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構である。西端はほぼ同軸方向で延びる SD-004 と合流し、東端は水道管等に阻まれ詳細が明らかにならないが、調査区外へ続くとみられる。検出された長さは約 18 m、幅は SD-004 との重複のないところで 95cm である。断面形は緩い U 字形で、検出

面からの深さは 20cm 前後である。覆土は、下層に褐色土粒を含む黒褐色土、上層にロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。SD-004 との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが古い。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

7SD-006（第 9・10 図、図版 28）

24G グリッドに所在する南北方向の溝状遺構であるが、電柱や埋設水道管等の存在により、調査できた部分は僅かである。遺構南端は SD-002 に合流し、北端は調査不能部分に阻まれ明確にならないが、東西方向の溝状遺構 7SD-003 に合流する可能性が高い。また、東西方向に延びる溝状遺構 7SD-001・005 と交差する。検出された長さは約 5m、幅は重複のない部分で 95cm ほどである。断面形は緩い U 字形で、検出面からの深さは 20cm 前後である。覆土は、下層に褐色土粒を含む黒褐色土、上層にロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。SD-004 との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが古い。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

7SD-008（第 9・10・348 図、図版 28・109）

24H グリッドに所在する。東西方向の 7SD-003 と 7SD-009 の間でそれぞれ重複しながら並走する溝状遺構である。西端は SD-002 と合流し、東端は調査区外へと続くとみられる。検出された長さは約 8m、幅は 110cm ほどである。断面形は緩い U 字形で、検出面からの深さは 33cm ほどである。覆土はローム粒・褐色土粒を若干含む黒褐色土の単層であった。ピットが集中的に検出されており、地境溝などとして機能したと考えることができる。新旧関係は、土層断面の観察から、並行して重複する 7SD-009 とは当遺構のほうが古く、合流する SD-002 とは当遺構の方が新しい。

図示した遺物は 1 点である。第 348 図 1 は当遺構と 7SD-009 から出土した破片が接合したもので、常滑片口鉢底部の転用砥石である。外面及び破断面が転用されているとみられる。内面も平滑になっているが、片口鉢としての使用痕と考えられる。

7SD-009（第 9・10 図、図版 28）

24H グリッドに所在する。東西方向の溝強遺構 7SD-008 の南側に重複しながら並走し、南北方向の溝状遺構 7SD-011 が合流する。西端は SD-002 と合流し、その先で電柱等による調査不能区域を挟み 7SD-001 に繋がる可能性が高い。東端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは約 12m で、幅は 130cm ほどである。断面形は U 字形で、検出面からの深さは 48cm ほどである。覆土はロームブロックと炭化物を含む黒褐色土層が 2 層堆積していた。重複する 7SD-008 との新旧関係は、当遺構のほうが新しい。

第 348 図 1 は 7SD-008 出土遺物として掲載したが、当遺構から出土した破片と接合したものである。ほかには混入品と見られる土器の小破片が少量出土したのみである。

7SD-010（第 9・10・349 図、巻頭図版 7、図版 28・105）

24H グリッドに所在する。調査不能部分と複数の溝状遺構に囲まれる中、辛うじて検出された北東一南西方向の溝状遺構である。北東端は 7SD-003 に合流するが、新旧関係は当遺構のほうが新しい。南西端は SD-002 に合流すると考えられる。検出された長さは僅かに 60cm、幅は 40cm である。断面形は緩い U

字形で、検出面からの深さは23cmである。覆土はロームブロック塊を若干含む黒褐色土の単層で、調査所見として新しい様相であったという。青磁片（第349図1）が覆土中から出土したが、遺構は近世以降の所産である可能性が考えられる。

図示した遺物は1点である。第349図1は青磁壺の破片である。外面は無文で、内面はロクロ目が頗著である。内外面とも施釉されオリーブ灰色を呈している。胎土は灰白色である。

7SD-011（第10図、図版28）

24H・25Hグリッドに所在する。南北方向の溝状遺構で、東西方向の溝状遺構7SD-005と7SD-009を繋ぐように存在する。それら遺構との切合い関係は認められないことから、同時に併存したものと考えられる。検出された長さは4.8m、幅は100cmほどである。断面形は緩いU字形で、検出面からの深さは18cmほどである。

遺物は出土していない。

第10節 遺構外出土遺物

ここでは、遺構を伴わずに出土した遺物、或いは時期の異なる遺構から出土し混入品とみられる遺物をまとめて掲載する。

1 陶磁器・土器

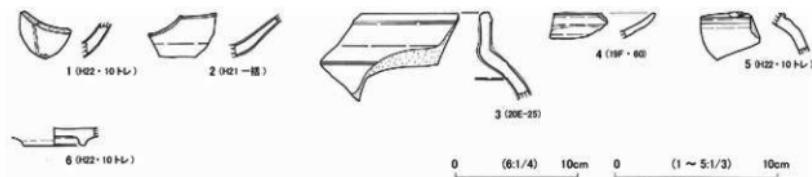
（1）貿易陶磁器（第350図、巻頭図版7、図版106）

第350図1～3は青磁、4・5は白磁、6は青白磁である。

1は青磁蓮弁文碗である。内外面に施釉されるが、釉層は薄い。2は青磁皿とみられる破片である。内外面に釉が施されている。3は青磁の酒会壺とみられる。遺存部分の外面下端に陰刻文と思われるものが少し観察されるが、文様等不明である。釉は内外面に施されるが、口唇部は拭取りされている。時期は中世前半に位置づけられるものと考えられる。表面はややざらついており、二次的に被熱したとみられる。また、図右側の破断面がやや平滑になっており、砥石として転用された可能性がある。

4は白磁の小皿である。内面全面と外面の口縁部に釉が施される。時期は15世紀代と考えられる。5は白磁壺の肩部破片であるが、外面上端部にある付着物が耳部の一部とみられることから、四耳壺であろう。2本の沈線が巡る。

6は青白磁皿である。底部の15%程度の遺存度である。削り出し高台をもつ。内外面に施釉されるが、高台端部は拭取りされている。



第350図 遺構外出土 貿易陶磁器

(2) 濑戸・美濃産陶磁器 (第 351・352 図、図版 106・107)

第 351 図 1～4 は平碗である。1 は口縁部の 25% 程度の破片である。内面全体と外面の上部に灰釉が施されるが、二次的に被熱したとみられ、釉の表面はざらつき、色調も白っぽく変化している。外面下部には重ね焼きのトチ痕跡が観察される。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。2 も内面全体と外面の上部に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。3 は内外面全体に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。4 は内面全体と外面の上部に灰釉が施される。内面下部には重ね焼き痕がみられる。外面下端部には、僅かに削り出し高台の痕跡が認められる。古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。土器 SA-001 の下から出土した。

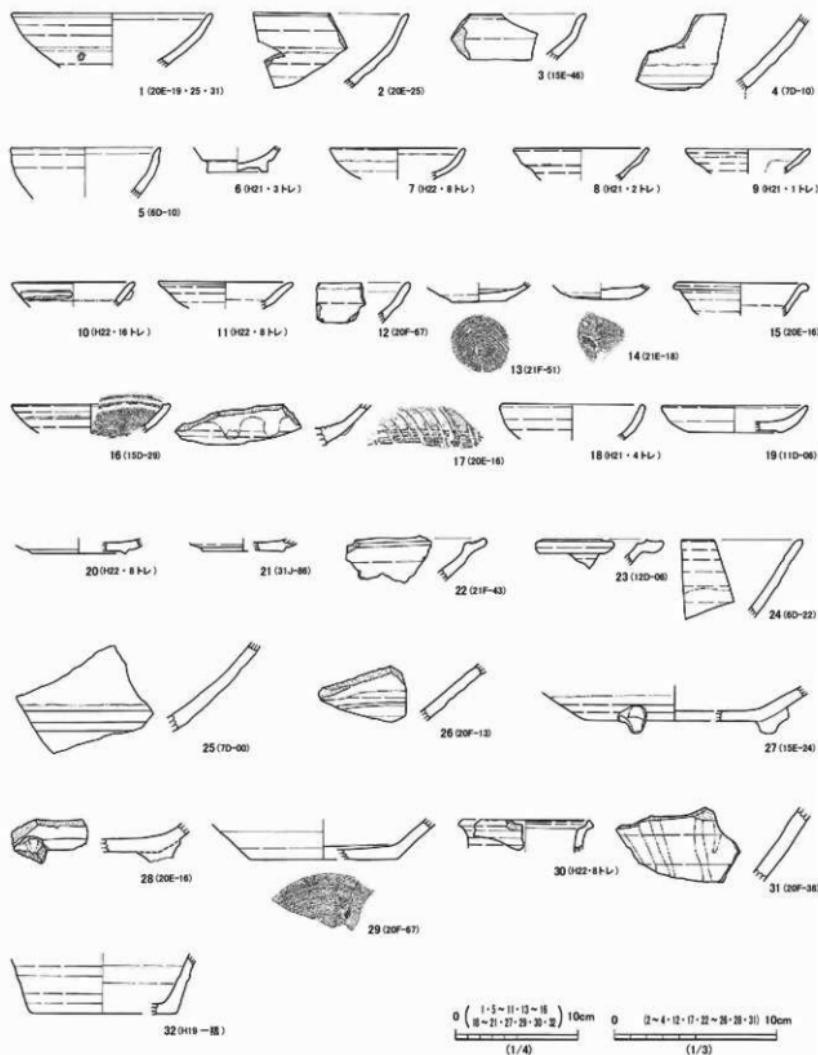
5・6 は天目茶碗である。5 は口縁部の 25% 程度の破片で、弥生時代の竪穴住居覆土から出土したものである。内外面全体に褐灰色～黒色の鉄釉がみられるが、内面は気泡が入り、表面が荒れている。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。6 は内面にのみ黒褐色の鉄釉がみられ、外面は露胎である。高台は削り出し高台である。大窯第 4 段階以降の所産と考えられる。

7～10・12～14 は縁釉小皿である。7 は内外面口縁部に灰釉が施される。露胎部の色調は暗灰色である。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。8 は内面全体と外面口縁部に灰釉が施されるが、内外面の口縁部はツケガケ、内面は全体的にハケ塗りによって施されている。9 は内外面の口縁部に灰釉が施されるが、内面は遺存部下方まで釉が垂れている。被熱したとみられ、釉の色調は灰白色～灰オリーブ色を呈し、表面がざらついている。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。10 は内外面に灰釉が施されるが、外面には、別個体の口縁部の破片が釉で密着している。重ね焼き後、剥離に失敗したものとみられる。古瀬戸後期Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。12 の灰釉は光沢のない灰オリーブ色で、被熱して劣化しているとみられる。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものであろうか。13 は底部のみ全部遺存しており、内外面に点状に少量の灰釉がみられる。古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。14 は底部の 60% 程度の遺存度である。内外面に点状に少量の鉄釉がみられる。古瀬戸後期様式、恐らくⅣ期に位置づけられるものであろう。11 は皿類で、口縁部の 10% 程度の破片である。内外面全体的に灰釉が施されている。

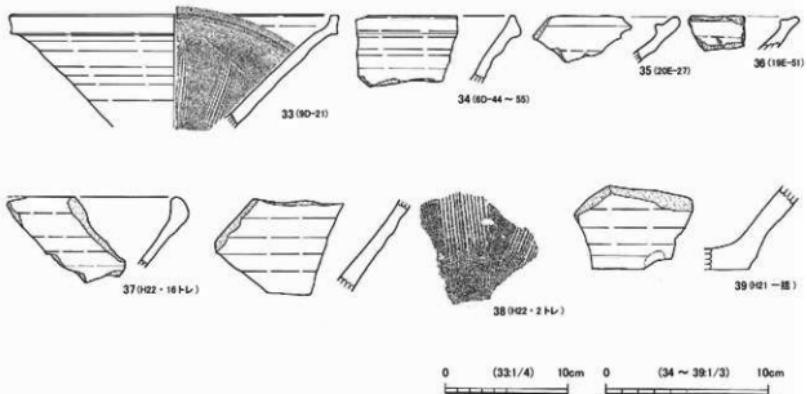
15 は小鉢とみられる。内外面とも灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。

16・17 は鉗皿である。16 は口縁部の 20% 程度の破片で、内面下端部に僅かに鉗目が確認できる。口唇部と外面口縁部に薄く灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。17 は内外面の遺存部上部に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。

18～21 は志野丸皿である。18 は、口縁部の 10% 程度の破片である。釉は、内面は全体的に、外面は口縁部付近に施され、外面下部は露胎である。近世以降の所産と考えられる。19 の高台は削り出し高台である。内外面全面に釉が施されている。大窯第 4 段階の所産と考えられる。20 の高台は削り出し高台である。内外面に釉が施されている。大窯第 4 段階以降の所産と考えられる。21 は弥生時代の竪穴住居覆土から出土したものである。内外面全体に施釉されるが、高台内部は拭取りされている。高台は削り出し高台である。



第351図 遺構外出土 濑戸・美濃産陶磁器（1）



第352図 遺構外出土 瀬戸・美濃産陶磁器(2)

22・23は折縁深皿である。22は内外面全体に灰釉が施されるが、被熱により劣化している。古瀬戸後期様式IV期新段階に位置づけられるものと考えられる。23は内外面に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式III期に位置づけられるものと考えられる。

24は直縁大皿である。内外面のそれぞれ上半部にのみ灰釉が施釉され、内面には帯状の重ね焼き痕が認められる。古瀬戸後期様式III期に位置づけられるものと考えられる。

25～29は盤類で、折縁深皿又は直縁大皿とみられる。25は内外面に灰釉が施されるが、内面全体に薄くハケ塗りした後、内外面上部にツケガケを行っているものとみられる。露胎部の色調は灰黄色である。古瀬戸後期様式III期に位置づけられるものであろうか。土器SA-001の下から出土した。26は内面全体と外面の上部に灰釉が施されるが、内面は拭取りされている。釉は被熱し劣化している。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。27・28はいずれも脚部が1か所残存する破片であるが、28の脚端部は破損している。27は底部の15%程度の破片で、内面全体に灰釉が薄く施される。施釉はハケ塗りによるとみられる。外面は上部に灰釉が施され、ほかは露胎である。古瀬戸後期様式III期に位置づけられるものと考えられる。28は内面部に少量の黄白色の灰釉がみられ、外面は露胎である。古瀬戸後期様式III～IV期に位置づけられるものであろうか。29は内面に灰釉がハケ塗りされている。外面は露胎である。釉の色調は白色である。露胎部分の色調は暗黄褐色を呈している。古瀬戸後期様式II～III期に位置づけられるものであろうか。

30は片口瓶で、内外面全体に灰釉が施される。古瀬戸後期様式IV期に位置づけられるものと考えられる。

31は瓶壺類の胴部下半分とみられる破片である。外面に灰釉が薄く施されるが、縦帶状に細く釉が剥げている部分がある。被熱して剥落したものとみられる。古瀬戸前期様式～後期様式に位置づけられる可能性があるが、恐らく後期であろう。

32は鉢であろうか。底部の10%程度の破片である。外面に鉄釉が施されるが、外面底部には部分的にしか釉がみられず、回転糸切り痕が残されている。

第352図33～39は擂鉢である。33・34はI類に分類されるもので、内外面に錫釉が施される。33

は口縁部の25%程度の破片である。大窯第3段階に比定されるものと考えられる。34は大窯第1段階に比定されるものと考えられる。35は内外面に鋸歯が施される。器面は被熱して劣化している。古瀬戸後期様式IV期新段階に位置づけられるものと考えられる。36も内外面に鉄軸が施され、古瀬戸後期様式IV期新段階に位置づけられるものと考えられる。37も内外面に鋸歯が施される。遺存部分には、擂目はない。古瀬戸後期様式IV期新段階に位置づけられるものと考えられる。38・39も内外面に鋸歯が施される。いずれも内面はかなり使い込まれたとみられ、著しく摩耗し擂目が一部消えている。39は土器SA-001下から出土した。

(3) 常滑産陶器（第353図、図版94・107・108）

第353図1～9は片口鉢である。1は全体の25%程度の遺存度で、片口部分が遺存している。9型式に比定されるものと考えられる。2は10型式に比定されるものと考えられる。3は外面に重ね焼き痕がみられる。8型式に比定されるものと考えられる。4は9型式に比定されるものと考えられる。5は内面に指頭圧痕が残されており、使用痕はみられない。8型式に比定されるものである。6は10型式に比定されるものと考えられる。7は底部の20%程度の破片である。8は底部の15%程度の破片である。内面は使用により摩耗している。外面底部も二次的な使用によるものか、摩耗している。9は底部の10%程度の破片である。色調は外面と内面上部は赤褐色、内面下部は暗灰色を呈している。

10～13は甕である。10は灰色～暗灰色を呈している。6b型式に比定されるものであろうか。11は表面の欠損・摩滅が著しいが、9～10型式に位置づけられるものとみられる。12は内外面に自然軸がみられる。9型式に位置づけられるものであろうか。13は外面にハケ調整痕が僅かに残存する。9型式に比定されるものと考えられる。右側下部の破断面が平滑になっており、砥石として転用されたとみられる。

14は広口壺である。内外面に自然軸がかかっている。15も壺の肩部付近の破片で、恐らく広口壺であろう。肩部に縦に2条の沈線が刻まれている。色調は外面とも暗灰色を呈している。

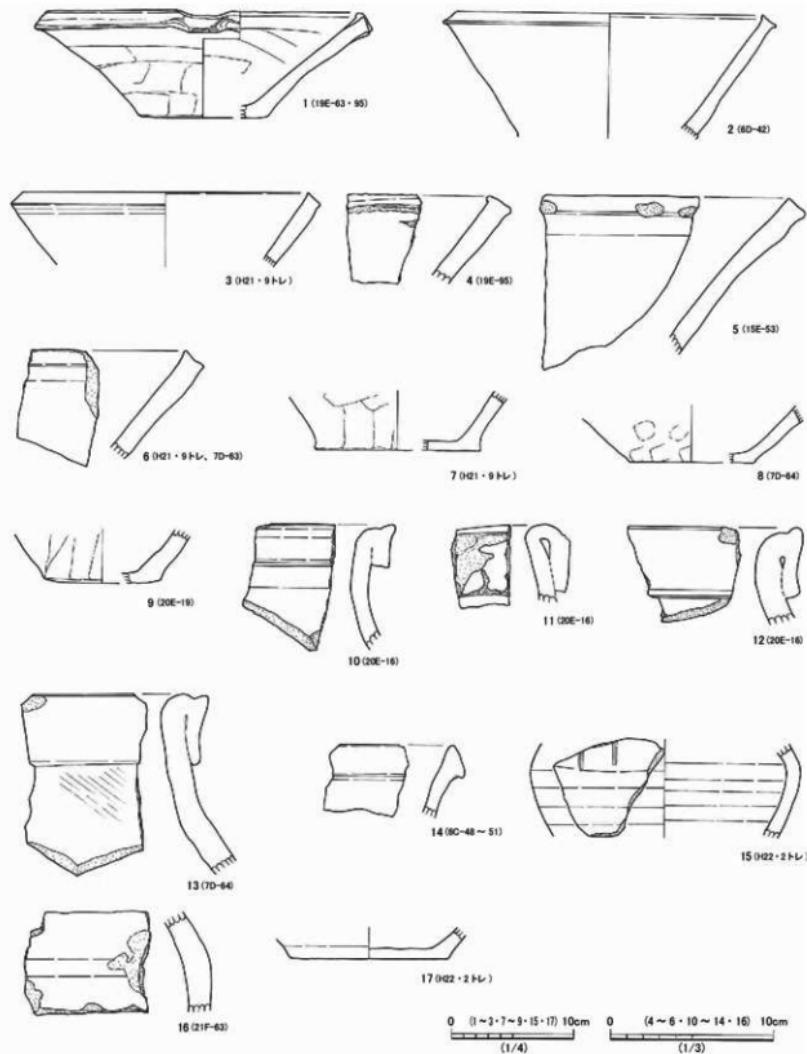
16は甕である。外面全体に自然軸がみられる。17は甕又は壺の底部破片である。底部は未調整である。

(4) 土器（第354図、図版94・108）

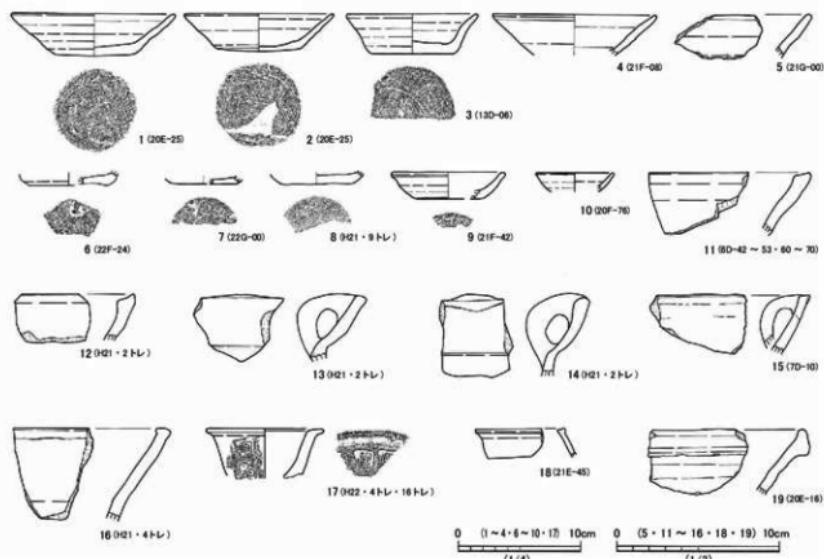
第354図1～8はカワラケ杯である。1は全体の30%程度の遺存度である。復元口径は13.2cmで、底部から口縁部まで直線的に開く形状である。胎土に白色針状物質や雲母を少量含む。2は全体の50%程度の遺存度で、1と同様の胎土、器形である。3は全体の40%程度の遺存度である。胎土には赤色スコリアと少量の白色針状物質・雲母を含む。器面は摩耗している。4は口縁部の30%の破片である。胎土に白色針状物質を少量含む。焼成は比較的良好である。5は胎土に白色針状物質と少量の雲母を含む。6は底部の25%程度の破片である。器面が摩耗している。弥生時代の竪穴住居覆土から出土した。7は底部の40%程度の破片である。8は底部の30%程度の破片である。胎土に雲母が少量含まれる。

9・10はカワラケ小皿である。9は全体の20%程度の破片である。胎土に白色針状物質や雲母を少量含む。10は口縁部の25%程度の破片である。遺存部の口唇部には煤が付着している。

11・12は在地産擂鉢である。いずれも胎土に白色粒子を少量含み、色調は外面とも黒褐色を呈している。破片には擂目はみられない。出土位置は互いに近く、同一個体の可能性もある。

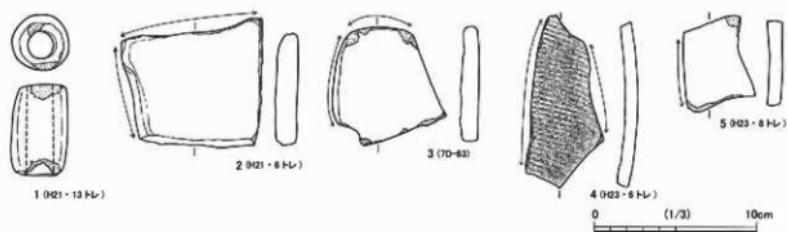


第353図 遺構外出土 常滑産陶磁器



2 土製品（第355図、図版109・110）

第355図1は土錘である。上下端は面取りされている。上下端部が破損しているが、使用によるものかもしれない。胎土に白色粒子を多量に含む。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。2～5は転用砥石である。2は常滑表の破片で、破断面のほか内外面も使用されている。3も常滑表の破片で、破断面及び外面が使用されている。外面には自然釉がみられる。4は須恵器表の転用である。外面には格子目状の叩き目、内面には同心円状の當て具痕がみられる。破断面を使用している。5も須恵器表の転用で、破断面が使用されているが、内面も平滑で使用された可能性がある。



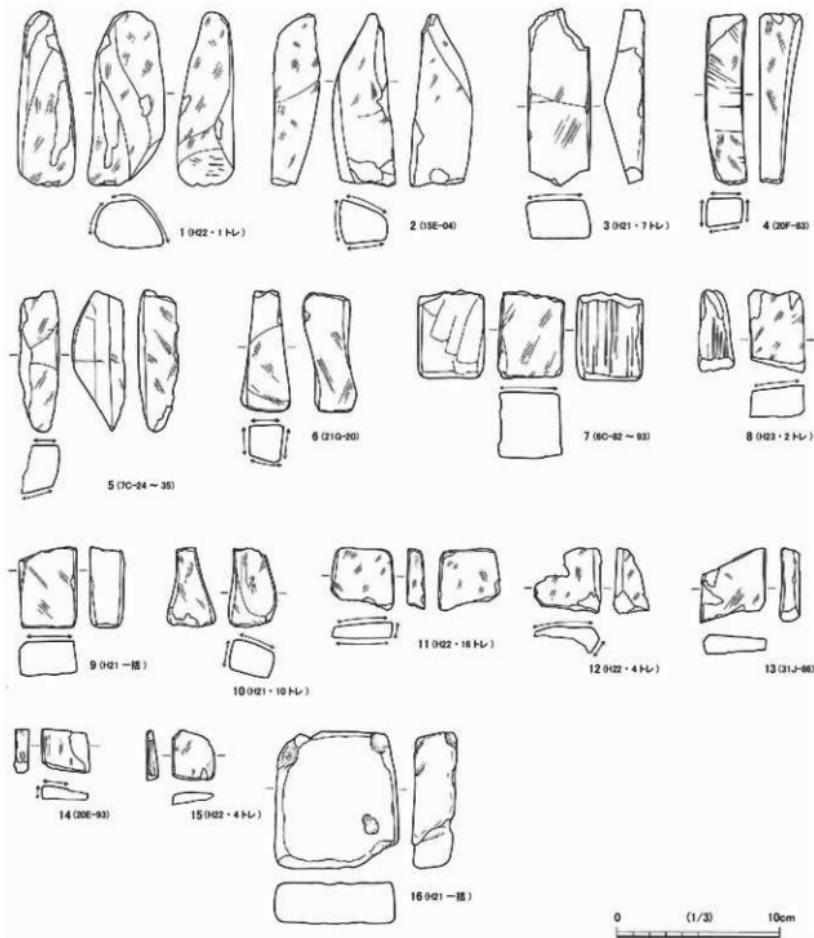
第355図 遺構外出土 土製品

3 石器・石製品（第356図、図版113）

第356図1～15は砥石である。1はほぼ完形である。2・4は下端を欠損する。3・8・11・13・14は上下端を欠損する。5・15は上端と裏面を欠損する。6・7・9・10は上端を欠損する。12は上下端及び裏面を欠損し一部しか遺存していないが、砥石とみられる。16は、砥石であろうか。極めて軟質な輕石製で摩耗が著しく、使用痕や調整痕等観察できない。現状で直方体状を呈しており、あたかも完形のように見えるが、同一個体と思われる接合しない破片が別に存在しており、その厚さ等から、少なくとも表面と裏面以外の面で欠損しているものと考えられる。

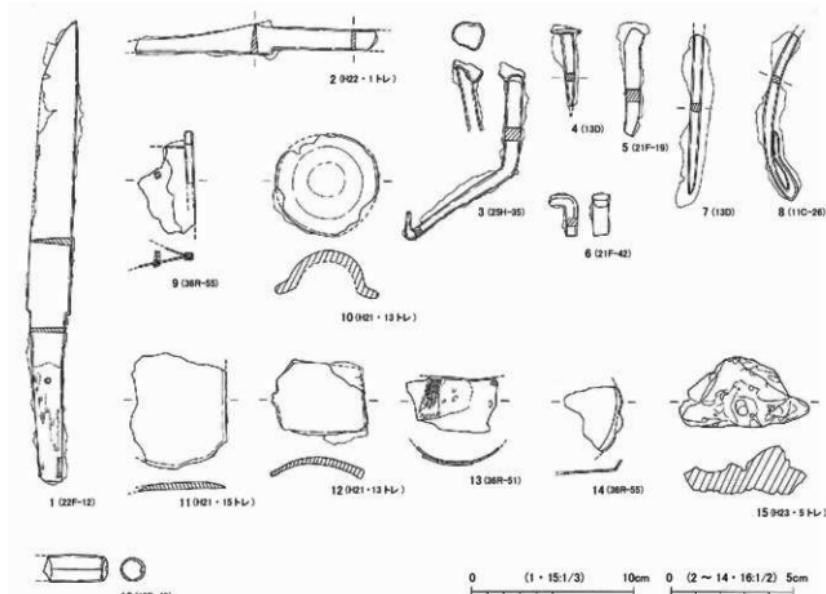
4 金属製品（第357図、図版115・119・120・121）

第357図1は22F-12グリッドから出土した短刀である。ピットが群在する地点から出土したが、特に遺構は検出されなかった。切先を僅かに欠くが、現存長は28.0cm、刀身長17.8cm、茎長10.2cmである。刀身部の最大幅は2.5cm、背厚の最大厚は0.5cmである。柄部分には木質が若干遺存し、目釘穴が1か所認められる。2は小柄小刀である。切先と茎の端部をそれぞれ欠損している。3～8は鉄釘である。3は完形とみられる。中間部と端部が屈曲している。4は下端部を欠損する。5は鉤のためはっきりしないが、頭部と下端部を欠損するようである。6は頭部の破片である。7は鉤膨れが著しいが、頭部を欠損する釘と考えられる。8は、頭部を欠損する。下端部は、X線写真の観察によると、かなり屈曲しているようである。9は、蝶番の破片とみられる。長さ6mmほどの断面四角形の目釘が遺存している。10は、鉤膨れがひどく詳細は明らかでないが、厚さ0.5cmの円形の鉄板の中央部が高く打ち出され、帽子のような形状を呈している。11は板状の鉄製品であるが、断面形は裏面が平坦で表面は縁辺部が薄くなる形状である。12は



第356図 遺構外出土 石器・石製品

板状の鉄製品で、厚さ0.3cmの鉄板が反るように曲げられている。左側面には細い柄が付くような折れ面が認められる。13は厚さ2mmほどの帶状の鉄板にカーブを付け輪状にしたものである。帯の幅は現状で2.3cmであるが、下端は折れており、本体はもっと幅広であったとみられる。表裏面に布目痕のようなものが観察される。14は円形を呈する板状の鉄製品の破片とみられる。板の厚さは0.1cmほどで、フリル状の縁辺部が垂直に立つ。15は楕円形鋤である。16は煙管の破片である。



第357図 遺構外出土 金属製品

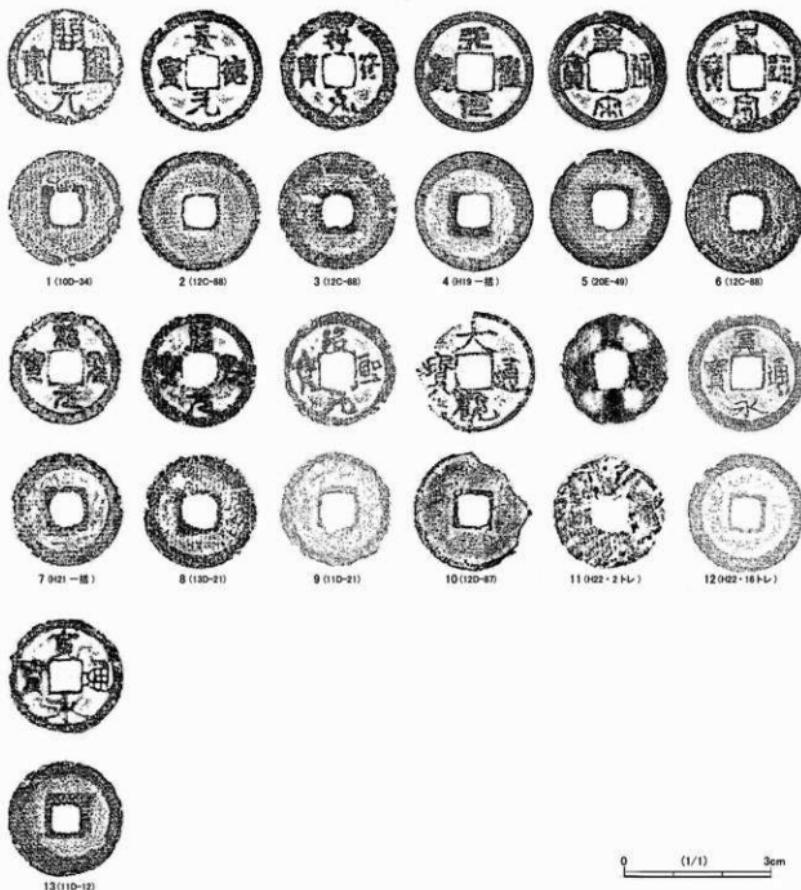
5 銭貨（第358図・図版124）

第358図1は開元通寶である。背面は無文とみられる。2は景德元寶である。3は祥符元寶である。4は天聖元寶である。書体は篆書である。5・6は皇宋元寶である。いずれも書体は篆書である。7～9は紹聖元寶で、書体は7・8が篆書で9が行書である。いずれも背面は無文である。10は大觀通寶である。11は表面を内側にしてV字状に折れ曲がってしまっている。ちょうど上下の文字の部分で谷折り状に折れ曲がっているとみられ、実物からはもちろん、辛うじて探拓した拓影図からも銭文を読み取ることは困難で、銭種は不明である。12・13は寛永通寶である。13は腐食している。

ほかに、図示はしていないが、平成22年度調査10トレンチ及び15D-57・15E-03グリッドから、それぞれ銭貨の小破片が出土している。3点の銭貨はいずれも大破しており、銭種も不明である。

6 火葬人骨（第10図・図版110）

溝状遺構SD-004の南側、25H-11グリッドで出土し、一括で取り上げられた人骨である。周辺にはピットが群在しているが、人骨に伴う遺構や遺物は検出されなかった。人骨は強い火を受けて灰白色化し、ひび割れの著しい骨が100g取り上げられている。小片のみだが、四肢骨と肋骨がみられる。火葬人骨と推定される。時期は明らかにはならないが、周辺の遺構の状況から、中・近世の可能性が高いと考えられる。



第358図 遺構外出土 錢貨

第15表 掘載陶磁器・土器一覽表

件番号	調査年	地番番号(報告)	産地	部種	編年等	法規(cm)			(1) 厚さ・規格等		備考
						口径	幅	高さ	成形	規則	
第 352 圖 35 H20 19E-27	鹿戸・美濃	擂鉢	古後引削	—	—	—	—	—	—	—	○
第 352 圖 36 H20 19E-28	鹿戸・美濃	擂鉢	古後引削	—	—	—	—	—	—	—	○
第 352 圖 37 H20 19E-29	鹿戸・美濃	擂鉢	古後引削	—	—	—	—	—	—	—	○
第 352 圖 38 H20 19E-30	鹿戸・美濃	擂鉢	古後引削	—	—	—	—	—	—	—	○
第 352 圖 39 H21 1頭	鹿戸・美濃	擂鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 1 H20 19E-63-95	鹿戸	擂鉢	口口鉢	9型式	(25.3)	(10.6)	—	—	—	—	—
第 353 圖 2 H21 6D-42	鹿戸	擂鉢	口口鉢	10型式	(27.2)	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 3 H21 6H-レシテ	鹿戸	擂鉢	口口鉢	8型式	(25.2)	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 4 H20 19E-95	鹿戸	擂鉢	口口鉢	9型式	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 5 H22 19E-53	鹿戸	擂鉢	口口鉢	9型式	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 6 H21 7D-63	鹿戸	擂鉢	口口鉢	10型式	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 7 H21 9H-レシテ	鹿戸	擂鉢	口口鉢	—	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 8 H21 9H-42	鹿戸	擂鉢	口口鉢	—	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 9 H21 9H-19	鹿戸	擂鉢	口口鉢	—	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 10 H20 20E-19	鹿戸	擂鉢	擂鉢	9-10型式	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 11 H20 20E-16	鹿戸	擂鉢	擂鉢	9-10型式	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 12 H20 20E-15	鹿戸	擂鉢	擂鉢	9-10型式	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 13 H21 9H-64	鹿戸	擂鉢	擂鉢	9型式	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 14 H21 8D-48-51	鹿戸	擂鉢	広口壺	—	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 15 H22 25-レシテ	鹿戸	擂鉢	擂鉢	—	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 16 H22 25-レシテ	鹿戸	擂鉢	擂鉢	—	—	—	—	—	—	—	○
第 353 圖 17 H22 25-レシテ	鹿戸	擂鉢	擂鉢	—	—	—	—	—	—	—	○
第 354 圖 1 H20 20E-25	在地	カブラケ鉢	—	—	(13.2)	(6.7)	—	—	—	—	—
第 354 圖 2 H20 20E-25	在地	カブラケ鉢	—	—	(12.0)	7.9	—	—	—	—	—
第 354 圖 3 H20 21F-42	在地	カブラケ鉢	—	—	(13.0)	(6.8)	—	—	—	—	—
第 354 圖 4 H20 21F-08	在地	カブラケ鉢	—	—	(13.3)	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 5 H20 21O-09	在地	カブラケ鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 6 H20 22F-24F付近	在地	カブラケ鉢	—	—	(6.4)	(1.1)	—	—	—	—	—
第 354 圖 7 H20 27-09	在地	カブラケ鉢	—	—	(5.3)	(0.7)	—	—	—	—	—
第 354 圖 8 H21 9H-レシテ	在地	カブラケ鉢	—	—	(5.6)	(1.0)	—	—	—	—	—
第 354 圖 9 H20 21F-42	在地	カブラケ鉢	—	—	(9.0)	(5.5)	—	—	—	—	—
第 354 圖 10 H20 21O-09	在地	カブラケ鉢	—	—	(6.2)	—	(5.5)	—	—	—	—
第 354 圖 11 H21 9H-42～53～70	在地	擂鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 12 H21 25-レシテ	在地	擂鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 13 H21 25-レシテ	在地	擂鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 14 H21 10-10	在地	内土鍋	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 15 H21 4H-レシテ	在地	内土鍋	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 16 H21 4H-レシテ	在地	内土鍋	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 17 H22 4H-レシテ-16H-レシテ	在地	土器質土器	—	—	(8.6)	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 18 H20 21E-45	東海系	羽墨	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 19 H20 20E-16	東海系	羽墨	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第 354 圖 20 H20 20E-16	東海系	羽墨	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第 16 表 掲載中・近世土製品一覧表

件番号	調査年	地番番号(報告)	遺物名	寸法			備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	
第 108 圖 1 H22 4SK-055	転用砥石	5.0	7.8	1.2	82.0	(常滑型)	
第 115 圖 34 H22 4SK-092	転用砥石	5.5	5.4	0.5	16.2	(須恵器型)	
第 115 圖 35 H22 4SK-092	土製品	0.9	0.9	0.3	0.2	ミニチュア土器型	
第 117 圖 2 H22 4SK-101	転用砥石	6.5	8.0	1.0	45.4	(漏戸・美濃擂鉢)	
第 117 圖 3 H22 4SK-101	転用砥石	4.0	5.8	1.3	56.6	(常滑片口鉢)	
第 151 圖 1 H22 4SK-009	転用砥石	8.0	12.0	1.2	159.7	(常滑型)	
第 155 圖 2 H22 4SK-016	土製品	2.1	1.9	1.2	6.4	砾石状	
第 168 圖 1 H22 4SK-033	転用砥石	8.4	9.0	1.4	196.4	(常滑型)	
第 168 圖 2 H22 4SK-033	転用砥石	6.5	7.5	1.4	111.4	(常滑片口鉢)	
第 185 圖 1 H22 4SK-098	転用砥石	5.4	7.5	1.0	52.6	(常滑型)	
第 199 圖 1 H22 4SK-002	土縫	6.2	4.0	3.9	99.4	孔径14×1.5cm	
第 295 圖 12 H21 SD-027	転用砥石	7.4	8.4	1.8	122.4	(常滑型)	
第 314 圖 5 H22 SD-004	転用砥石	5.2	5.0	1.4	37.7	(常滑型)	
第 319 圖 10 H20 SD-020	転用砥石	4.0	5.0	1.0	26.8	(常滑型)	
第 324 圖 1 H22 4SD-003	転用砥石	7.5	3.5	1.0	43.4	(常滑型)	
第 326 圖 24 H24 4SD-005	転用砥石	4.4	4.5	0.7	18.8	(須恵器型)	
第 326 圖 25 H24 4SD-005	転用砥石	4.0	5.2	1.5	29.7	(常滑片口鉢)	
第 326 圖 26 H24 4SD-005	転用砥石	9.7	8.0	1.1	98.7	(常滑型)	
第 330 圖 9 H24 4SD-009	転用砥石	7.0	6.4	1.5	80.5	(常滑型)	
第 337 圖 1 H22 4SD-017	土縫	2.6	1.8	0.8	2.3	復元孔径0.6cm	
第 348 圖 1 H27 7SD-008*	転用砥石	4.6	9.5	1.2	55.8	(常滑片口鉢)	
第 355 圖 1 H21 13H-レシテ	土縫	5.5	3.5	2.4	56.7	孔径1.6cm	
第 355 圖 2 H21 6H-レシテ	転用砥石	7.9	8.7	1.5	142.4	(常滑型)	
第 355 圖 3 H21 7D-63	転用砥石	7.2	6.7	1.2	71.5	(常滑型)	
第 355 圖 4 H21 6H-レシテ	転用砥石	10.6	4.4	0.8	48.4	(須恵器型)	
第 355 圖 5 H21 8H-レシテ	転用砥石	5.0	4.0	0.9	31.6	(須恵器型)	

第17表 掘載中・近世石器・石製品一覧表

擲出番号	説明年月	遺構番号(報告時)	遺物名	石材	寸法			備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	
第 100 図	2 H20	SK-073	砥石	凝灰岩	4.7	2.9	0.6	12.6
第 103 図	3 H21	SK-116	砥石	凝灰岩	7.5	2.2	1.9	47.5
第 115 図	36 H22	4SK-092	砥石	凝灰岩	7.2	3.9	1.9	76.1
第 123 図	2 H20	SI-028	砥石	凝灰岩	3.9	4.6	2.0	50.0
第 123 図	3 H20	SI-028	砥石	凝灰岩	7.0	4.0	3.4	99.7
第 141 図	9 H20	SK-061	砥石	凝灰岩	1.7	3.3	0.4	4.0
第 142 図	3 H20	SK-069	砥石	凝灰岩	6.3	2.8	2.8	15.6
第 142 図	4 H20	SK-069	砥石	凝灰岩	6.3	2.8	0.6	18.8
第 146 図	1 H22	4SK-001	砥石	凝灰岩	4.6	5.2	1.1	37.1
第 153 図	1 H22	4SK-011	砥石	凝灰岩	7.9	3.3	2.4	77.1
第 161 図	1 H22	4SK-036	砥石か	砂岩	10.2	3.6	1.8	104.0
第 164 図	1 H22	4SK-035	砥石か	砂岩	2.8	1.8	0.8	4.9
第 168 図	3 H22	4SK-038	台石か	安山岩	5.2	5.3	4.0	115.5
第 172 図	1 H22	4SK-050	砥石	凝灰岩	10.6	3.3	2.6	108.5
第 172 図	2 H22	4SK-050	砥石	凝灰岩	12.6	2.7	2.8	179.7
第 173 図	9 H22	4SK-067	砥石	凝灰岩	9.6	4.2	3.4	114.9
第 185 図	2 H22	4SK-098	砥石	凝灰岩	8.1	3.2	2.1	72.3
第 190 図	1 H22	4SK-110	砥石	凝灰岩	4.9	3.5	2.3	43.3
第 193 図	1 H24	6SK-126	砥石	凝灰岩	6.2	3.4	3.1	69.3
第 193 図	2 H24	6SK-126	砥石	凝灰岩	5.9	3.1	2.5	66.5
第 197 図	2 H24	6SK-133	砥石	粘板岩	14.5	5.1	2.0	282.3
第 268 図	3 H22	4SK-049-	砥石	凝灰岩	7.3	2.5	1.5	45.6
第 279 図	1 H22	4SK-077	砥石	凝灰岩	4.3	4.0	1.5	36.6
第 295 図	13 H21	SD-027	砥石	凝灰岩	10.3	3.2	2.4	113.0
第 295 図	14 H21	SD-027	砥石	凝灰岩	7.1	2.8	2.9	75.8
第 295 図	15 H21	SD-027	砥石	凝灰岩	8.0	3.5	2.6	51.5
第 295 図	16 H21	SD-027	砥石	凝灰岩	4.0	2.8	2.4	42.5
第 295 図	17 H21	SD-027	砥石	凝灰岩	1.0	3.5	3.4	103.3
第 295 図	18 H21	SD-027	五輪塔	安山岩	12.2	6.1	3.5	509.1 水輪か、被熱か
第 296 図	2 H21	SA-001	五輪塔	安山岩	10.3	11.6	3.9	622.0 水輪か
第 309 図	12 H20	SH-024	砥石	凝灰岩	6.8	2.8	0.9	30.0
第 309 図	13 H22	4SH-004	砥石	砂岩	4.8	4.5	1.8	57.1
第 317 図	1 H20	SD-018	砥石	凝灰岩	3.4	2.2	1.7	67.5
第 318 図	9 H20	SD-019	五輪塔	安山岩	14.0	9.0	4.0	440.0 水輪か
第 326 図	27 H24	4SD-005	砥石	安山岩	径(30.8)、器高(11.1)			0.3 959.6
第 326 図	28 H24	4SD-005	板碑	輝斑岩片岩	28.1	18.0	3.0	2038.0
第 327 図	5 H24	4SD-006	砥石	砂岩	6.1	3.7	1.6	37.2
第 334 図	2 H22	4SD-013	火打石	玉髓	3.4	2.8	2.2	22.7
第 334 図	3 H22	4SD-013	砥石	凝灰岩	9.0	2.9	2.7	87.4
第 334 図	4 H22	4SD-013	石臼	安山岩	5.8	3.3	4.3	90.3
第 335 図	3 H22	4SD-016	砥石	凝灰岩	4.1	2.4	2.5	53.4
第 335 図	4 H22	4SD-016	砥石	凝灰岩	13.2	3.2	2.9	163.3
第 336 図	2 H22	4SD-018	砥石	凝灰岩	6.5	3.2	2.5	55.6
第 337 図	2 H22	4SD-017	火打石	チャート	6.0	3.2	5.9	146.7
第 337 図	3 H22	4SD-017	石臼	砂岩	7.2	11.1	5.1	269.8
第 339 図	1 H22	4SD-020	砥石	凝灰岩	3.4	2.6	1.3	14.8
第 341 図	2 H22	4SD-026	火打石	チャート	5.7	2.9	2.1	33.6
第 343 図	2 H22	4SD-035	砥石	凝灰岩	6.2	3.0	2.7	67.5
第 344 図	5 H22	4SD-037	砥石	凝灰岩	4.8	2.0	1.3	23.0
第 344 図	6 H22	4SD-037	砥石か	凝灰岩	7.6	5.2	0.8	30.7
第 344 図	7 H22	4SD-037	砥石	砂岩	(21.1) 8.3			4.0 561.4 接合しない2破片
第 345 図	4 H24	6SD-036	砥石	凝灰岩	7.5	4.0	2.3	119.5
第 356 図	1 H22	1トレンチ	砥石	凝灰岩	10.7	4.3	3.0	180.3
第 356 図	2 H22	15E-04	砥石	凝灰岩	10.6	3.5	2.8	116.5
第 356 図	3 H21	7トレンチ	砥石	凝灰岩	10.8	2.4	3.2	117.9
第 356 図	4 H20	20F-83	砥石	凝灰岩	10.4	2.2	1.7	77.9
第 356 図	5 H21	7C-24~35	砥石	凝灰岩	8.6	2.4	3.1	59.0
第 356 図	6 H20	21G-20	砥石	凝灰岩	6.9	2.9	2.7	65.4
第 356 図	7 H21	6C-82~93	砥石	凝灰岩	5.2	3.9	4.0	141.1
第 356 図	8 H23	2トレンチ	砥石	凝灰岩	5.0	3.3	1.9	50.3
第 356 図	9 H21	H21-1話	砥石	凝灰岩	5.0	3.5	2.0	57.5
第 356 図	10 H21	10トレンチ	砥石	凝灰岩	4.9	2.9	2.9	43.6
第 356 図	11 H22	16トレンチ	砥石	凝灰岩	3.8	3.8	1.0	20.8
第 356 図	12 H22	4トレンチ	砥石	凝灰岩	4.0	4.1	1.2	22.2
第 356 図	13 H19	31J-86付近 (SI-014)	砥石	凝灰岩	4.8	4.0	1.3	25.4
第 356 図	14 H20	20E-93	砥石	凝灰岩	2.4	2.9	0.9	8.0
第 356 図	15 H22	4トレンチ	砥石	凝灰岩	3.0	2.5	0.7	6.3
第 356 図	16 H21	H21-1話	砥石か	砂岩	8.5	7.4	2.5	63.8

第18表 揭載金属製品一覧表

掲番番号	調査 年度	品種番号(規格番号)	遺物名	寸法			備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	
第 108 図	2 H22	4SK-055	防錆車	23.4	4.8	1.5	27.9 輪部鉄製・車部木製
第 109 図	3 H22	4SK-085	釘	2.9	0.7	0.5	2.4
第 109 図	4 H22	4SK-085	板状鉄製品	2.2	1.7	0.3	1.9
第 111 図	1 H22	4SK-087	仏施器	口径4.7	底径2.7	高さ2.8	14.9 銅製
第 115 図	37 H22	4SK-092	鍔前	12.6	2.5	0.9	60.4 社金具・社金具・鍔が鎧着
第 115 図	38 H22	4SK-092	短刀	19.6	2.1	0.2	49.7
第 115 図	39 H22	4SK-092	釘	5.0	0.5	0.4	4.4
第 115 図	40 H22	4SK-092	釘	5.1	2.2	0.5	4.9
第 115 図	41 H22	4SK-092	板状鉄製品	12.5	1.6	0.1	19.4
第 131 図	1 H21	2SI-017	板状鉄製品	3.1	1.6	0.1	2.8
第 131 図	2 H21	2SI-017	棒状鉄製品	4.9	0.6	0.5	3.3
第 139 図	4 H20	SK-053	釘	3.6	0.6	0.5	6.1
第 139 図	5 H20	SK-053	釘	3.1	0.4	0.4	1.8
第 139 図	6 H20	SK-053	板状鉄製品	3.4	3.1	0.3	15.2
第 146 図	2 H22	4SK-001	釘	4.3	0.5	0.3	2.2
第 149 図	3 H22	4SK-005	板状鉄製品	3.2	1.9	0.2	3.3
第 152 図	2 H22	4SK-010	釘	10.8	0.8	0.6	17.6
第 164 図	2 H22	4SK-035	腕形彫	7.2	9.4	3.5	357.4
第 171 図	10 H22	4SK-047	釘	7.7	3.3	1.0	24.7
第 171 図	11 H22	4SK-047	鍔	14.2	1.2	0.7	17.0
第 171 図	12 H22	4SK-047	煙管	5.1	1.0	1.0	7.0 銅製
第 174 図	10 H22	4SK-069	短刀	17.1	2.5	0.4	53.8
第 174 図	11 H22	4SK-069	小柄小刀	14.1	1.4	0.6	37.4 柄銅製
第 174 図	12 H22	4SK-070	釘	5.9	0.5	0.5	6.6
第 174 図	13 H22	4SK-070	ヘラ状鉄製品	3.0	1.0	0.2	2.1
第 174 図	14 H22	4SK-070	煙管	7.5	0.9	1.4	4.3 銅製、接合しない2破片
第 182 図	4 H22	4SK-090	釘	3.5	0.6	0.4	2.6
第 185 図	3 H22	4SK-098	釘	8.8	1.3	0.7	11.7
第 185 図	4 H22	4SK-098	釘	6.9	4.9	0.5	14.2
第 185 図	5 H22	4SK-098	釘	3.7	1.0	0.4	2.0
第 185 図	6 H22	4SK-098	釘	6.7	0.6	0.3	4.2
第 185 図	7 H22	4SK-098	釘	7.5	0.4	0.3	4.0
第 185 図	8 H22	4SK-098	把手	4.9	0.4	0.3	1.8
第 185 図	9 H22	4SK-098	把手	3.8	0.5	0.4	2.6
第 231 図	1 H20	SK-076	釘	3.0	1.2	1.0	7.5
第 239 図	1 H21	SK-100	毛抜き	8.0	1.8	0.1	11.1 接合しない破片
第 266 図	4 H22	4SK-049	環状鉄製品	3.3	3.3	0.5	16.7 銅製
第 295 図	19 H21	SD-027	鍔	6.5	5.5	0.2	54.7 鋼鉄製
第 296 図	3 H21	SA-001	不明銅製品	1.8	1.8	0.5	1.4 銅製
第 309 図	14 H22	4SH-010	釘	6.7	0.8	0.5	11.7
第 327 図	6 H22	4SD-006	小柄小刀	6.3	1.5	0.4	9.9
第 328 図	1 H22	4SD-007	釘	3.7	0.6	0.5	6.9
第 328 図	2 H22	4SD-007	煙管	5.1	1.6	1.4	5.2 銅製
第 337 国	4 H22	4SD-017	釘	4.3	0.8	0.4	7.5
第 337 国	5 H22	4SD-017	小柄小刀	7.6	1.4	0.5	12.3 柄銅製、接合しない2破片あり
第 337 国	6 H22	4SD-017	煙管	6.0	1.1	1.6	5.7 柄銅製、接合しない2破片
第 337 国	7 H22	4SD-017	鍔	4.8	6.3	1.5	39.7
第 338 国	4 H22	4SD-019	釘	3.7	0.9	0.5	5.6
第 338 国	5 H22	4SD-019	釘	10.4	1.6	0.5	12.2
第 342 国	1 H22	4SD-034	棒状鉄製品	5.6	1.0	0.5	7.6
第 344 国	8 H22	4SD-037	釘	6.2	0.6	0.4	10.3 2本隕着
第 344 国	9 H22	4SD-037	釘	5.6	0.4	0.3	4.2
第 344 国	10 H22	4SD-037	釘	3.4	0.6	0.4	4.0 2本隕着
第 344 国	11 H22	4SD-037	釘	4.4	0.6	0.4	2.8
第 344 国	12 H22	4SD-037	釘	3.5	0.5	0.3	2.3
第 357 国	1 H20	22F-12	短刀	28.0	2.5	0.5	85.7
第 357 国	2 H22	11レシナ	小柄小刀	9.8	1.2	0.4	9.1
第 357 国	3 H19	25H-35	釘	7.5	4.5	0.6	14.0
第 357 国	4 H22	13D	釘	3.1	1.2	0.4	3.4
第 357 国	5 H20	21F-19	釘	4.4	0.6	0.5	7.9
第 357 国	6 H20	21F-42	釘	1.7	0.4	0.7	2.3
第 357 国	7 H22	13D	釘	6.5	0.5	0.4	12.1
第 357 国	8 H22	11C-26付 近(4SD-033)	釘	6.7	1.0	0.4	7.4
第 357 国	9 H23	36R-55	蝶番	4.1	2.2	0.8	4.9
第 357 国	10 H21	13レシナ	円形鉄製品	4.0	4.0	1.9	21.1
第 357 国	11 H21	15レシナ	板状鉄製品	4.0	4.4	0.3	30.2
第 357 国	12 H21	13レシナ	板状鉄製品	2.9	3.8	0.8	16.4
第 357 国	13 H23	36R-51付 近(5SI-004)	板状鉄製品	2.3	3.7	0.7	4.4
第 357 国	14 H23	36R-55	板状鉄製品	2.6	2.6	0.4	2.3
第 357 国	15 H23	5レシナ	腕形彫	8.0	4.3	3.0	57.7
第 357 国	16 H22	10D-49	煙管	2.6	1.1	2.7	銅製

第 19 表 出土錢貨一覽表 (4SK-014 以外)

第20表 遺構別出土陶磁器・土器破片数（単位：個）

遺構名	貢島周辺						戸戸・美濃						東濃						土器						備考	
	青磁	白磁	青白磁	淡付 磁	碗	皿	盤	鉢	アラカルト	器鉢	その他 器口鉢	壺・瓶	その他 器	その他の セラマ	窓・口	その他の セラマ										
21 SA-001															1	1										
22 45B-001																										
19 SD-001															1											
19 SD-002															2											
19 SD-003	1														2	2										
19 SD-004															1	3	1									
19 SD-005															1											
20 SD-011															1											
20 SD-012															2											
20 SD-013																										
20 SD-015																										
20 SD-016																										
20 SD-018																										
20 SD-019															1											
20 SD-020															1	2	1									
20 SD-021															1											
20 SD-022															2	2										
20 SD-026															2											
21 SD-027	1														1	9	2									
17 SG-001															1											
22 AG-002															1											
22 AG-003															1	1										
22 AG-005	1	1													1	4	5	55	5	1	9	39	39	39	39	
22 AG-006															1	1										
22 AG-007															6											
22 AG-008															3		2									
22 AG-009	1	1													1											
22 AG-011															5	19	1	9	1	5	5	11	11	11	11	
22 AG-013															1	9	1	3								
22 AG-014															2											
22 AG-015															1											
22 AG-016															1											
22 AG-017															4	14	6	12	3	2	9	11	11	11	11	
22 AG-018															1	1	6	1	1	24	24	24	24	24	24	
22 AG-019															1	3		7	24							
22 AG-021																										
22 AG-023																										
22 AG-024																										
22 AG-025																										
22 AG-031																										
22 AG-032																										
22 AG-034																										
22 AG-035																										
22 AG-037																										
24 65G-006	1														1	2	7	20	20	44	44	44	44	44	44	44
27 TS-003															2			2	1							
27 TS-003															1			1	4							
27 TS-006															3											
27 TS-010	1																									
22 45E-001																										
22 45E-002																										
24 65E-005																										
20 SH-001																										
20 SH-009																										
20 SH-011																										
20 SH-012																										
20 SH-013																										
20 SH-017																										
20 SH-019																										
20 SH-021																										
20 SH-022																										
20 SH-023																										
20 SH-034																										
20 SH-061																										
22 45H-005																										
22 45H-013																										
22 45H-015																										
22 45H-017																										
22 45H-018															1											
19 SJ-001																										
19 SJ-003																										
19 SJ-007																										
19 SJ-014																										
20 SJ-018																										
20 SJ-020																										
20 SJ-024																										
20 SJ-025																										
20 SJ-028																										
20 SJ-029																										
20 SJ-032																										
17 SJ-044															1											
23 SS-001																										
20 SK-011																										
20 SK-012																										
20 SK-023																										
20 SK-036																										
20 SK-044																										
20 SK-045																										
20 SK-050															2		1									
20 SK-052															2		1									

品目	品種名	貿易面積			瀬戸内海面積			東洋面積			土砂面積			備考
		青緑	白緑	黄緑	青苔	黄苔	紫苔	紅藻	緑藻	その他の藻類	赤・黒	青・黄	緑・白	
20	SK-054										1			
20	SK-059										1			
20	SK-060										2			
20	SK-061	1			1						10	2	2	
20	SK-065				1						1			
20	SK-067		2	1	1			2		1	9			その他1は須恵器転用砾石
20	SK-069		2	1	2			1	2		1			その他1は知多半島系統小石(鉄錆)
20	SK-070													常滑要うら1は転用砾石
20	SK-072				1						2			
20	SK-073										1			
20	SK-077										1			
20	SK-078													
20	SK-082										4			
20	SK-089													3
20	SK-090													
21	SK-093													
21	SK-095													
21	SK-100													
21	SK-112													1
21	SK-116													2
21	SK-119													その他1は在地産礫
22	4SK-002										1	1	1	
22	4SK-004										1			
22	4SK-005		1	1							1	1		
22	4SK-006	1	1	1				1	2	13	1	1	3	青緑その他の1は鉛
22	4SK-008										2			
22	4SK-009										1	2		常滑要うら1は転用砾石
22	4SK-010										2			その他1は瓦質錆
22	4SK-011										1	1		
22	4SK-012										3	2	1	
22	4SK-013										1	1	2	瀬戸内海の1は山並礫
22	4SK-017										1			
22	4SK-024	1									1			
22	4SK-025										3			青緑その他の1は魚文錆
22	4SK-026										1			
22	4SK-027										6			
22	4SK-028										1	1		
22	4SK-029										1	2		
22	4SK-030										1			
22	4SK-031										1	1	2	その他1は在地産鉱
22	4SK-032										1	7		
22	4SK-035										3			
22	4SK-036										1			
22	4SK-037										3	3		
22	4SK-038		1	1	1	1	1	1	6	6	1			
22	4SK-039										1			常滑要うら1は転用砾石
22	4SK-042										3	1		その他1は瓦質土器
22	4SK-043										1			その他1は在地産鉱
22	4SK-044											2		
22	4SK-045										1			その他1は東海系
22	4SK-047										5	1		その他1は瀬戸内海
22	4SK-049										2	1		その他1は瀬戸内海
22	4SK-050										1			
22	4SK-053	1									1	1	2	その他1は須恵器転用砾石
22	4SK-054										1			1
22	4SK-055										2	1		常滑要うら1は転用砾石
22	4SK-056										3			
22	4SK-058										1			
22	4SK-060											2		
22	4SK-084										1			
22	4SK-085										4			
22	4SK-086										1			
22	4SK-087											2		
22	4SK-088										1			
22	4SK-089	1	1	1	2	1	1	1	1	1	7			
22	4SK-070										4			
22	4SK-071										1			その他1は在地産錆
22	4SK-074										1			その他1は在地産錆
22	4SK-075										2			
22	4SK-076										1			
22	4SK-077										1			
22	4SK-079													
22	4SK-084										1	2		その他1は在地産錆
22	4SK-085	1									4	2	2	その他1は在地産錆
22	4SK-089										1			
22	4SK-090		1	1	1	4	2	2	1	61	1	2		青緑その他の1は錆、その他1は須恵器転用砾石
22	4SK-092	1	1	1	1	4	2	2	1	61	1	2		
22	4SK-098										1			4
22	4SK-099										1			4
22	4SK-101										2			6
22	4SK-103										4			
22	4SK-106										7	4	13	
22	4SK-110										1			
22	4SK-113										3			
22	4SK-117										2			
22	4SK-120										1			
22	4SK-126										2	1	2	
24	6SK-128										3			
24	6SK-129										1			
24	6SK-130										3			
24	6SK-131										1			
24	6SK-133										1			その他1は瓦質土器

年月	造形名	貢献度			周戸・美濃			東濃			土岐			備考			
		青磁	白磁	緑	碗	皿	盤	鉢	スカラベ	器物	その他	内口鉢	壺・壺	その他	セラフ	圓・盤	
19 SS-001																	1 方和周溝高(先生、26H-19グリッド付近)
21 SS-006																	1 方和周溝高(先生、7G-03グリッド付近)
21 1レシテ					1												1
21 2レシテ					1												2 その他!!は在地産標誌、近世うらわは軽用磁石
21 3レシテ																	2
21 4レシテ																	その他!!は在地産標誌、近世うらわは軽用磁石
21 5レシテ																	1 常滑窯うらわは軽用磁石
21 6レシテ																	常滑窯!!は軽用磁石
21 7レシテ						1											1
21 8レシテ																	2
21 9レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10レシテ																	常滑窯!!は軽用磁石
21 11レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 1レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 2レシテ																	2
22 3レシテ																	6
22 4レシテ																	
22 5レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 6レシテ																	2
22 7レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 8レシテ																	2
22 10レシテ	2		1														1 常滑窯!!は軽用磁石
22 12レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 13レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 14レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 15レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 16レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 17レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 18レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 1レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 2レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 3レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 4レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 5レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 6レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 7レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 8レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 9レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 10レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 11レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
23 12レシテ																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 9G-29																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 9G-48~51																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 9G-82~93																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 9G-94~95																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10G-28																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10G-43~53																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10G-44~55																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-61																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-82~93																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-94~15																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-20~32																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-23~39																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-24~36																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-45																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-53~73																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-66																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-67																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 10D-68																	1 常滑窯!!は軽用磁石
21 11D-06																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 11D																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 12D					1	1											1 常滑窯!!は軽用磁石
22 12D-06					1												1 常滑窯!!は軽用磁石
22 13D																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 13D-06~26																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 14D																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 15D-29																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 15D-39																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 15E-53																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 15E-46																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 15E-23																	1 常滑窯!!は軽用磁石
22 15E-14																	1 常滑窯!!は軽用磁石
20 19E-51																	1 常滑窯!!は軽用磁石
20 19E-62																	1 常滑窯!!は軽用磁石
20 19E-67																	1 常滑窯!!は軽用磁石
20 19E-95																	1 常滑窯!!は軽用磁石
20 19F-60																	1 常滑窯!!は軽用磁石
20 19F-69																	1 常滑窯!!は軽用磁石
20 19F-18									2	1	6	2	1				1 常滑窯!!は美濃片口割・瓦質火鉢、第1条その他川2小鉢・影庭
20 19E-17																	1 常滑窯!!は美濃片口割・瓦質火鉢、第1条その他川2小鉢・影庭
20 19E-18																	1 常滑窯!!は美濃片口割・瓦質火鉢、第1条その他川2小鉢・影庭
20 19E-19																	1 常滑窯!!は美濃片口割・瓦質火鉢、第1条その他川2小鉢・影庭
20 19E-25	1				2												1 常滑窯!!は美濃片口割・瓦質火鉢、第1条その他川2小鉢・影庭
20 19E-26																	1 常滑窯!!は美濃片口割・瓦質火鉢、第1条その他川2小鉢・影庭
20 19E-27																	1 常滑窯!!は美濃片口割・瓦質火鉢、第1条その他川2小鉢・影庭
20 19E-35																	1 常滑窯!!は美濃片口割・瓦質火鉢、第1条その他川2小鉢・影庭

年月	道種名	貿易面積			瀬戸・英虞						支那			土砂			備考			
		青緑	白緑	追付	廣	島	蟹	蛭	その他	内口林	島・蟹	その他	カツラ	島・蟹	その他					
		磯	その他	藻	青山林	藻														
20 20E-37											1				1					
20 20E-38											1									
20 20E-39											1				1					
20 20E-47											1									
20 20E-65					1									2						
20 20E-79														1	1					
20 20E-77											1									
20 20E-97					1									1	2					
20 20F-10											1									
20 20F-11											1									
20 20F-12											1									
20 20F-13					1									1						
20 20F-23														1						
20 20F-26														3	1					
20 20F-28																				
20 20F-35															1					
20 20F-39					1															
20 20F-54														1						
20 20F-57														1						
20 20F-67				1	1															
20 20F-76														2	1					
20 21E-18					1									2	2	3				
20 21E-45														1	1					
20 21E-57															1					
20 21F-08															6					
20 21F-09															6					
20 21F-10														1						
20 21F-18	1													1						
20 21F-42					1									1	3	1				
20 21F-43						1								2						
20 21F-51						1														
20 21F-53														2						
20 21F-62														1						
20 21F-63														1						
20 21F-69														1						
20 21F-72														1						
20 21G-00														1						
20 22D-40														1						
20 22D-00					1									1	1					
19 25H-35														1						
19 27J-82																	その他1は山系磯か			
23 36R-55						1	1													
23 36S															1					
11 H19-18					1	1	1	1									瀬戸・英虞その他1は駄駄林			
11 H22-18	1								1						2	1				
11 H22-18					1	1			1					3	3	3				
11	16	8	2	1	3	2	38	65	51	10	10	44	8	77	425	0	38	301	57	808

※複数作業後の個数をカウントした。

※別道種で複合した個体は代表道種でカウントした。

※非開拓地物を含む。

第3章 まとめ

文脇遺跡のこれまでの調査では、中・近世についての成果は限定的なものであった。今回、幅約40m×長さ約950mという狭長な範囲の調査ではあったが、ある程度まとまった成果が得られたと言えよう。これまでの成果とあわせることによって、中・近世における文脇遺跡について考えてみたい。

第1節 中・近世の遺構について

今回報告の中・近世遺構は、地下式坑20基、方形竪穴・竪穴状遺構116基、井戸3基、土坑127基、塙1条、土堤1条、掘立柱建物跡9棟、柵列3条、溝状遺構71条、ピット群などである（第359・360図）。これらについて、遺構ごとにまとめてみる。

まず地下式坑についてであるが、調査区内で検出されたものの分布は22Fグリッド以北に限られ、中でも12C・12D・13C・13Dグリッド付近に集中する傾向が窺える。地下式坑についてはあまり重複関係はみられないが、方形竪穴や土坑、溝状遺構と重複する場合、いずれも地下式坑のほうが古いようである。なお、地下式坑同士での重複はみられない。

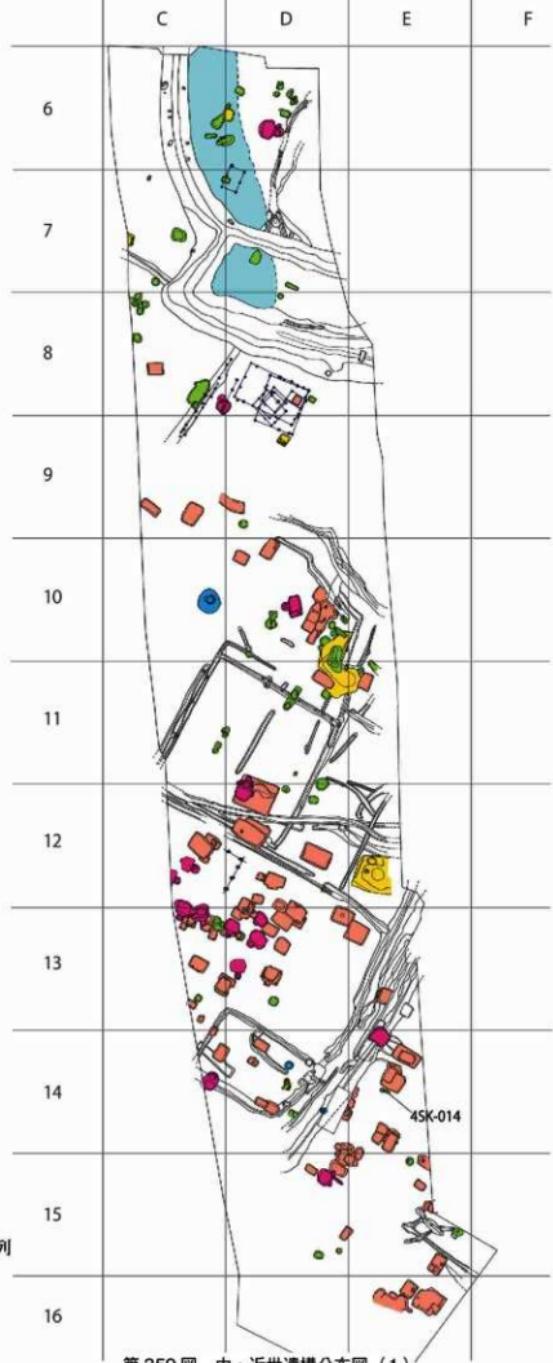
地下式坑の基本的な構造は、地下室に通じる竪坑と地下室とからなる。主に千葉県内の地下式坑について竪坑と地下室の関係からA類～H類に分類し、編年的見通しを立てた築瀬裕一氏の研究があるが¹⁾、その分類案によれば、文脇遺跡で今回検出された地下式坑は、竪坑が地下室に接して設けられるB類と、竪坑が地下室壁面に重なってくるC類が多いと言えそうである。

地下式坑から出土した遺物はあまり多くはなく、時期についてははっきりしない。しかしながら、例えばSK-116の床面からは、古瀬戸後期様式IV期新段階併行とみられる遺存度の高い在地産播鉢が出土している。また、4SK-039の床面から、古瀬戸後期様式IV期に位置づけられるほぼ完形の瀬戸・美濃縁釉小皿が出土しており、これらが年代を推定する手がかりとなり得るだろう。中世の陶磁器・土器に混じって近世以降の遺物が覆土から出土している遺構もあるが、地下式坑の年代は、概ね15世紀後半頃を主体とすると言えるのではないだろうか。

地下式坑の用途・機能についても、従来、墓など葬送関連施設とみる見解と、地下倉庫など貯蔵施設とみる見解などがあるようだが、一概にははっきりとは言えない状況である。

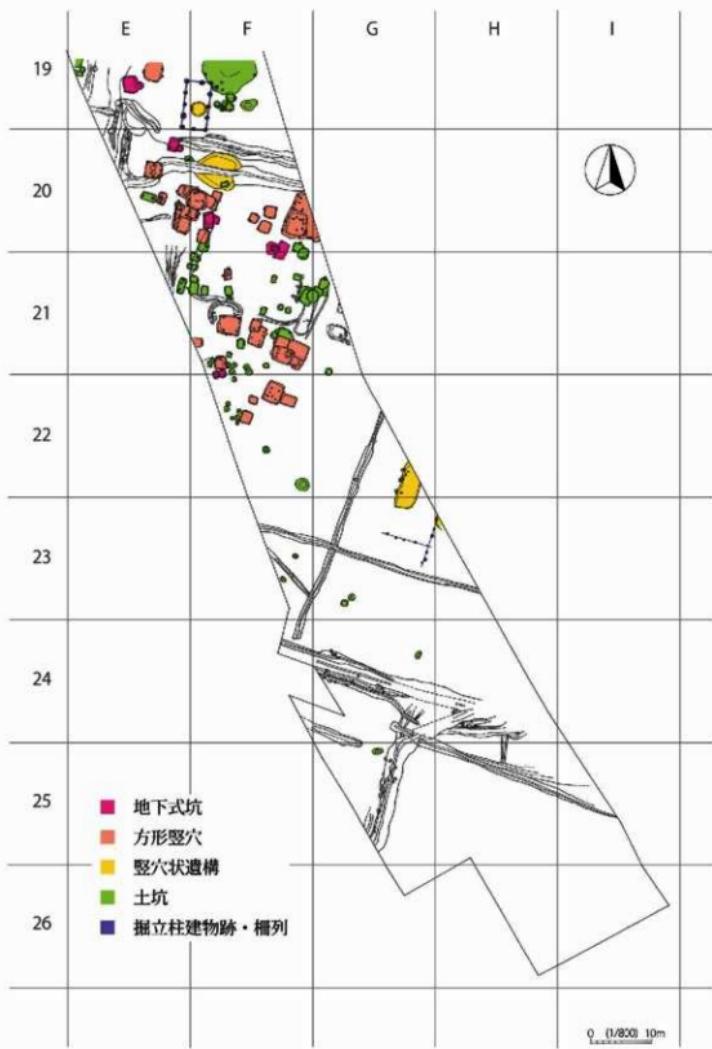
文脇遺跡と同じく、千葉鶴川線事業に伴って調査された荒久(2)遺跡では、副葬品とみられる遺物を伴って人骨が出土した地下式坑があるが²⁾、文脇遺跡では人骨は出土しておらず、明確に墓として使われたと言えるものはない。ただ、覆土から銭貨が出土した遺構や、仏飯器が出土した遺構などがあり、埋葬との関連を想起させるものは若干ある。

一方、覆土に貝層を伴う地下式坑が2基検出されたが（4SK-055・4SK-092）、貝層の分析の結果、イボキサゴを主体とする貝類のほかに、海産魚類の骨、ネズミ類・ヘビ類の骨、イネ胚乳（コメ）やオオムギ・コムギなどの植物遺体が確認された。貝層は、遺構の埋没に伴って持ち込まれ投棄された食料残滓である可能性も否定はできないものの、もともと遺構内或いは周辺にあったものを集めた可能性も考えられるだろう。イボキサゴについては、袖ヶ浦市周辺では、昭和初期に化学肥料が普及するまで田の肥料として珍重されたことが知られているが³⁾、他の貝や魚骨等を含んでいても肥料としては問題ないと思われる。



第359図 中・近世遺構分布図(1)

0 (1/800 10m)



第360図 中・近世遺構分布図（2）

これらのことから、地下式坑において肥料やコメ・オオムギ・コムギなどの農作物が収納され、そこにネズミやヘビが寄って来るような、倉庫のような使用状況があったことも考えられるだろう。

4SK-092では、多数の遺物を作った特殊な埋没状況が明らかとなり、廃絶にあたり何らかの祭祀的行為が行われたことも推測される。入口埋土上には、完形のカワラケが置かれていた。カワラケは覆土中からも多数出土しており、覆土中からはほかに銭貨や錠前、短刀といった金属製品なども出土している。天井部が遺存した状態で検出された地下式坑もある一方で、特殊な埋没状況を示す地下式坑もあるということを指摘できよう。

次に、方形竪穴・竪穴状遺構についてであるが、単なる土坑とは異なり、竪穴住居のように床面が堅く、壁がほぼ垂直に立ち上がる遺構のうち、平面形が方形を呈するものを方形竪穴、それ以外を竪穴状遺構としたが、これらの遺構はそれまでの文脈遺跡の調査でも検出されている。これらの遺構は、床面にピットが検出される場合はあるが、火床部ではなく、居住施設ではないとみられる。覆土は一気に埋め戻された様相を呈しており、具体的な用途ははっきりしないものの、倉庫などの貯蔵施設や作業場として機能していた可能性が考えられるものである。方形竪穴・竪穴状遺構の分布は23Gグリッド以北に限られ、中でも10D～16Eグリッド、21E～22Fグリッド付近では、1基ずつ存在するというより数基が隣接或いは重複するように密集して存在する傾向があるようである。

方形竪穴・竪穴状遺構のうち、特に北宋銭5枚・南宋銭1枚の計6枚の銭貨と、5型式に比定される常滑広口壺とが出土した方形竪穴4SK-013は注目されよう。一括出土銭の出土した土坑4SK-014の僅か40cm北側に存在しており、銭の貯蔵に関連する遺構であった可能性も考えられる。

方形竪穴・竪穴状遺構も、地下式坑と同様に出土遺物が少なく、出土しても多くは埋土に混入する破片といった状態であることから、いずれも遺構の時期を推定するのは難しい状況である。しかし、強いて言えば、全体的には15世紀後半頃を主体とし、それよりも古い遺構と新しい遺構とが少しずつあると言えそうである。古い遺構としては、古瀬戸中期様式の入子と花瓶が出土した4SK-005などがあり、概ね14世紀代～15世紀前半頃の時期が考えられる。新しいものとしては、大窯期以降の遺物が出土した4SK-047・068・069などがあり、概ね16世紀～17世紀の年代が考えられる。なお、遺構の分布範囲としては、時期によって偏る傾向はみられないようである。

次に、井戸についてであるが、井戸は調査区内から3基しか検出されていない。道路幅の調査であることから、調査区外にあった可能性は考えられるが、地下式坑や方形竪穴・竪穴状遺構の集中する地点の南北約85mの範囲内に3基が存在し、形状や規模もほぼ似通っている。時期は、6SE-005から9型式に比定される常滑大甕が出土しているものの、近世以降陶磁器・土器片も出土している。また4SE-001から近世の所産とみられるカワラケが出土しており、いずれも近世に機能した可能性が高いが、中世に遡る可能性もあると言えるだろう。

次に、調査区の北端、松川を見下ろす台地端部に位置している堀SD-027と土塁SA-001についてであるが、これらは位置関係のほか土層断面の観察から、一緒に構築されたものとみられる。時期は、土塁下から出土した遺物から15世紀半ば以降と考えることができるが、堀の覆土上層に宝永火山灰がみられることから、18世紀前葉には堀が埋没していたことが明らかである。出土した陶磁器も15世紀前半頃～近世を主体とするものであり、比較的長期間機能した可能性が考えられる。但し、堀の覆土と土塁の盛土が「虎口」を境に様子が異なることが調査所見としてあり、それが時期差を示しているかもしれない、検出

された形のまま機能し続けたわけではなく、途中で形を変えて機能し続けた可能性は高い。

周辺には城館の存在を示す文献資料は残っていないようであるが、SD-027とSA-001は館を方形に巡る堀と土塁と思われる。堀と土塁の内側部分には溝状遺構SD-028が、そのすぐ東側には台地整形区画があり、更に東側には、調査区外となるが現存の住宅が存在している。館の本体部分はその付近と推測されよう。

また、堀の外となる南側にも隣接して台地整形区画があり、その一段高い部分に掘立柱建物跡群が、段差部分に柵列が検出された。それらは何度も建て替えられたとみられるが、軸方向が大きく分けて2種類あり、堀・土塁と同様、時期差をもって機能していた可能性も考えられる。

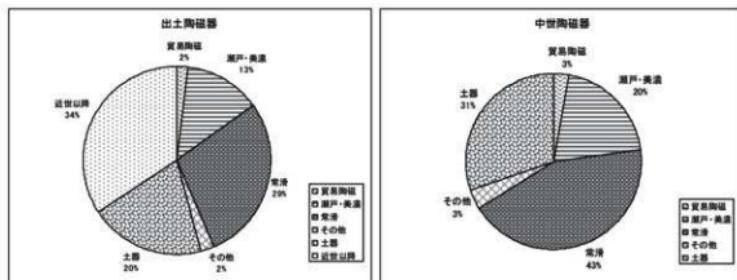
掘立柱建物跡は、上記のほかに3棟しか検出されなかった。そのうち1棟は土塁下から検出されたもので、ほか2棟は地下式坑や方形竪穴・竪穴状遺構等が集中する地点で検出された。付近には柱穴とみられるピットが群衆しており、現場では組めなかったもののそれらが掘立柱建物跡であった可能性はあるだろう。居住スペースとみられる掘立柱建物と、貯蔵・作業等スペースとみられる地下式坑・方形竪穴・竪穴状遺構と共に近接して存在していた様子が窺われる。

そのほか、調査区内からは多数の溝状遺構が検出された。溝状遺構は、区画と考えられるものほか、硬化面が何枚もみられ道路として継続して機能したと考えられるものがある。区画溝には、例え4SD-018などのように地形に沿ったものや、現在の区画とほぼ同じ場所にあるものも多い。硬化面がみられ道路と考えられる4SD-006、4SD-009や2SD-001、7SD-002、7SD-003、SD-005なども現道とほぼ同じ位置にあり、これらの区画や道が、中・近世まで遡るものであることが明らかとなったと言えるだろう。現在見られる文脈遺跡周辺の景観の基礎は、中・近世に形成されたということであろう。

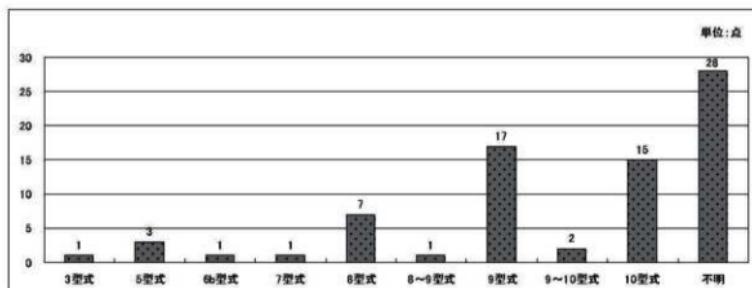
第2節 中・近世の遺物について

1 陶磁器・土器

出土した陶磁器・土器片について、掲載・非掲載を問わず全て分類して数を数えたものが第20表である。更にこれをグラフ化したものが、第361図である。これらによると、出土した全1,764点（接合作業後）の陶磁器・土器片のうち、中世陶磁器・土器が3分の2を占め、残り3分の1を近世以降陶磁器・土器が



第361図 出土陶磁器・土器内訳



第362図 常滑窯製品 型式別片数

占めている。このうち中世陶磁器・土器についてのみ産地ごとに見てみると、常滑窯製品が最も多く502点で、全体の43%を占める。次いで土器が31%（358点）、瀬戸・美濃窯製品が20%（226点）と続き、貿易陶磁器32点とその他陶磁器38点は僅か3%ずつとなる。これらについて、少し詳しく見ていく。

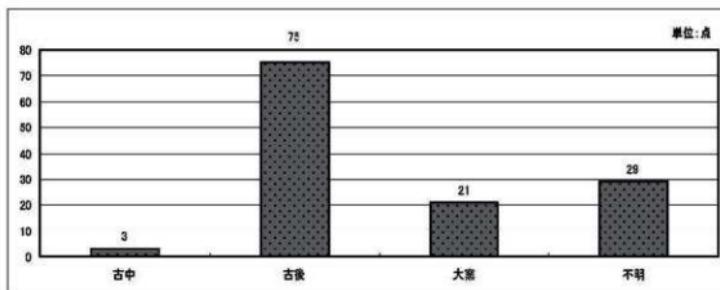
まず、今回最も多く出土している常滑窯製品のうち、85%にあたる425点は壺・甕の破片で、残り15%の77点は片口鉢である。図を掲載した76点の常滑窯製品について型式を見てみると（第362図）、型式が特定できないものが28点あるものの、9型式が17点と最も多く、次いで10型式が15点、8型式が7点となる。8~9型式、9~10型式と限定しきれないものも合わせると、型式のわかるもののうち90%が8型式~9型式となる。なお、11型式・12型式に比定されるものはみられない。

常滑窯製品で最も古いものは、溝状遺構4SD-018から出土した3型式の片口鉢（第336図1）で、ほかに古いものとしては、地下式坑4SK-012から出土した大甕（第104図1）や方形竪穴4SK-013から出土した片口鉢（第154図1）、方形竪穴4SK-036から出土した広口壺（第165図1）などがあり、5型式とみられる。

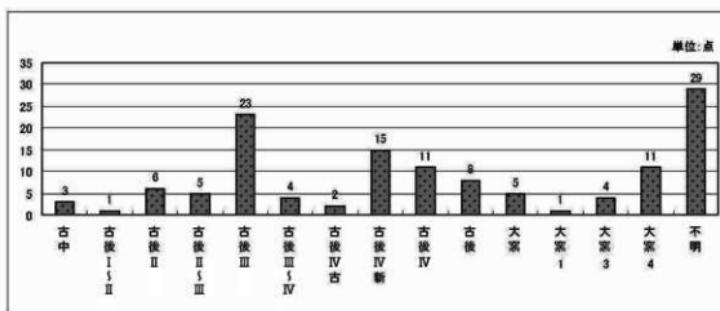
常滑窯製品については、3型式・5型式（12世紀後葉～13世紀前葉）から現れはじめ、8型式（14世紀後半）頃から増加し、9型式～10型式（15世紀代）をピークとして、急速に減少する傾向が指摘できるだろう。

常滑窯製品に次いで多く出土したのは土器で、358点である。このうち84%にあたる301点はカワラケ、残り16%の57点は鍋・釜である。カワラケは全てロクロ成形によるもので、手捏ねのものはみられない。カワラケは、完形か完形に近い遺存度のものが多く、大きく分けて口径12cm前後、底径6.5cm前後、器高3cm前後で底部から直線的に開く器形の杯と、口径8cm前後、底径5cm前後、器高1.5cm前後の小皿とがみられる。鍋・釜は、ほとんどが内耳土鍋であるが、東海系羽釜も少量みられる。

瀬戸・美濃製品は226点で、器種別にみると、多い順に皿が65点（29%）、盤が51点（23%）、擂鉢が44点（19%）、碗が38点（17%）、天目茶碗・瓶が各10点（各4%）、その他8点（4%）である。このうち図を掲載した128点の中世瀬戸・美濃窯製品について時期を見てみると、約半数にあたる75点が古瀬戸後期様式に位置づけられるもので、次いで大窯期のものが21点となっている（第363図）。古瀬戸中期様式に位置づけられるものはごく僅かしか確認できず、古瀬戸前期様式以前のものはみられなかった。



第363図 濑戸・美濃窯製品 時期別破片数①

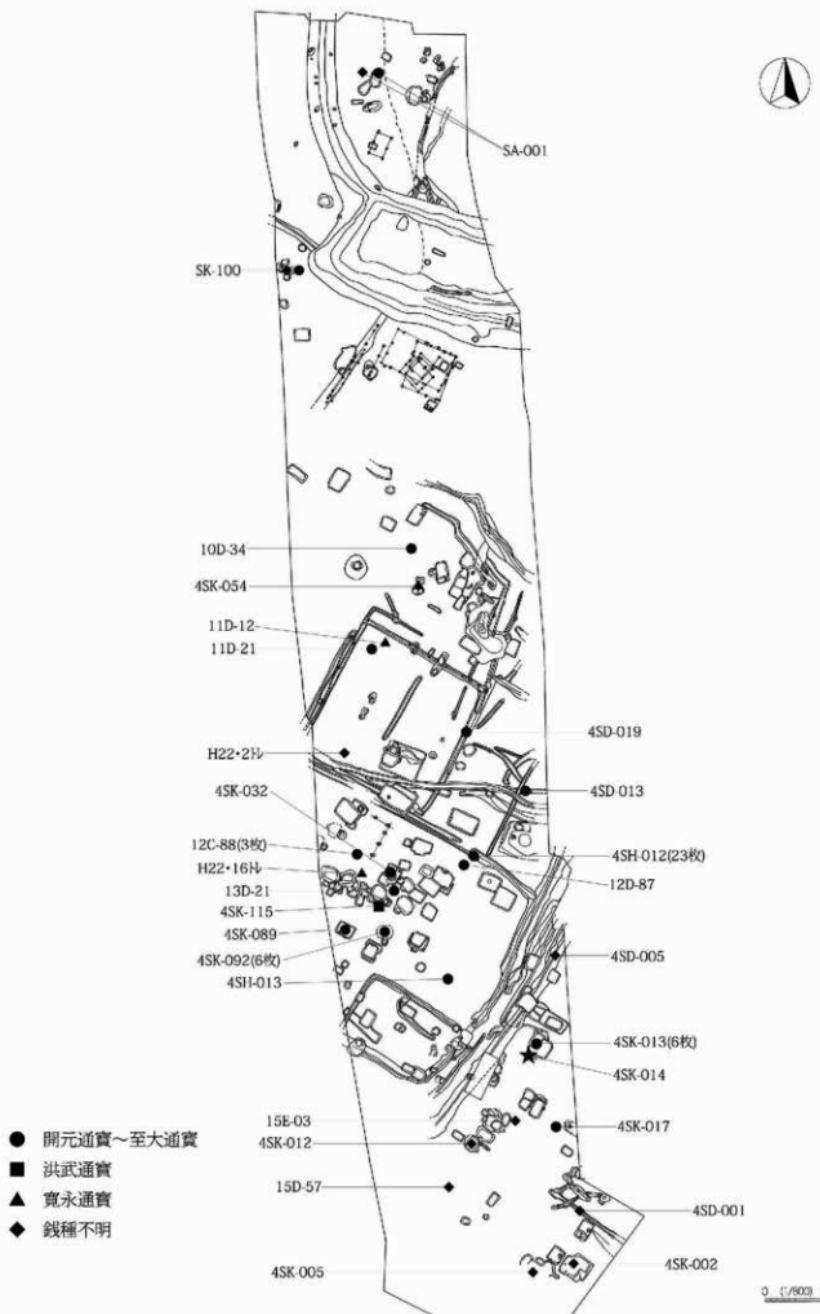


第364図 濑戸・美濃窯製品 時期別破片数②

これらについて更に詳しく見てみると、古瀬戸中期様式のものは、溝状遺構4SD-009から出土したIV期とみられる折縁深皿（第330図3）と、方形竪穴4SK-005から出土した入子（第149図1）及び花瓶（第149図2）しかなく、これらが瀬戸・美濃製品としては最も古いものとなる。古瀬戸後期様式のものもI～II期のものは少量だが、III期になると23点、IV期は古段階・新段階含め28点で、このあたりが主体となるようである。大窯期の製品も比較的多くみられ、中でも大窯期後半からのものが多いようである。大窯I～II期のものはほとんどみられず、断絶期があるのかもしれない。

瀬戸・美濃窯製品については、古瀬戸中期様式後半（14世紀中葉）頃から現れはじめ、古瀬戸後期様式III期～IV期（15世紀中葉～後葉）を一つのピークとして増加するものの、一時断絶し、その後大窯期後半（16世紀後半）頃にもう一度増加するという傾向が指摘できそうである。

次に、貿易陶磁器は全体に少ないが、中では青磁が最も多く24点で（75%）、そのうち碗が16点である。白磁は皿2点・壺1点、青白磁は皿2点・壺1点、染付は皿2点しかない。これらのうち、掲載した19点から時期を見てみると、青磁蓮弁文碗で13世紀代のものがある一方、15世紀代の白磁小皿や17世紀初め頃とみられる青白磁壺などもある。年代幅は広いが、国産陶磁器に対して違和感はないと言えるのかかもしれない。



第365図 錢貨出土分布図（1）



第366図 錢貨出土分布図（2）

2 銭貨（4SK-014 一括出土銭以外）

陶磁器・土器のほかに出土遺物として注目されるのは、銭貨である。土坑 4SK-014 から大量に出土した銭貨については第 2 章第 1 節で詳細に分析し、その組成から 14 世紀後半期を中心とする時期のものであると判断した。ここではそれ以外の出土銭貨（第 19 表）についてまとめる。

土坑 4SK-014 以外から出土した銭貨は、大破して拓本のみ辛うじて掲載できたもの、拓本も写真も掲載できなかったものを含め、計 73 枚を数える。地下式坑 4 基、方形竪穴 6 基、土坑 5 基、溝状遺構 5 条のほか、土壘下、ピット、遺構外から出土しており、その分布は 4SK-014 を中心として、その周辺に偏る傾向である（第 365・366 図）。この中には、一つの遺構からまとめて出土しているものもあり、特に土坑 4SH-012 からは、23 枚もの銭貨が出土した。そのほか、地下式坑 4SK-092 及び方形竪穴 4SK-013 から、それぞれ 6 枚ずつ出土した。4SK-013 は一括出土銭が出土した土坑 4SK-014 に隣接しており、4SK-014 との関連も考えられる。

銭種について見てみると、4SK-014 出土銭貨では最も新しいものは至大通寶（初鑄年 1310 年）であるが、4SK-014 以外では、至大通寶より新しいものは 5 枚しか確認されていない。すなわち、方形竪穴 4SK-115 から出土した洪武通寶（初鑄年 1368 年）1 枚と、土坑 SK-067、4SK-054 からそれぞれ 1 枚ずつ及び遺構外から 2 枚出土した寛永通寶の計 5 枚のみで、ほかは全て 4SK-014 でみられる銭貨である。また、4SK-014 には私鑄錢や模鑄錢、鳥錢といったものがみられるが、4SK-014 以外で出土した 73 枚の中にはそういう銭貨はみられず、全て本錢であった。

3 動物遺体

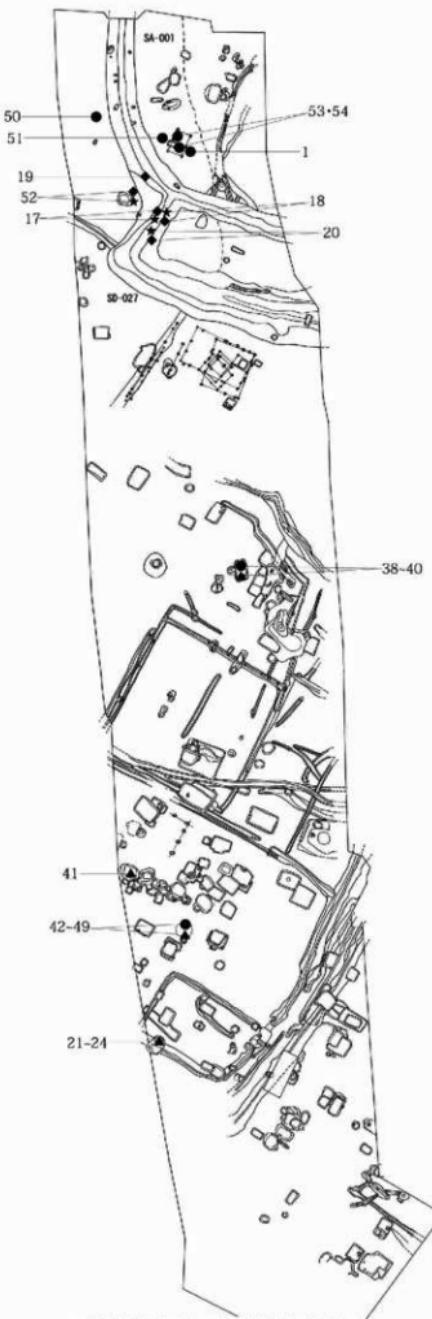
動物遺体は、地下式坑 4SK-092・4SK-055 のブロック貝層中から検出されたネズミ類やヘビ類等の微細骨のほかに、大型獸のものとみられる骨や歯、アカニシの貝殻等が単独で出土している。これらの出土状況についてみてみる。

まず、骨・歯についてであるが、これらは同定結果（付章参照）によるとウマかウシと考えられる。分布状況は、地下式坑や方形竪穴、掘立柱建物などの構築物が集中している地点を避けるように、縁辺にある溝状遺構や堀 SD-027 の中及び周辺からのみ出土している（第 367・368 図、第 21 表）。7SD-003 は、硬化面を複数持ち道路として機能していたと考えられる遺構であるが、ウマとみられる骨は、硬化面の下から出土した。また、堀 SD-027 では、ウマとウシの骨が出土している。人とともに生きた家畜が、既存の深い溝や堀を利用して埋葬されたものかもしれない。但し、堀 SD-027 から出土したウシについては、頭骨のみであることから、例えば動物犠牲に伴う祭祀に関係する可能性なども指摘できるのかもしれない。

そのほか、目立つのがアカニシの貝殻である。地下式坑のブロック貝層中にも含まれているが、それ以外に遺構から単独で出土している。出土分布を見ると、ウマやウシとは対照的に、地下式坑内や方形竪穴内、掘立柱建物付近、土壘 SA-001 下の掘立柱建物 SB-008 周辺など中・近世の遺構が集中する部分に多い様子が見て取れる。アカニシの貝殻は堅牢なため、他の貝殻に比べて遺存しやすいということはあるかもしれないが、単なる食料残滓とは言い切れない出土状況ではないだろうか。このようなアカニシの単独出土例は、松虫陣屋跡（印西市）などでも報告されており、食用以外の目的でアカニシの殻が利用されたのではないかとの指摘もなされている⁴⁾。例えば、施設の廃絶に伴って、何か祭祀的意味をもってアカニシを埋めた可能性なども考えられるのではないだろうか。

第21表 動物遺体一覧表

No.	調査年度	遺標番号(報告件)	遺構種別	遺物番号	遺物名	備考
1	H21	SA-001	土塁	17	アカニシ1点	土塁下部出土
2	H27	SD-002	溝状遺構	4	獸骨	
3	H27	SD-002	溝状遺構	5	獸骨	
4	H27	SD-002	溝状遺構	6	獸骨	
5	H27	SD-002	溝状遺構	7	獸骨	
6	H27	SD-002	溝状遺構	8	獸骨	
7	H27	SD-002	溝状遺構	9	獸齒	
8	H27	SD-002	溝状遺構	10	獸骨	
9	H27	SD-002	溝状遺構	11	獸骨	
10	H27	SD-002	溝状遺構	12	獸骨	
11	H27	SD-002	溝状遺構	13	獸齒	
12	H19	SD-004	溝状遺構	5	アカニシ1点	
13	H19	SD-004	溝状遺構	6	アカニシ1点	
14	H27	SD-004	溝状遺構	3	獸骨	
15	H20	SD-020	溝状遺構	1	アカニシ1点・獸齒1点	アカニシ廃棄済
16	H20	SD-021	溝状遺構	2	アカニシ1点	廃棄済
17	H21	SD-027	堀	10	獸骨・衛	堀壁出土
18	H21	SD-027	堀	11	獸骨・衛	堀底出土
19	H21	SD-027	堀	16	獸齒	
20	H21	SD-027	堀	19	獸骨・衛	
21	H22	4SD-006	溝状遺構	2	ブロック貝層	廃棄済
22	H22	4SD-006	溝状遺構	3	ブロック貝層	廃棄済
23	H22	4SD-006	溝状遺構	4	ブロック貝層	廃棄済
24	H22	4SD-006	溝状遺構	5	貝	廃棄済
25	H27	7SD-001	溝状遺構	5	ブロック貝層	サルボオ主体、ハマグリ少 量、ツメタガイ微量
26	H27	7SD-003	溝状遺構	6	獸齒	硬化面下出土
27	H27	7SD-003	溝状遺構	7	獸齒	硬化面下出土
28	H27	7SD-003	溝状遺構	8	獸齒	硬化面下出土
29	H27	7SD-003	溝状遺構	9	獸骨	硬化面下出土
30	H27	7SD-003	溝状遺構	12	獸骨	硬化面下出土
31	H20	SH-014	ピット	1	アカニシ1点	廃棄済
32	H20	SI-025	方形堅穴	1	アカニシ1点	廃棄済
33	H20	SK-009	方形堅穴	1	アカニシ1点	廃棄済
34	H20	SK-028	土坑	1	アカニシ1点	廃棄済
35	H20	SK-050	方形堅穴	2	アカニシ1点	廃棄済
36	H20	SK-065	地下式坑	3	アカニシ2点・ハマグリ1点	廃棄済
37	H20	SK-073	地下式坑	2	アカニシ1点	廃棄済
38	H22	4SK-055	地下式坑	3	ブロック貝層	貝サンプルA
39	H22	4SK-055	地下式坑	4	ブロック貝層	貝サンプルB
40	H22	4SK-055	地下式坑	5	ブロック貝層	貝サンプルC
41	H22	4SK-087	地下式坑	1	貝	廃棄済
42	H22	4SK-092	地下式坑	1	ブロック貝層	貝サンプルA
43	H22	4SK-092	地下式坑	2	ブロック貝層	貝サンプルA
44	H22	4SK-092	地下式坑	7	ブロック貝層	貝サンプルB
45	H22	4SK-092	地下式坑	9	ブロック貝層	貝サンプルC
46	H22	4SK-092	地下式坑	10	ブロック貝層	貝サンプルD
47	H22	4SK-092	地下式坑	14	ブロック貝層	貝サンプルE
48	H22	4SK-092	地下式坑	19	ブロック貝層	貝サンプルF
49	H22	4SK-092	地下式坑	20	ブロック貝層	貝サンプルG
50	H21	4トレンチ		3	アカニシ1点	
51	H21	7C-09		3	アカニシ1点	
52	H21	7C-56		1	獸骨・衛	
53	H21	7D-00~10		2	アカニシ1点	
54	H21	7D-00~10		3	アカニシ1点	
55	H20	20E-16		1	アカニシ1点・獸骨1点・獸齒多數	アカニシ廃棄済
56	H20	20E-25		3	アカニシ1点	廃棄済
57	H20	20E-27		2	アカニシ1点	廃棄済
58	H20	20F-11		2	アカニシ1点	廃棄済

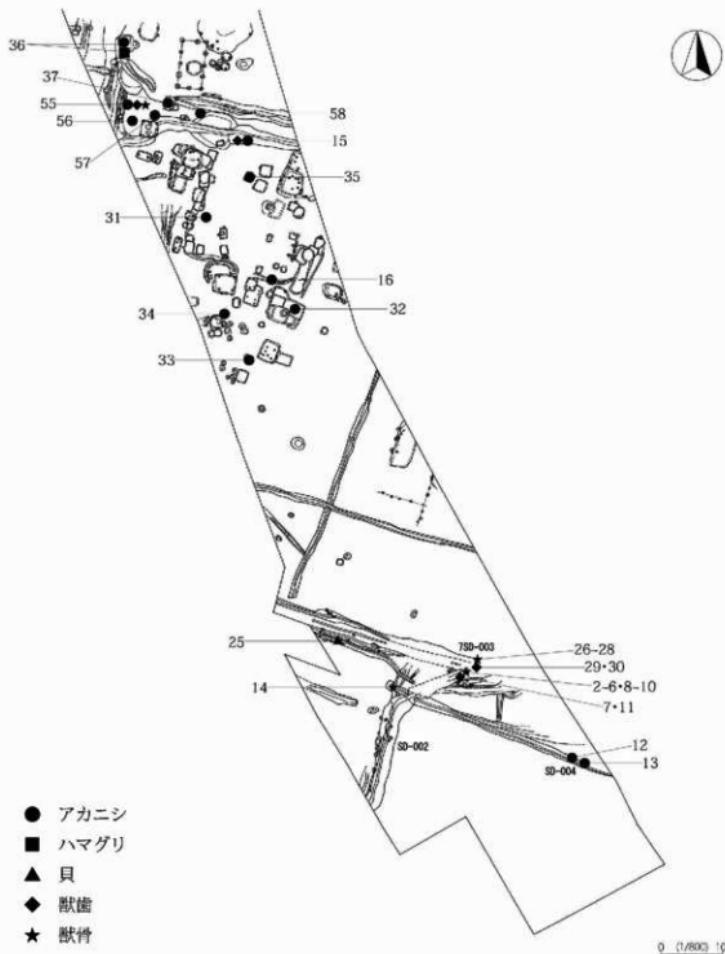


※数字は第21表のNo.

- アカニシ
- ▲ 貝
- ◆ 獣歯
- ★ 獣骨

第367図 貝・骨出土地点（1）

0 1/600 10m



第368図 貝・骨出土地点（2）

第3節 中・近世の文脇遺跡について

中・近世における文脇遺跡のこれまでの調査成果について、あわせて考えてみたい。

これまでに検出された中・近世の遺構分布図が第369図である。昭和62年～平成元年にかけて行われた調査では、道路状遺構4条、掘立柱建物跡2棟、土坑墓2基、竪穴状遺構4基、竪穴住居状遺構1基、溝状遺構77条、柵列1条などが検出され、調査区の中央付近で検出された東西に走る道路（2号道路状遺構）を挟んで、南北で遺跡の特徴が異なる様相が捉えられた。すなわち、南側では和鏡を伴う土坑墓や経筒の蓋が検出されるなど宗教的な性格が認められるのに対し、北側は掘立柱建物や溝が多く検出され、耕作地とそれに隣接した屋敷地の一部と推測される状況であった。遺構の時期は、出土した陶磁器などから12世紀～13世紀と考えられ、14世紀前半までには消滅に向かったとみられている⁵⁾。

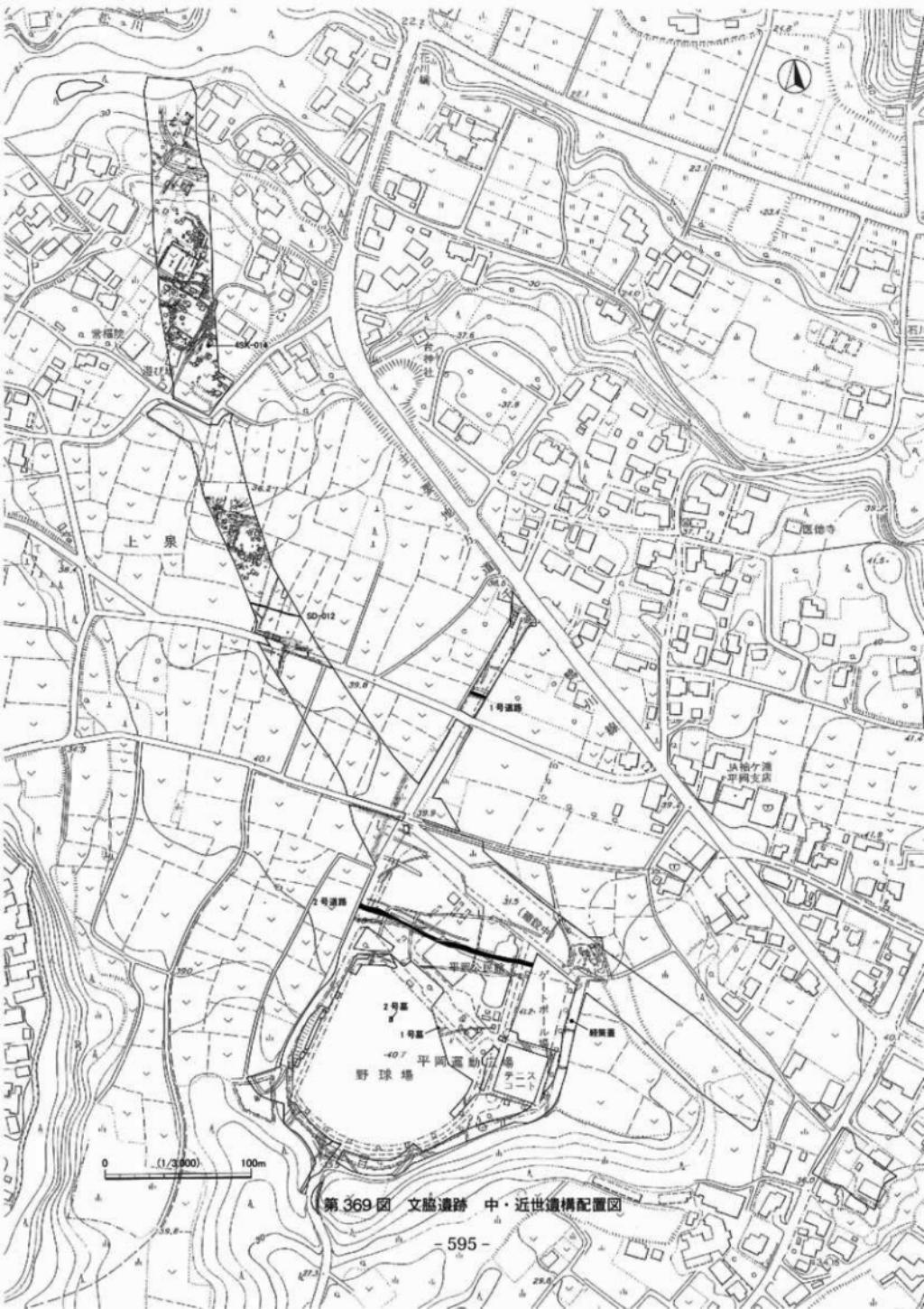
続く昭和63年の調査では、先の2号道路状遺構の北側にあたる部分の隣接地が調査地区となり、遺構は地形造成跡及び区画溝1か所、竪穴状遺構1基、土坑9基、溝状遺構9条などが検出された。地形造成跡は溝により3つの区画に分けられ、その最も広い区画には竪穴状遺構や土坑、ピット群などが検出され、建物の存在が想定された。一方、溝と土坑以外は遺構がほとんどみられない区画もあり、耕作地等に利用されたのではないかと考えられている⁶⁾。

これらを踏まえ今回の成果を見てみると、既調査区に隣接する平成19年度調査区周辺では、東西方向及び南北方向の溝状遺構ばかりが検出され、既調査区で想定された耕作地が引き続き展開していたものと推測される。

しかしこの様相は、東西方向の溝状遺構SD-012を境として、その北側から全く異なったものとなっている。SD-012の北側では、地下式坑、方形竪穴・竪穴状遺構、掘立柱建物跡、ピット群などが多数展開しており、それらは谷状にやや低くなる空白部分（平成22年度確認調査区）を挟んで更に北側へと広がり、台地の最も北側の松川を望む場所には、塙と土壙に囲まれた館も存在している。そして遺構の合間には、区画或いは道路等とみられる溝状遺構が、縫うように縦横に延びている。

それらの主体となる時期は、出土した陶磁器から15世紀後半頃～16世紀後半頃と考えられる。従って、文脇遺跡は14世紀前半までに消滅に向かったわけではなく、あくまで南北に狭長な調査範囲の成果としてではあるが、主体となる場所が南方から北方へと移動したとみるのが妥当なのではないだろうか。或いは、北方の今回の調査地区においても12世紀後葉～13世紀前葉の遺物が出土し、14世紀後半頃のものから量が増加する状況があることから、それまで南方・北方ともに耕作地に構築物が散漫に分布するだけの状況であったものが、14世紀後半頃を契機として、15世紀後半～16世紀後半頃には、特に北方において領主の館を戴く村落が耕作地に隣接して展開していたと考えるほうが、より適切かもしれない。

遺構と遺物が少しずつ増えてくるとみられる14世紀後半は、4SK-014の銭貨が埋められたと考えられる時期でもある。4SK-014の平面的な位置は、SD-012以北の遺構分布域の中では、南北方向では中間的地点と言える場所であり興味深いが、文脇遺跡の調査範囲は、広大な遺跡の中のほんの一部分に過ぎない。一括出土銭のもつ意味については、今後さまざまな観点から慎重に検討していくべきであろう。



第369図 文政遺跡 中・近世遺構配置図

- 注1 梁瀬裕一 2006 「地下式坑の分類と編年試論－中馬場遺跡他の千葉県の事例をもとに－」『房総中近世考古』房総中近世考古学研究会
- 2 小林清隆 1998 『袖ヶ浦市荒久(2)遺跡』財團法人千葉県文化財センター
- 3 袖ヶ浦市教育委員会編 1992 『市民のための袖ヶ浦の歴史』
- 4 黒住耐二・西野雅人「1 貝類」 2010 『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書－印旛村松虫陣屋跡－』財團法人千葉県教育振興財團
- 5 笹生 衛 1998 「文臨遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』財團法人千葉県史料研究財團編
- 6 加藤正信・大谷弘幸 1995 『袖ヶ浦市文臨遺跡』財團法人千葉県文化財センター

付章 自然科学分析

第1節 文脇遺跡出土貝類

1 概要

平成22年度に調査した4SK-055・4SK-092の地下式坑2基で貝層を検出した。大規模な遺構群であることからすれば、貝層を形成する遺構は少ないが、採取した貝サンプルからは貝類以外に獸骨・魚骨や植物遺体を検出しており、当時の資源利用、食事の実態を知るうえで貴重な資料となるであろう。また、現地採集の貝類としてアカニシ等がある。

同定・分析は、貝類を西野雅人が行い、動物遺体については中村賢太郎氏（株式会社パレオ・ラボ）に委託した（第2節）。また、植物遺体については小林真生子氏（千葉県農林総合研究センター森林研究所）に依頼した（第3節）。

第22表 貝類同定結果

貝種	SK055-1	SK055-2	SK055-3	SK055全	SK092-1	SK092-2	SK092-3	SK092-4	SK092-5	SK092-6	SK092-7	SK092-8	SK092全	全体
イボキサゴ	2128	69	336	2533	153	15	171	237	4	58	78	716	3249	
ウミニナ科	8			8				1				1	9	
ツメタガイ					14		9	3		4		1	31	31
アラムシロ	69	1	3	73										73
アカニシ								1	1	1			3	3
マガキ	1		1	2		3	4	5		5		1	18	20
ショフキ	2	1		3	10	2	3	8		5		1	29	32
サルボオ					5		6	6				2	19	19
ハマグリ					51	11	26	43	2	3		19	155	155
マテガイ					6								6	6
バカガイ							1	5		1		1	8	8
アカリ	1			1	20	1	1	10		7		6	45	46
合計	2209	71	340	2620	262	30	221	319	6	84	0	109	1031	3651
木炭粒数(個)/kg	9.5	0.8	3.0	13.3	21.0	4.0	11.0	10.5	1.0	8.5	0.1	4.5	60.6	73.9
水洗前重量(kg)	7.0	0.5	2.3	9.8	17.0	2.8	9.2	8.2	1.0	6.4	0.1	3.5	48.1	57.9
水洗後重量(kg)	1.4	0.1	0.3	1.8	2.2	0.4	1.2	1.6	0.2	0.6	0.0	0.6	6.7	8.4
微小貝	7			7	37	6	13	8		1		7	72	79
土器片	1		1	2	2	10	1					1	14	16

第23表 貝種組成

貝種	SK055	%	SK092	%	全体	%
イボキサゴ	2533	96.7%	716	69.4%	3249	89.0%
ハマグリ	0.0%	155	15.0%	155	4.2%	
アラムシロ	73	2.8%		73	2.0%	
アサリ	1	0.0%	45	4.4%	46	1.3%
ショフキ	3	0.1%	29	2.8%	32	0.9%
ツメタガイ	0.0%	31	3.0%	31	0.8%	
その他	10	0.4%	55	5.3%	65	1.8%
合計	2620	100.0%	1031	100.0%	3651	100.0%

その他の内訳

マガキ	2	0.1%	18	1.7%	20	0.5%
サルボオ	0.0%	19	1.8%	19	0.5%	
ウミニナ科	8	0.3%	1	0.1%	9	0.2%
ハマグリ	0.0%	8	0.8%	8	0.2%	
マテガイ	0.0%	6	0.6%	6	0.2%	
アカニシ	0.0%	3	0.3%	3	0.1%	

第24表 標準貝類相

貝種	SK055	SK092
イボキサゴ	190.45	191
ハマグリ		2.56
アラムシロ	5.49	6
アサリ	0.06	0.74
ショフキ	0.23	0.48
ツメタガイ		0.51
ウミニナ科	0.60	1
合計	198	18

標準貝類相：全体の個体数をサンプルの体積73.9リットルで除したもの

貝類1リットルの平均的な内容を示す。

4SK-055 地下式坑の覆土中層には天井の崩落に伴うロームブロック主体の層が形成されており、貝層はその直下から検出している。A～Cの3つの貝ブロックごとに全量をサンプリングした。サンプルのカット番号も同じ順序で1～3とした。水洗前の体積はA：9.5リットル、B：0.8リットル、C：3.0リットルである。一度の廃棄によるものが移動した可能性が高い。貝類のほかに植物遺体を検出した。

4SK-092 地下式坑の豊坑に貝層を形成している。ブロック状のまとまりごとに全量をサンプリングしており、取上げ順にA～Gのブロック名をつけた。サンプルのカット番号も同じ順序で1～7とした。cut8は現地で作成した遺物台帳では「一括」、図面ではブロックAの一部となっている。なお、ブロックGのみ60cmほど離れた地下式坑本体から検出しているが、本来一連のものが落ち込んだものであろう。貝類のほかに、獸骨・魚骨や植物遺体を検出した。

現地採取の貝類 このほかに、保存が悪くチョーク化した貝殻が採集されていた。ほとんどはアカニシであり、持ち込まれた貝類のうち、堅牢な殻をもつアカニシの一部のみが遺存し、ほかは失われた可能性が高い。貝類がかなり活発に利用された可能性を示す資料だが、出土地点を記録して廃棄した(第21表)。

2 貝種組成と計測値分布

貝種組成 同定された貝類は海産巻貝類5種以上、二枚貝類7種である(第22表)。すべて内湾の干潟から浅瀬に生息する種であり、現在も小櫃川の河口干潟で目にすることができる。遺跡近くの干潟で採取された可能性が高い。ツメタガイは膣孔が大きく開く内湾型(ツメタガイ型)のみであった。第23表は上段に主要6種とその他の種の組成を、下段にその他の内訳を示した。第24表(図版125)は、サンプル1リットルあたりの平均的な内容を示すもので、同定個体数をサンプルの体積(リットル)で除して算出した。二つの遺構で組成が大きく異なるため、二つの資料を作成した。

4SK-055

3つのブロック間に差異はほとんど認められない。全体でいうと、イボキサゴが2533個、96.7%を占め、アラムシロが73個、2.8%混じる。アラムシロとウミニナ類がイボキサゴ層に伴うのは、縄文時代以来の普遍的な特徴であり、かご等を使ったイボキサゴ漁の証拠といえる。わずかに含まれていたマガキ・シオフキ・アサリは稚貝や捕食孔をもつものであり、混獲された可能性が高い。したがって、この貝層はイボキサゴ漁によって持ち込まれたもののみであり、量からいえば1回に利用されたものであるかもしれない。イボキサゴのサイズは平均 $13.7\text{mm} \pm 0.8\text{mm}$ (標準偏差)と漁の盛んでない時期としては小振りである。

4SK-092

やはりイボキサゴ主体(69.4%)にハマグリが多く混じり(15.0%)、この2種で84.5%を占める。但し、3%～4%ほどのアサリ・ツメタガイ・シオフキの3種、2%未満のうち、サルボオ・バカガイ・マテガイの3種は大きめの個体、マガキは小さなもののみであった。これらも食用に採取したものであり、イボキサゴやハマグリの多い干潟で雑多な種を採取したものと推定される。

イボキサゴのサイズは平均 $14.3\text{mm} \pm 0.8\text{mm}$ とやはり小振りである。一方、ハマグリは平均55.3mm、最小

第25表 貝類計測値分布

イボキサゴ殻径

殻長mm	ツメタガイ殻径		二枚貝殻長 (SK092)					
	SK055	SK092	殻長mm	マガキ	シオフキ	サルボオ	ハマグリ	アサリ
-10.0			-25.0					
-11.0			-30.0					1
-12.0	3		-35.0		1			2
-13.0	58	3	-40.0		3	7	2	4
-14.0	135	29	-45.0	7	2	1	2	3
-15.0	96	47	-50.0	5	1	1	4	1
-16.0	19	18	-55.0			1	1	
-17.0	2	1	-60.0					
-18.0			-65.0				1	
-19.0			-70.0				1	
-20.0			-75.0				1	
-21.0			-80.0				1	
-22.0			-85.0				2	
試料数	313	98	試料数	12	試料数	7	11	16
平均	13.74	14.28	平均	44.48	平均	39.25	43.20	37.17
標準偏差	0.82	0.78	標準偏差	2.23	標準偏差	5.05	5.59	5.38
最小	11.36	12.09	最小	40.14	最小	31.66	43.20	27.90
最大	16.25	16.68	最大	49.32	最大	46.63	43.20	47.33

でも39mmで、60mmを超えるものも多く、大きめのものを選んで採取している。アサリやマガキはやや小さくても採取、シオフキやサルボオは大きければ採取したとみられ、味の良さによるえり好みが表れ正在るものと思われる。

3 貝類の所見

イボキサゴとハマグリは、東京湾沿岸に形成された貝塚の二大構成種である。縄文時代中期から古代に至るまでその傾向は変わらないが、中世には二つの点で変化が現れる。一つは、二枚貝の中でハマグリの圧倒的な優位が崩れて、シオフキとアサリが凌駕するようになったことである。もう一つは大きくて粒ぞろいの二枚貝主体で、イボキサゴがほとんど混じらない事例が表れることである。市場と流通の発達を想定させるそうした例と、自己消費のために採取された例があるとすれば、今回報告したものは明らかに後者であろう。

ハマグリは東京湾沿岸の各時代の貝塚で主要構成種となっているが、明治30年ごろの漁業統計をみるとバカガイがハマグリの10倍近くになっており（西野2000）、現在は絶滅したとされている。いつ頃からハマグリが減り、バカガイが増えたのかは、東京湾の貝類相と貝類利用の変遷史上、興味深い問題のひとつである。千葉市・村田川河口付近では、14世紀代の伯父名台遺跡ではハマグリが多く、バカガイはごくわずかであるのに対して、近世・18世紀代の有吉城跡SE01（井戸）ではバカガイとアサリが多く、ハマグリが混じっていない事例が存在した（西野2002）。本報告も、15世紀～16世紀代の小櫃川河口ではまだハマグリが多かったことを示すものである。

しかし、中・近世の貝層の分析事例は未だ少なく、比較的多くの分析データがある古代以前と、生態調査のデータが豊富な近代以降をつなぐものとして、今後の増加が望まれる。

参考文献

- 西野雅人 2000 「明治期に記録された東京湾の魚貝類相—農商務省水産局『東京湾漁場調査報告』から」 動物考古学 14
西野雅人 2008 「貝サンプルの分析結果」『千葉東南部ニュータウン30—千葉市伯父名台遺跡—』
西野雅人 2010 「貝類の分析結果」『千葉市中野台遺跡・荒久遺跡(4) 千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書V-1』

第2節 文脇遺跡から出土した動物遺体

中村賢太郎 (株式会社パレオ・ラボ)

1 はじめに

千葉県袖ヶ浦市に所在する文脇遺跡の発掘調査では、中世～近世の遺構が多数検出され、そのうち溝状遺構、堀、地下式坑から動物遺体が出土した。ここでは動物遺体の同定結果を報告する。

2 試料と方法

試料は、目視で採集された哺乳類 (No.1 ~ 7)、1mm メッシュ以上で回収された微細骨 (No.8 ~ 13)、1mm メッシュ以上で回収された魚骨 (No.14 ~ 19) の計 19 点である。出土した遺構は、No.1 が溝状遺構の SD-020、No.2 が 7C-56、No.3 が 20E-16、No.4 ~ 7 が堀の SD-027、No.8 ~ 19 が地下式坑の 4SK-092 (貝層) である。

同定は、肉眼及び実態顕微鏡下で、現生標本との比較により行った。同定の際に、カットマークの有無に着目して観察した。サイズ計測はノギスを用いた。

3 結果

第 26 表に同定された分類群の一覧を示す。

第 26 表 同定された分類群一覧

哺乳綱 Mammal	
ウマ	<i>Equus caballus</i>
ウシ	<i>Bos taurus</i>
ネズミ類	Rodentia fam., gen. et sp. indet.
爬虫綱 Reptilia	
ヘビ類	Serpentes fam., gen. et sp. indet.
硬骨魚綱 Osteichthyes	
ニシン科	Clupeidae gen. et sp. indet.
ススキ属	<i>Lateolabrax</i> sp.
タイ科	Sparidae gen. et sp. indet.
アジ科	Carangidae gen. et sp. indet.
腹足綱 Gastropoda	
腹足綱の一種	Gastropoda fam., gen. et sp. indet.

第 27 表に、遺構ごとに出土した動物遺体の詳細を示す (図版 126)。

溝状遺構の SD-020 (No.1) では、ウシの臼歯破片が出土した。

7C-56 (No.2) では、ウシの上顎の歯と下顎骨、ウシの可能性がある頭蓋骨、長骨、不明破片が出土した。

20E-16 (No.3) ではウマの上顎骨、下顎骨が出土した。巻貝 (腹足綱) の破片も見られた。

堀の SD-027 (No.4 ~ 7) では、ウシとウマが出土した。ウシは頭部だけ、ウマは頭部をはじめ前肢や

後肢が出土した。

地下式坑の4SK-092（貝層）(No.8～19)では、魚類のニシン科、スズキ属、タイ科、アジ科、哺乳類のネズミ類、爬虫類のヘビ類が出土した。

第27表 動物遺体同定結果一覽

4 考察

大型の哺乳類として、ウシとウマが利用されていたと考えられる。ウシとウマが両方出土した堀 SD-027 では、出土部位がウシとウマで対照的であり、ウシ（No.4～6）は頭部のみ、ウマ（No.7）はほぼ全身が見られた。ウシは解体された後に堀へ廃棄された可能性が考えられる。但し、カットマークは見られず、解体について十分に検討できなかった。ウマの年齢を推定したところ、20E-16 の個体（No.3）は歯冠高から 10 才前後、堀 SD-027 の個体（No.7）は歯冠高と歯の萌出状況から 4 才程度であった。

地下式坑 4SK-092(貝層)から出土したニシン科(マイワシ、サッパ他)、スズキ属(スズキ、ヒラスズ

キ)、タイ科(マダイ、クロダイ他)、アジ科(マアジ他)などの魚類は海産で、食後・調理後に残滓が地下式坑へ廃棄されたと考えられる。ネズミ類やヘビ類も食用にされた可能性を否定できないが、魚類の残滓に寄ってきた可能性も考えられる。

参考文献

松井章 2008『動物考古学』312p 京都大学学術出版会

第3節 文脇遺跡から出土した植物遺体

小林真生子(千葉県農林総合研究センター森林研究所)

1 はじめに

千葉県袖ヶ浦市に位置する文脇遺跡は、弥生時代と中・近世を主体とする遺跡である。今回、中・近世の地下式坑から植物遺体が見つかった。出土した植物遺体の同定結果を報告する。

2 試料と方法

試料は、平成22年の発掘調査時に地下式坑4SK-055及び4SK-092より発掘された植物遺体12点である。植物遺体は、遺構・遺物発掘時に1mm以上のメッシュを使って拾いだされ、袋や小瓶に乾燥状態で保存されていた。

3 結果

地下式坑より見つかった12点の植物遺体の同定結果を第28表、図版127に示す。

12点の植物遺体は全て炭化していた。4SK-055から見つかった植物遺体のうち1つは破損しているため同定できなかったが、1つはオオムギ *Hordeum vulgare L.* の胚乳だった。

4SK-092から見つかった植物遺体はイネ *Oryza sativa L.* の胚乳2つ、コムギ *Triticum aestivum L.* の胚乳1つ、ウメ *Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vries の核の破片2つ、フジ属 *Wisteria* sp. の種子1つだった。4点の植物遺体に関しては破損していたため分類群を同定することができなかったが1点は縦方向の明確な稜線があり、イネの胚乳の可能性が高かった。

第28表 文脇遺跡出土植物遺体の同定結果(点数)

分類群	出土部位	4SK-055	4SK-092
オオムギ <i>Hordeum vulgare L.</i>	胚乳	1	
イネ <i>Oryza sativa L.</i>	胚乳	2	
コムギ <i>Triticum aestivum L.</i>	胚乳	1	
ウメ <i>Armeniaca mume</i> (Siebold et Zucc.) de Vries	核(破片)	2	
フジ属 <i>Wisteria</i> sp.	種子	1	
不明	種実類	1	4
合計		2	10

4 考察

地下式坑から見つかった植物遺体のうち、オオムギ、イネ、コムギ、ウメは栽培植物であった。穀類であるオオムギ、イネ、コムギは食用として利用されていた可能性が高い。

オオムギ、コムギなどの麦類の出土に関する報告はイネに比べて少ないが、千葉市のうならず遺跡(平

安時代)や船橋市の印内台遺跡群(奈良~平安時代)の住居跡(新山2004、住田2007)、松戸市の根本内城跡(中世)の地下式坑(新山2004)等の遺跡から報告されている。文脇遺跡から今回見つかった植物遺体は出土点数が少ないが、麦類の栽培や伝播過程、中・近世の人々の食生活を考えるうえで重要な資料になると考えられる。

引用文献

- 新山雅広 2004「炭化種実」『千葉市平和公園遺跡群Ⅱ うならすず遺跡』p292-293 財団法人千葉市教育振興財团
新山雅広 2004「根本内城跡から出土した炭化種実」『根本内城跡 第2地点発掘調査報告書』p82-86 松戸市遺跡調査会
住田雅和 2007「印内台遺跡群(44)調査地点出土炭化種実類について」『印内台遺跡群(44)』p61-62 船橋市教育委員会

第4節 文脇遺跡出土の銭紐の素材同定

米田恭子(株式会社パレオ・ラボ)

1 はじめに

文脇遺跡から出土した中世の一括出土銭は、一組の単位で幾つもつながった状態で、曲物に納められていた。ここでは、銭に通された紐の素材を調べる目的で、植物珪酸体分析を行った。以下に、分析結果及び考察を記す。なお、曲物の素材については樹種同定が行われている(第5節参照)。

2 試料と方法

試料は、土坑4SK-014から一括で取り上げられた銭紐の破片10点(分析No.1)である。試料の長さは0.8mm~30.0mm、幅は1.5mm~5.0mmほどで、黄緑色~緑褐色を呈する。なお、試料はすべてZ撚りである。遺構の時期は、鎌倉時代末から室町時代前半とみられている。

はじめに、任意に選んだ試料の表面をアセトンと筆を用いて洗浄し、乾燥させた試料を管瓶にとり、電気炉を用いて灰化処理を試みた。灰化する工程は藤原(1976)を参考にして行った。毎分5°Cの割合で温度を上げ、100°Cにおいて15分ほどその温度を保ち、その後毎分2°Cの割合で550°Cまで温度を上げ、6時間温度を保持し、試料の灰化を行った。焼成の結果、試料は白色化(灰化)せず、赤~黒褐色に変化した。この原因は、試料に浸み込んだ銅の成分の影響と考えられる。銅の成分を除去するため、別の試料を用いて灰化処理前に希塩酸10パーセント溶液で処理を施したところ、銅成分が除去され、灰化が可能であった。しかし、灰の一部をグリセリンで封入して検鏡した結果、植物珪酸体は全く観察されなかった。これは、試料に含まれる珪酸体そのものが銅に置換されており、希塩酸処理の工程で溶けたと考えられる。したがって、通常の灰化処理による植物珪酸体の抽出は困難と判断した。

そこで、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)を用いて15mmほどの長さで、状態の良い試料1点(図版1-2)を選び、試料表面の植物珪酸体の観察を行い、現生標本と比較して銭紐の素材の同定を試みた。残りの試料は、千葉県教育委員会に保管されている。

3 観察の結果

観察された植物珪酸体を第29表に示した。

走査型電子顕微鏡で観察を行った結果、イネ型短細胞珪酸体列が試料の表面に観察された。このほかに、ポイント型の不明植物珪酸体が観察された。ポイント型の不明植物珪酸体は、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が出現するため（近藤、2010）、形状からの同定は困難である（図版128）。

第29表 分析試料と観察された植物珪酸体

分析No.	種類	試料名	遺構	時期	植物珪酸体	
					短細胞珪酸体列	不明植物珪酸体
1	錢紐	縁一括	4SK-014	鎌倉時代末～室町時代前半	イネ型	ポイント型

4 考察

走査型電子顕微鏡を用いて錢紐の観察を行った結果、イネの葉身や葉鞘の表面に形成されるイネ型短細胞珪酸体列が観察された。イネ型短細胞珪酸体列は、8の字型の短細胞珪酸体が細胞の形成方向に対して垂直方向に配列し、同様の配列がイネやヨシ、マコモなどにみられる。試料に観察されたイネ型短細胞珪酸体と、現生イネと現生ヨシの葉身の短細胞珪酸体の形態と比較を行ったところ、試料から得られた短細胞珪酸体は、現生ヨシの短細胞珪酸体に比べると、8の字型の中心部分が細くくびれており、隣り合う短細胞珪酸体の間隔が規則正しい。この形態と配列が、イネの短細胞珪酸体列に類似しており、イネ科植物の分類の決め手となる葉身に形成される機動細胞珪酸体は得られなかったものの、錢紐の素材は稻藁である可能性が高い。

一般に、藁製品の製作の際には葉の部分を除去（藁すり）して稈の部分を使用する（樋口、1978）。よって、藁製品に葉が残されている可能性は低く、機動細胞珪酸体が得られる可能性も低い。

錢紐には撚りがかけられており、葉身の部分は錢紐を作製する工程で取り除かれた可能性があるため、分析試料に観察されたイネ型短細胞珪酸体列は、葉身ではなく、葉鞘に由来すると考えられる。

引用文献

- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-」『考古学と自然科学』9 15-29
近藤鍊三 2010 『プラント・オパール図譜』387p 北海道大学出版会
樋口清之 1978 「作るー手作り生活の知恵ー」『生活歳時記』1148p 三寶出版

第5節 文脇遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）

1 はじめに

袖ヶ浦市に所在する文脇遺跡で、中世の一括出土錢に伴って出土した曲物3点について樹種同定を行った。

2 試料と方法

試料は、SK014から出土した曲物で、側板と底板、部位不明木材片の3点である。曲物は直径約40cm、

高さ約25cmとみられ、銭が入れられていた。中国の北宋から南宋の時代（960～1279年）に鋳造された銭が多く、1310年の鋳造年が最も新しかったため、鎌倉時代末～室町時代前半に埋められたと推測されている。試料の表面には、アルコールニスが塗布されていた。

樹種同定は、通常剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取するが、試料の状態が悪く、肉眼観察で針葉樹と判断できたため放射断面のみの採取を行った。ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察及び同定、写真撮影を行った。プレパラートは、千葉県教育委員会に保管されている。

3 結果

樹種同定の結果、3点とも針葉樹のスギであった。木取りは、いずれも柾目であった。結果の一覧を第30表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版129に示す。

スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

第30表 樹種同定結果

遺跡コード	遺構・遺物No	遺物名	樹種	木取り	備考
229-036-4	SK-014	曲物側板片	スギ	柾目	アルコールニス 塗布
	SK-014	曲物底板片	スギ	柾目	
	SK-014-041	曲物木材片	スギ	柾目	

4 考察

曲物の側板片と底板片、部位不明の木材片は、すべてスギであった。スギは比較的軽軟で加工容易であり、割裂性が大きいため曲物などの薄板にしやすい（平井、1996）。千葉県では、君津市の外箕輪遺跡や市原市の市原条里制遺跡から出土した鎌倉～室町時代の曲物にスギが多用されていた（伊東・山田編、2012）。なお、同時代の東京都や神奈川県、埼玉県から出土した曲物ではスギのほかにヒノキやサワラ、モミ属など比較的多様な針葉樹の利用がみられ、千葉県でもやや離れたいすみ市の烟台遺跡ではモミ属とツガ属が利用されており、様相が異なる（伊東・山田編、2012）。従って、文臨遺跡の周辺地域では、鎌倉～室町時代の曲物にスギを利用する傾向がみられ、曲物の用材傾向は地域ごとに異なっていた可能性がある。

引用文献

平井信二 1996『木の大百科』394p 朝倉書店

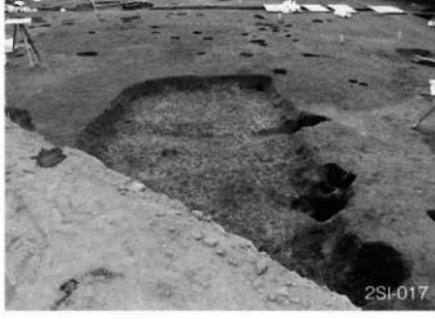
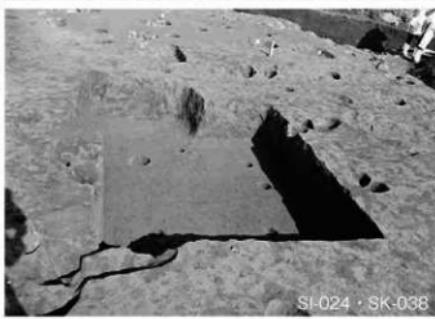
伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学—出土木製品用材データベースー』449p 海青社

写真図版

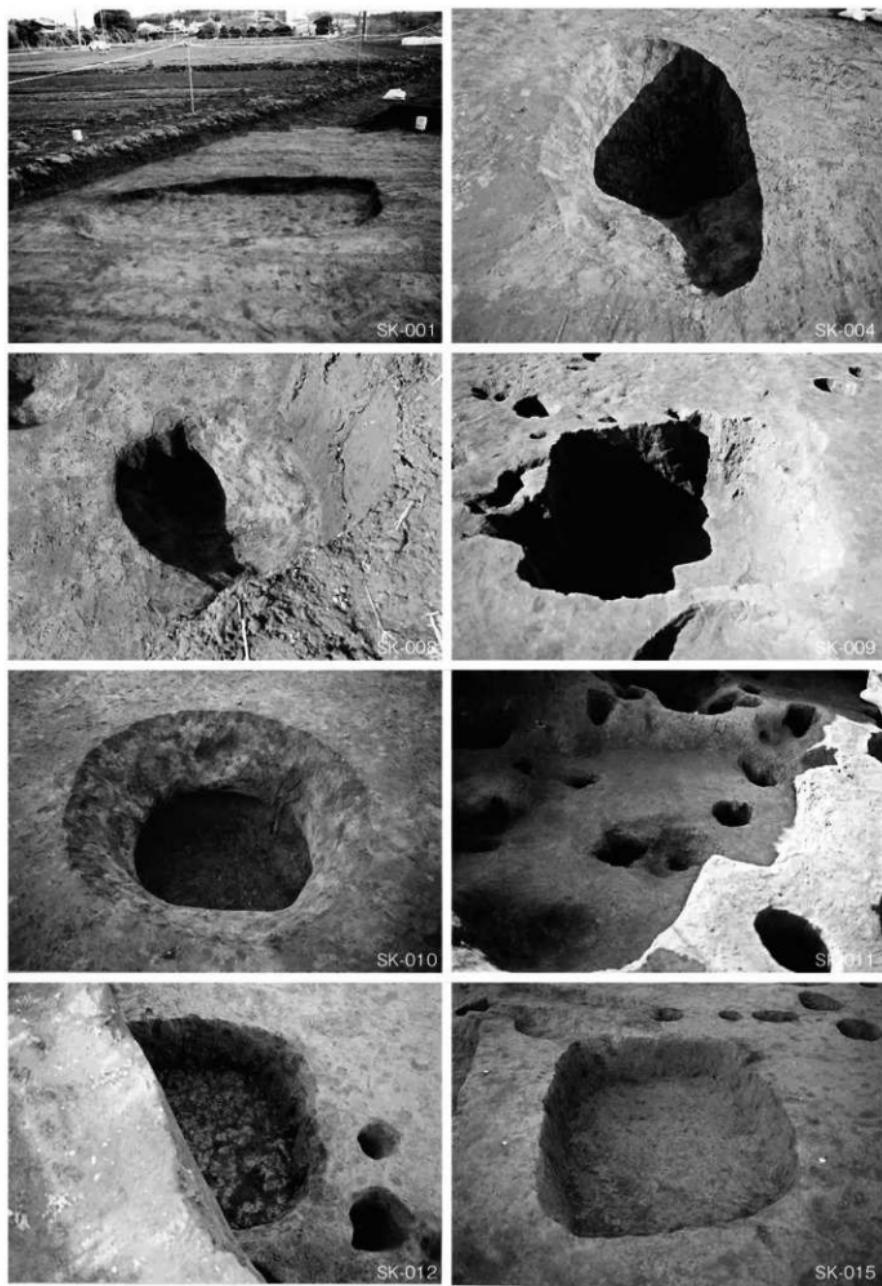
遺跡周辺航空写真 1:10,000

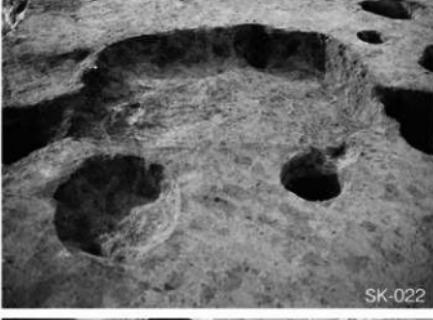
圖版2



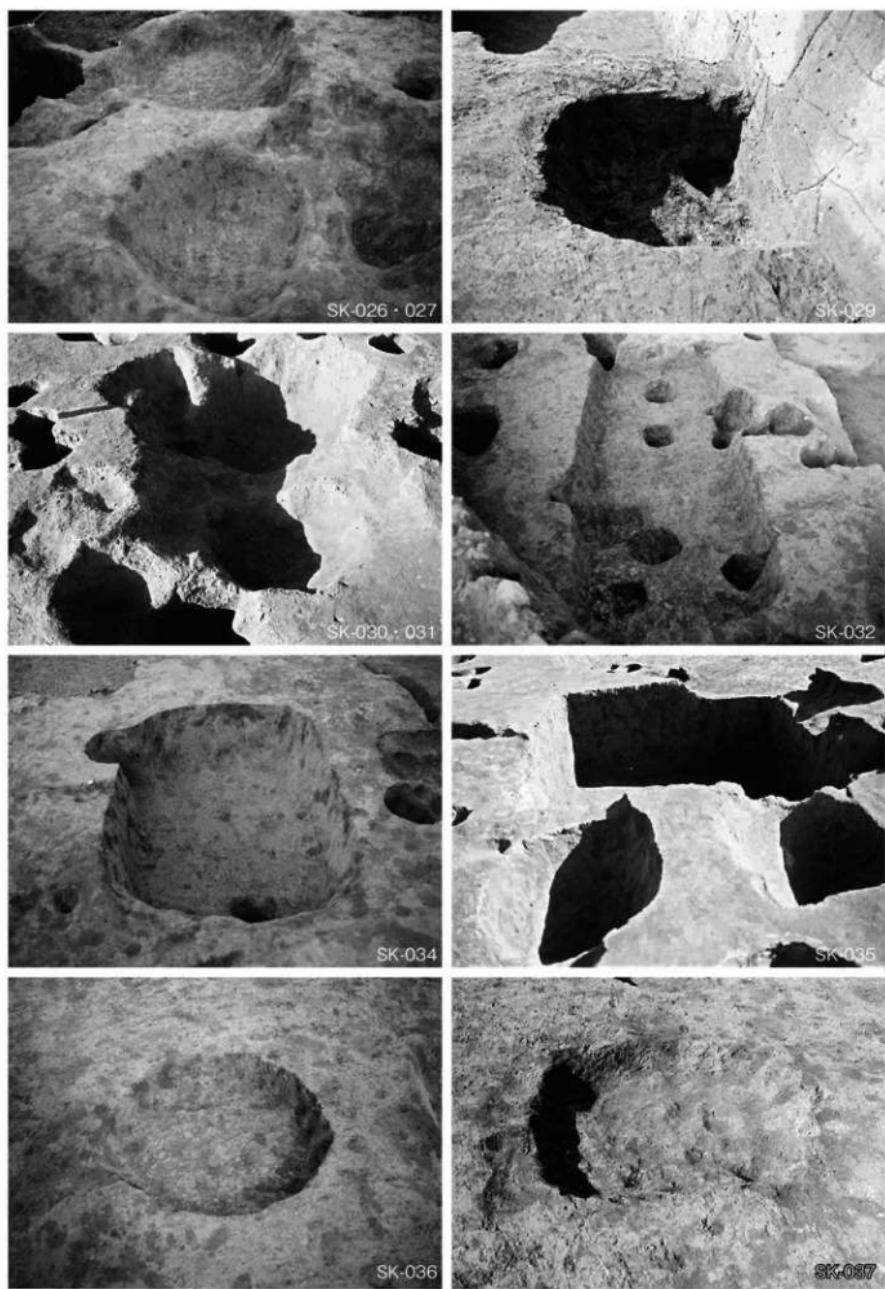


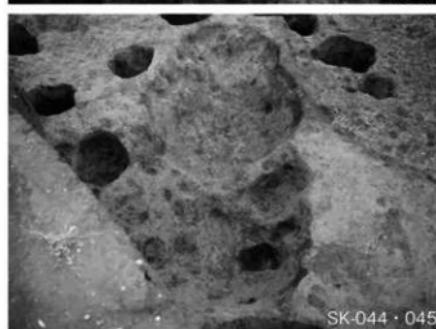
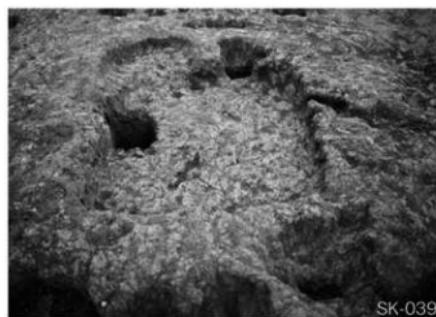
図版4



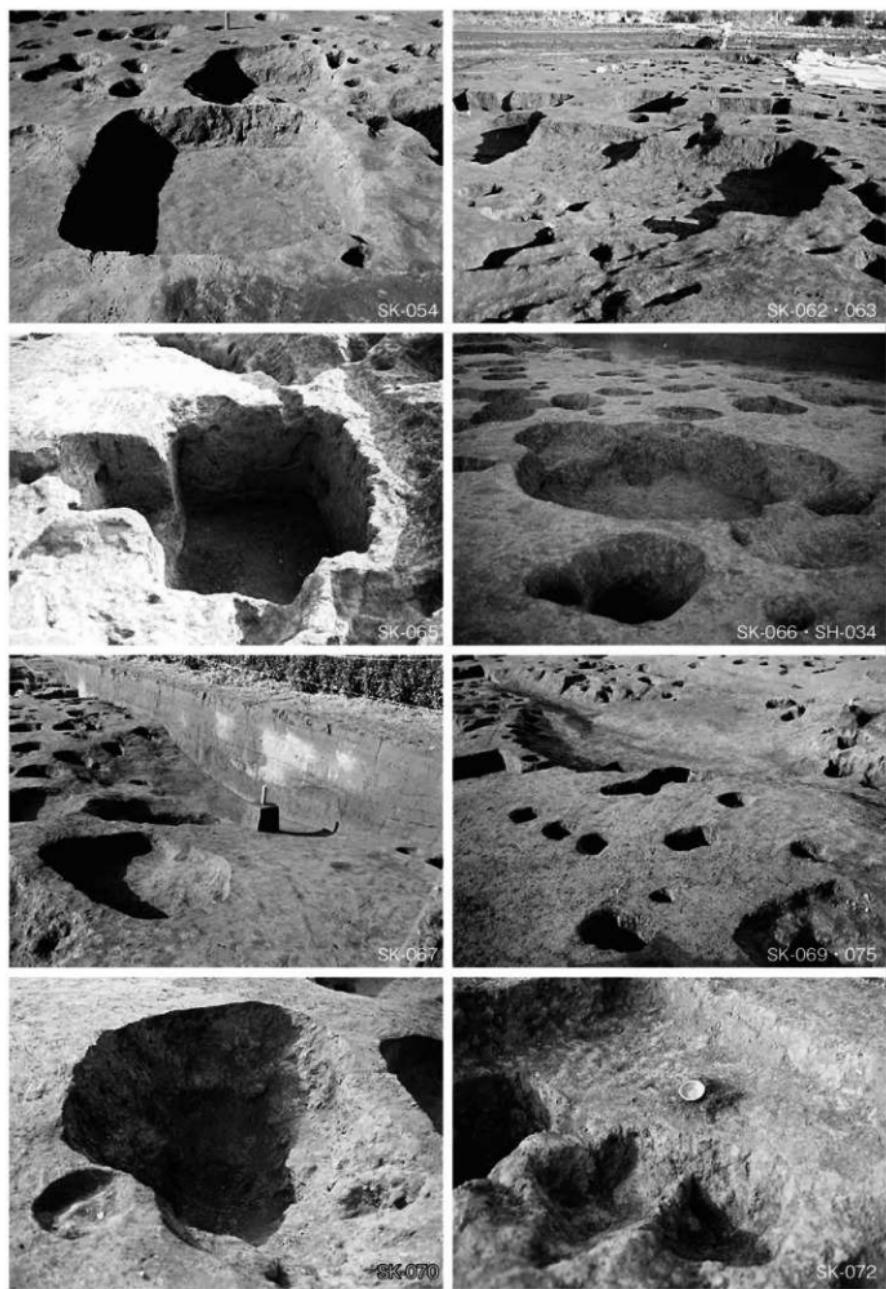


図版6





図版8





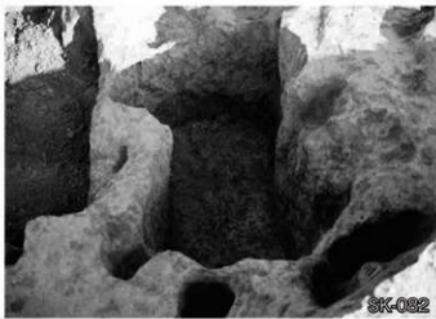
SK-073



SK-076



SK-076 ~ 080



SK-082



SK-083 ~ 084



SK-085

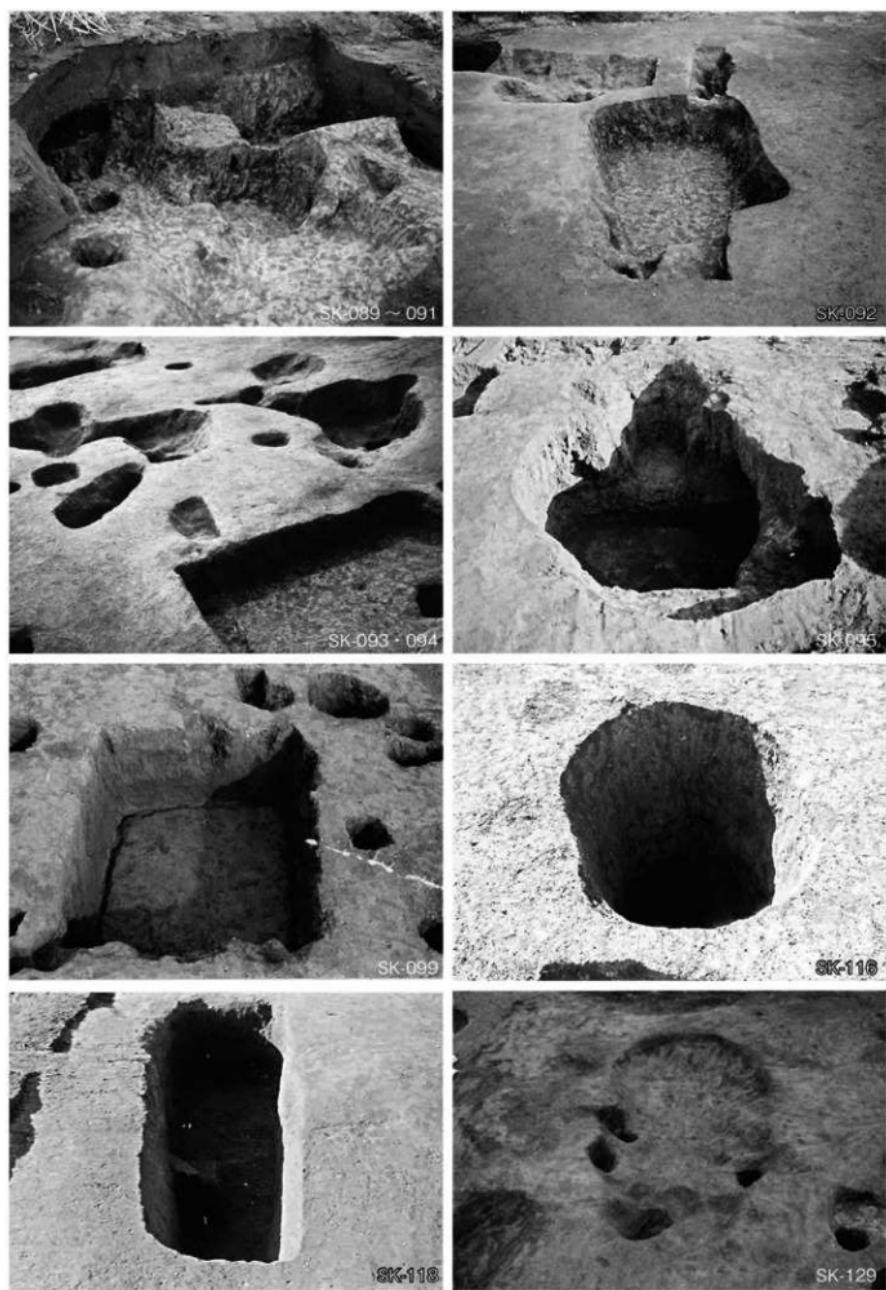


SK-086 ~ 087



SK-088

図版 10





図版 12





4SK-026 · 027



4SK-028 · 029



4SK-030



4SK-031



4SK-032 · 033



4SK-034

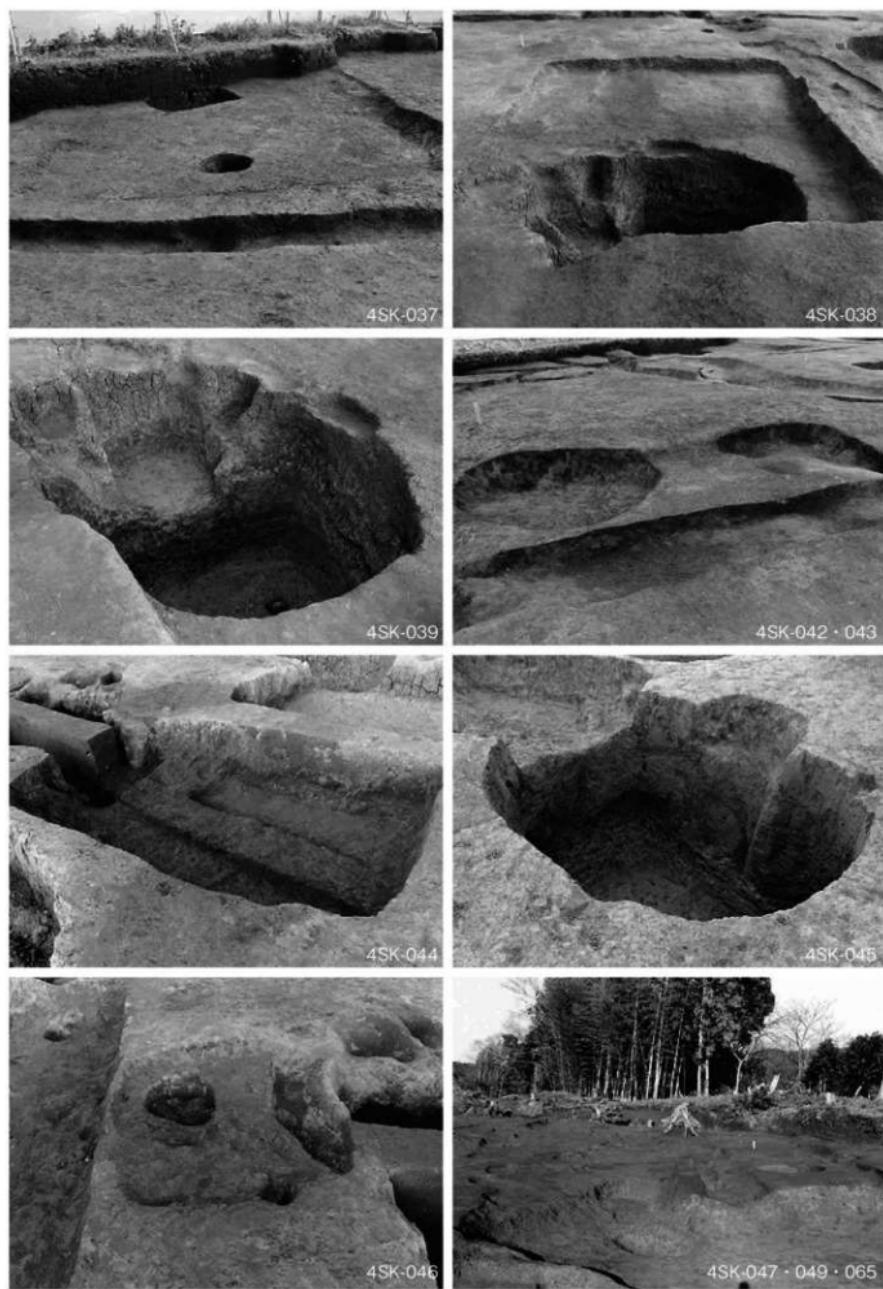


4SK-035



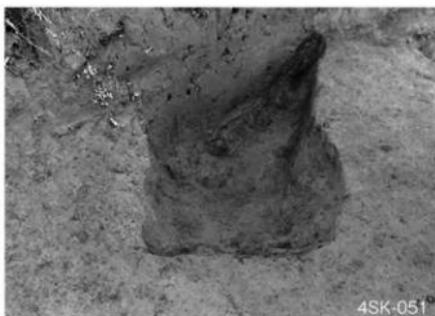
4SK-036

図版 14





4SK-050



4SK-051



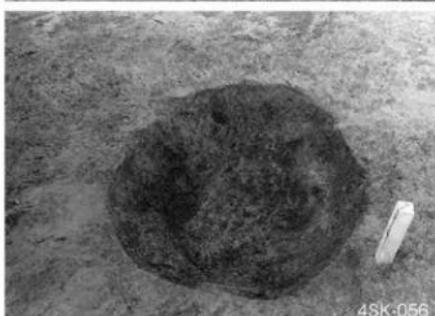
4SK-053



4SK-054



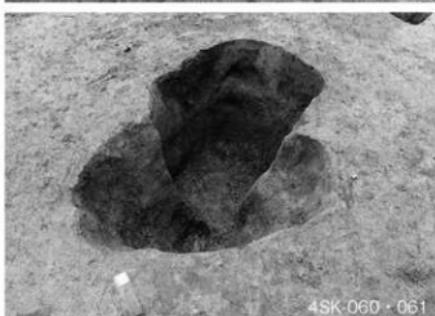
4SK-055



4SK-056

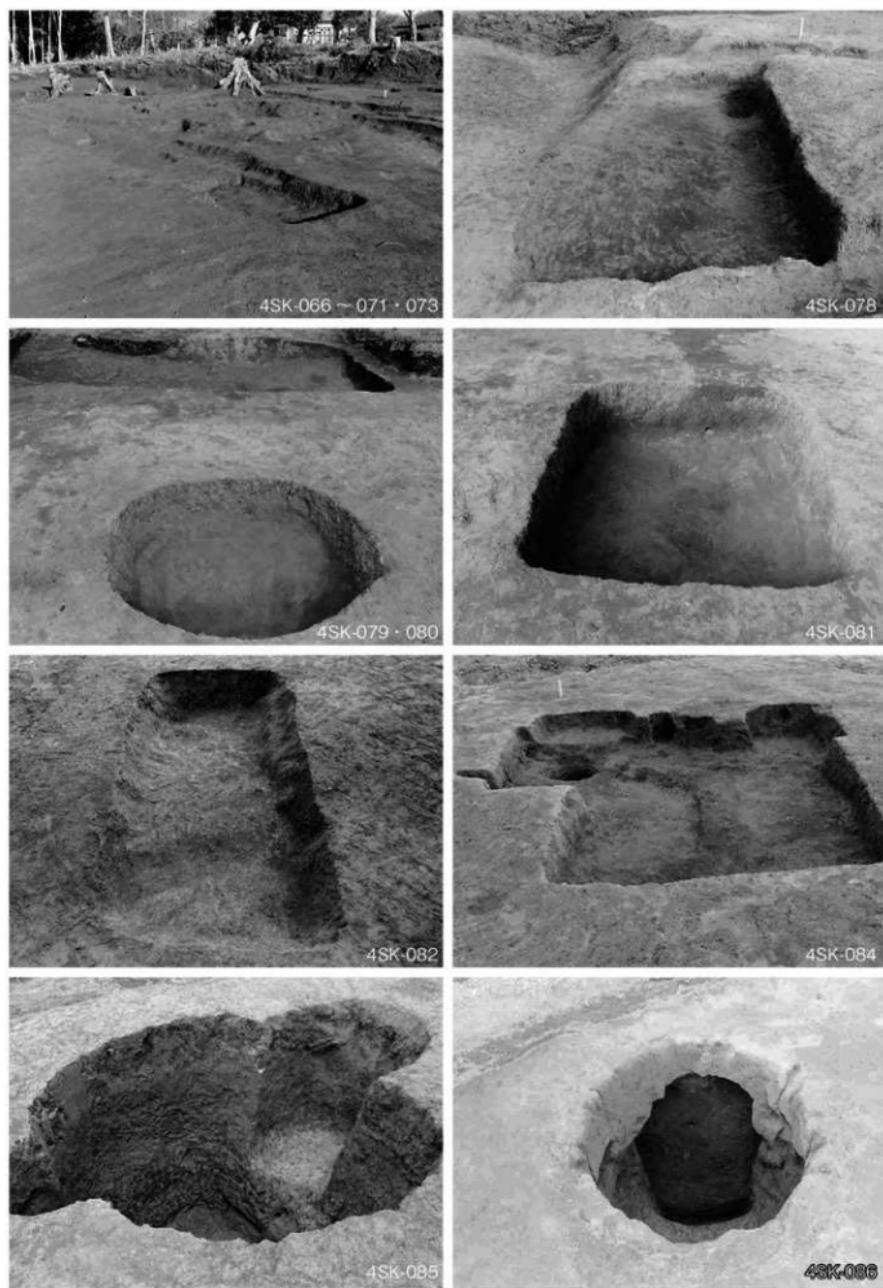


4SK-058 + 062



4SK-060 + 061

図版 16





4SK-087



4SK-088



4SK-089



4SK-090



4SK-091



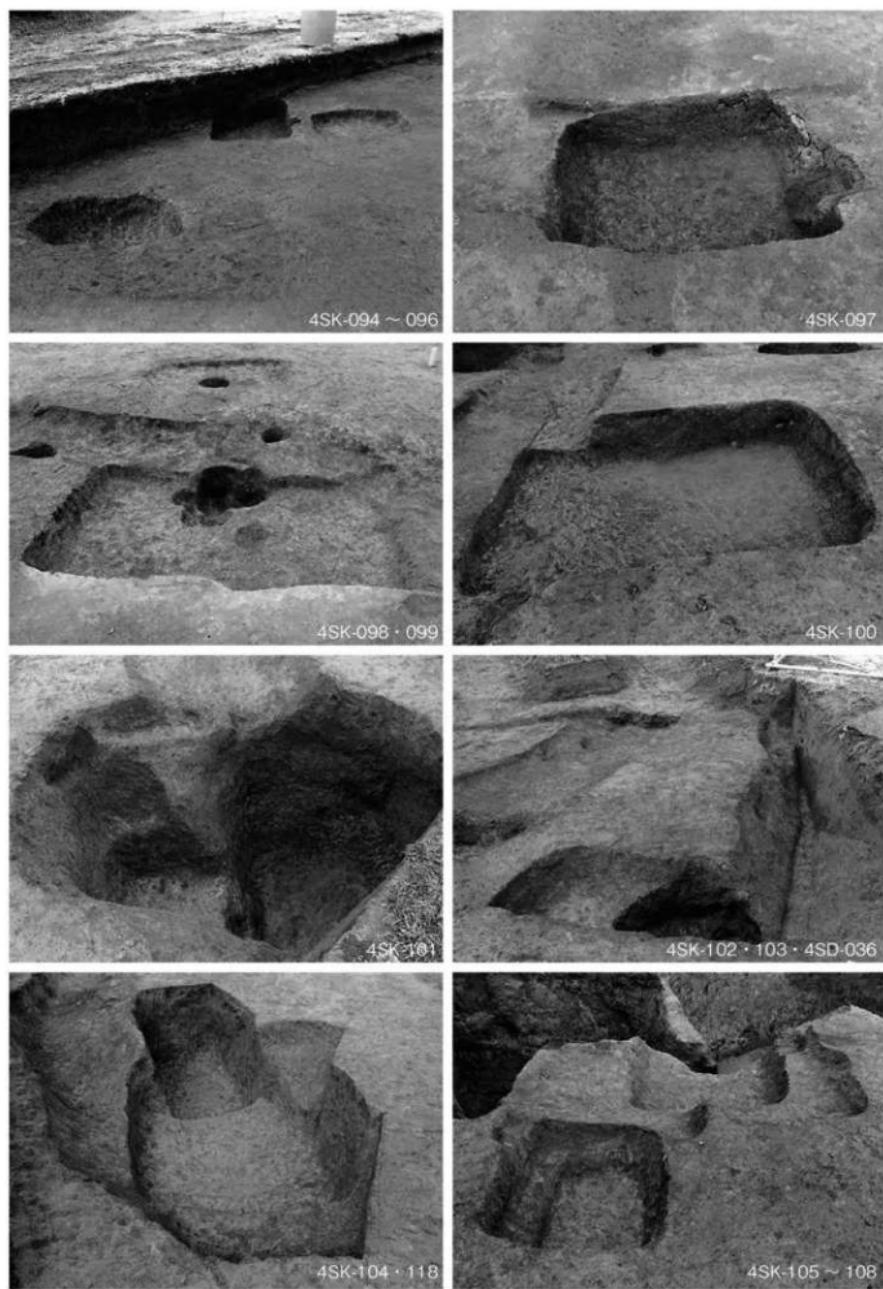
4SK-092 入口部部分状況

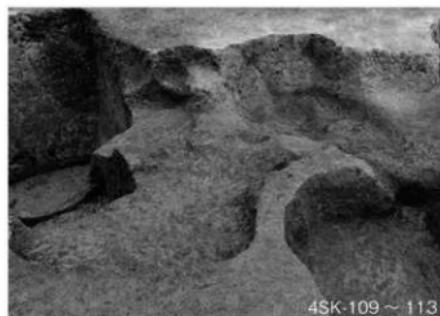


4SK-092 出土物状況



4SK-092 底部状況

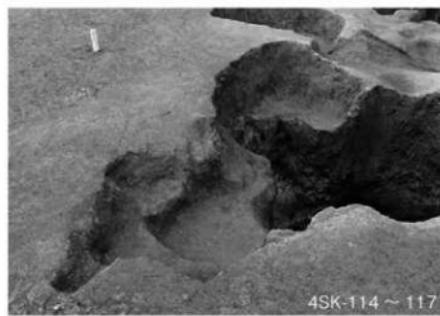




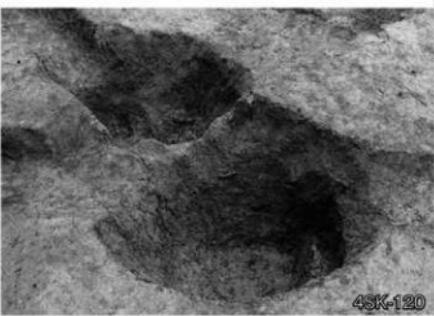
4SK-109 ~ 113



4SK-111



4SK-114 ~ 117



4SK-120



6SK-126



6SK-128

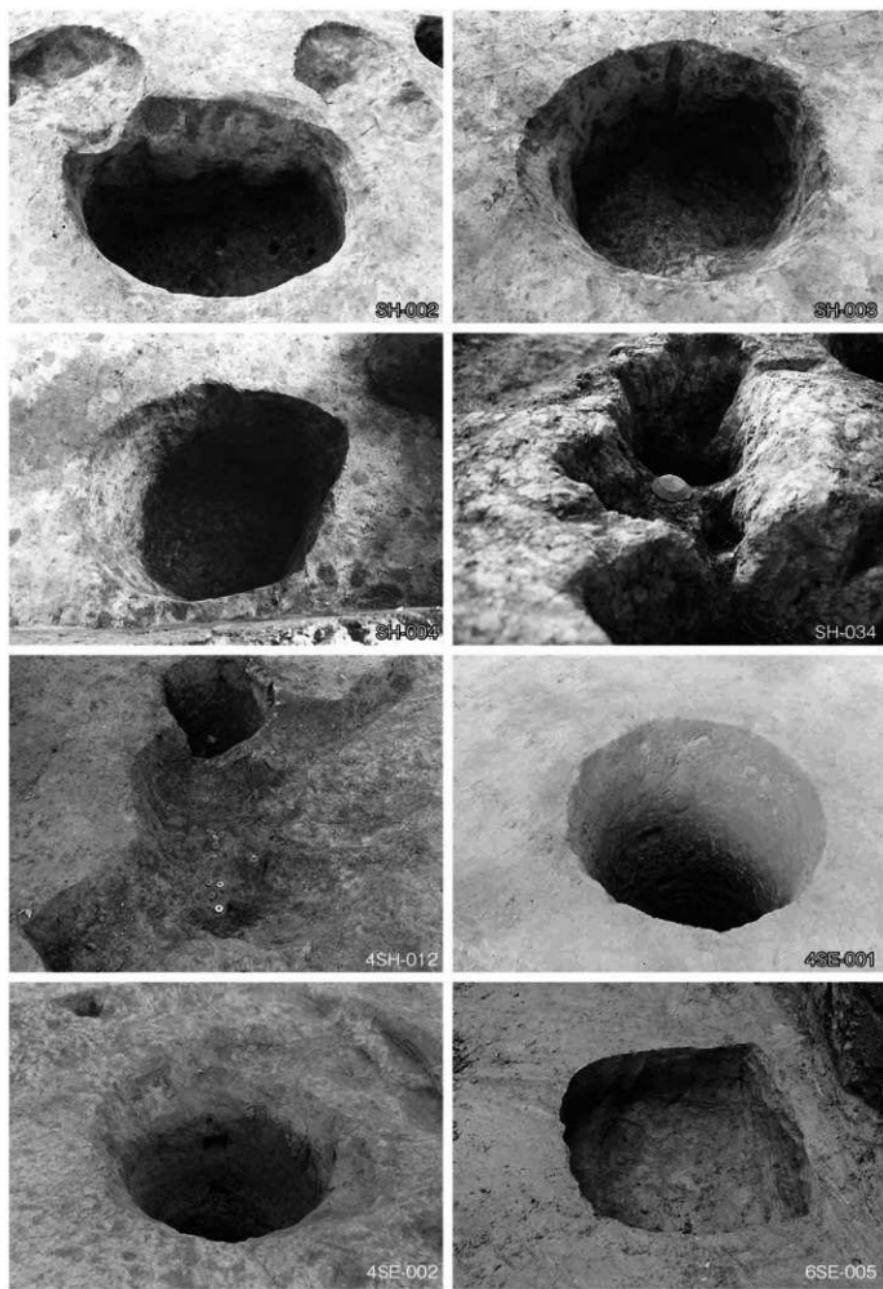


6SK-129



6SK-133

図版 20





SB-001



SB-002 ~ 007



4SB-001



SA-002



2SA-001



2SA-002



土壘 (SA-001)
調査前状況 (1)



土壘 (SA-001)
調査前状況 (2)



土壘 (SA-001)
土層断面



堀 (SD-027) (1)



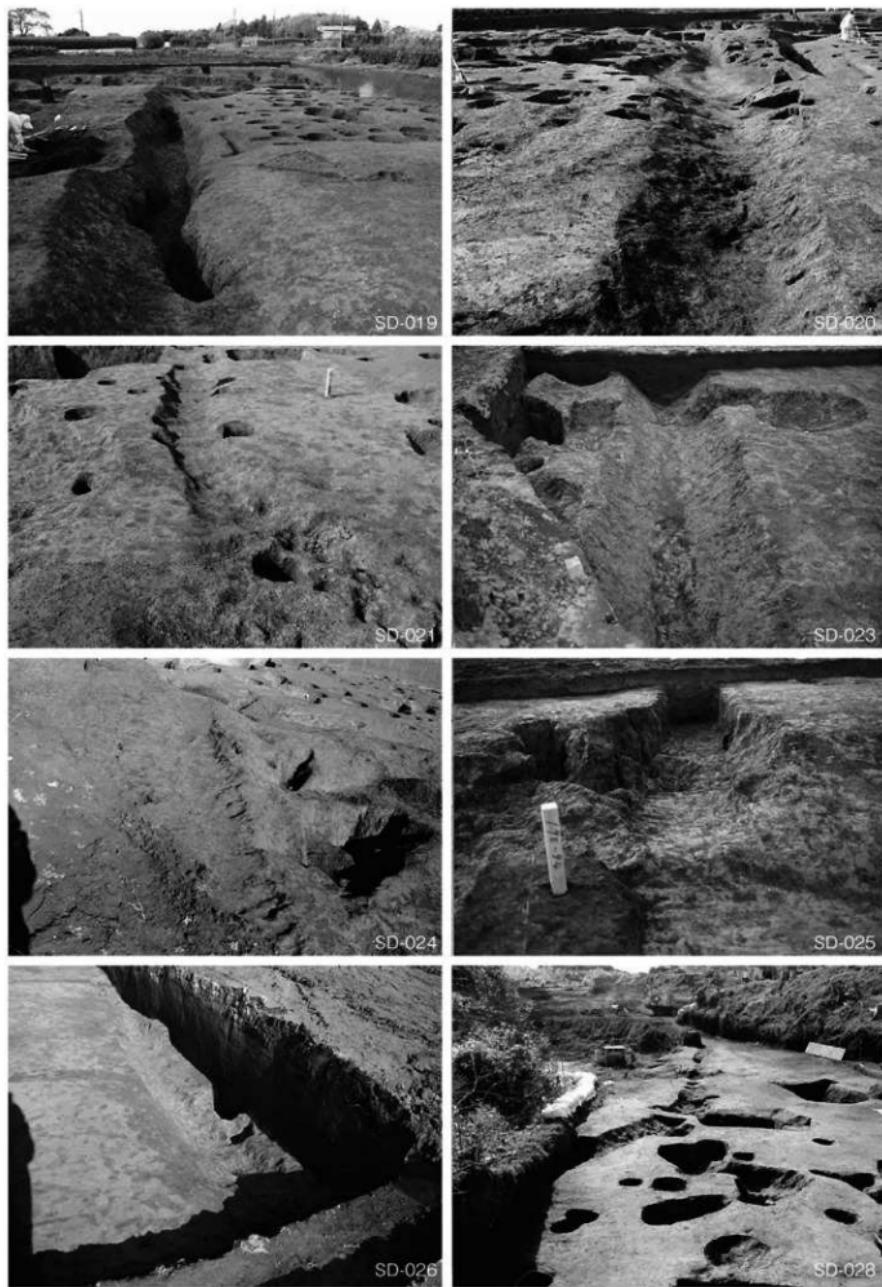
堀 (SD-027) (2)



堀 (SD-027) (3)



図版 26

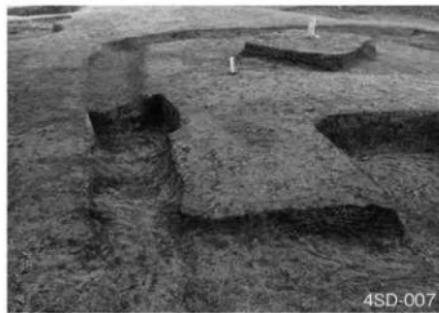




SD-030



4SD-006



4SD-007



4SD-010



4SD-013・019



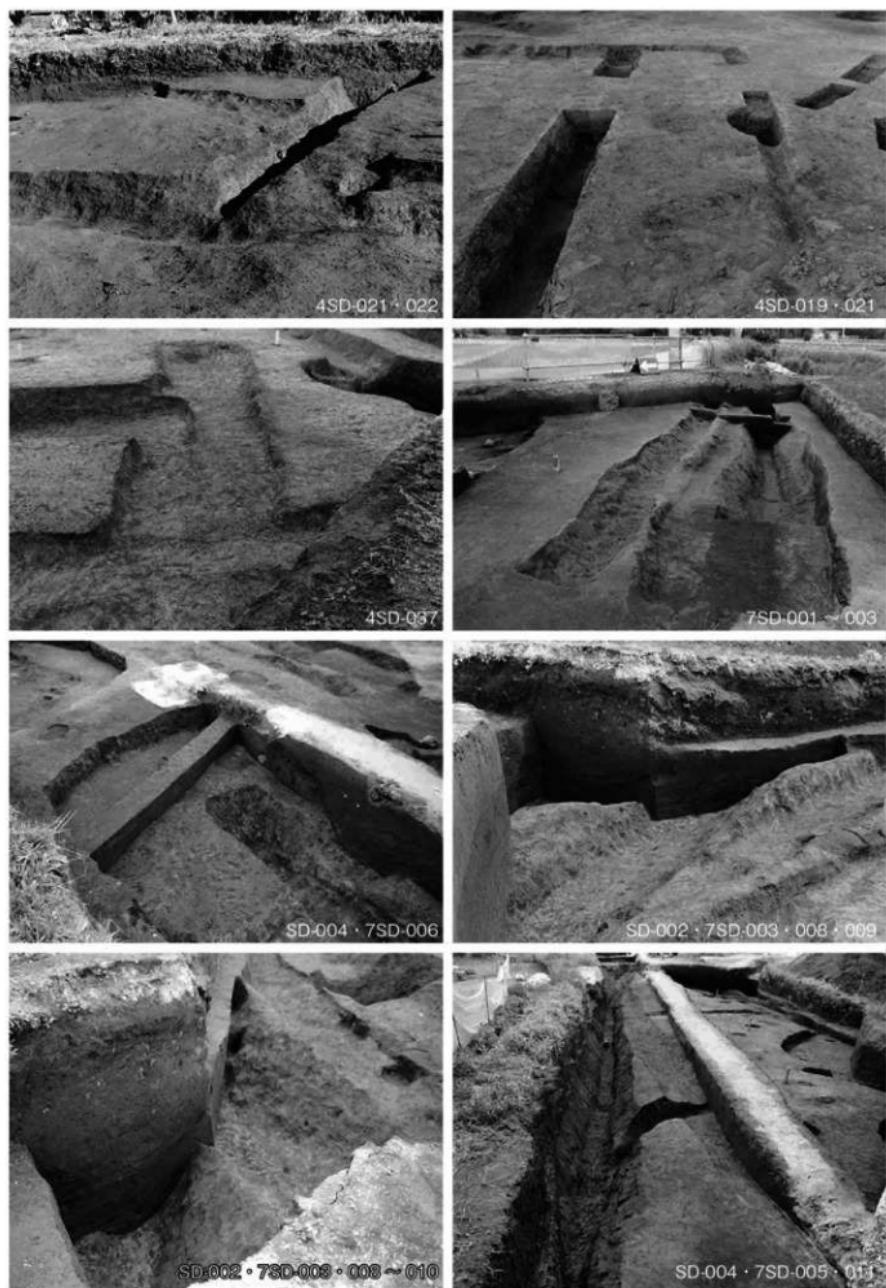
4SD-018

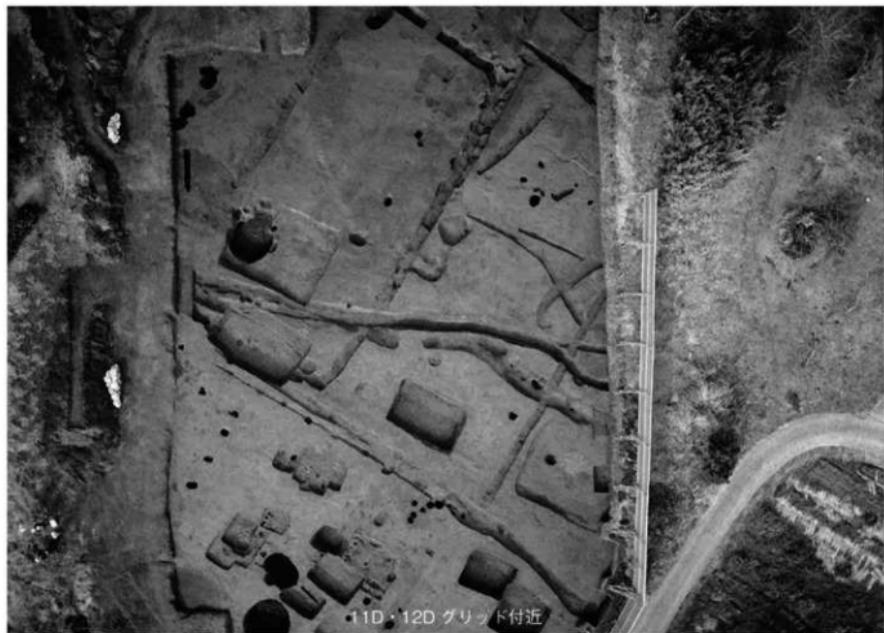


4SD-019・034



4SD-020





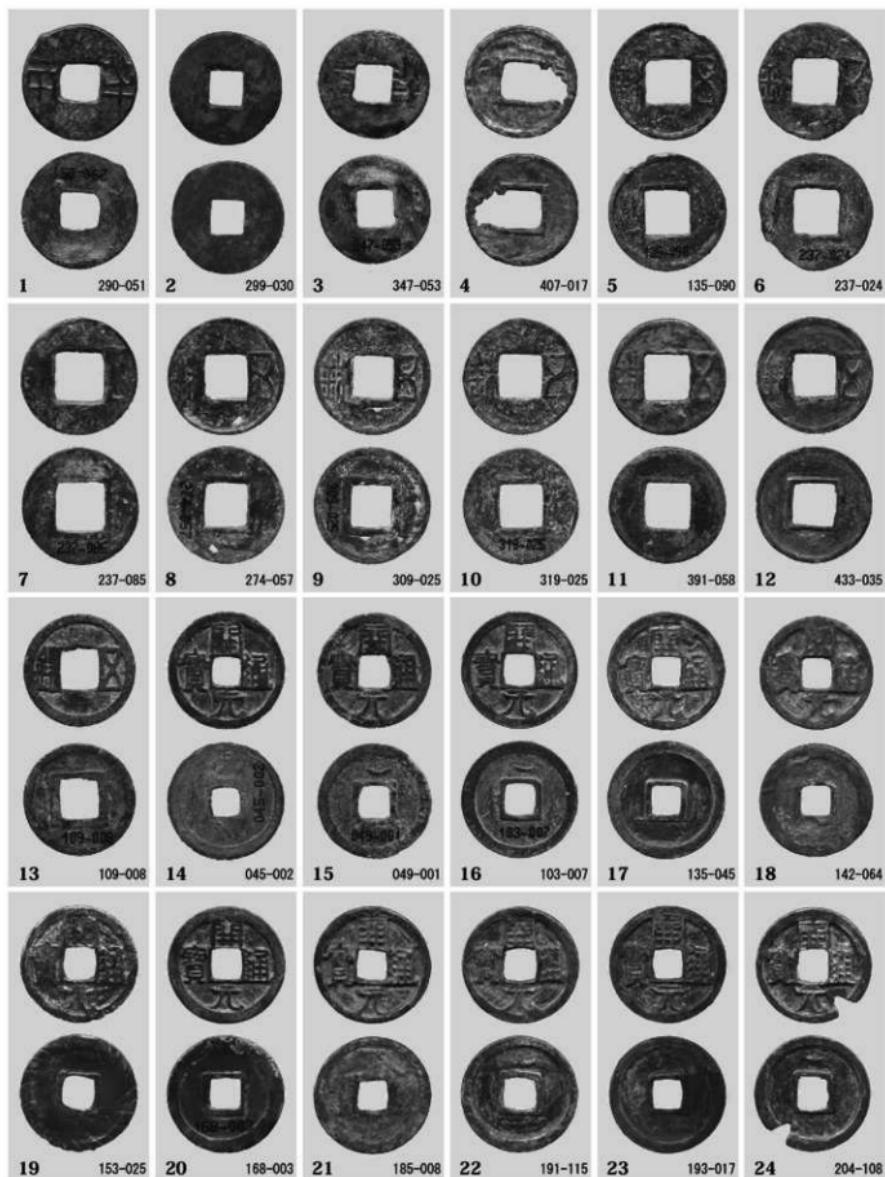


14C・14D グリッド付近



19E・19F・20E・20F・21F・22F グリッド付近





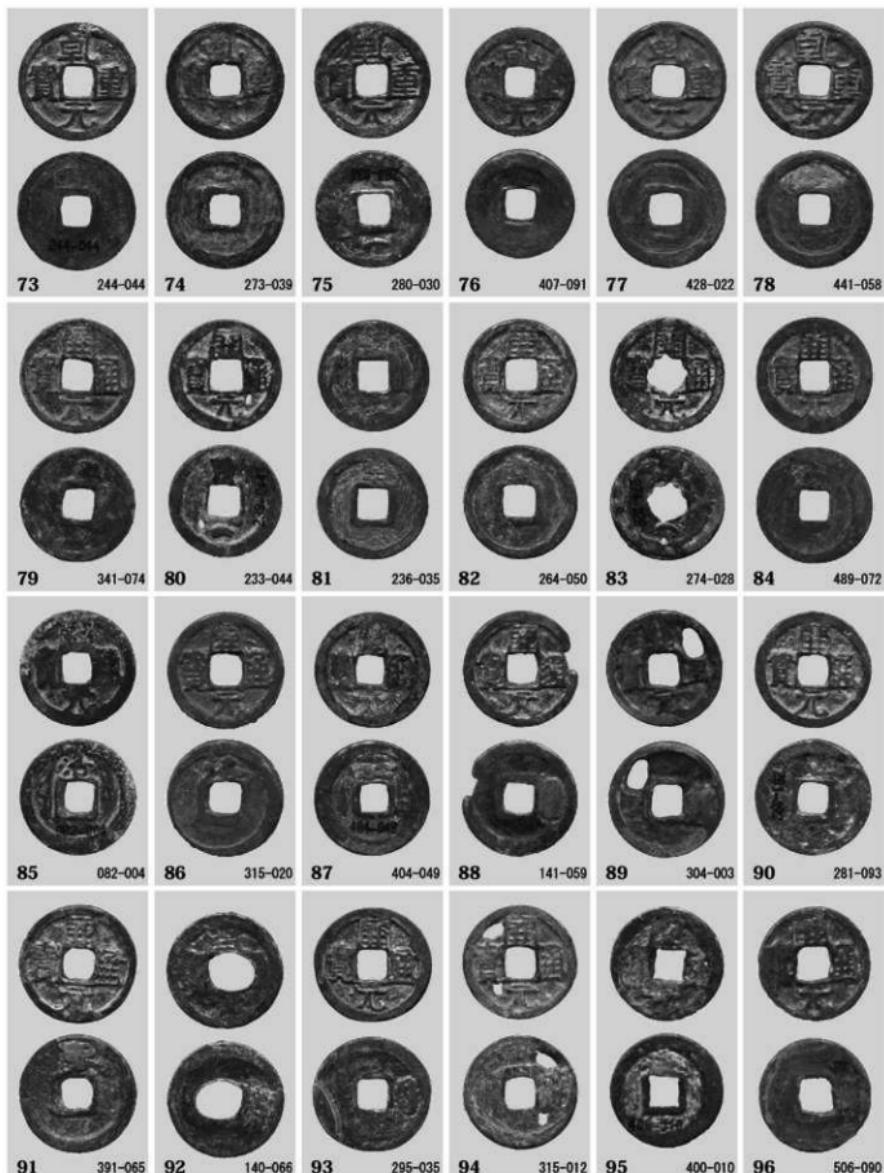
4SK-014 出土錢貨（1）



4SK-014 出土銭貨（2）



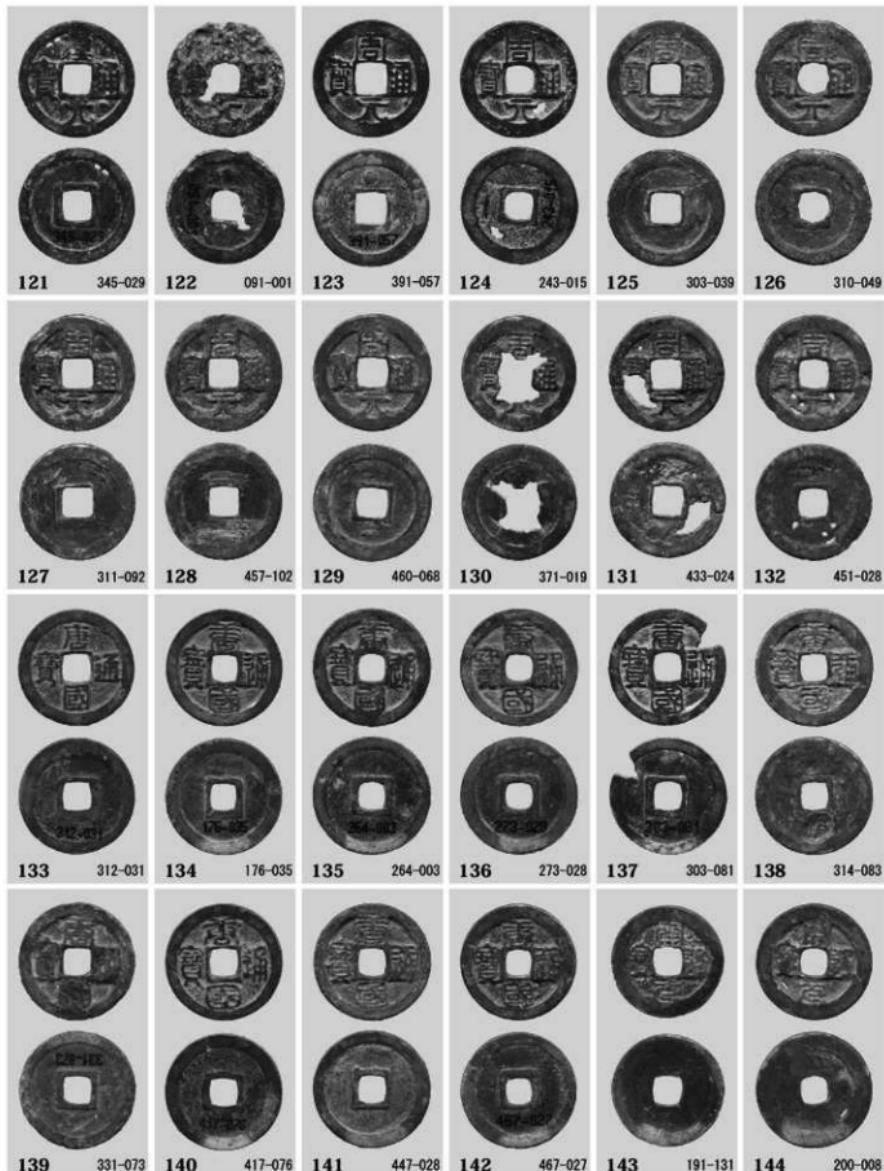
4SK-014 出土錢寶 (3)



4SK-014 出土銭貨（4）



4SK-014 出土錢貨（5）



4SK-014 出土銭貨（6）



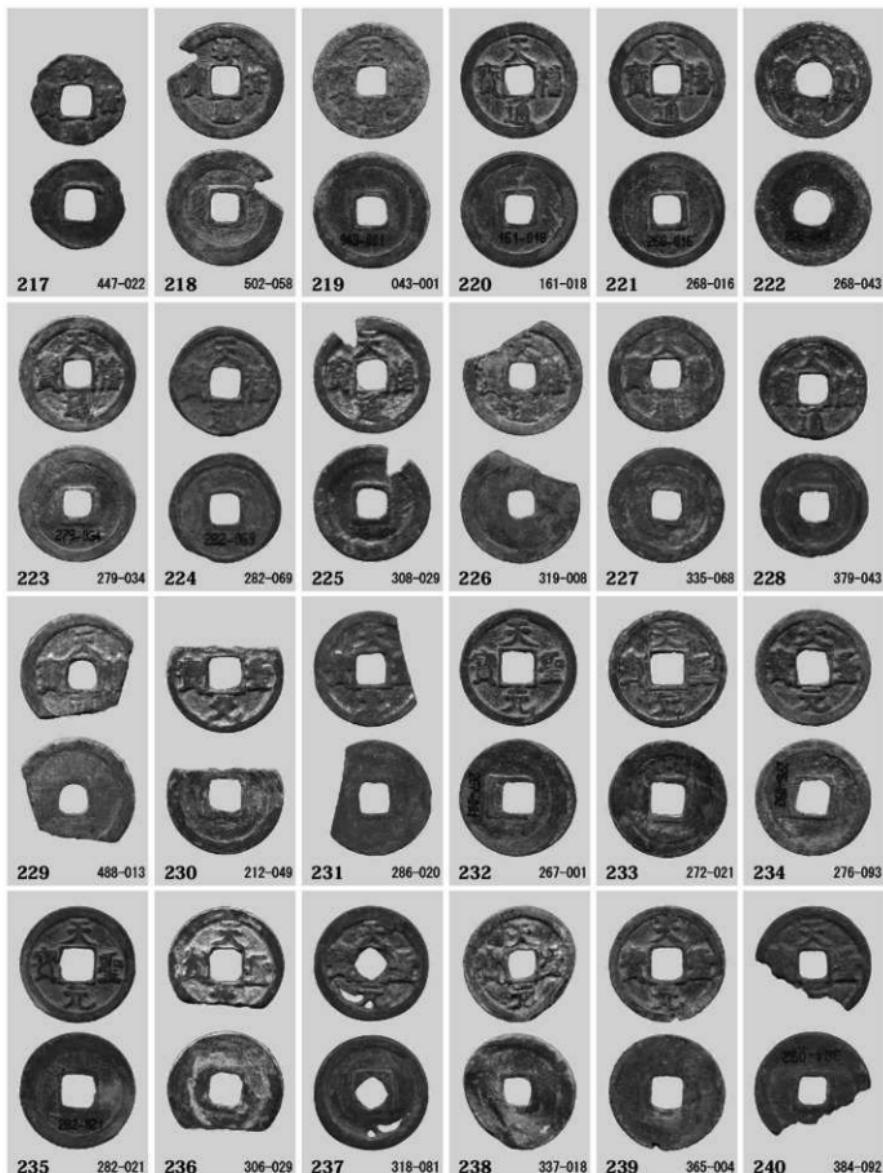
4SK-014 出土錢貨 (7)



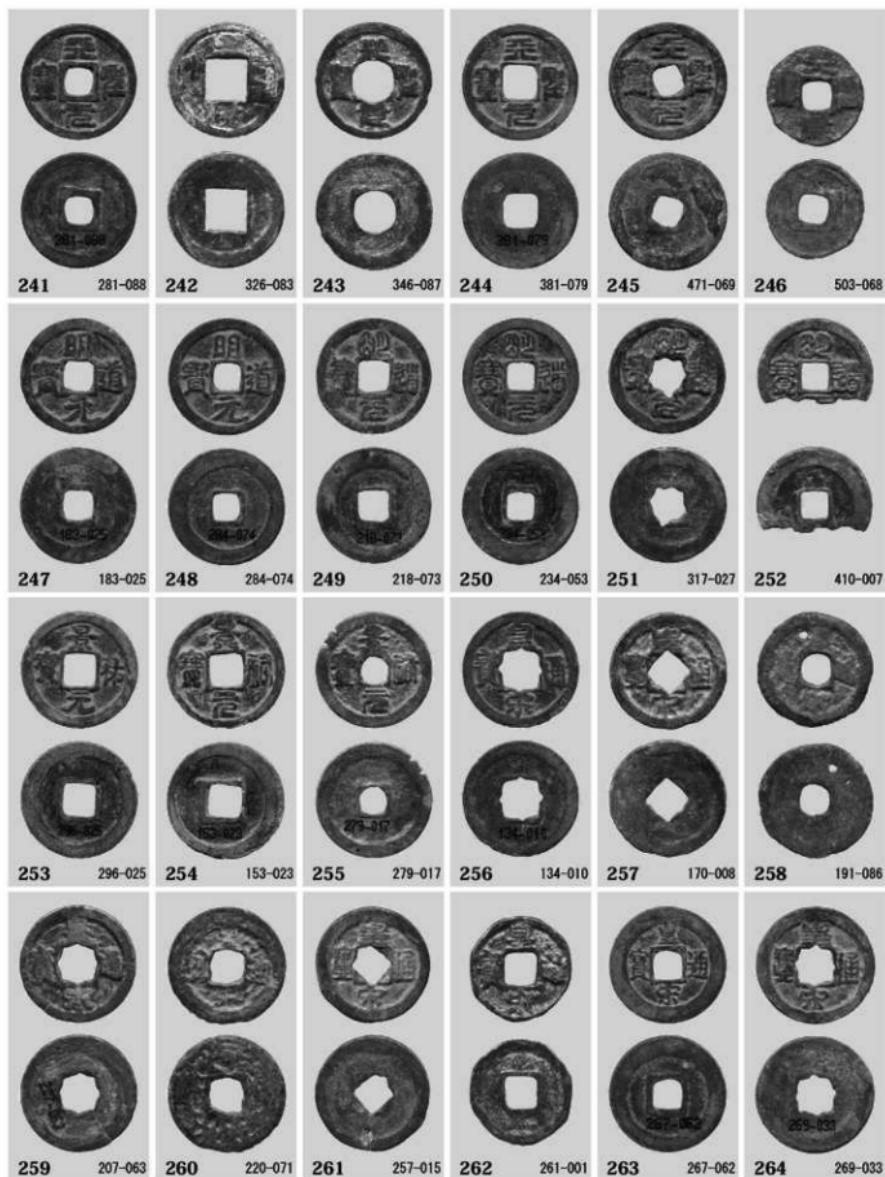
4SK-014 出土銭貨（8）



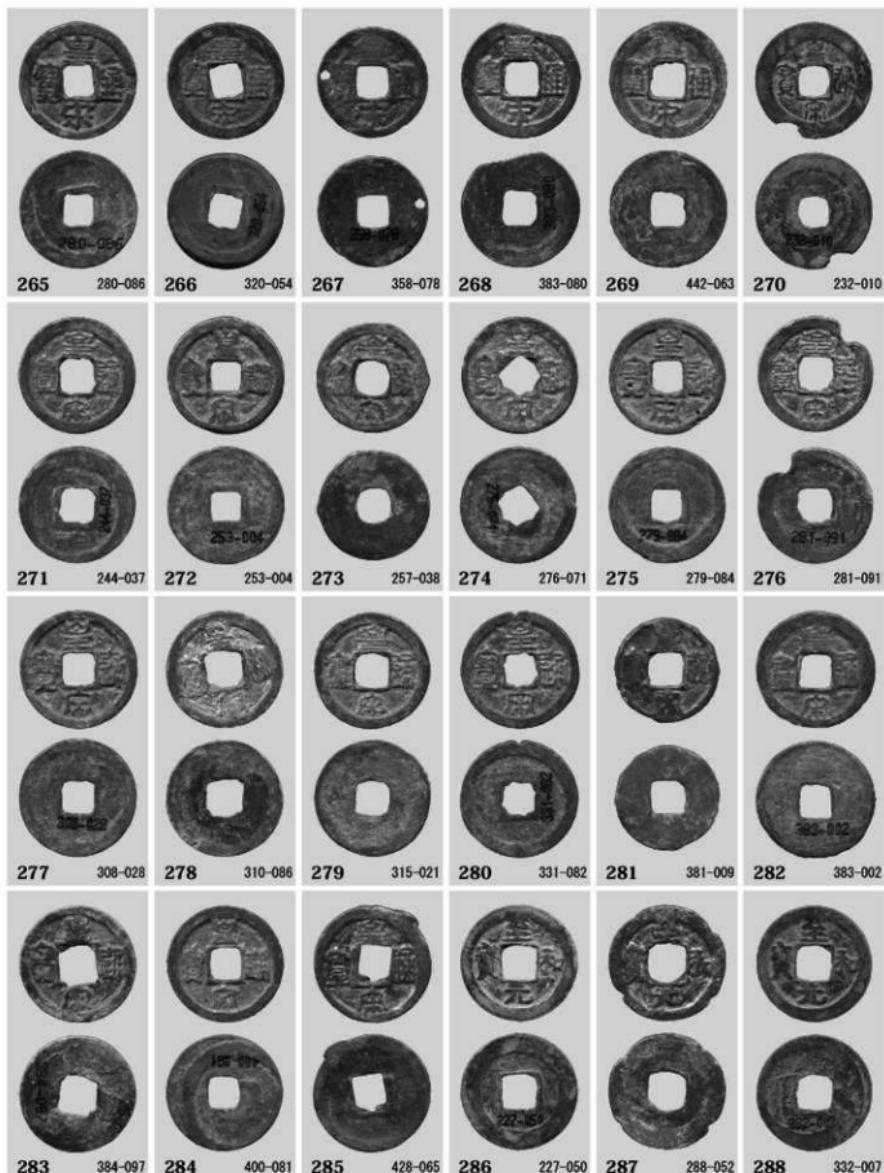
4SK-014 出土錢貨（9）



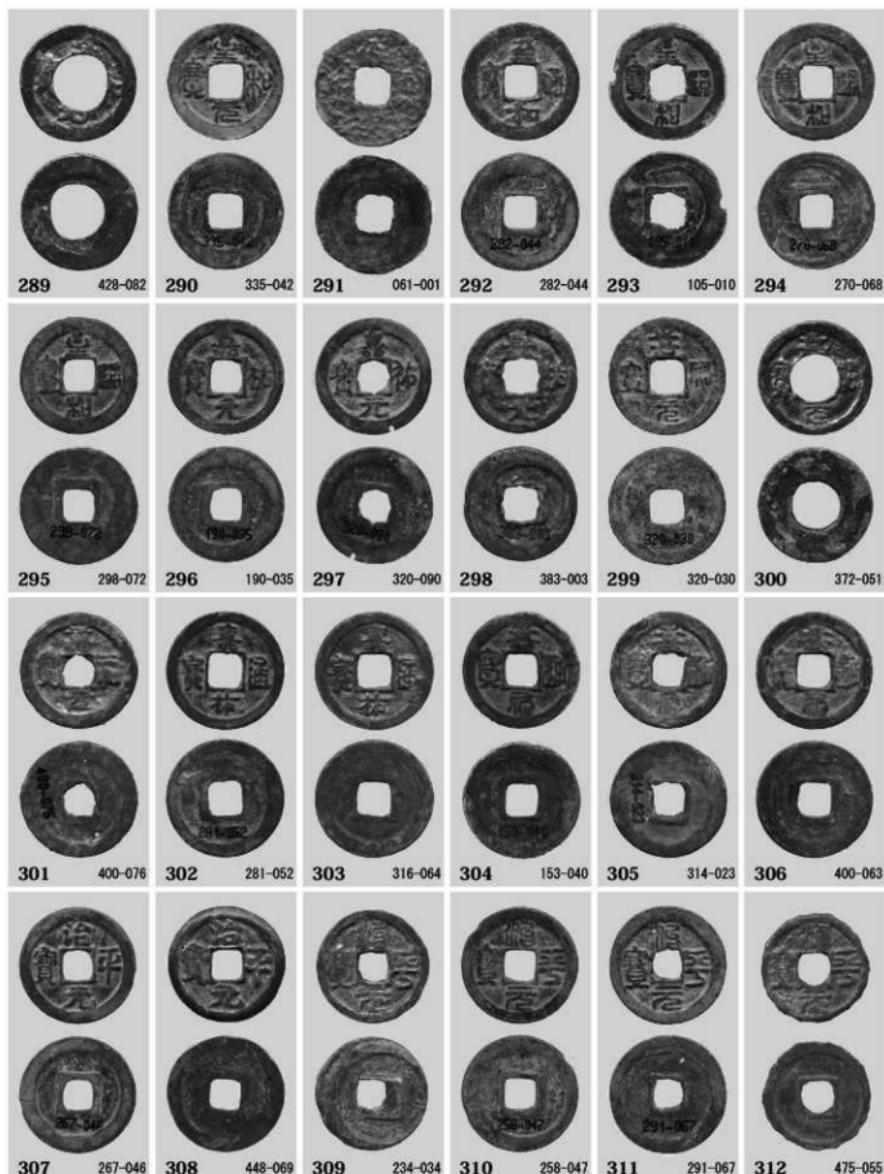
4SK-014 出土銭貨 (10)



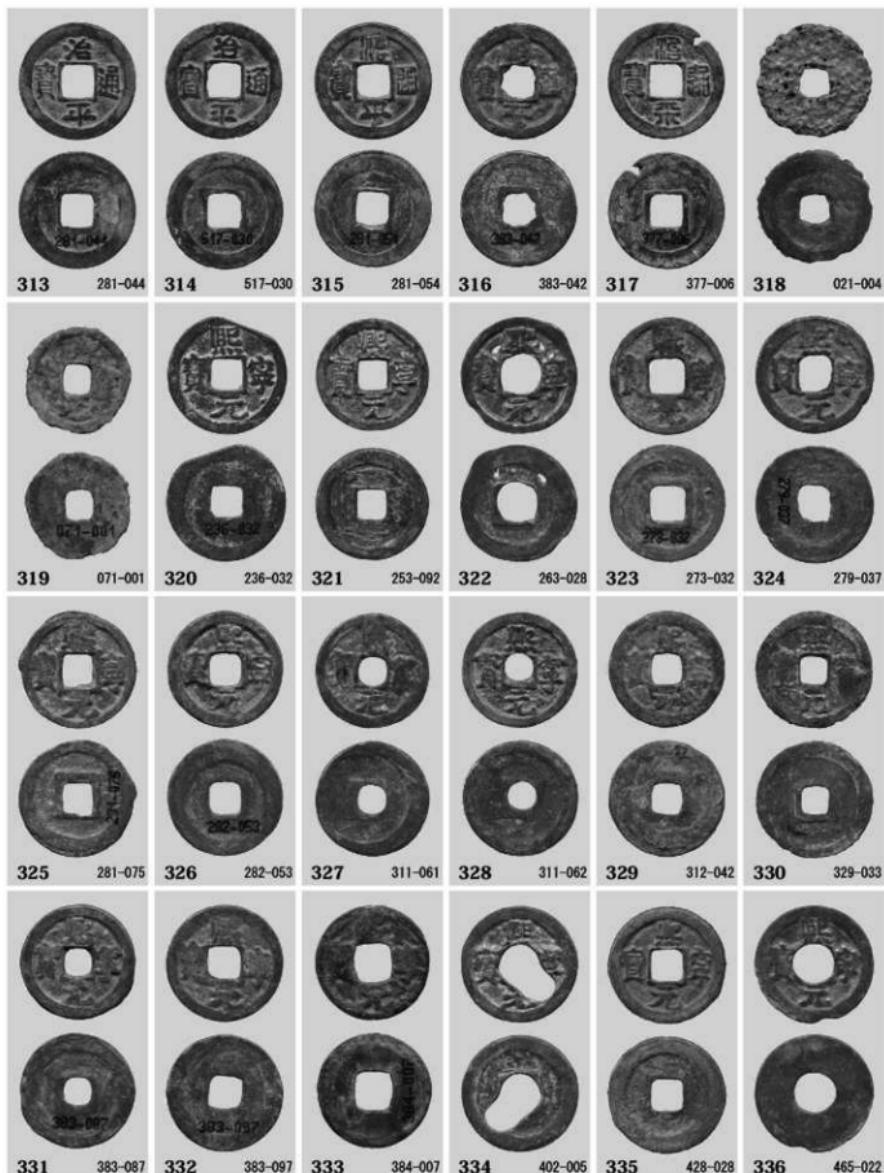
4SK-014 出土錢貨 (11)



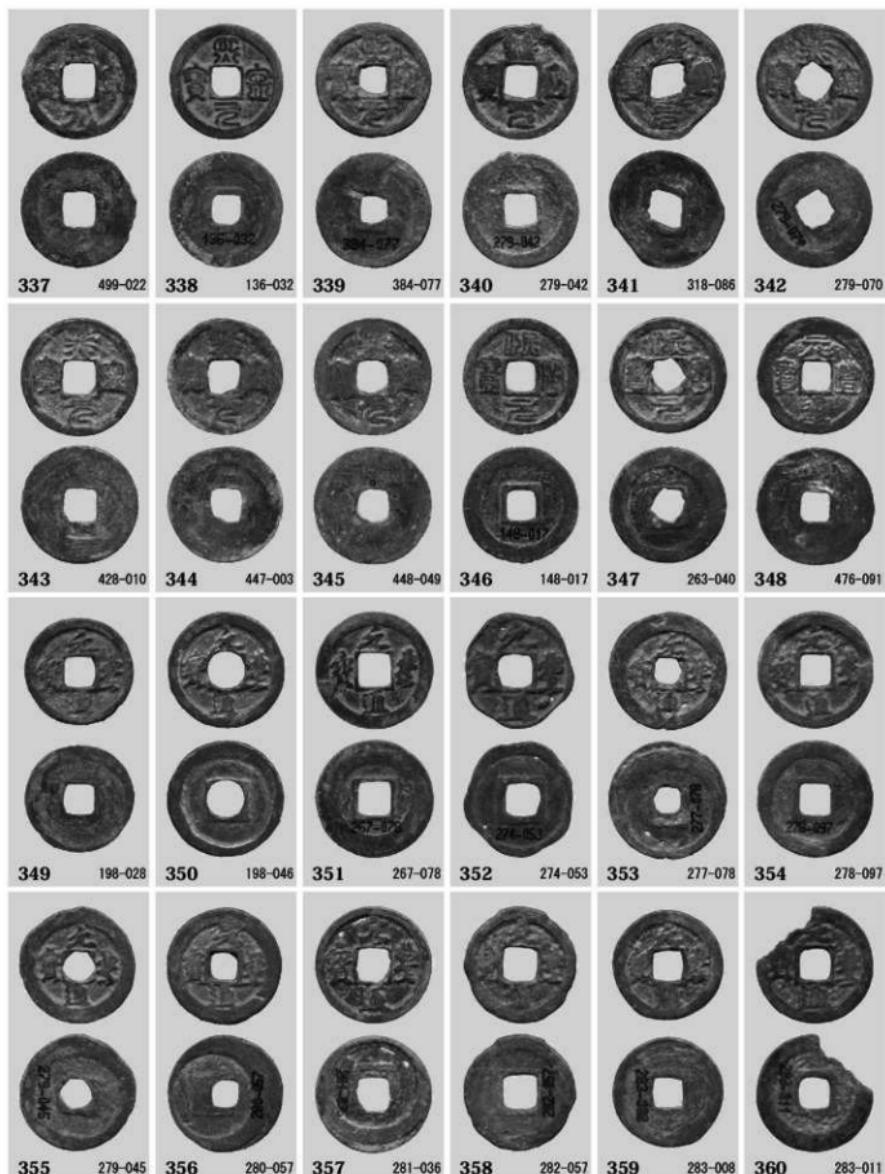
4SK-014 出土銭貨 (12)



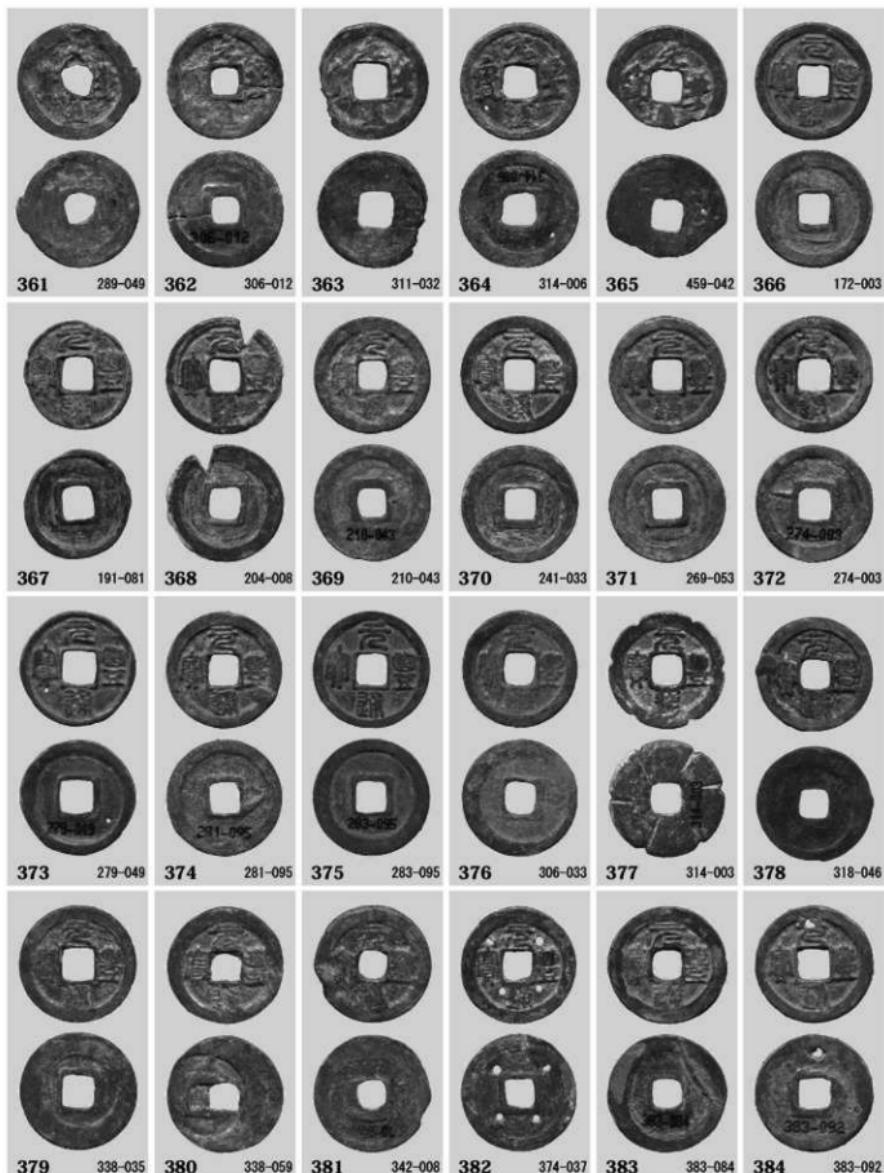
4SK-014 出土錢貨 (13)



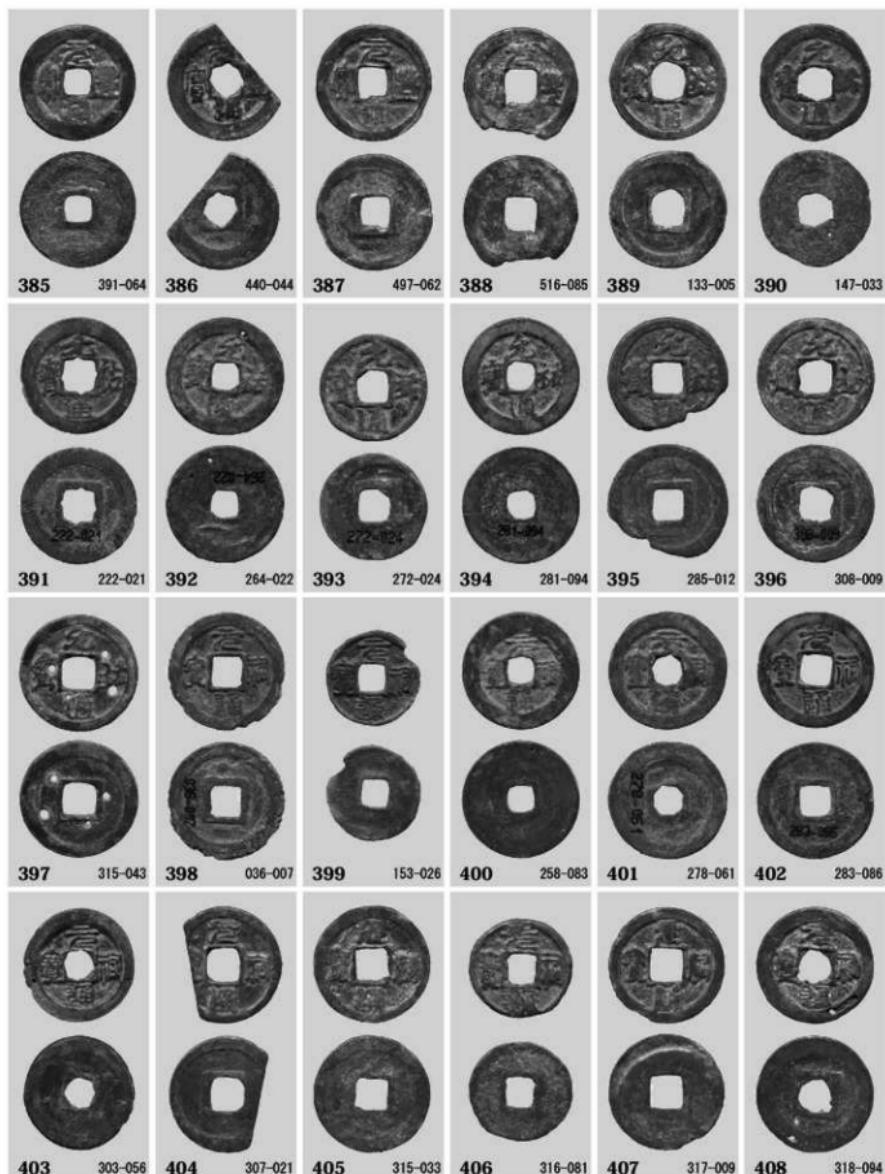
4SK-014 出土銭貨 (14)



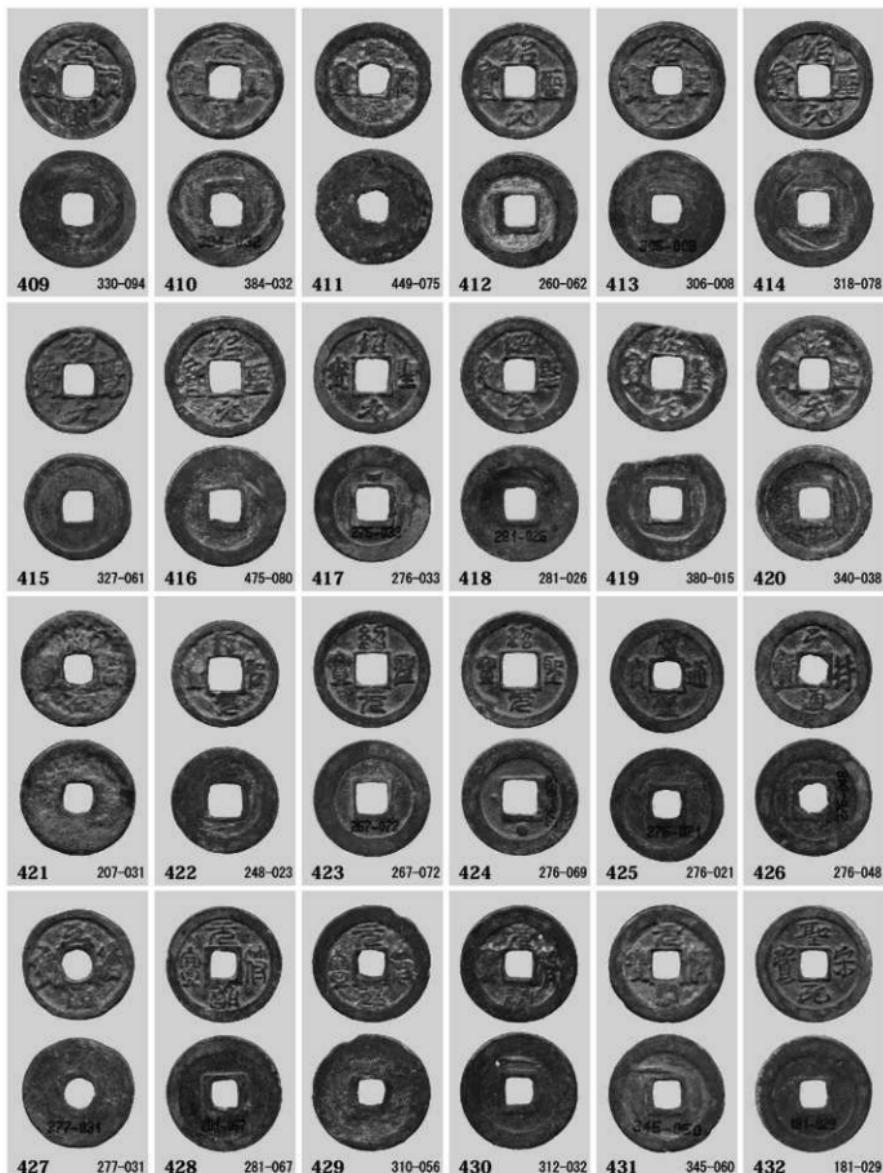
4SK-014 出土錢貨 (15)



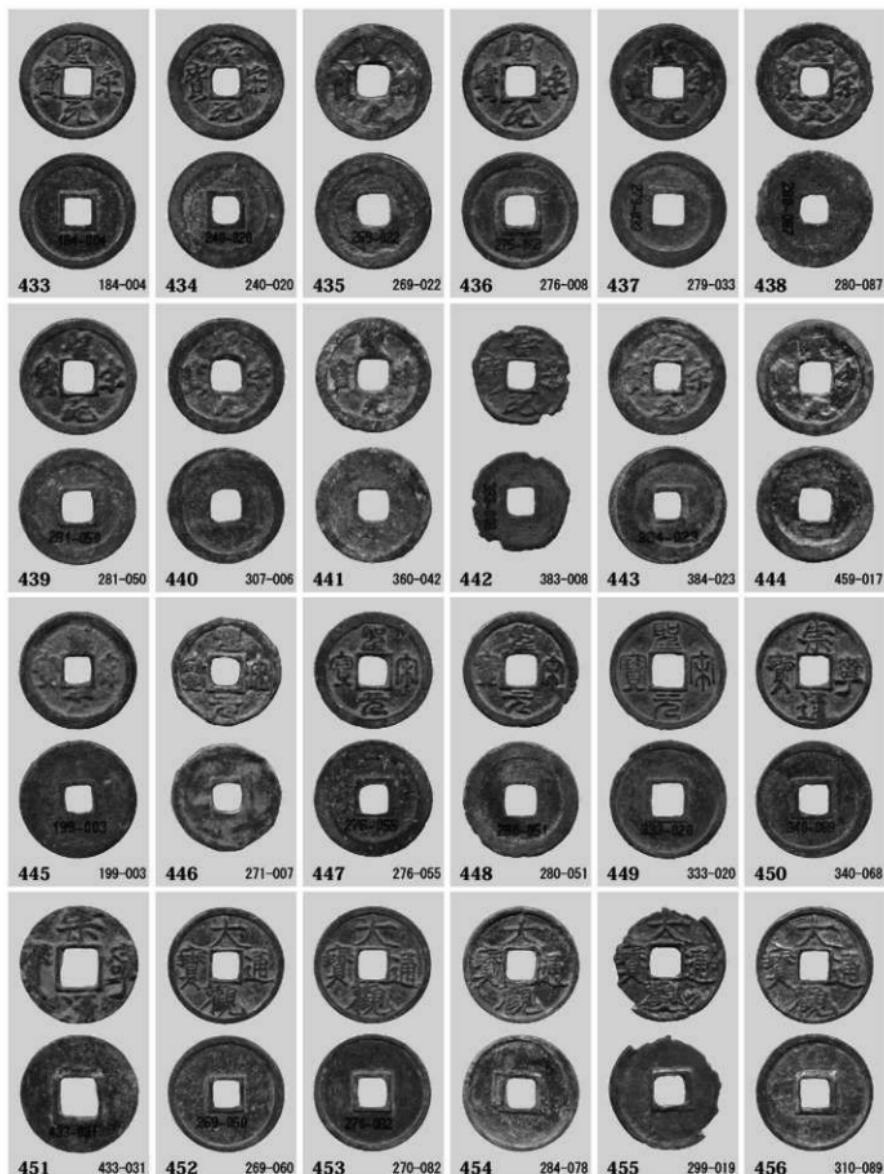
4SK-014 出土銭貨 (16)



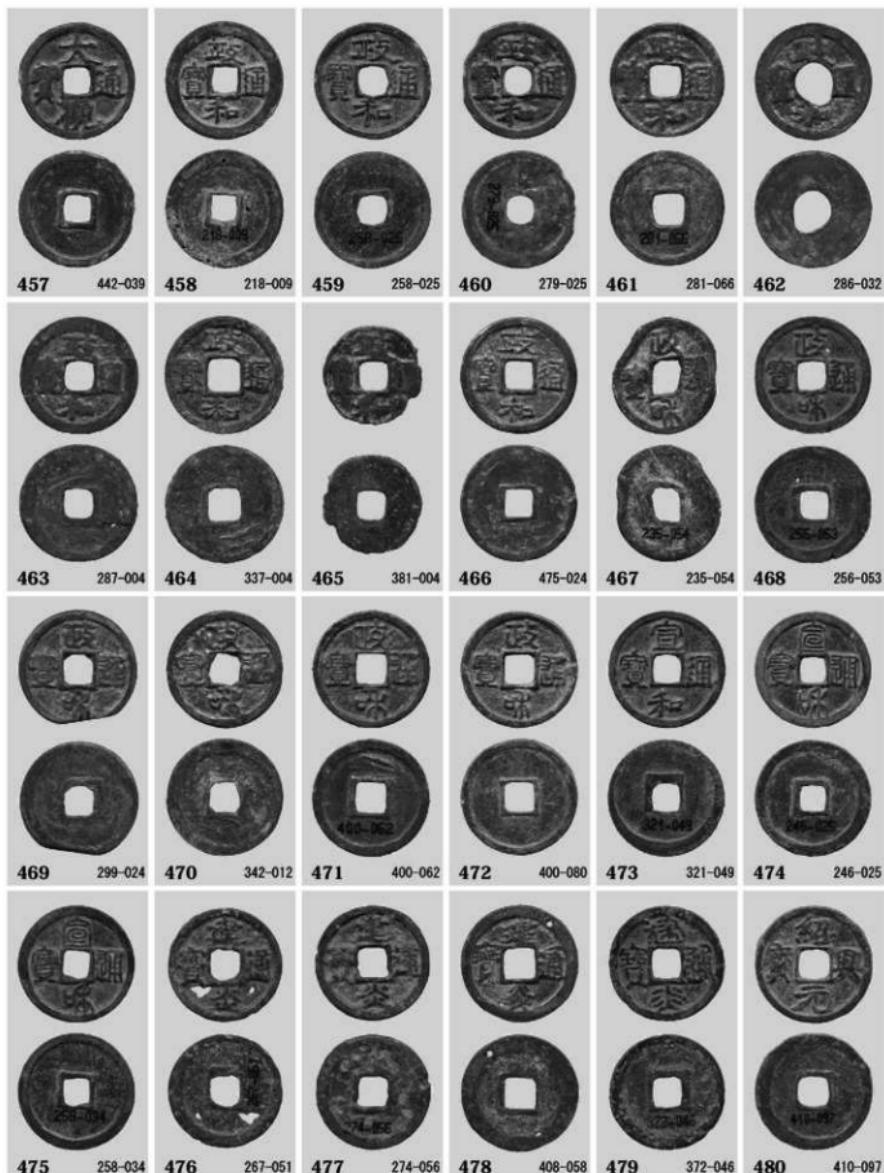
4SK-014 出土錢貨 (17)



4SK-014 出土銭貨 (18)



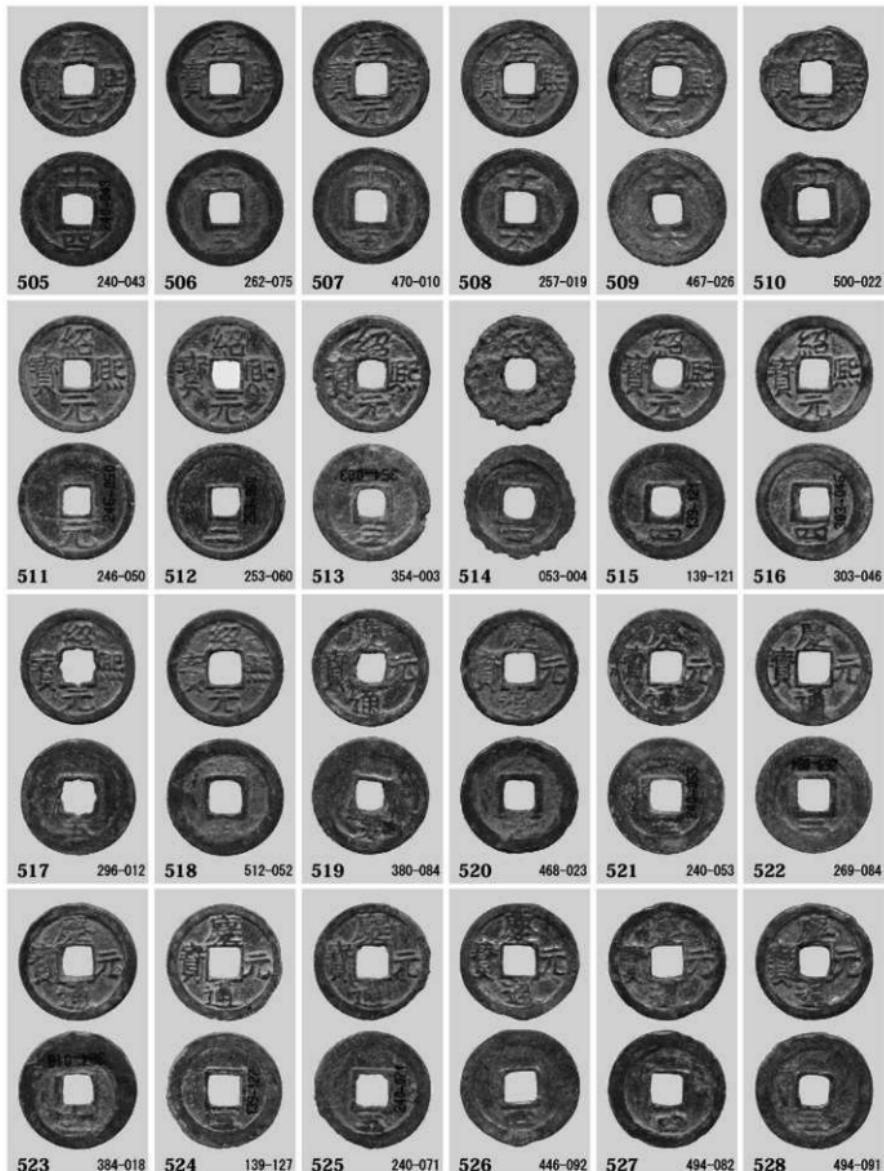
4SK-014 出土錢貨 (19)



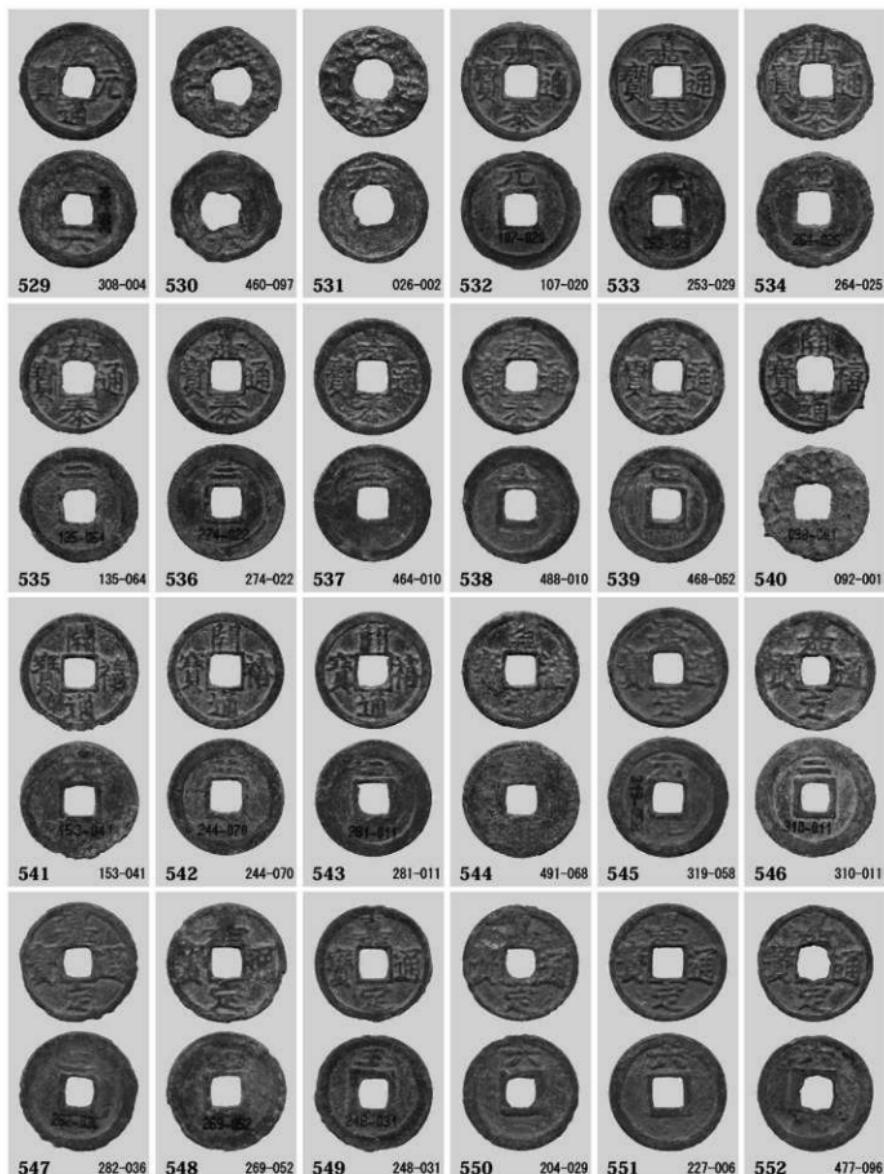
4SK-014 出土銭貨 (20)



4SK-014 出土錢貨 (21)



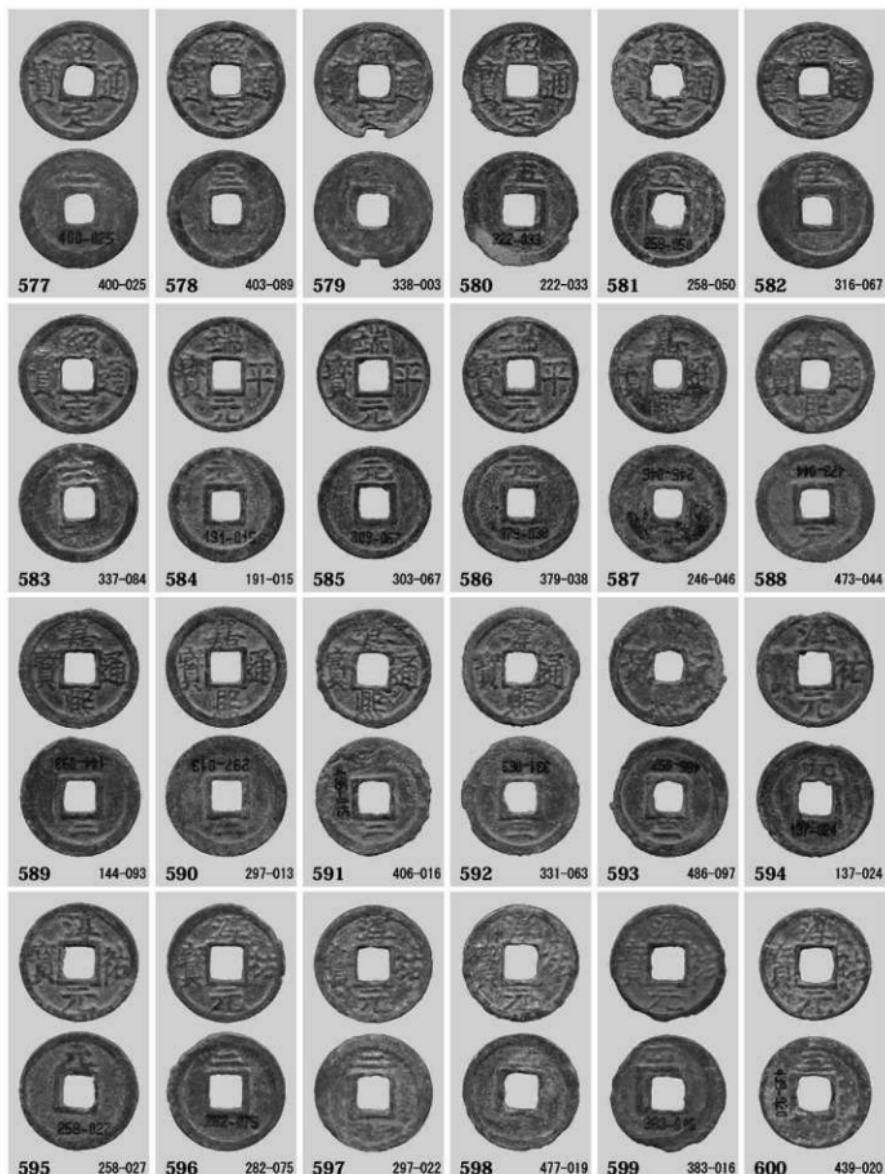
4SK-014 出土銭貨 (22)



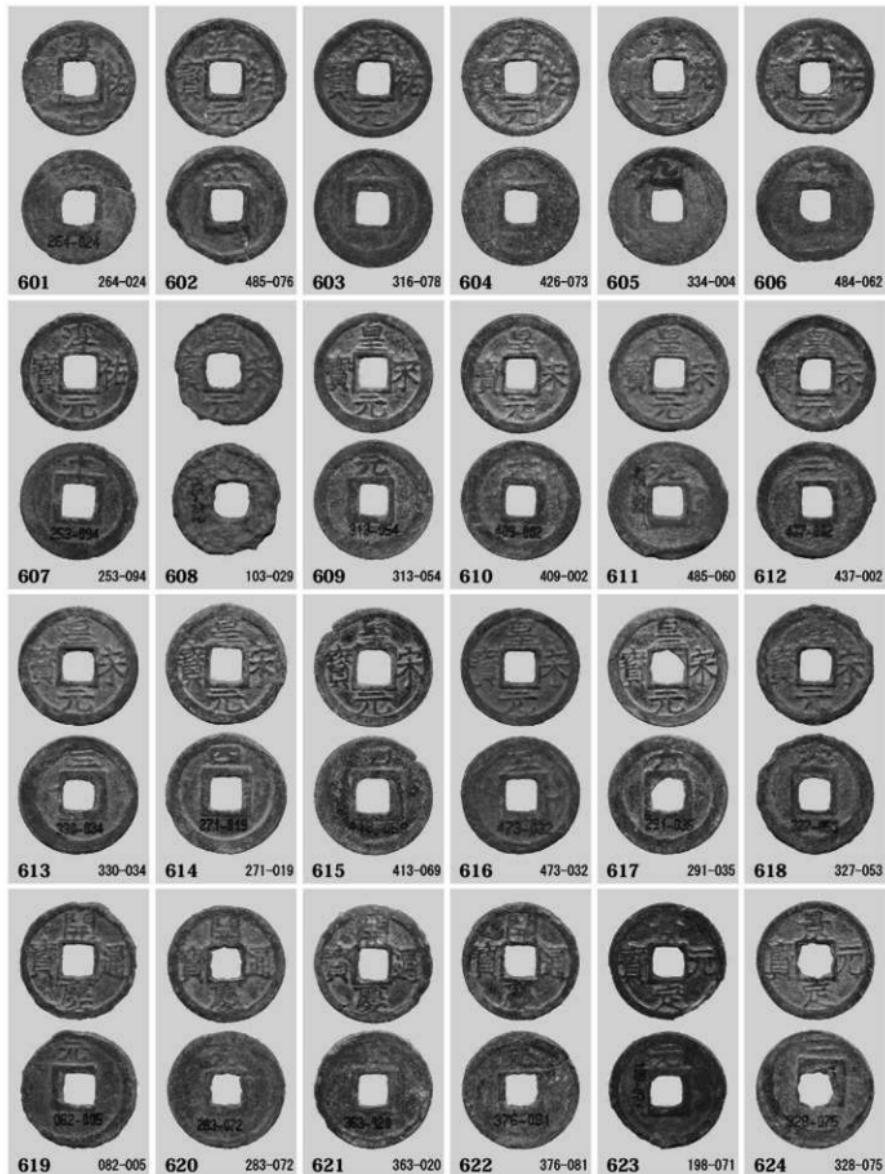
4SK-014 出土錢寶 (23)



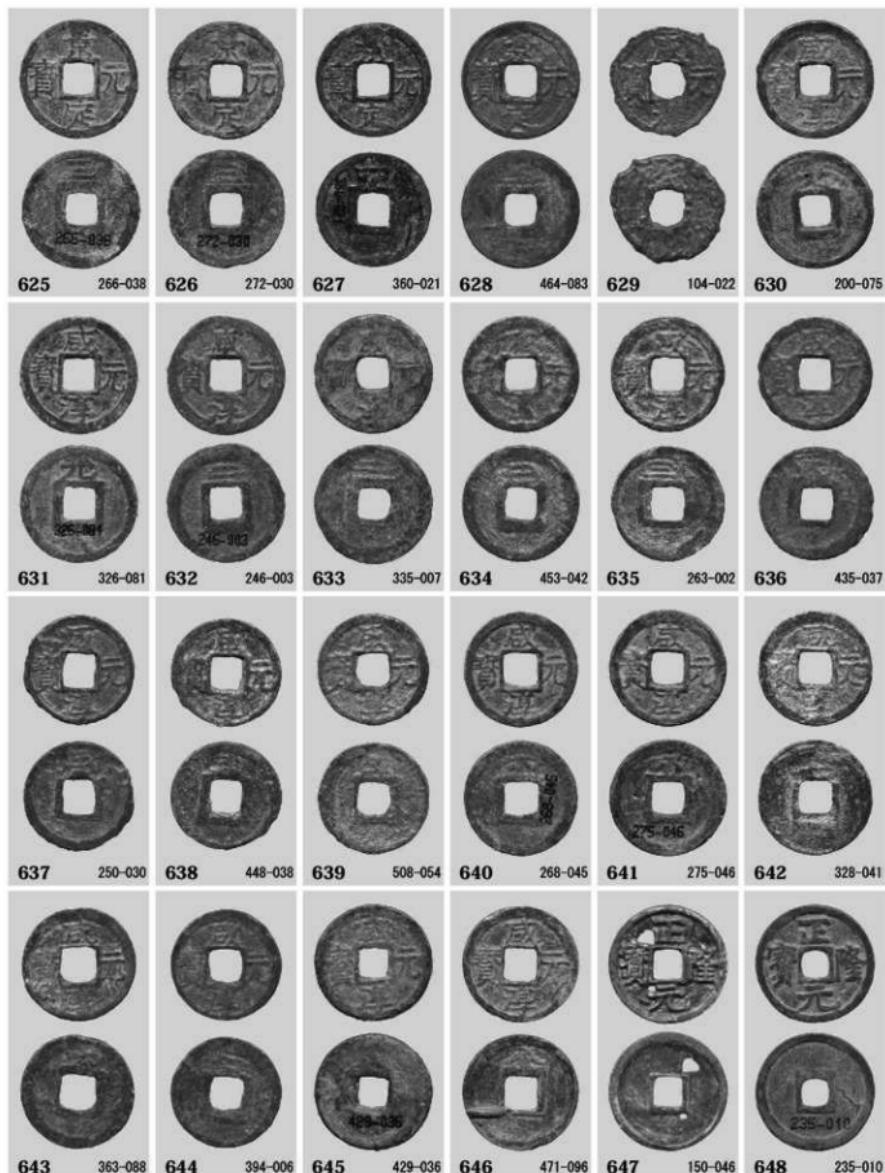
4SK-014 出土銭貨 (24)



4SK-014 出土錢貨 (25)



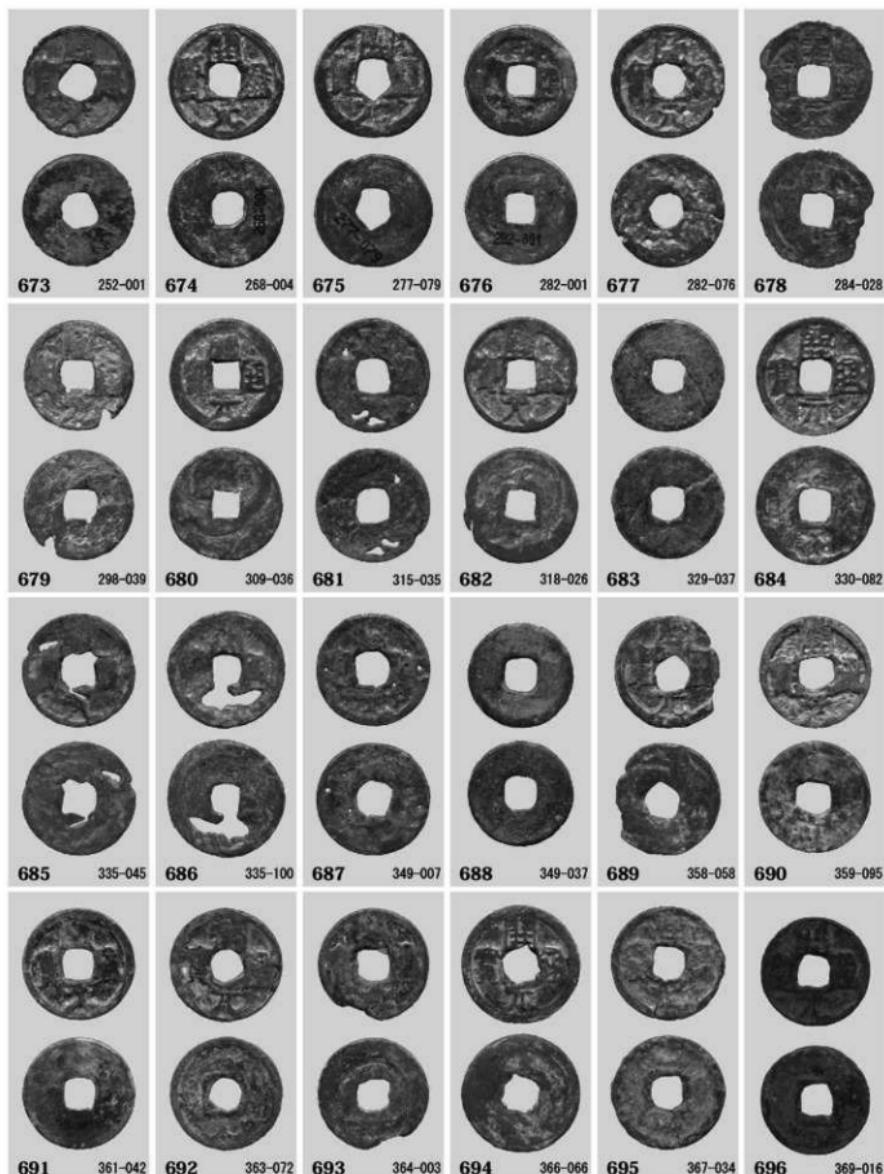
4SK-014 出土銭貨 (26)



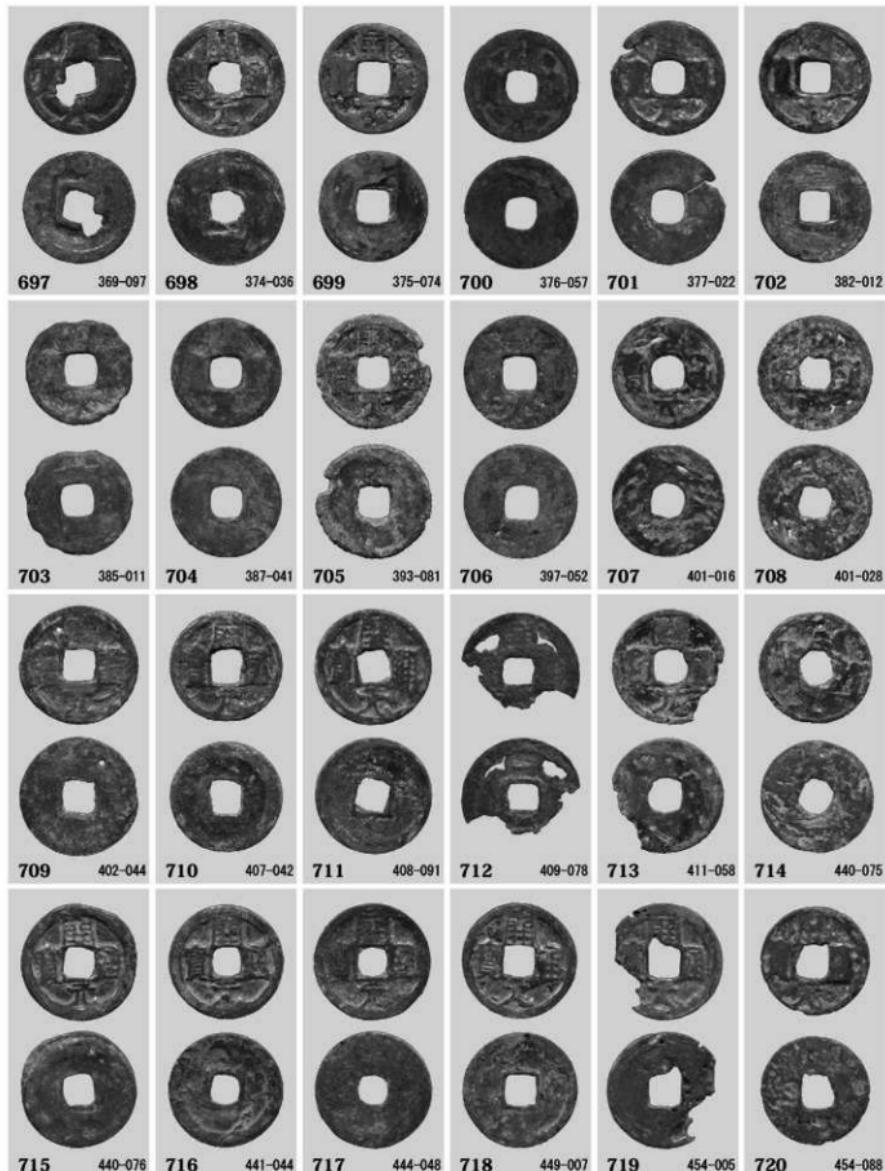
4SK-014 出土錢貨 (27)



4SK-014 出土錢貨 (28)



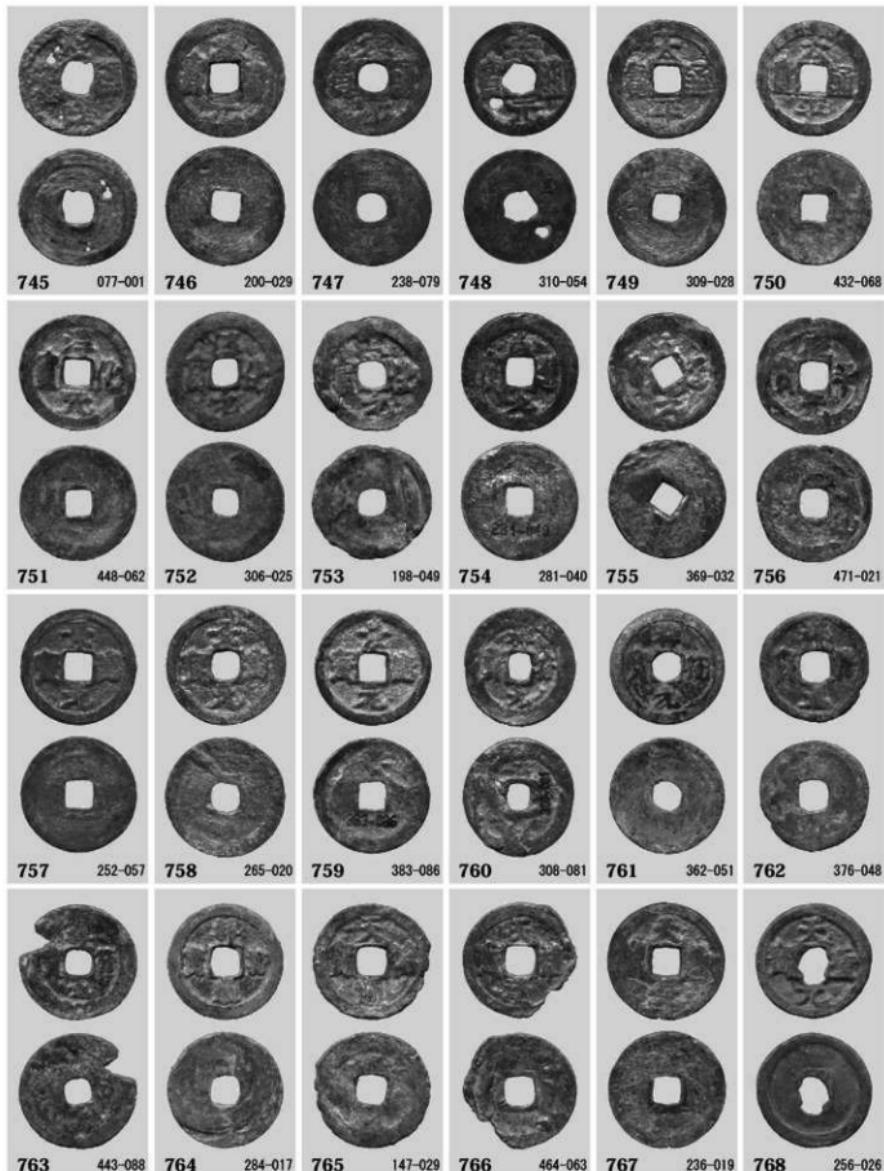
4SK-014 出土錢貨 (29)



4SK-014 出土銭貨 (30)



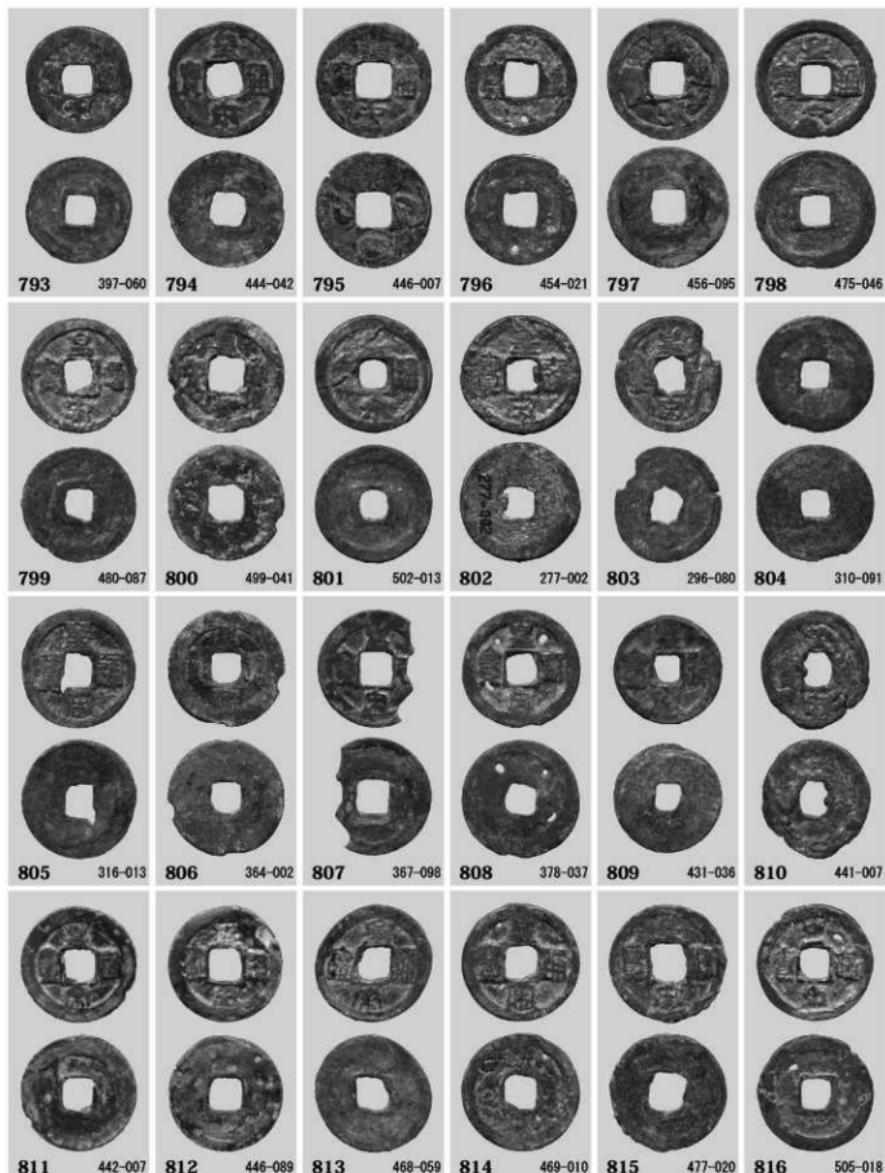
4SK-014 出土錢貨 (31)



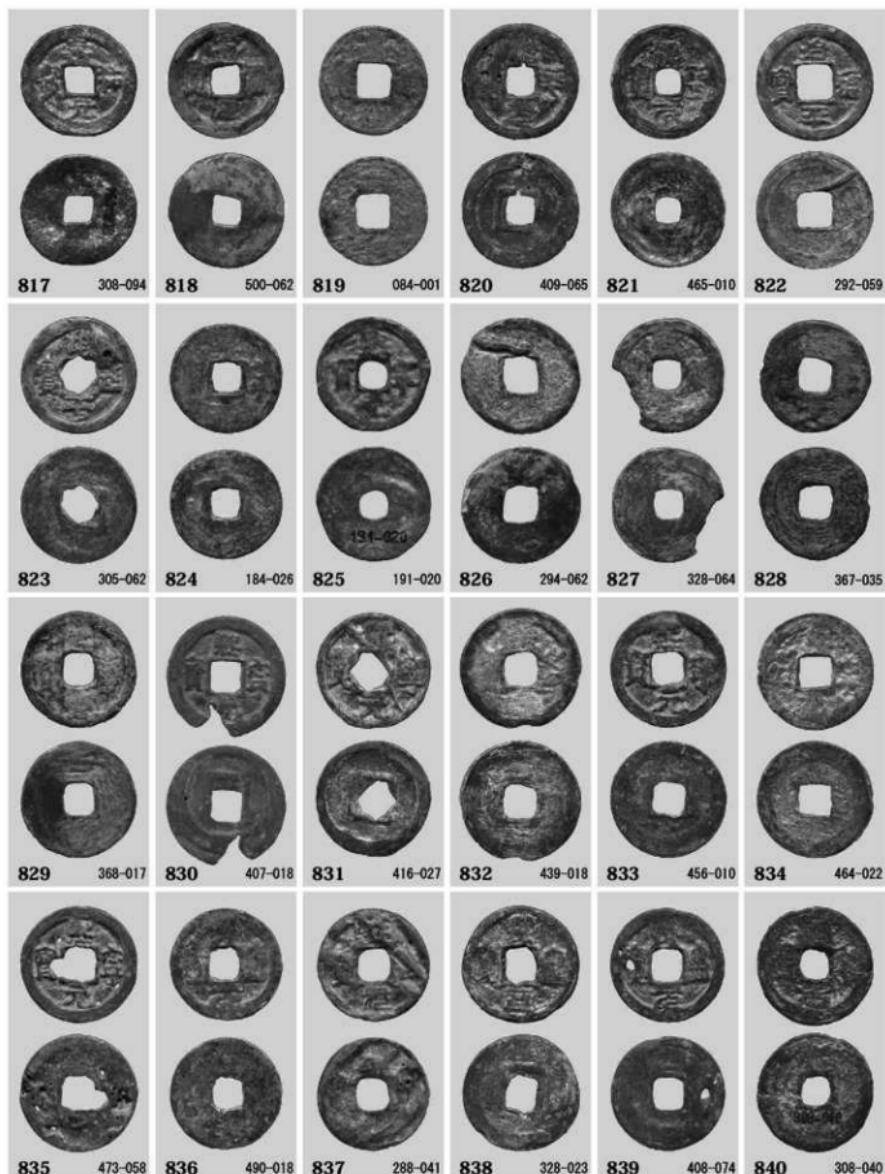
4SK-014 出土銭貨 (32)



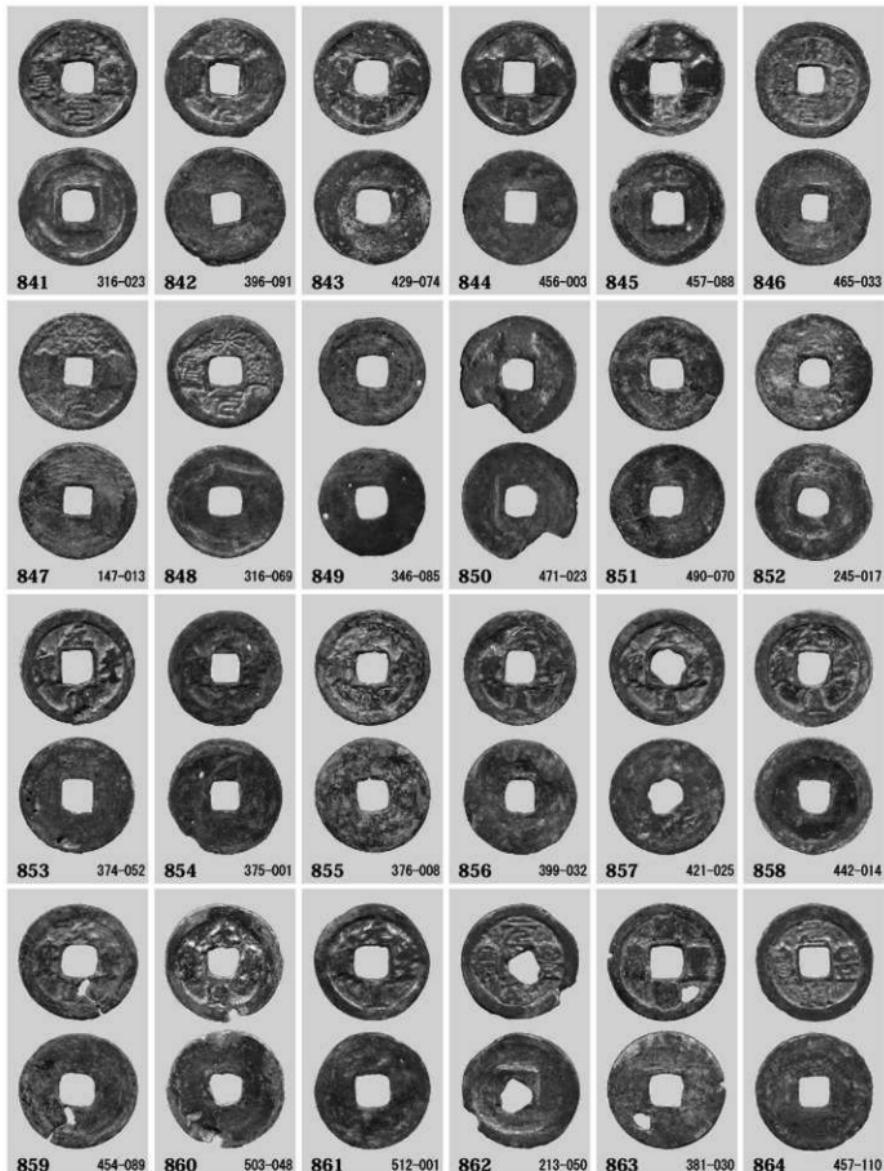
4SK-014 出土錢貨 (33)



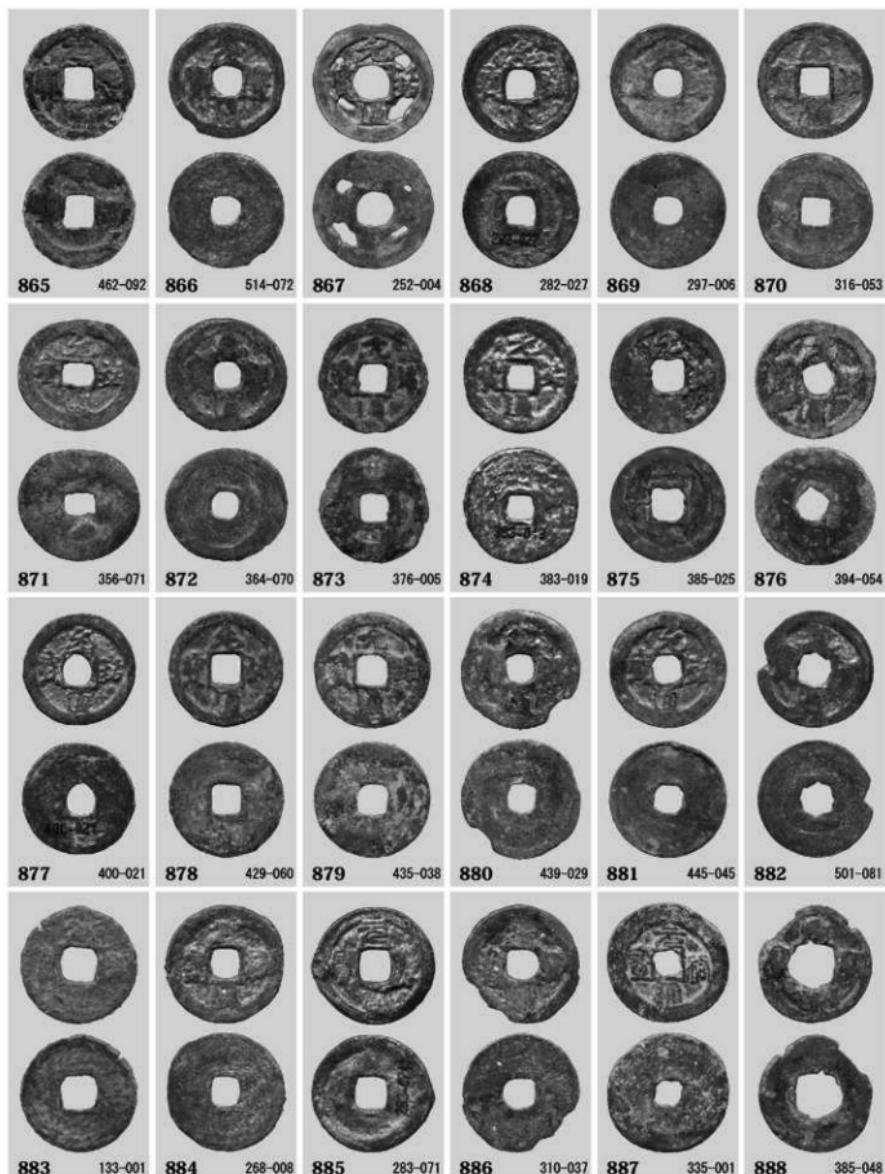
4SK-014 出土銭貨 (34)



4SK-014 出土錢貨 (35)



4SK-014 出土銭貨 (36)



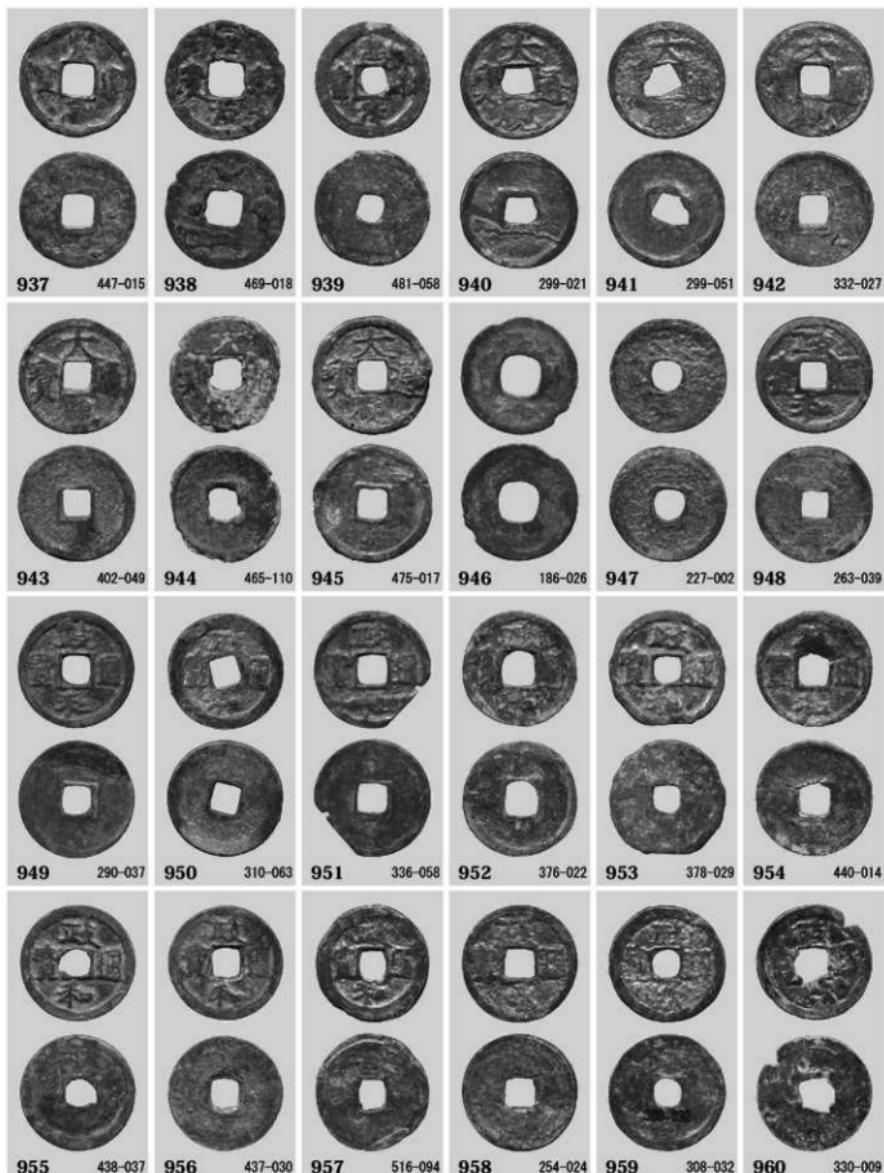
4SK-014 出土錢貨 (37)



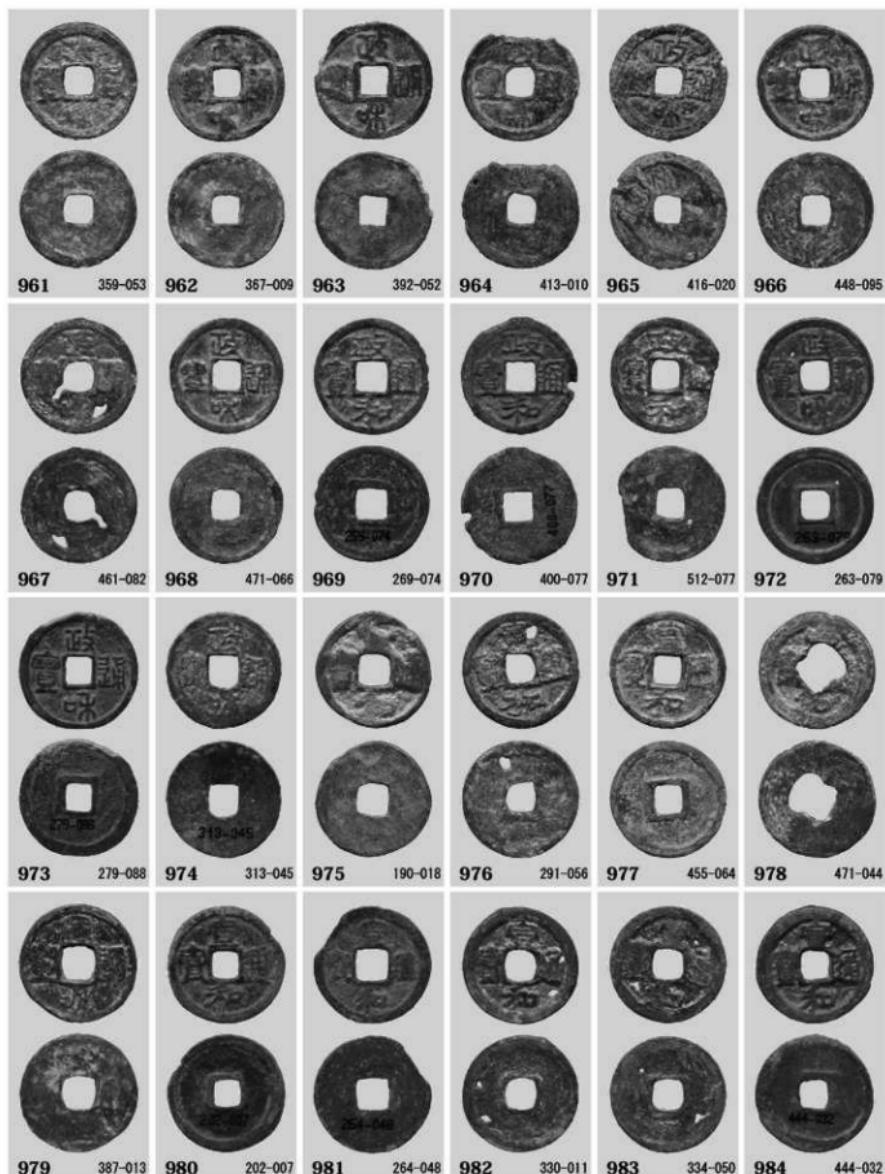
4SK-014 出土銭貨 (38)



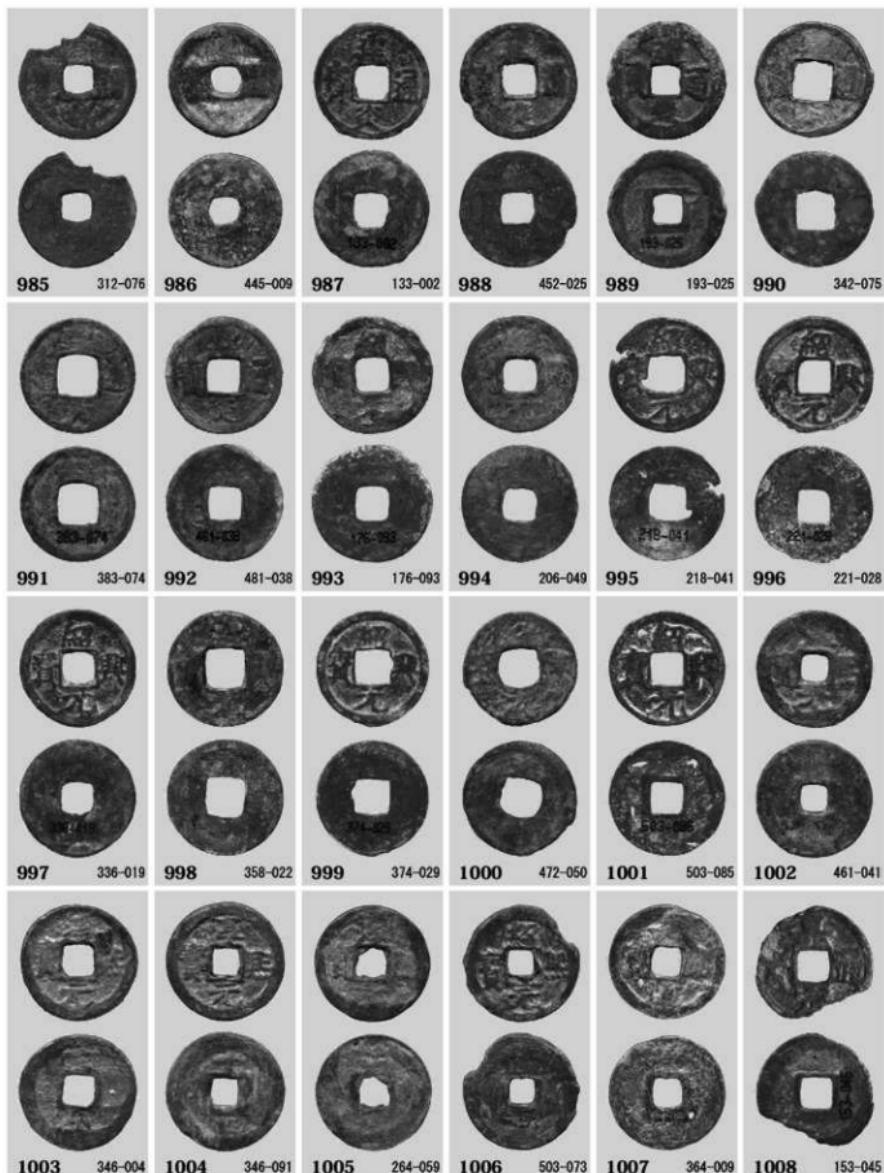
4SK-014 出土錢貨 (39)



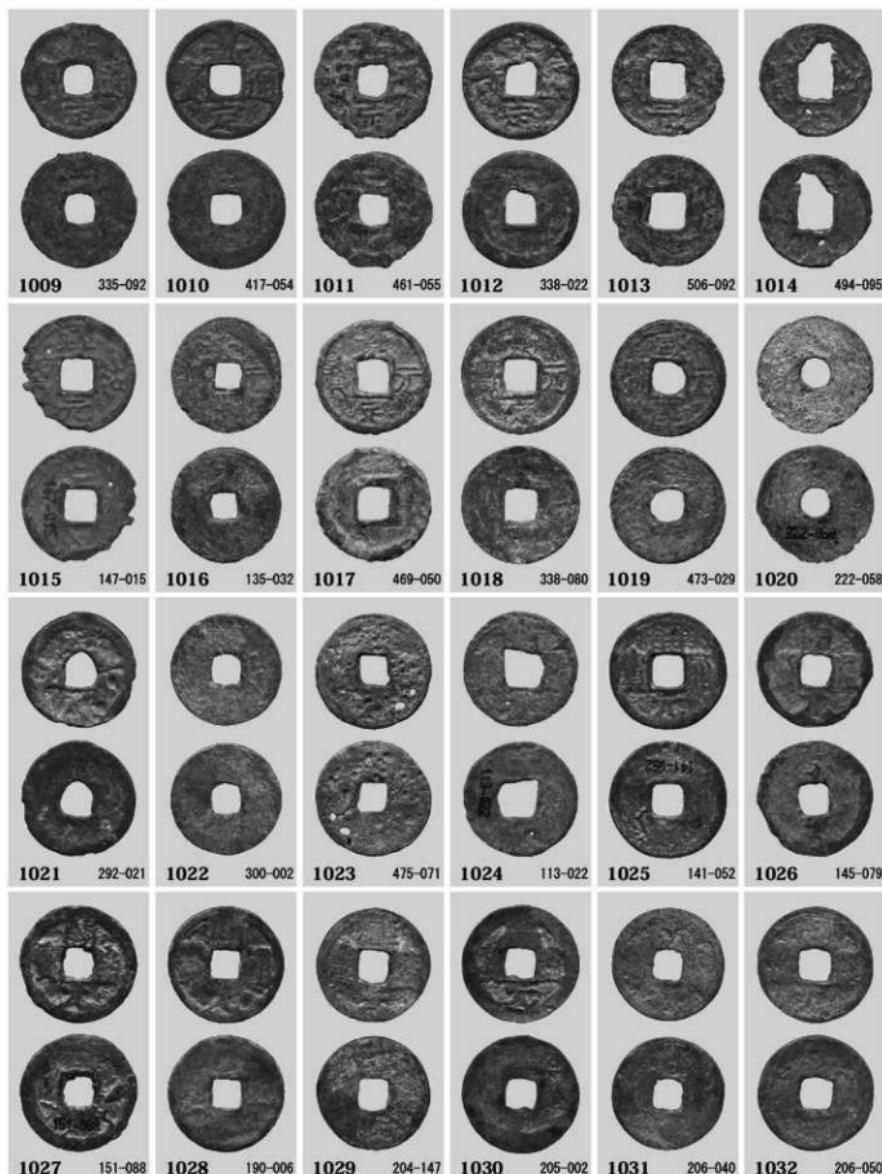
4SK-014 出土銭貨 (40)



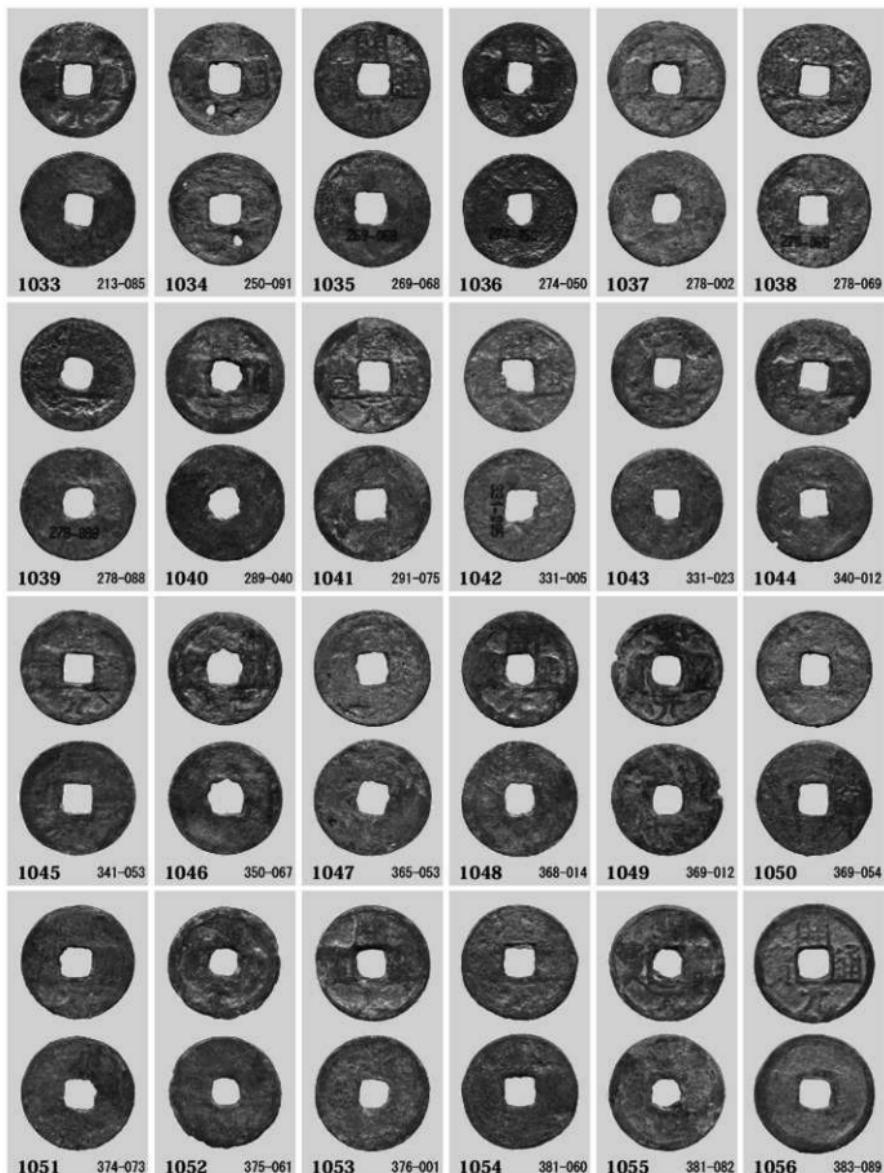
4SK-014 出土錢貨 (41)



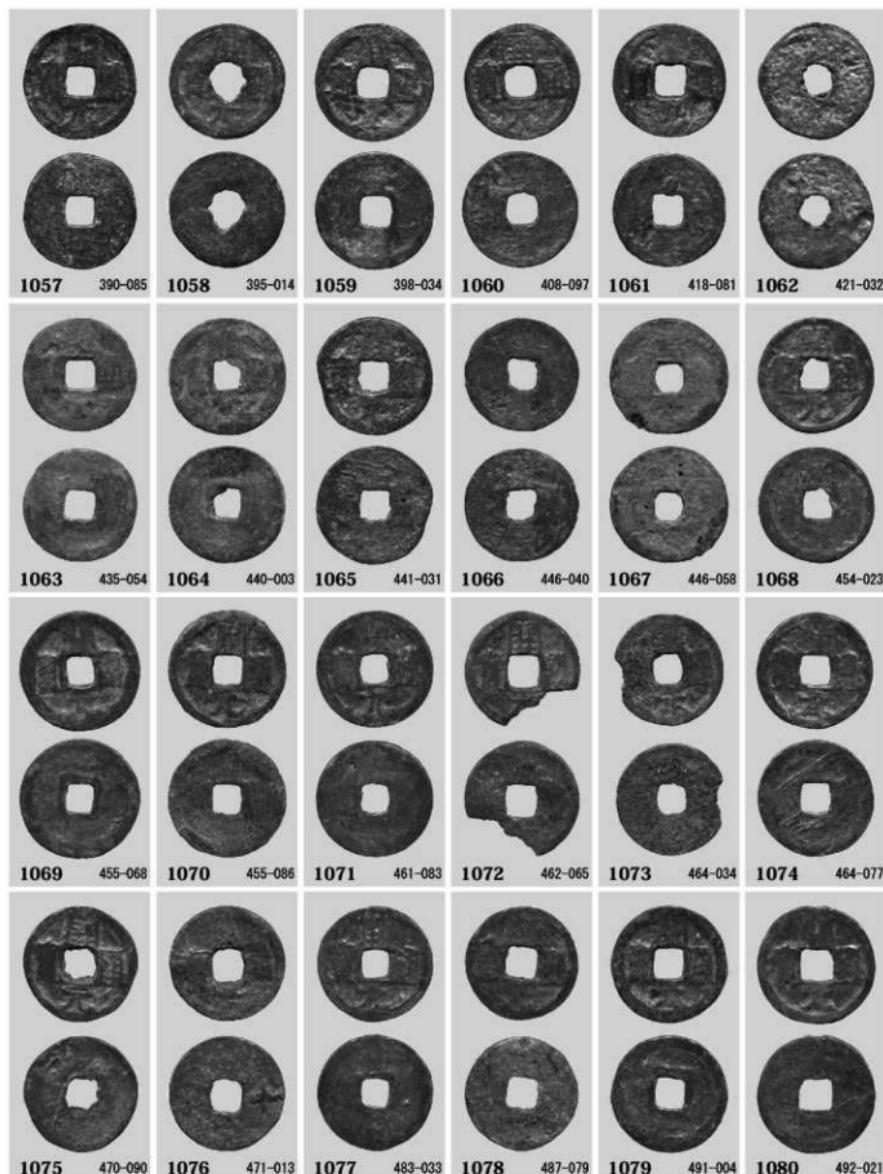
4SK-014 出土銭貨 (42)



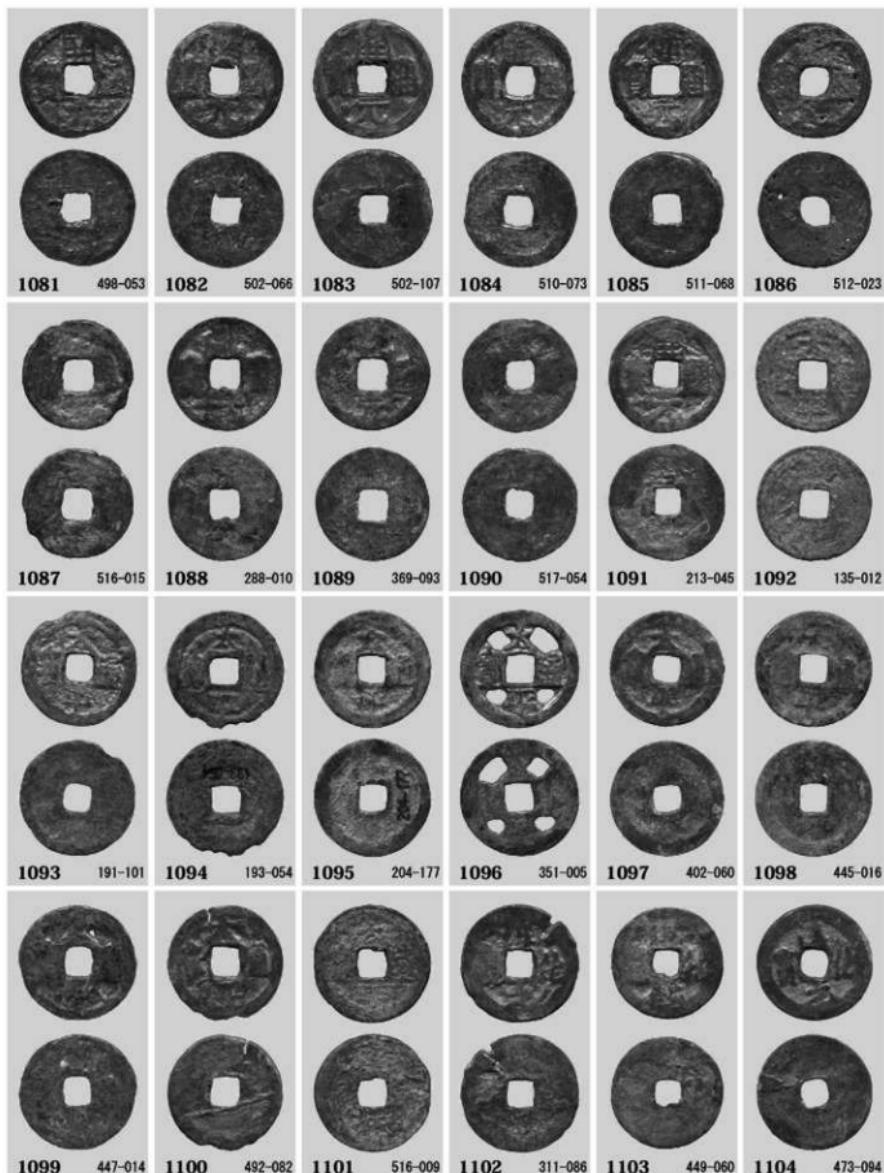
4SK-014 出土錢貨 (43)



4SK-014 出土銭貨 (44)



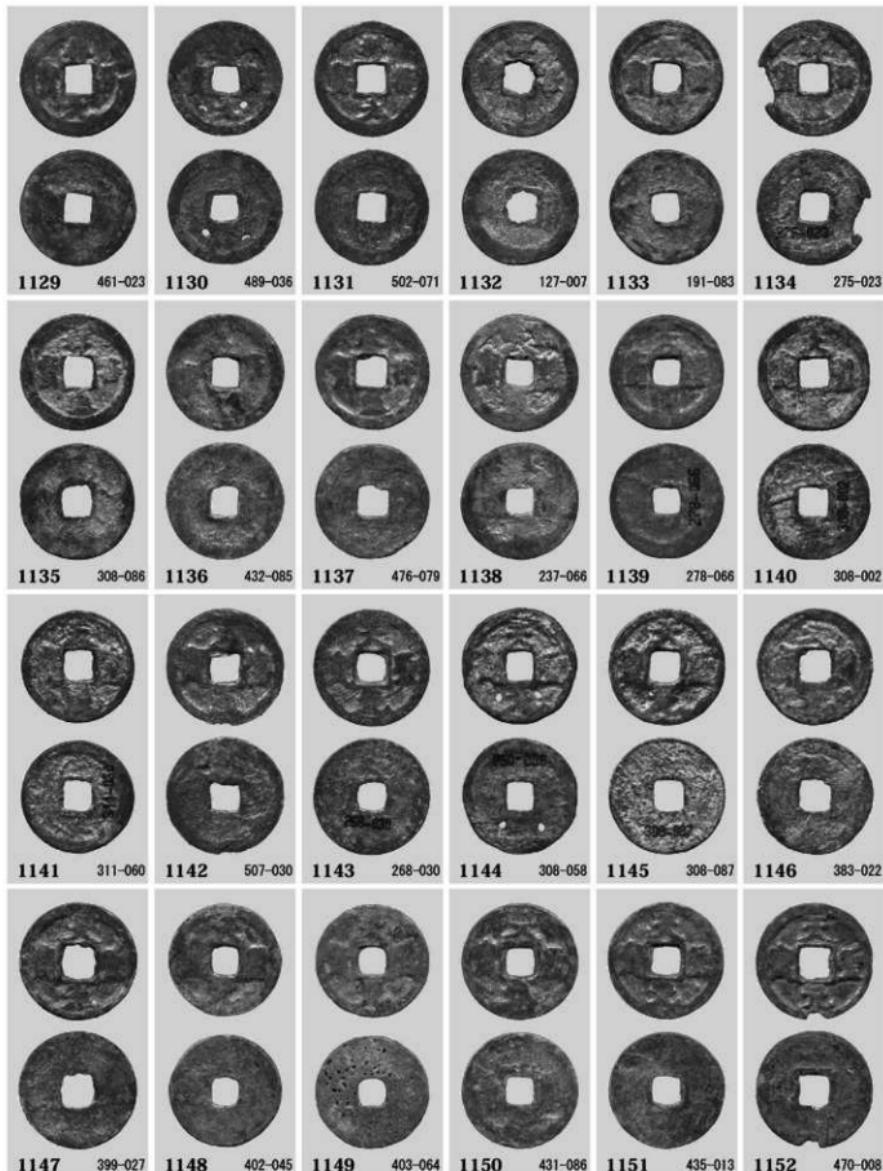
4SK-014 出土錢貨 (45)



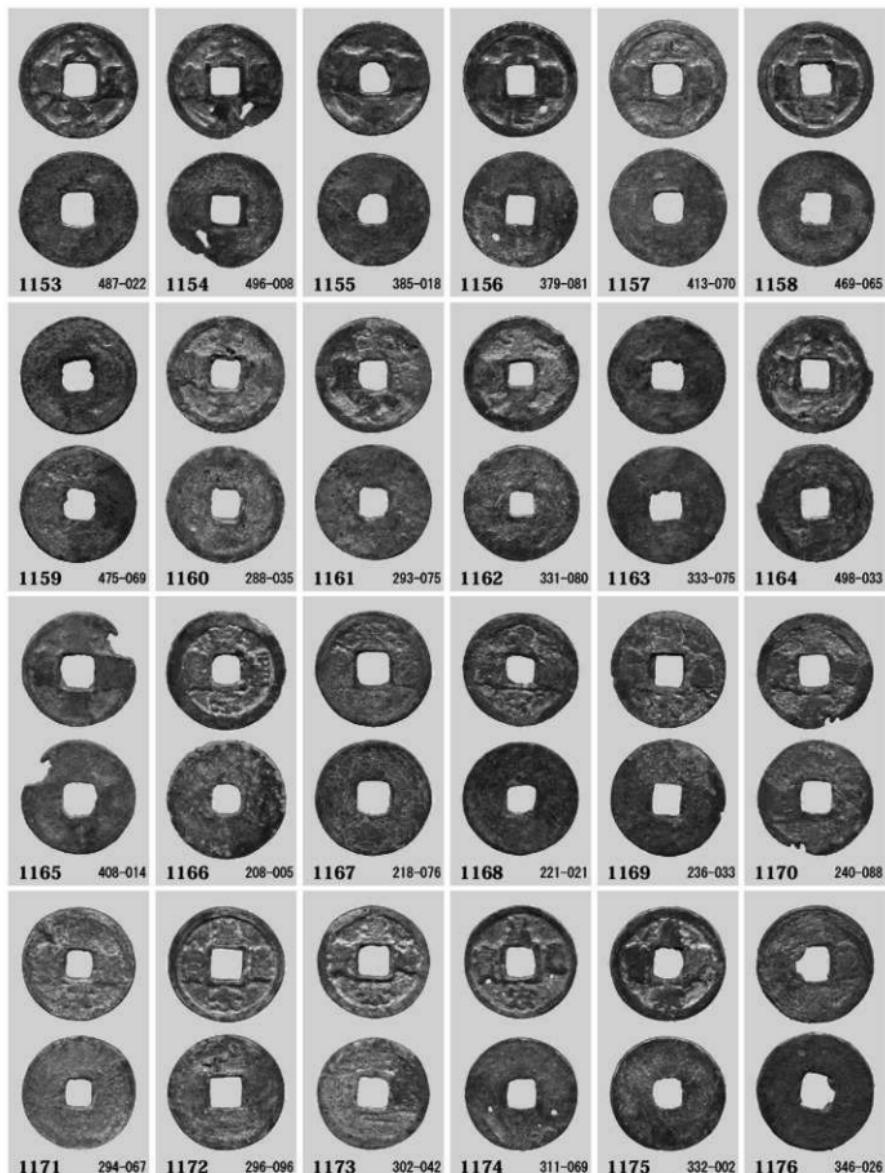
4SK-014 出土銭貨 (46)



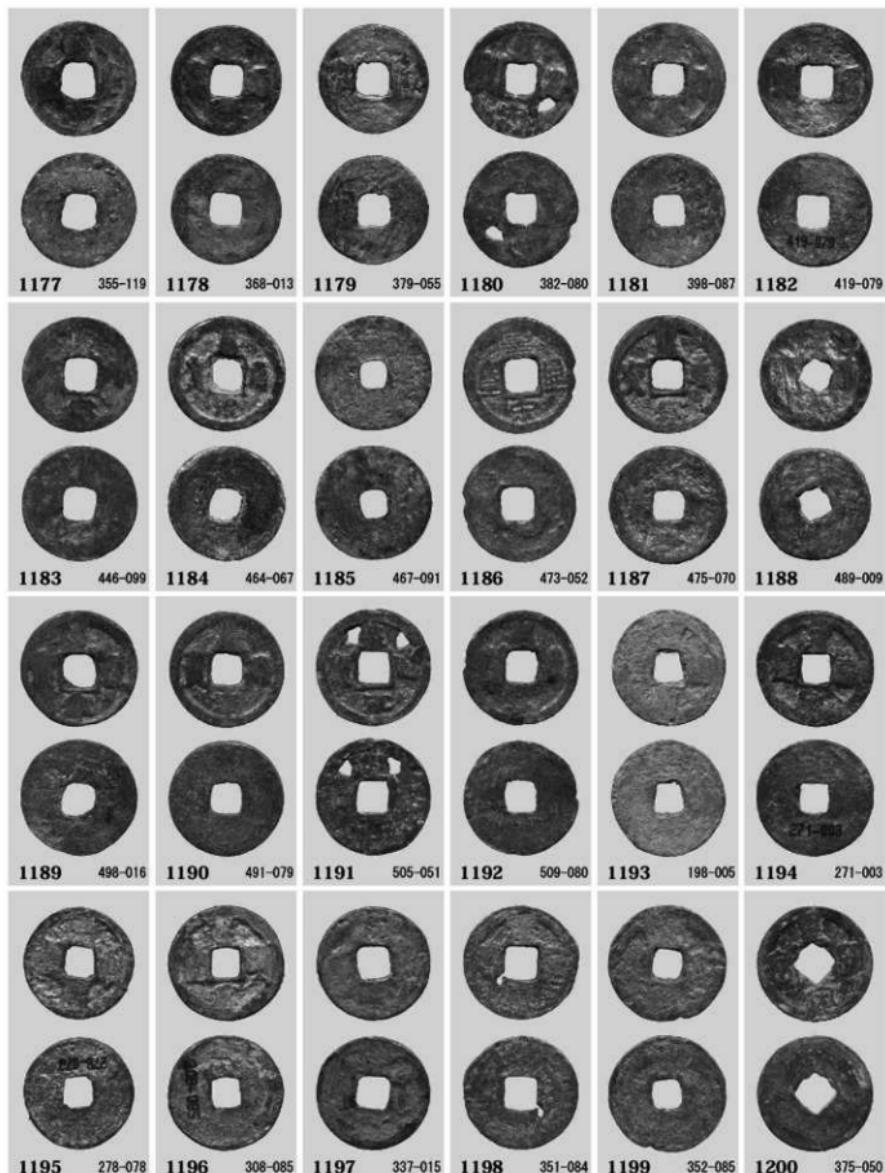
4SK-014 出土錢貨 (47)



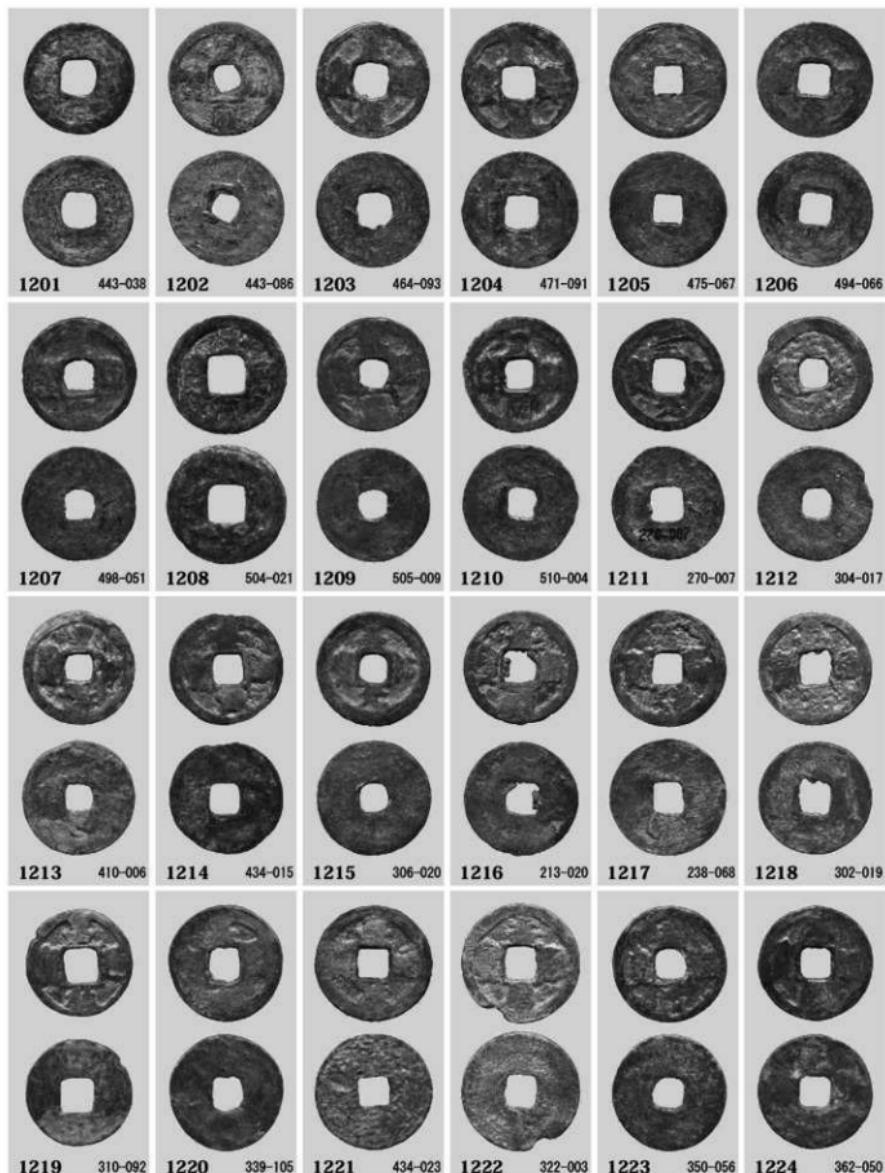
4SK-014 出土銭貨 (48)



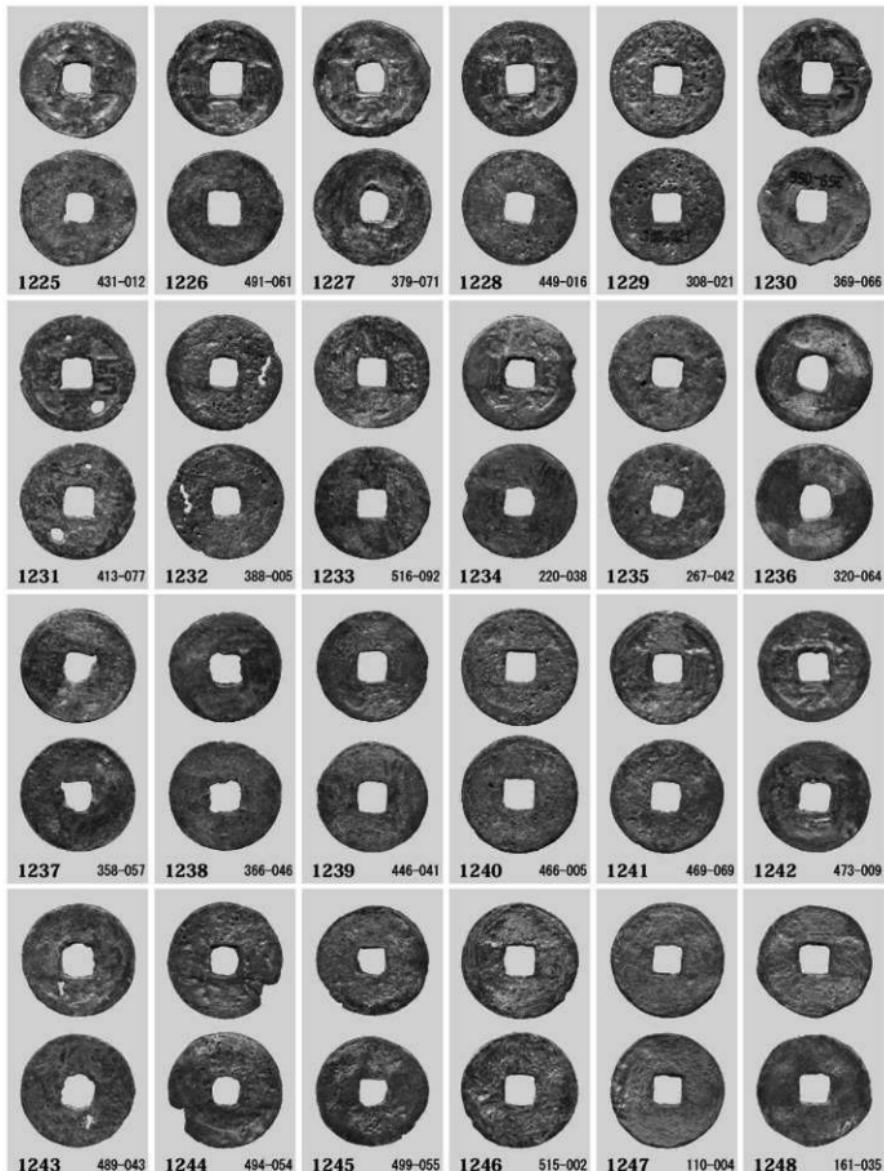
4SK-014 出土錢貨 (49)



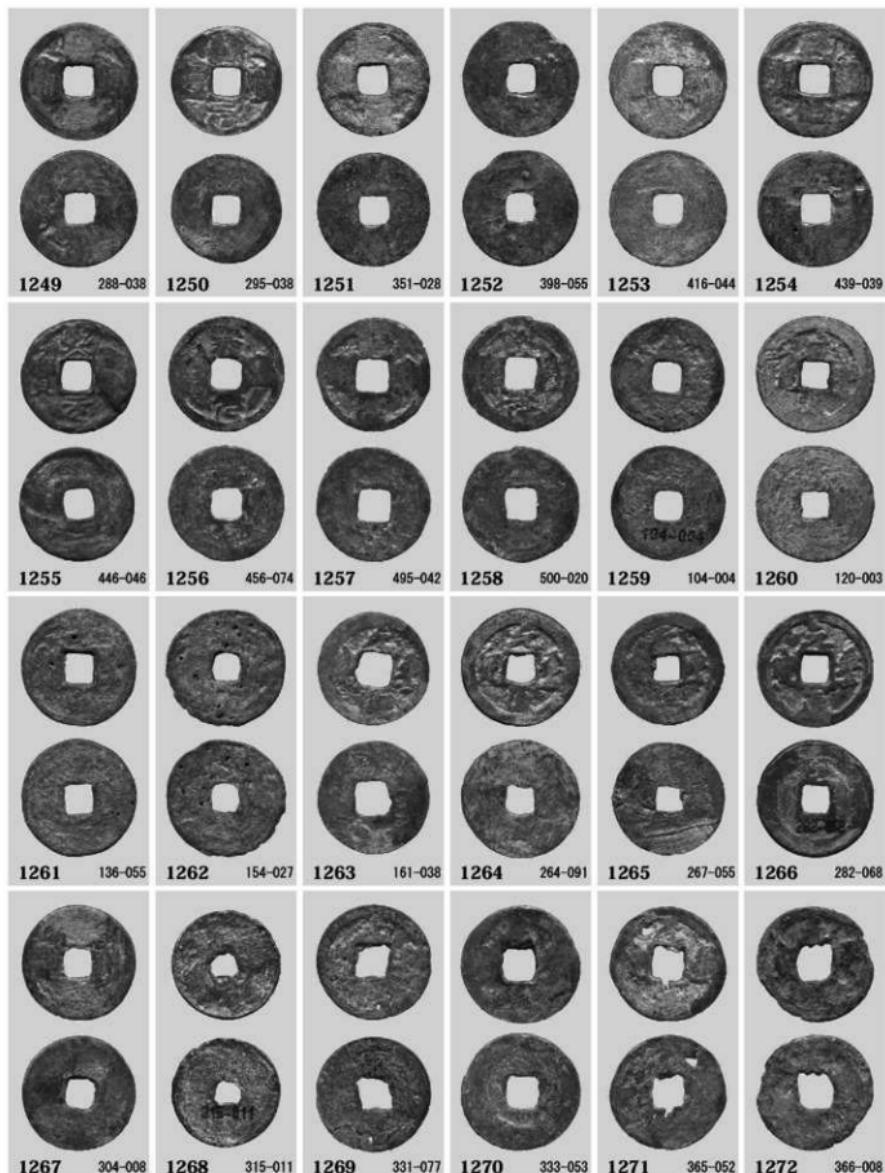
4SK-014 出土銭貨 (50)



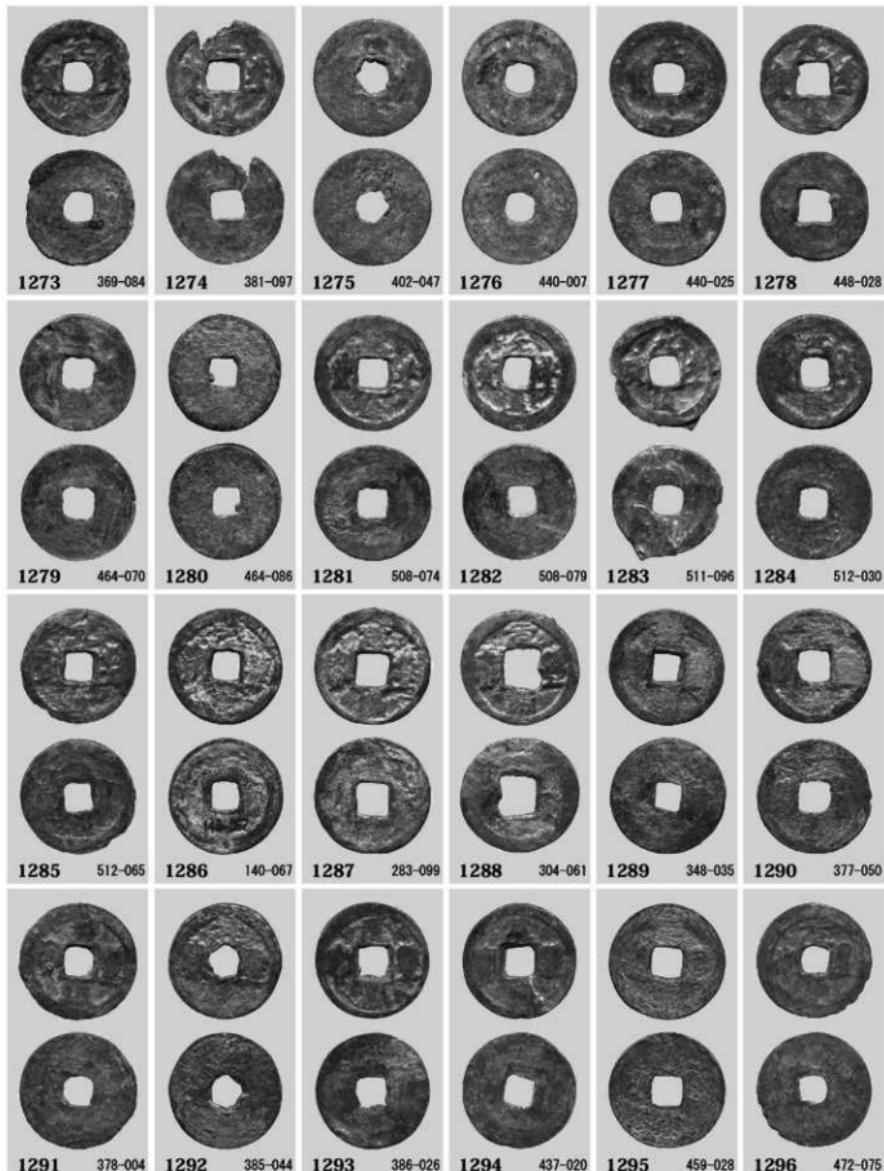
4SK-014 出土钱货 (51)



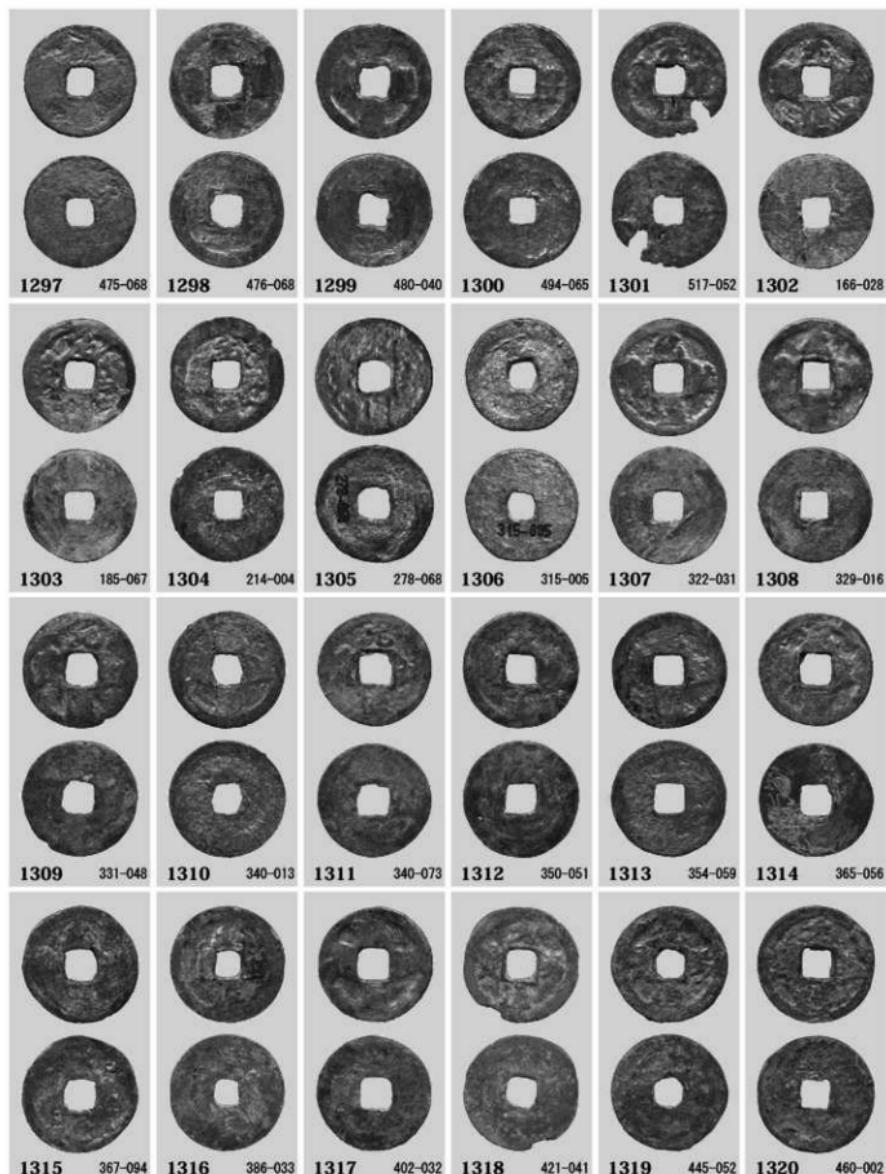
4SK-014 出土銭貨 (52)



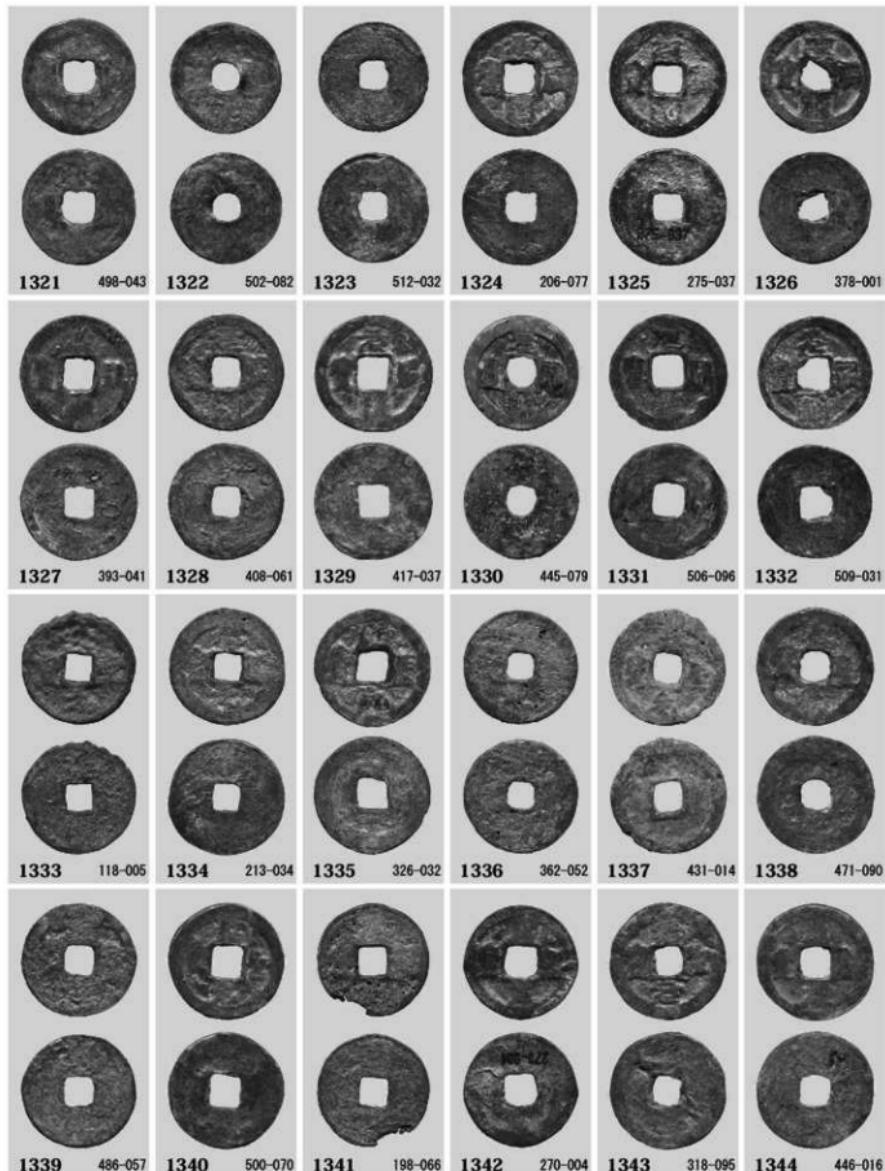
4SK-014 出土錢貨 (53)



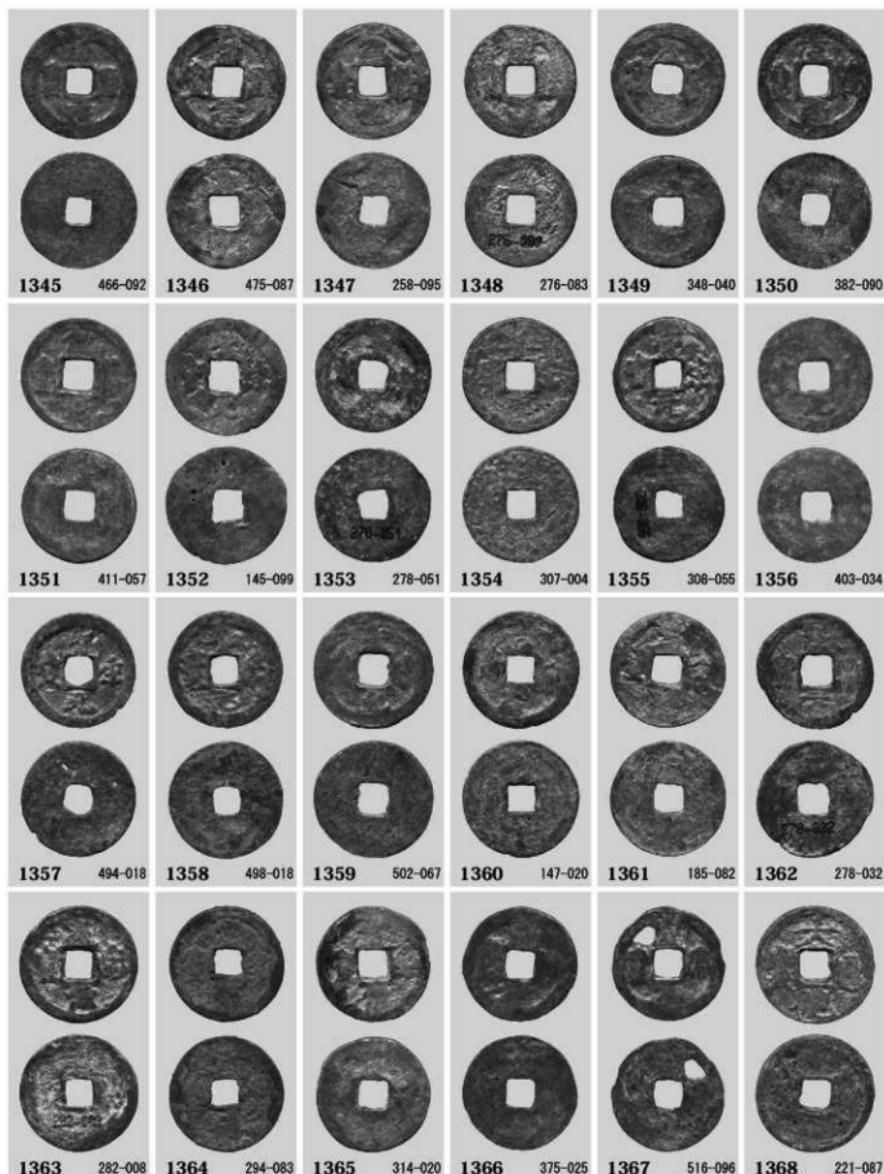
4SK-014 出土銭貨 (54)



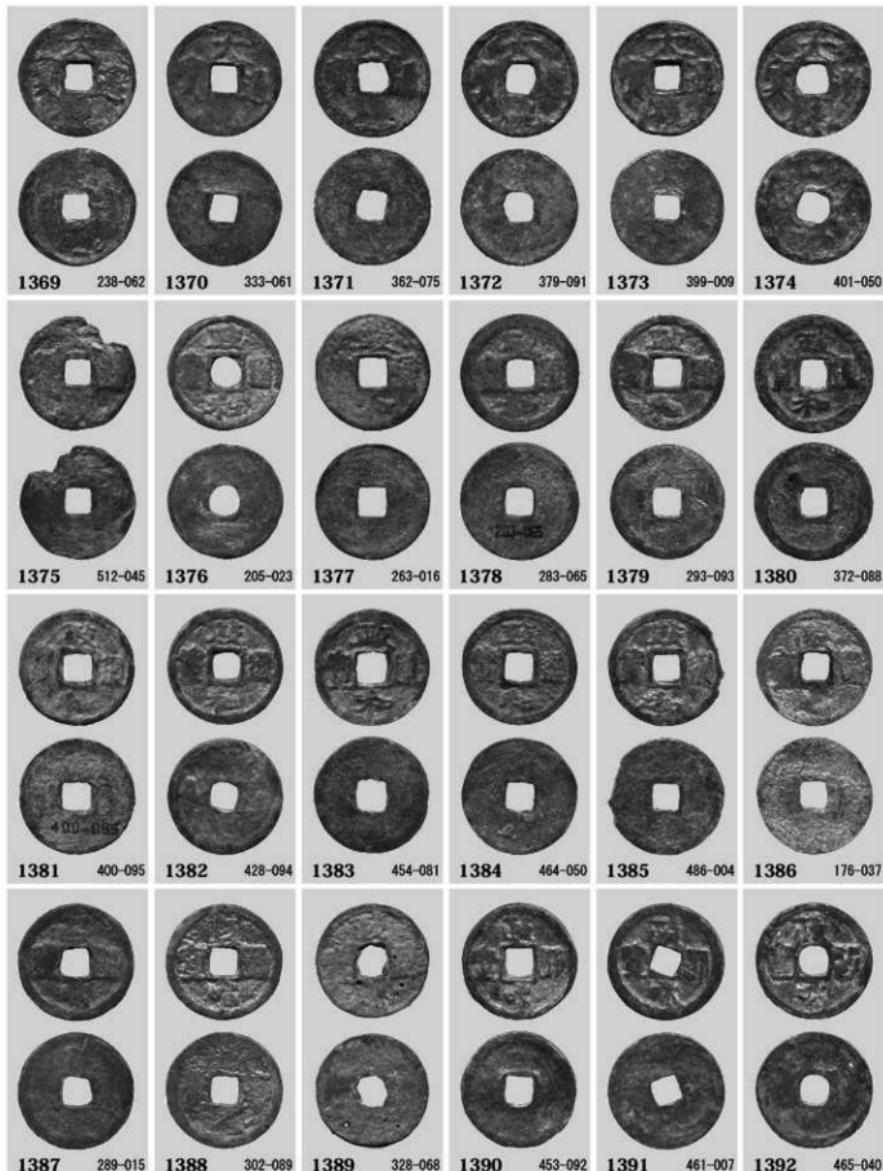
4SK-014 出土錢貨 (55)



4SK-014 出土銭貨 (56)



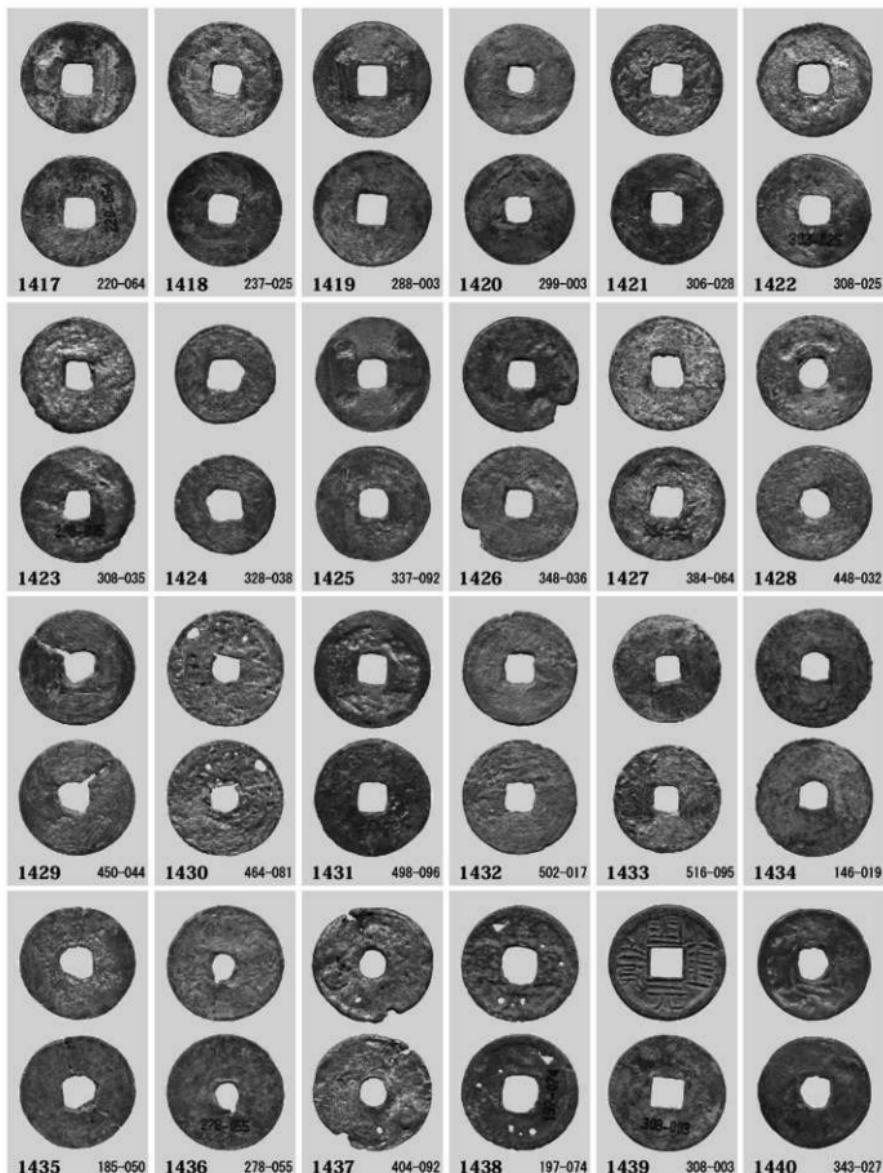
4SK-014 出土錢貨 (57)



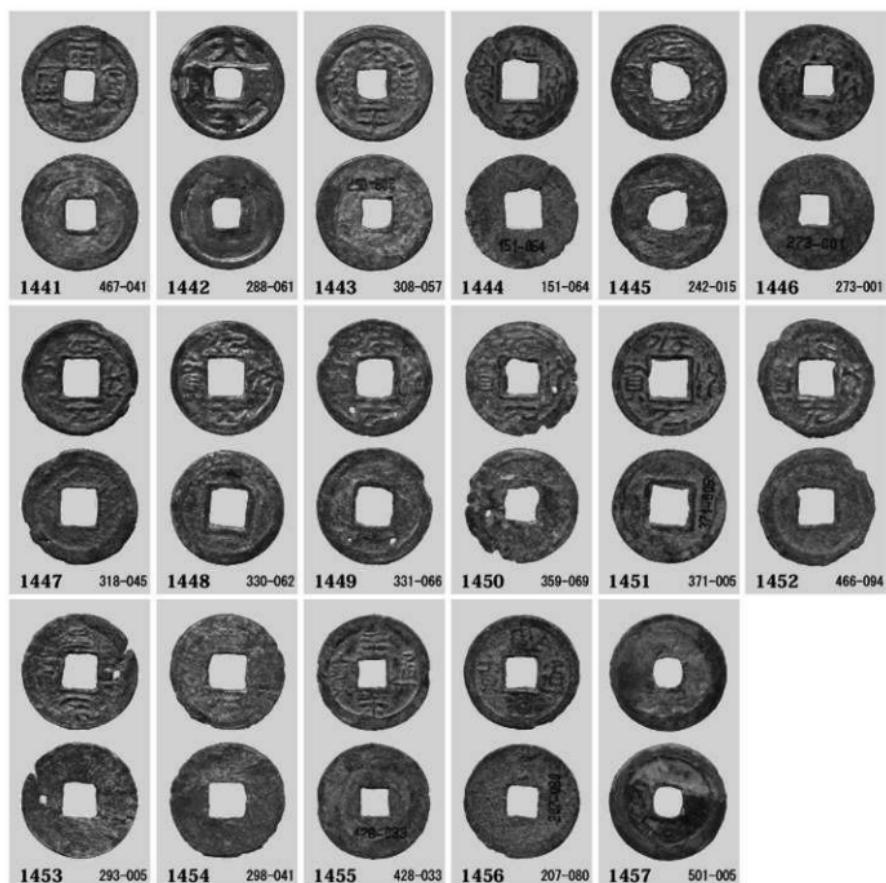
4SK-014 出土銭貨 (58)



4SK-014 出土錢貨 (59)



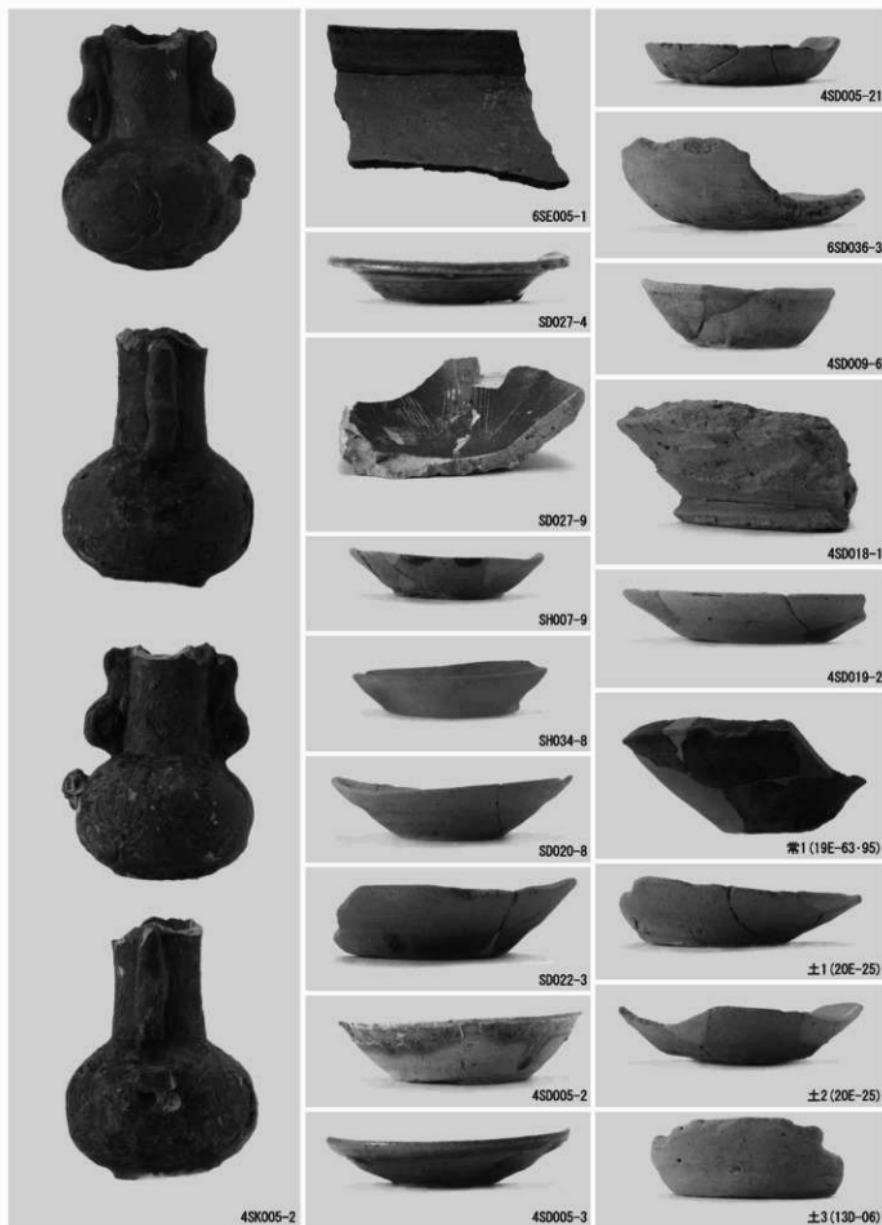
4SK-014 出土銭貨 (60)



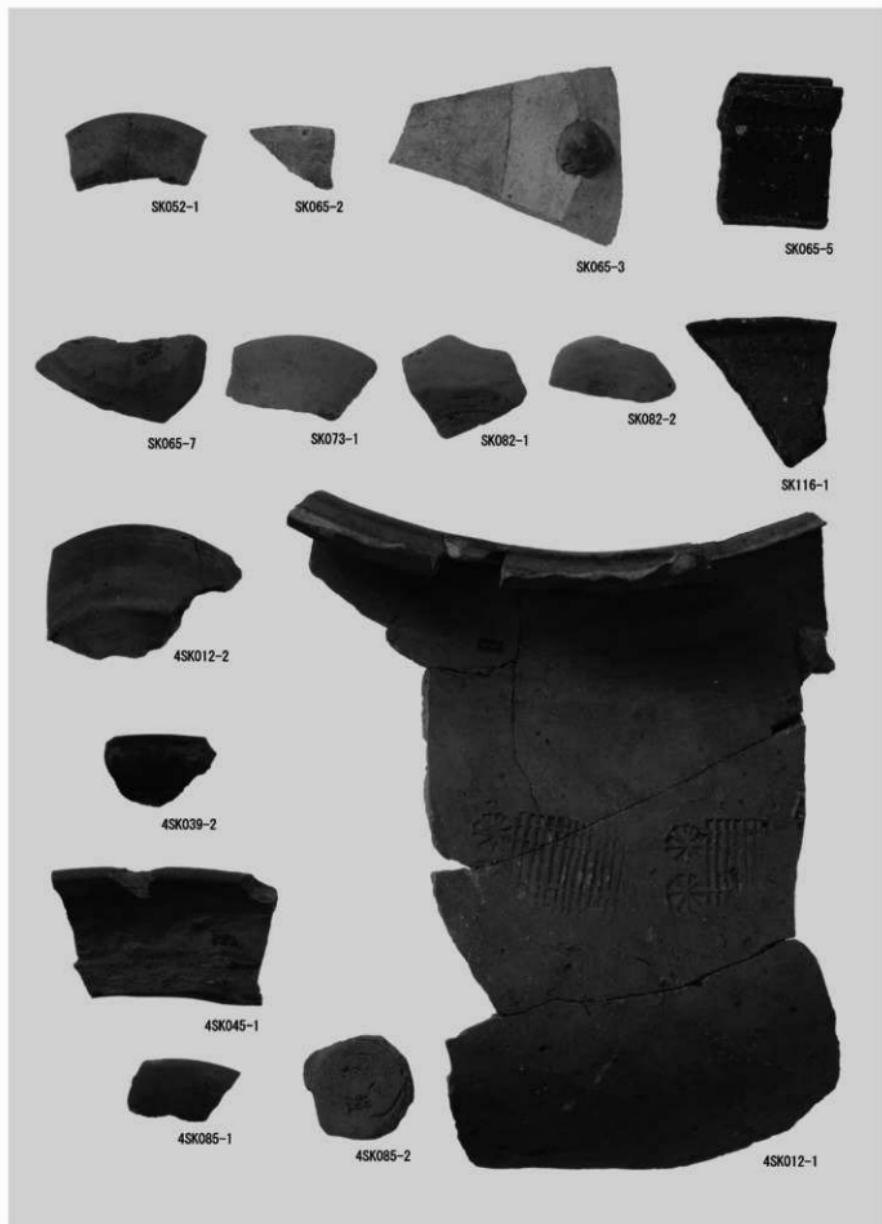
4SK-014 出土錢貨 (61)



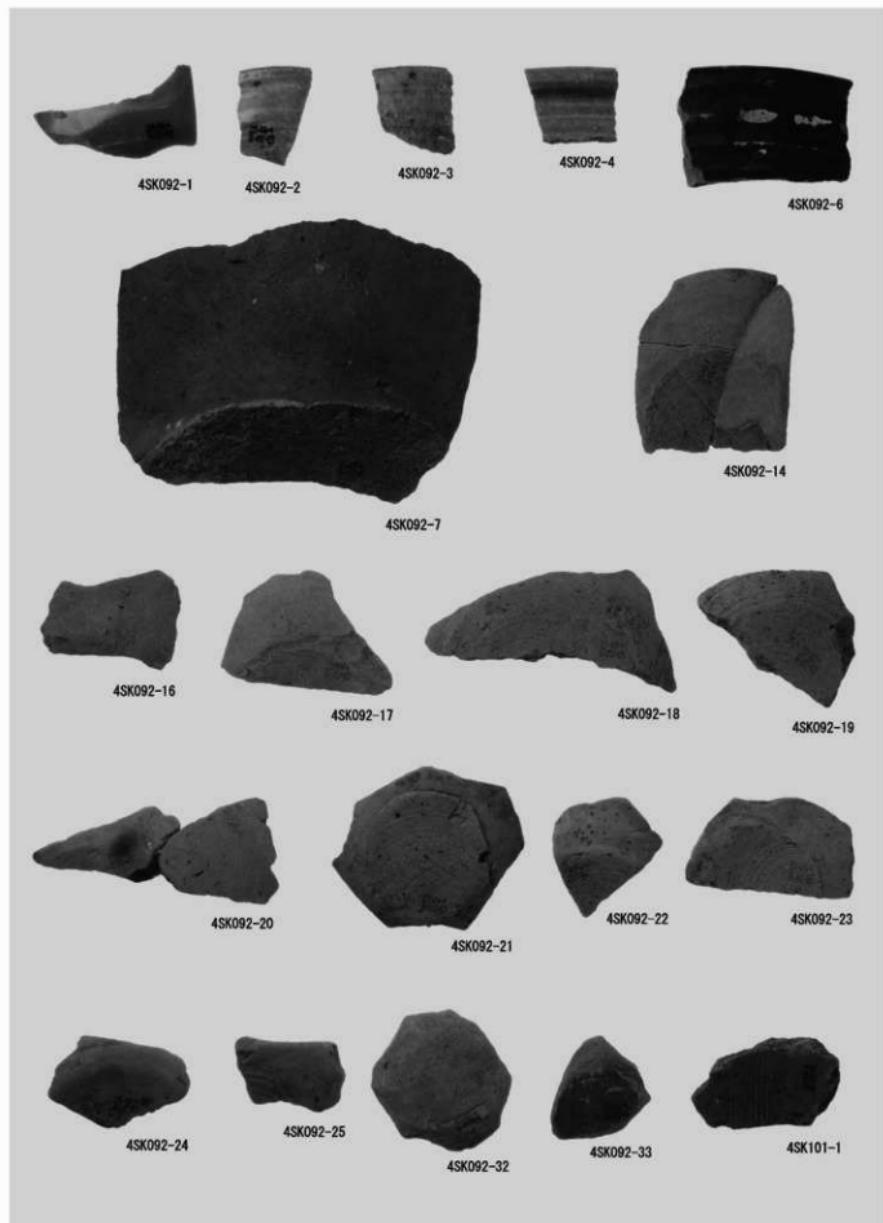
陶磁器・土器（1）



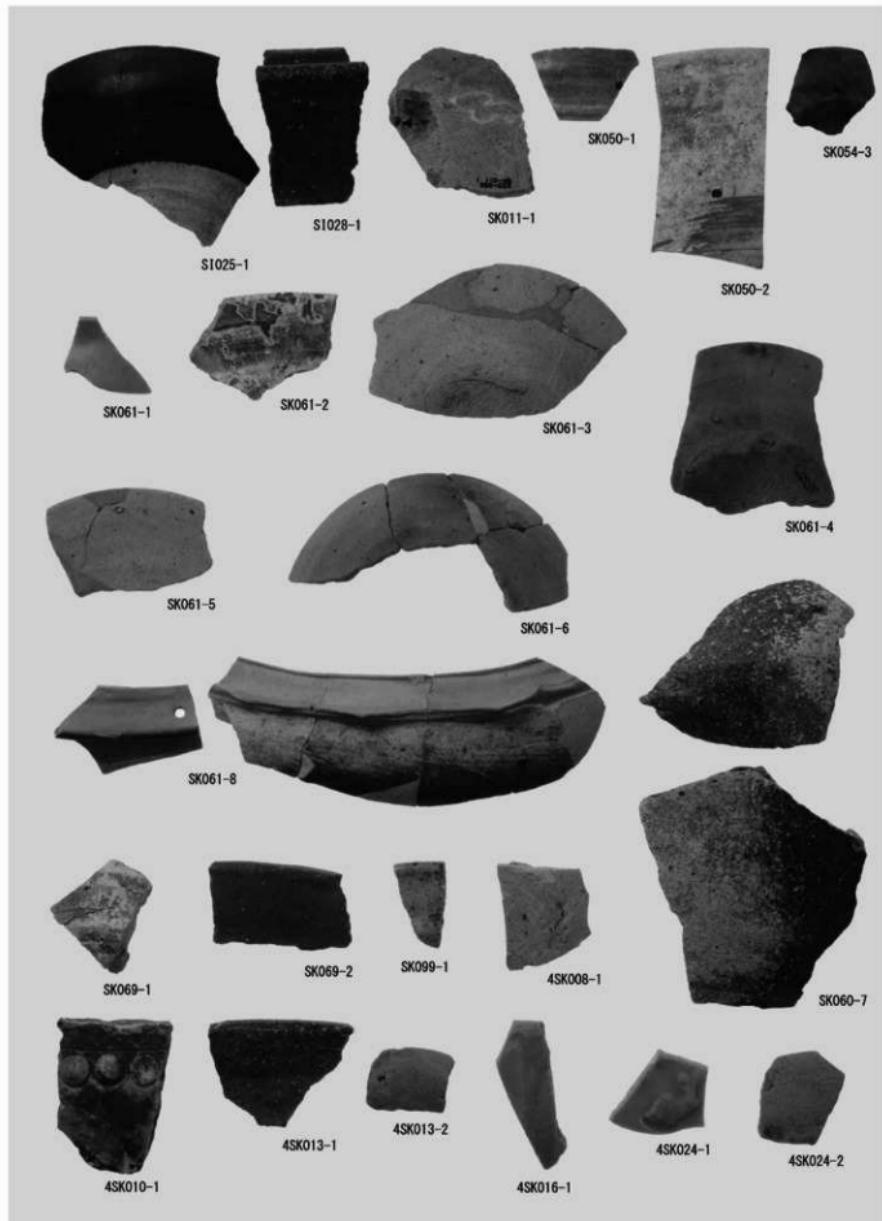
陶磁器・土器（2）



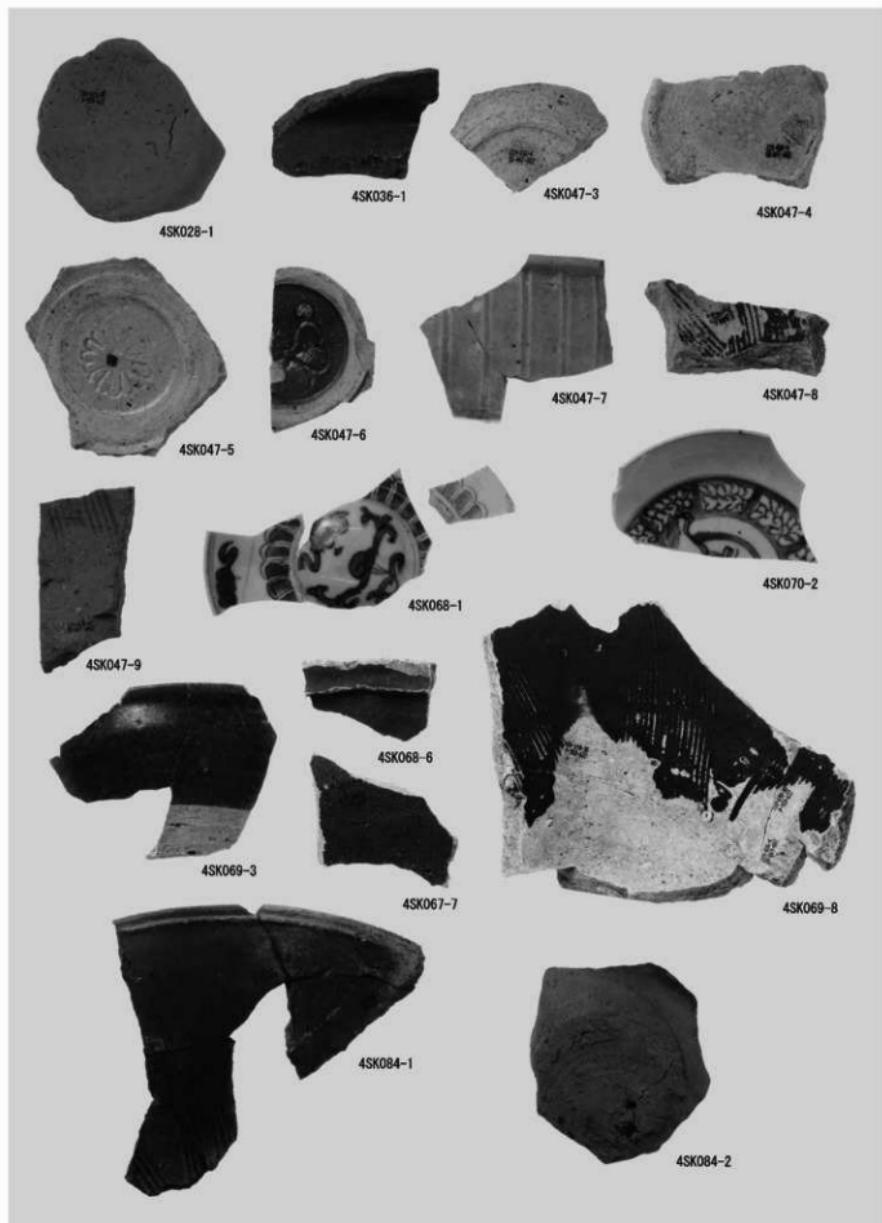
地下式坑出土陶磁器・土器（1）



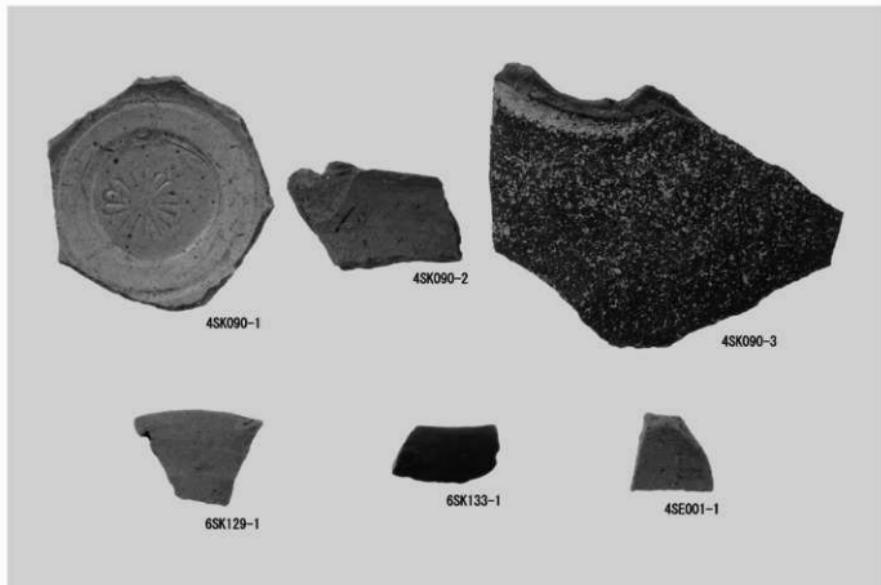
地下式坑出土陶磁器·土器 (2)



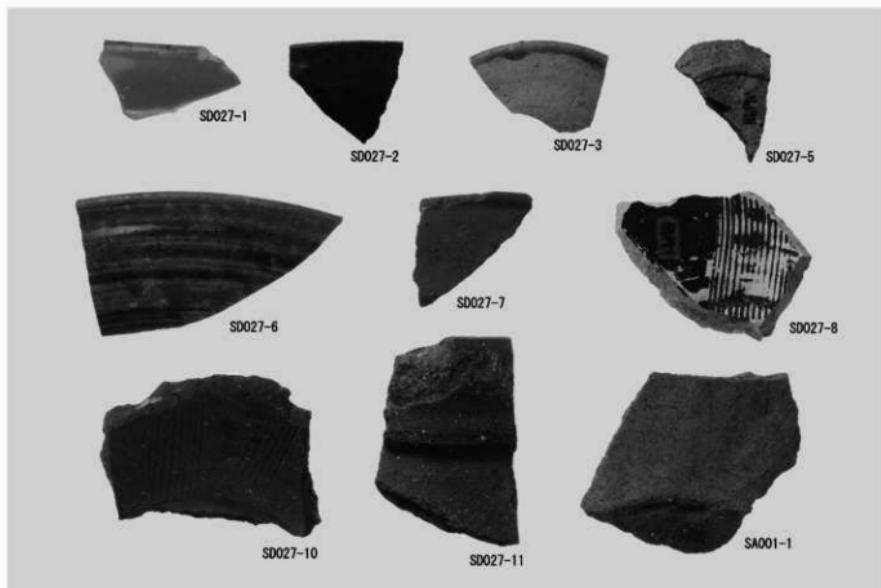
方形竪穴・竪穴状遺構出土陶磁器・土器（1）



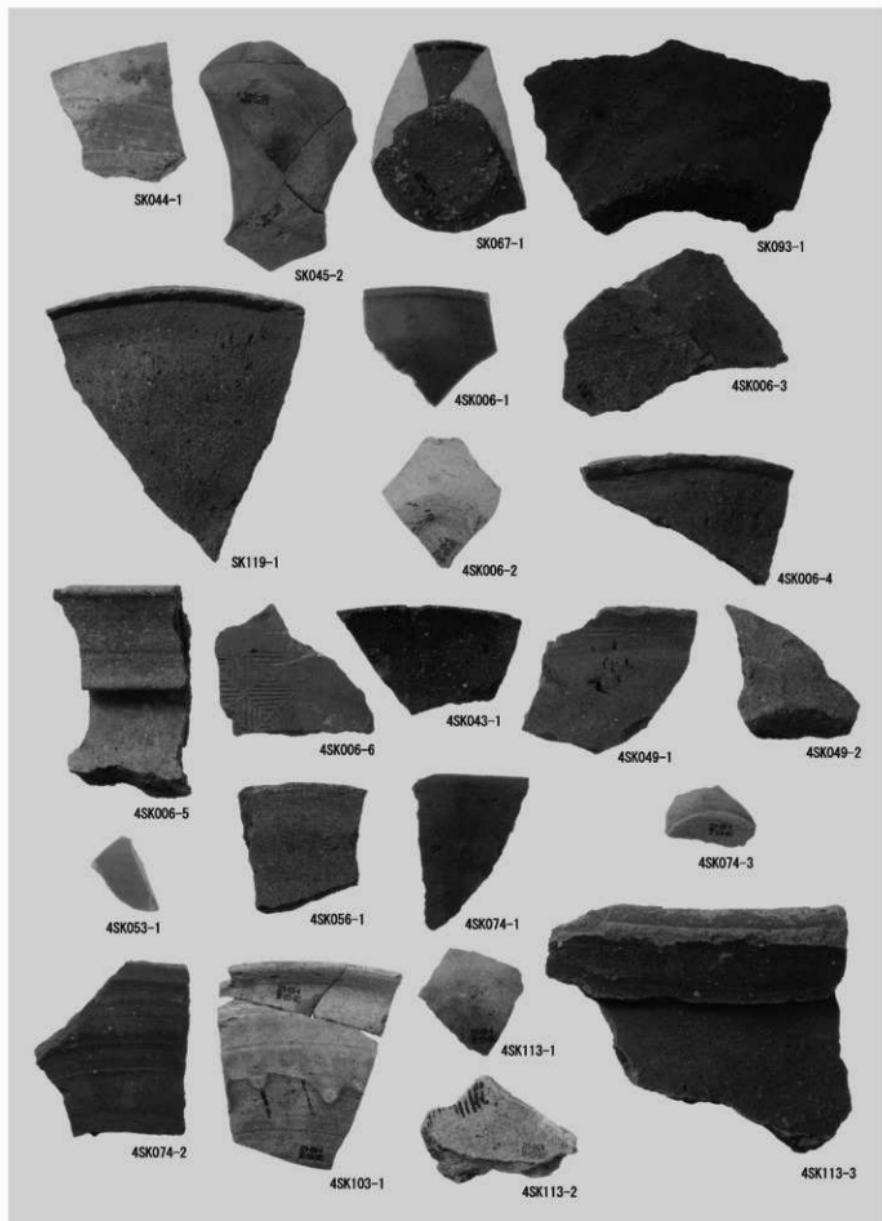
方形竪穴・竪穴状遺構出土陶磁器・土器（2）



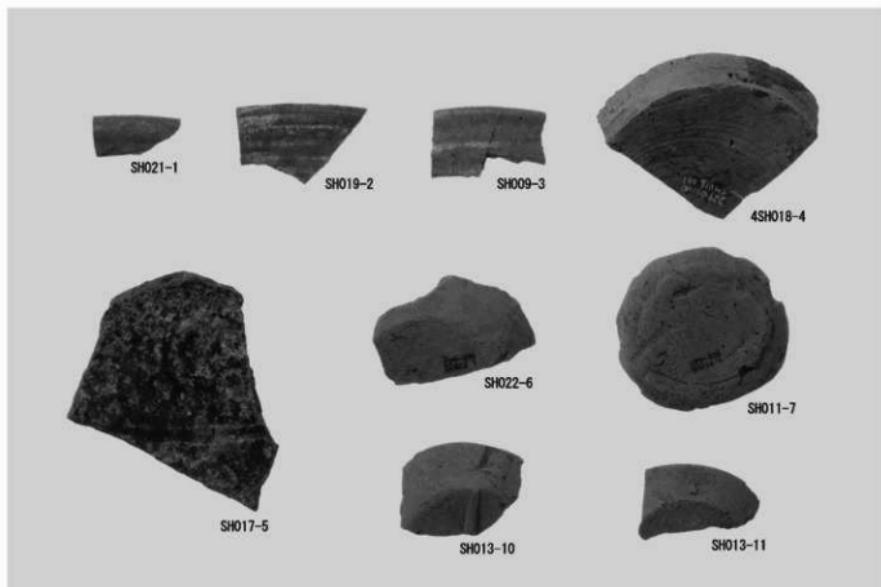
方形堅穴・堅穴状造構、井戸出土陶磁器・土器



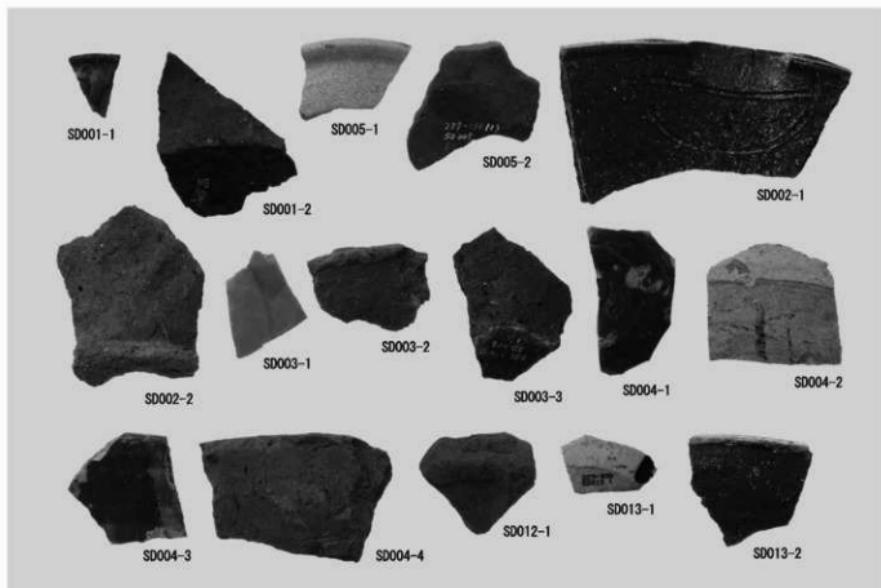
井戸出土陶磁器・土器



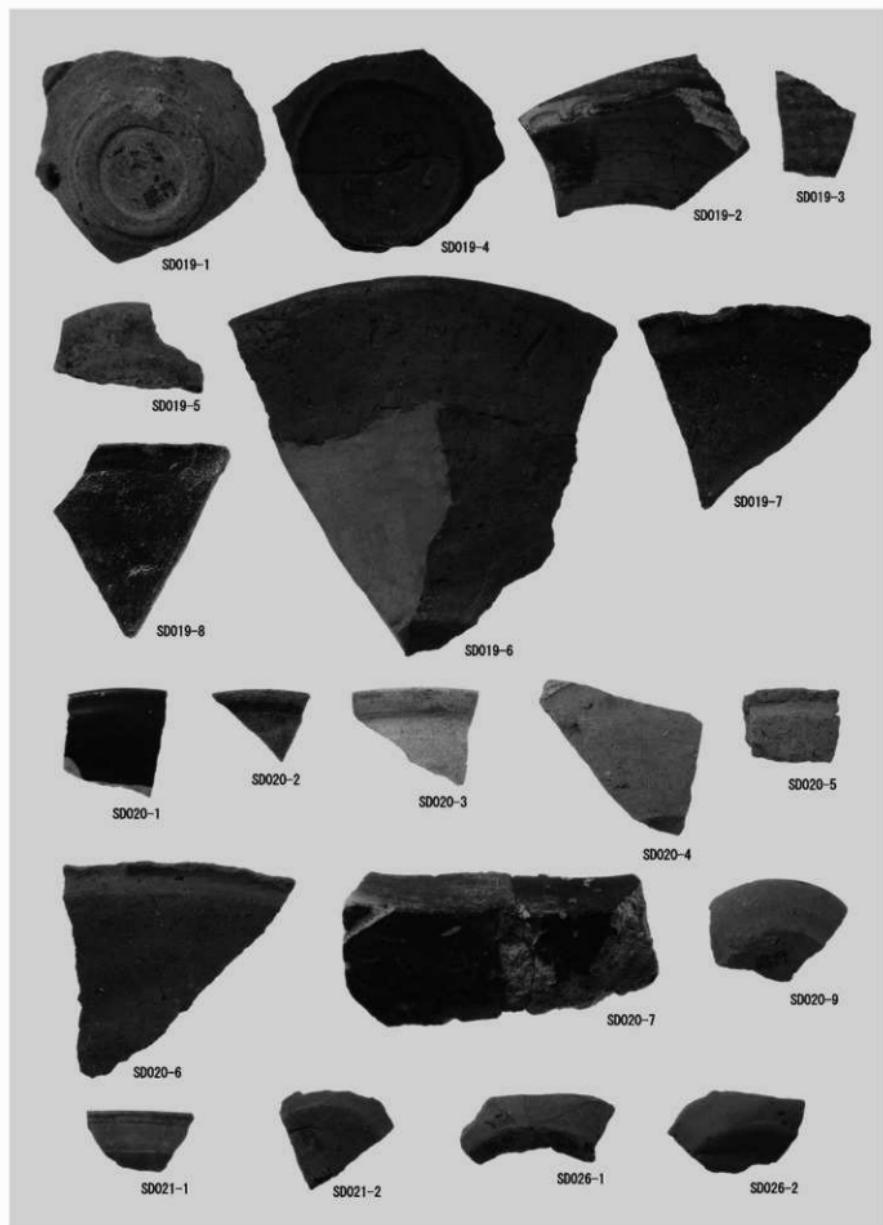
土坑出土陶磁器・土器



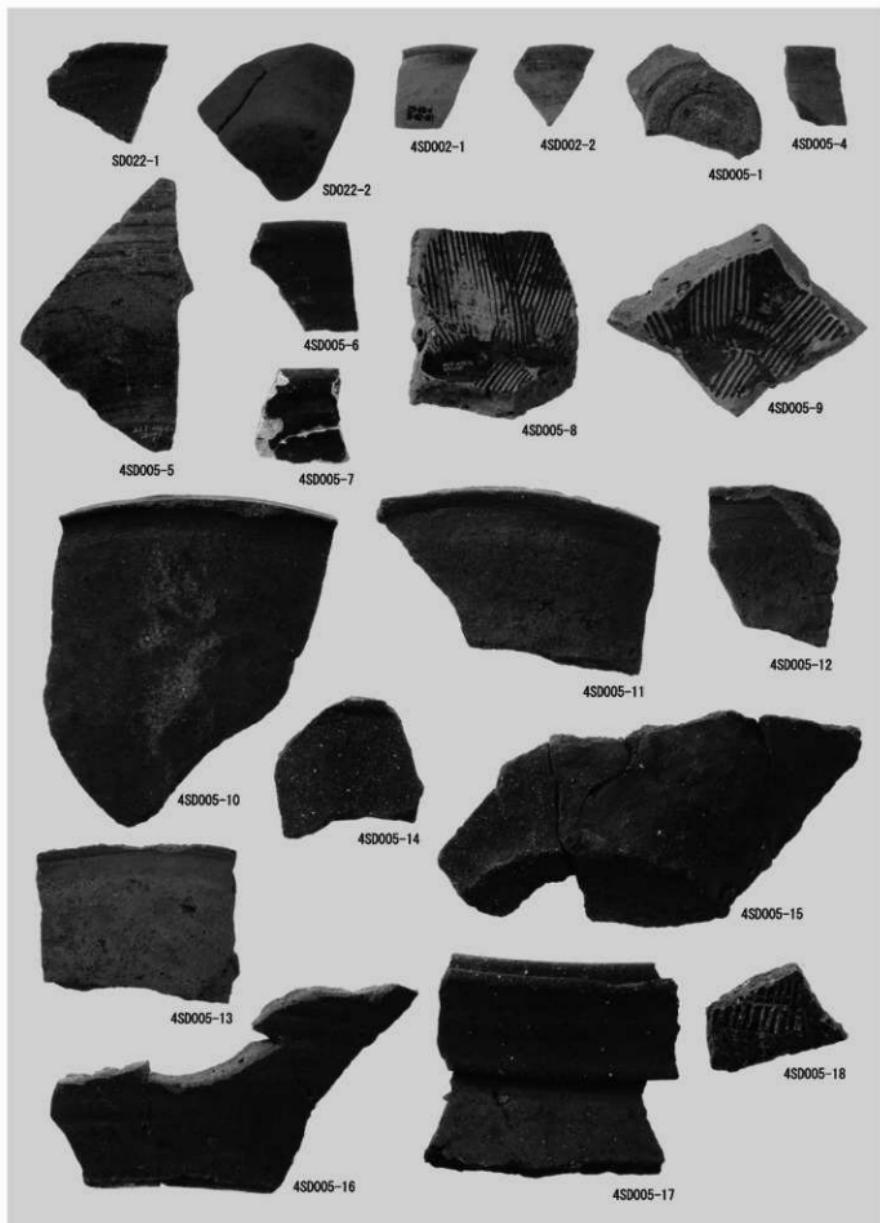
ピット群出土陶磁器・土器



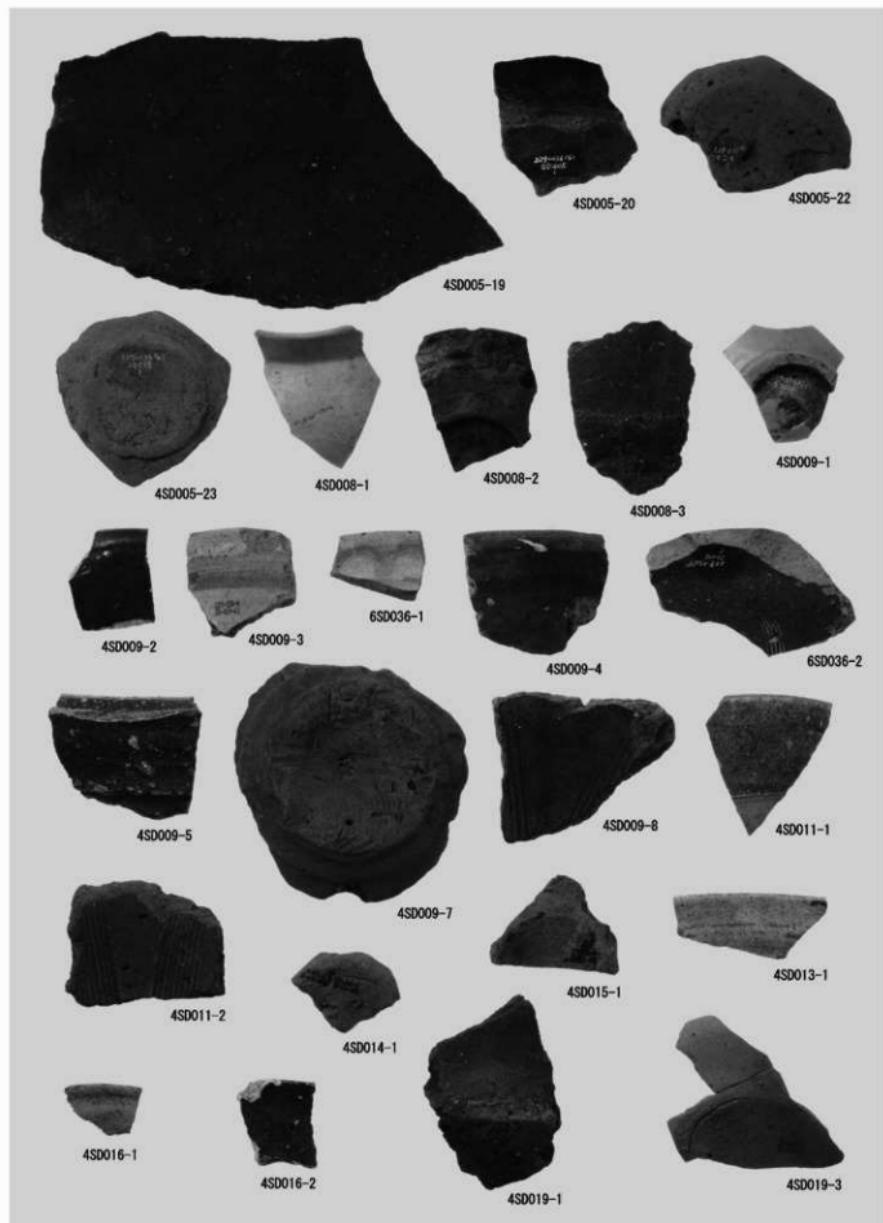
溝状遺構出土陶磁器・土器（1）



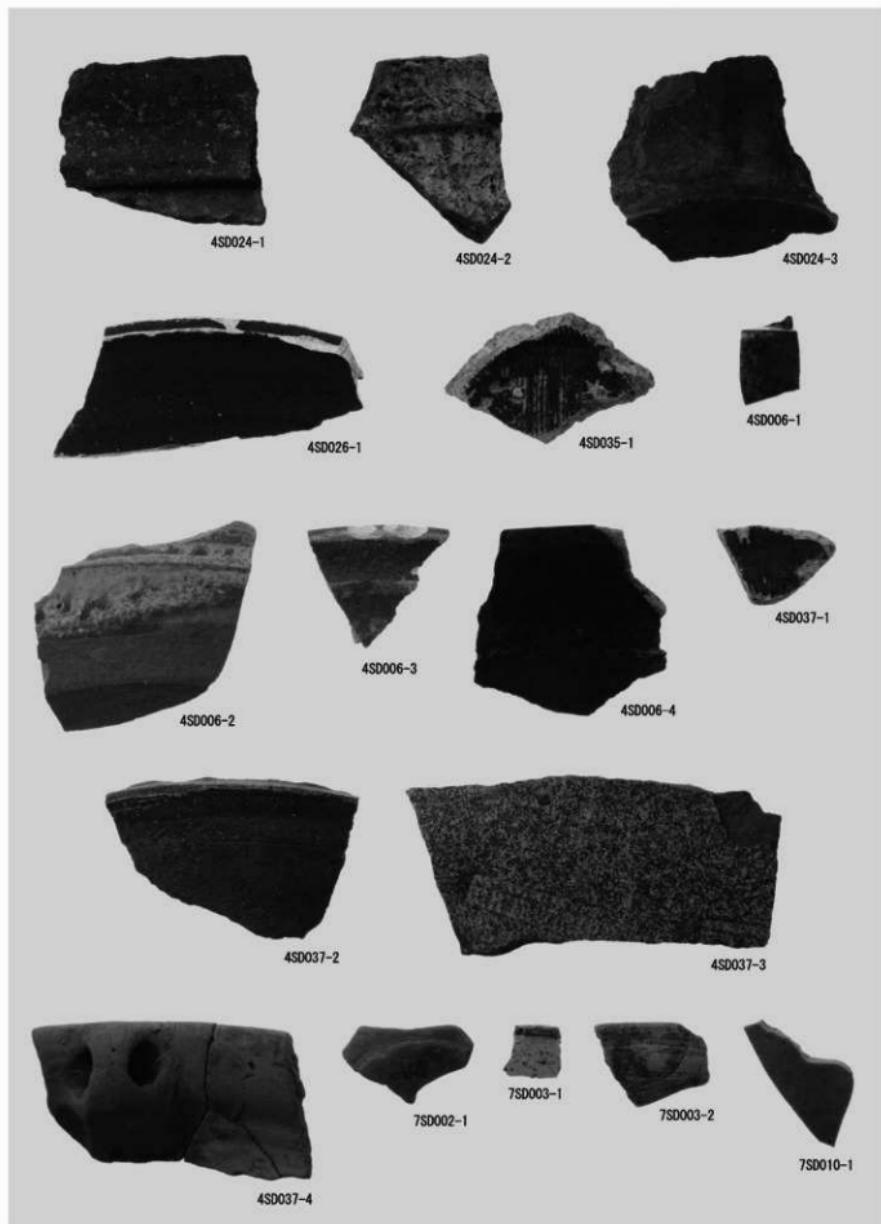
溝狀遺構出土陶磁器・土器（2）



溝状遺構出土陶磁器・土器（3）



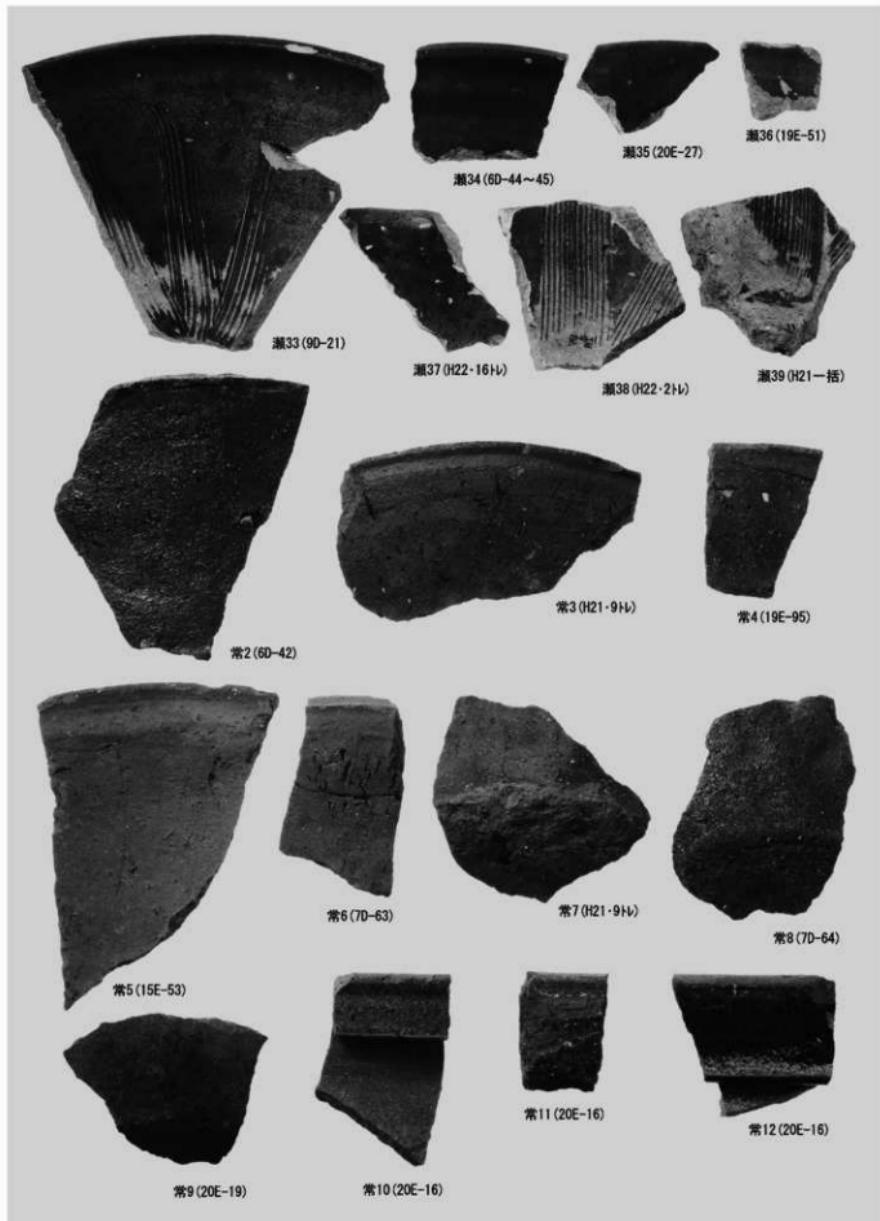
满状遗构出土陶磁器·土器 (4)



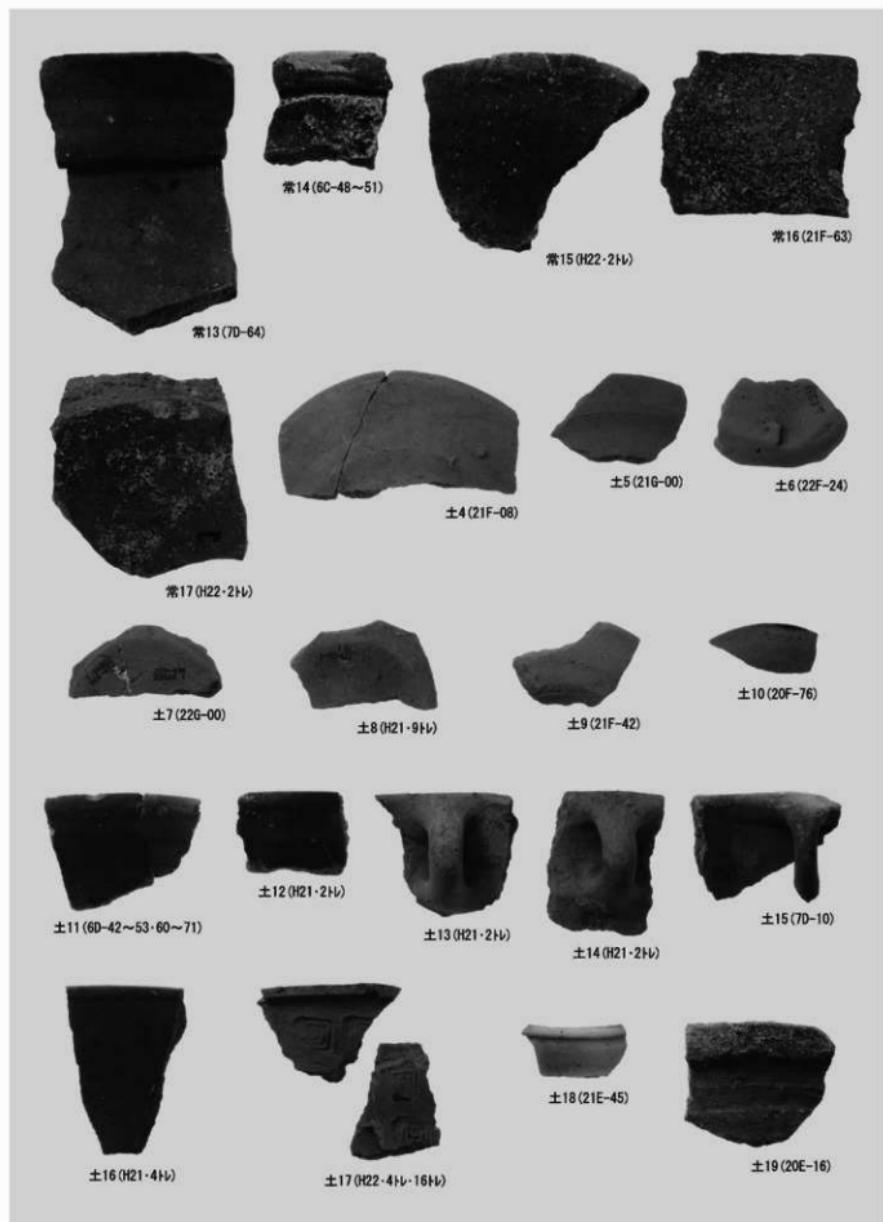
溝状遺構出土陶磁器・土器（5）



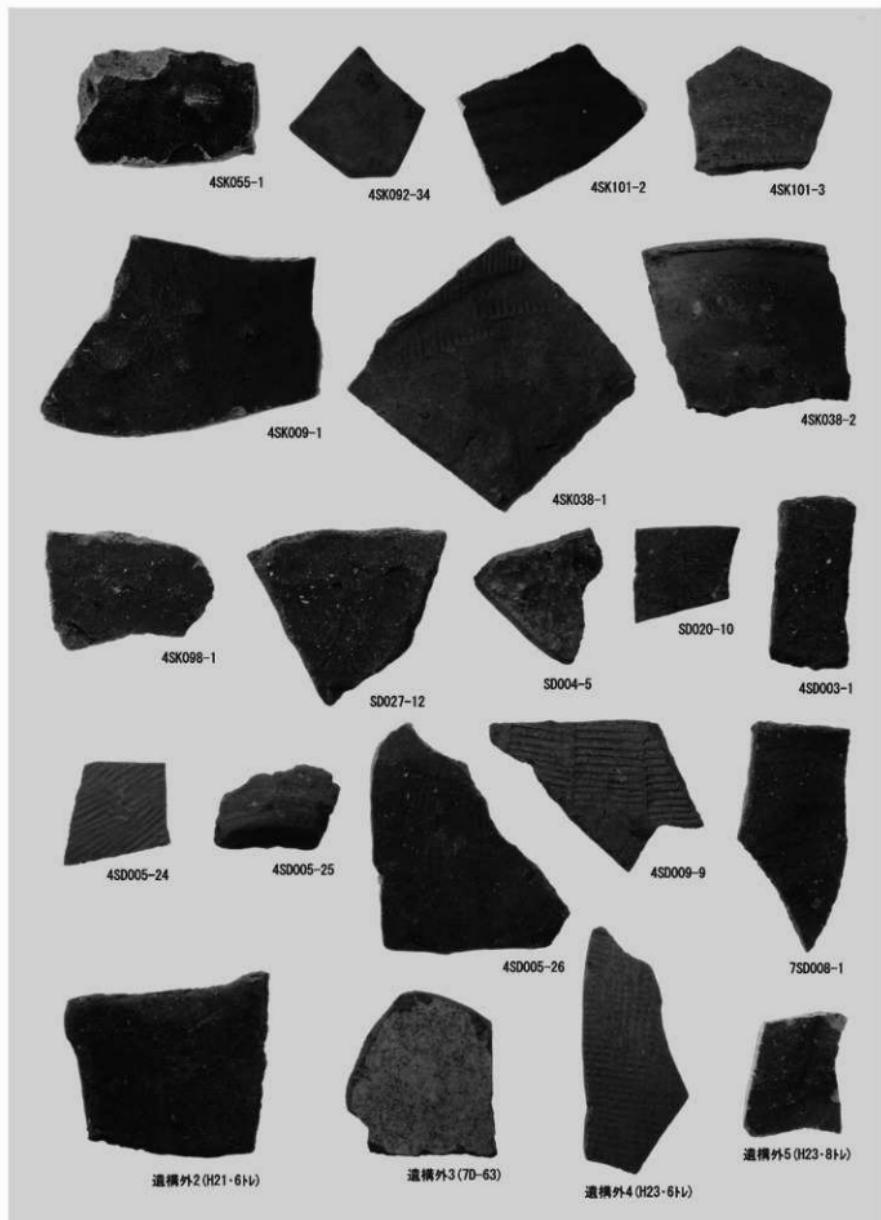
造構外出土陶磁器・土器（1）



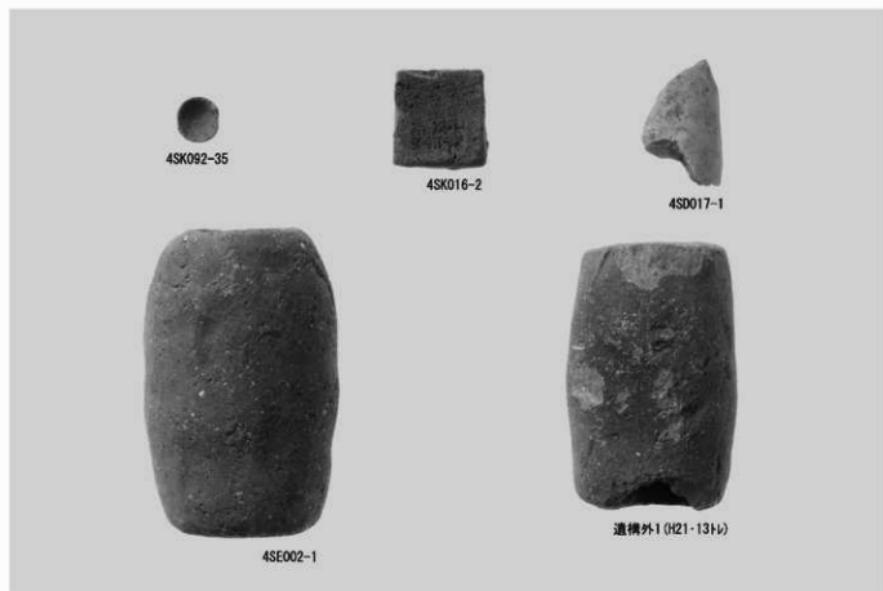
造構外出土陶磁器・土器（2）



遺構外出土陶磁器・土器（3）



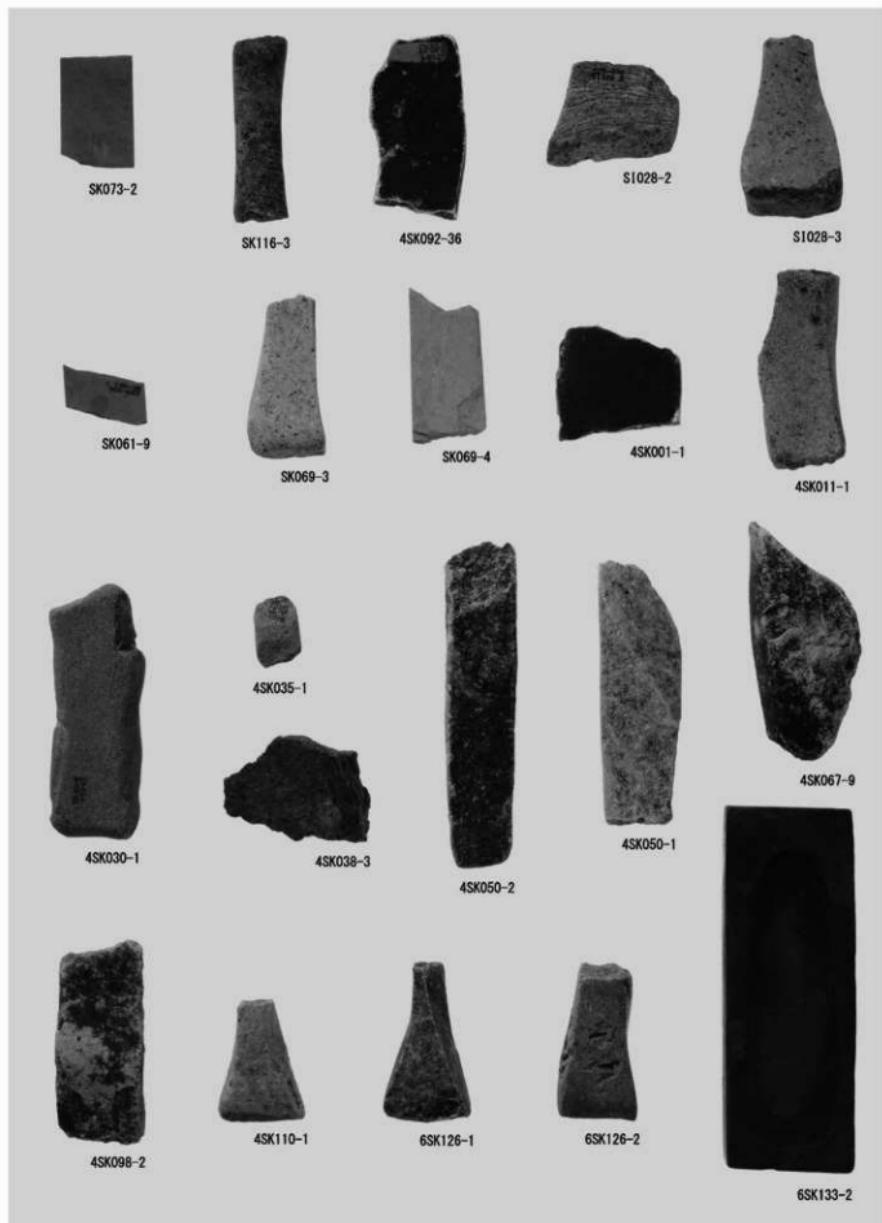
土製品（1）



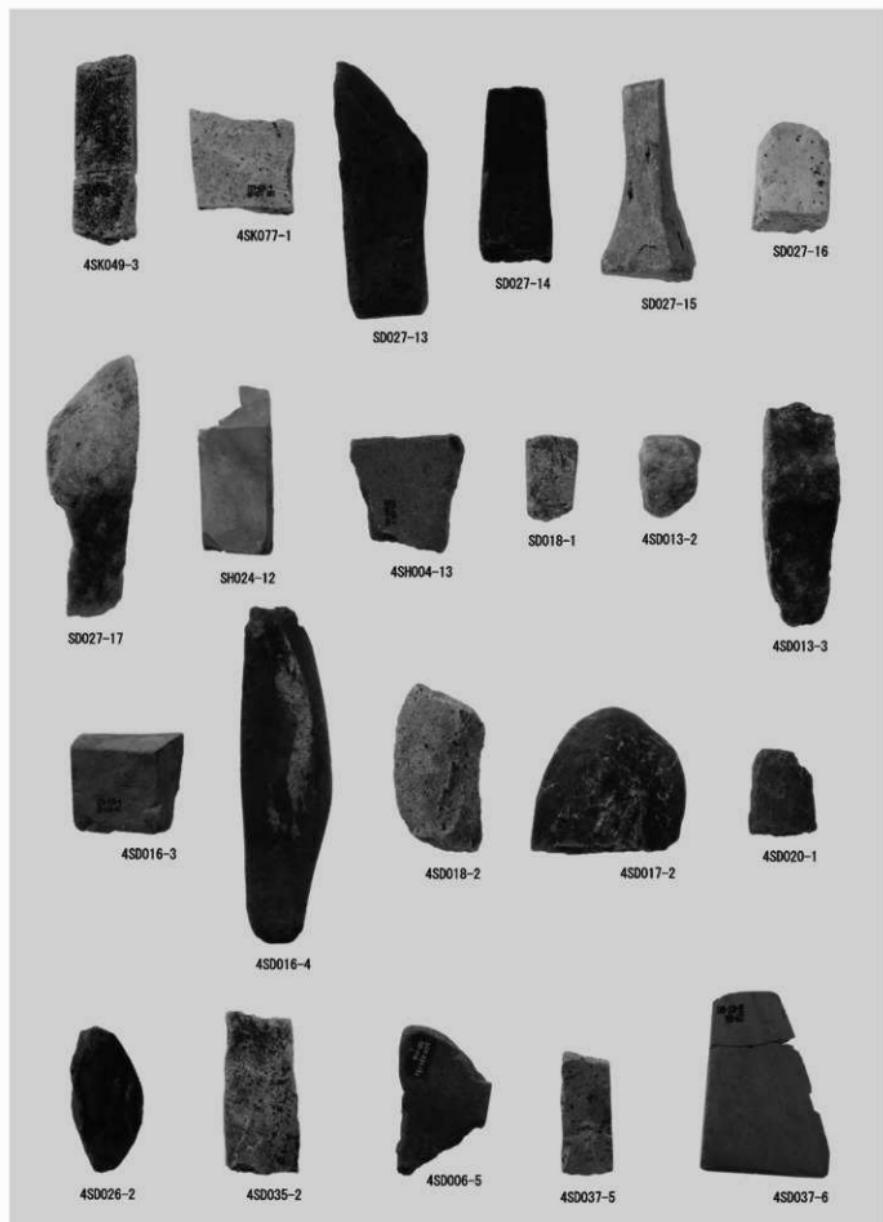
土製品（2）



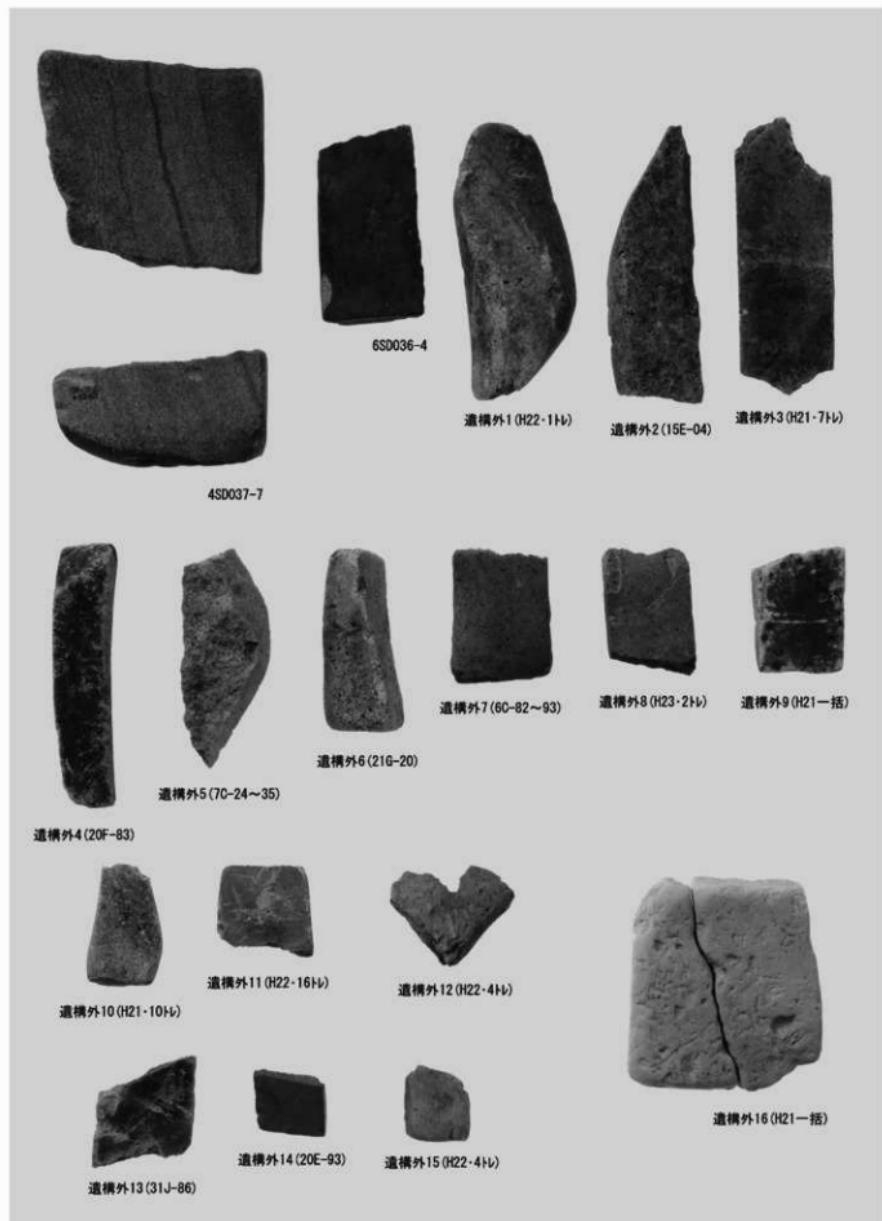
火葬人骨



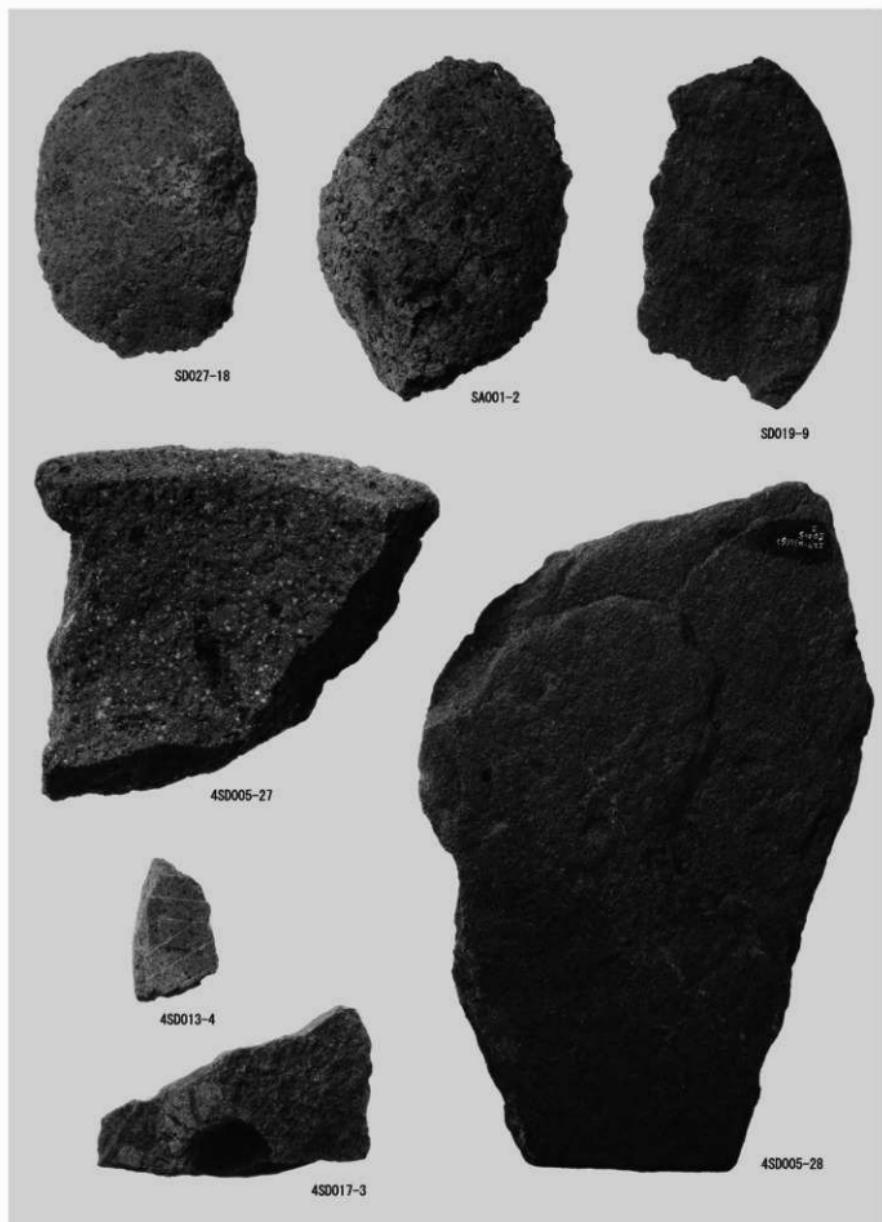
石器・石製品（1）



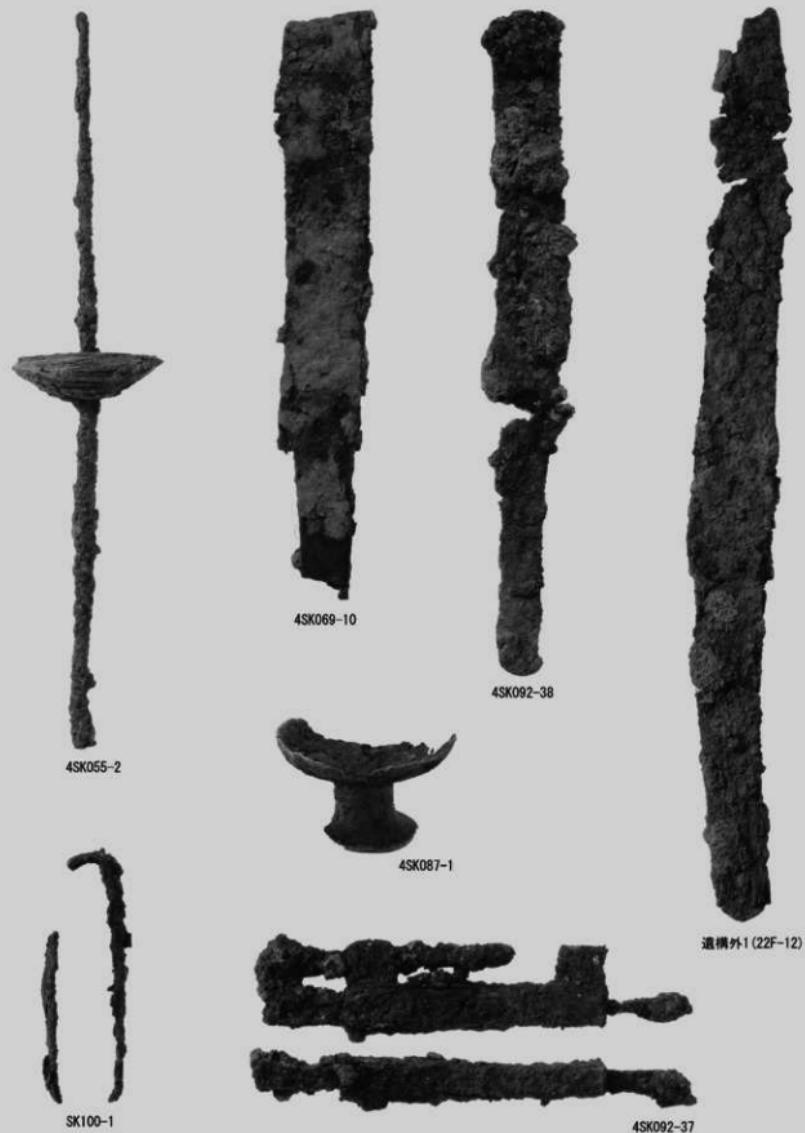
石器・石製品（2）



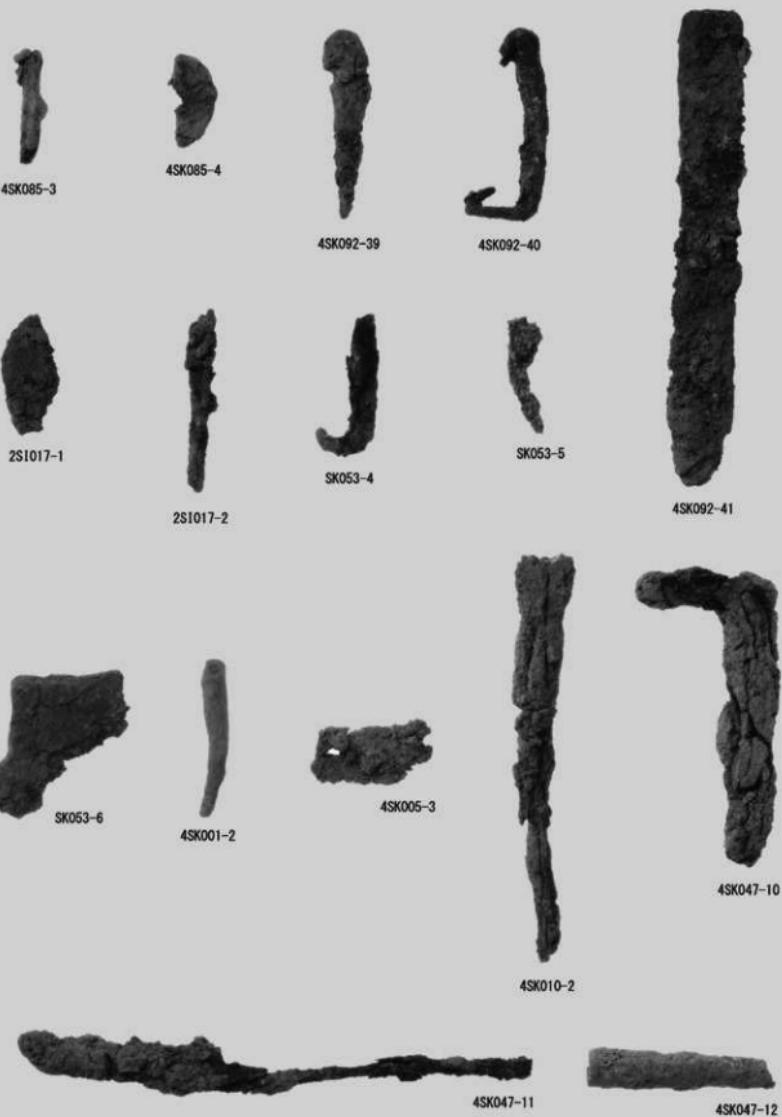
石器・石製品（3）



石器・石製品（4）



金属製品（1）



金属製品（2）



4SK069-11



4SK070-13



4SK070-14



4SK070-12



4SK090-4



4SK098-3



4SK098-4



4SK098-5



4SK098-6



4SK098-7



4SK098-8



4SK098-9



SK076-1



4SK049-4



SD027-19



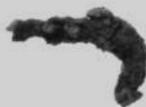
SA001-3



4SH010-14



4SD006-6



4SD007-1



4SD007-2



4SD017-4



4SD017-5



4SD017-6



4SD019-4



4SD019-5



4SD034-1



4SD037-8



4SD037-9



4SD037-10



4SD037-11



4SD037-12



造構外2 (H22-1Hv)



造構外3 (25H-35)



造構外4 (13D)



造構外5 (21F-19)

金属製品（5）



造構外6(21F-42)



造構外7(13D)



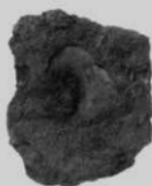
造構外8(11C-26)



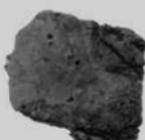
造構外9(36R-55)



造構外10(H21-13H)



造構外11(H21-15H)



造構外12(H21-13H)



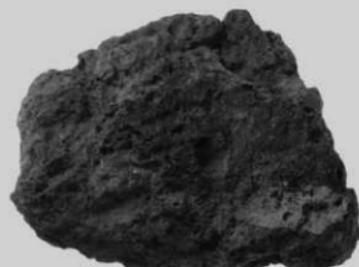
造構外13(36R-51)



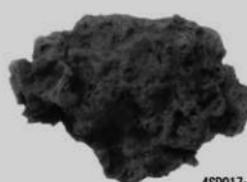
造構外14(36R-55)



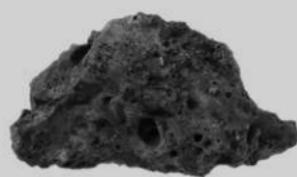
造構外16(10D-49)



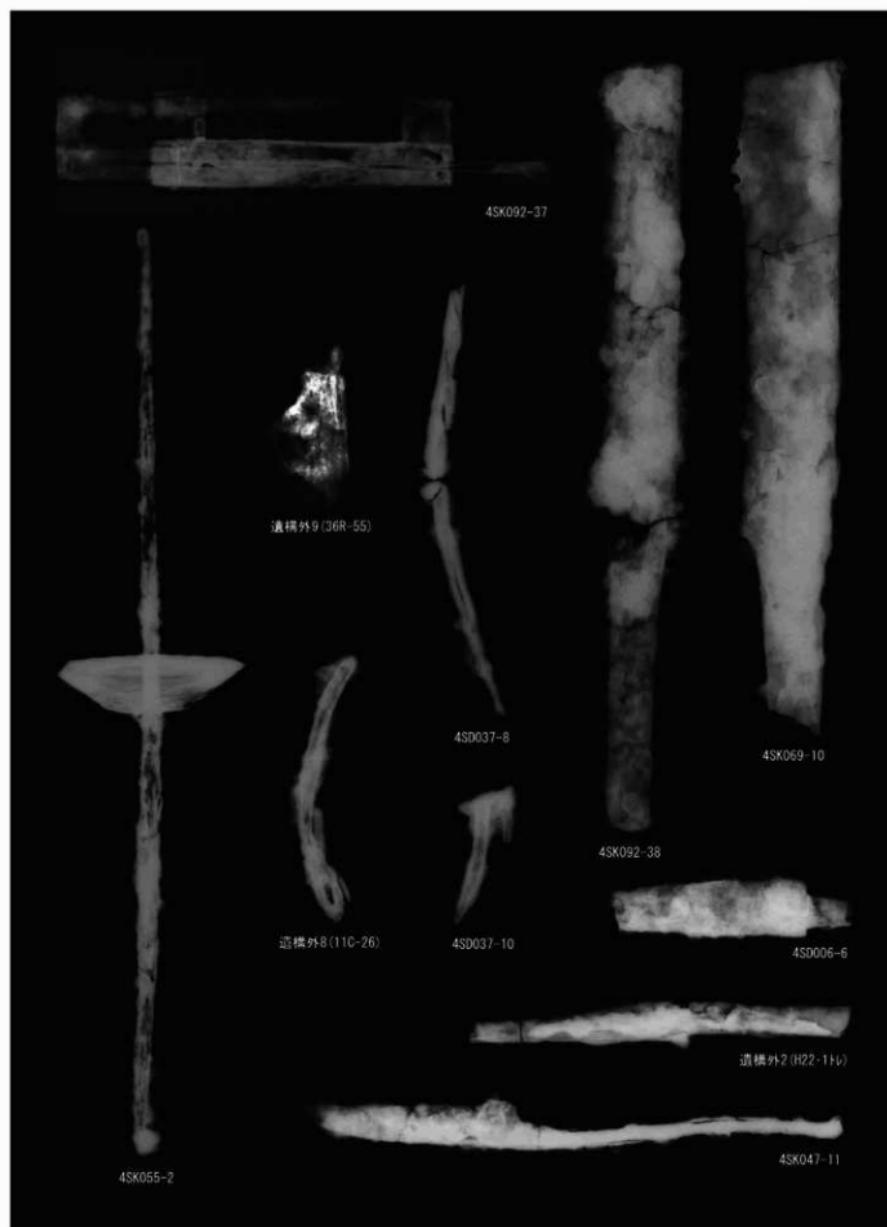
4SK035-2



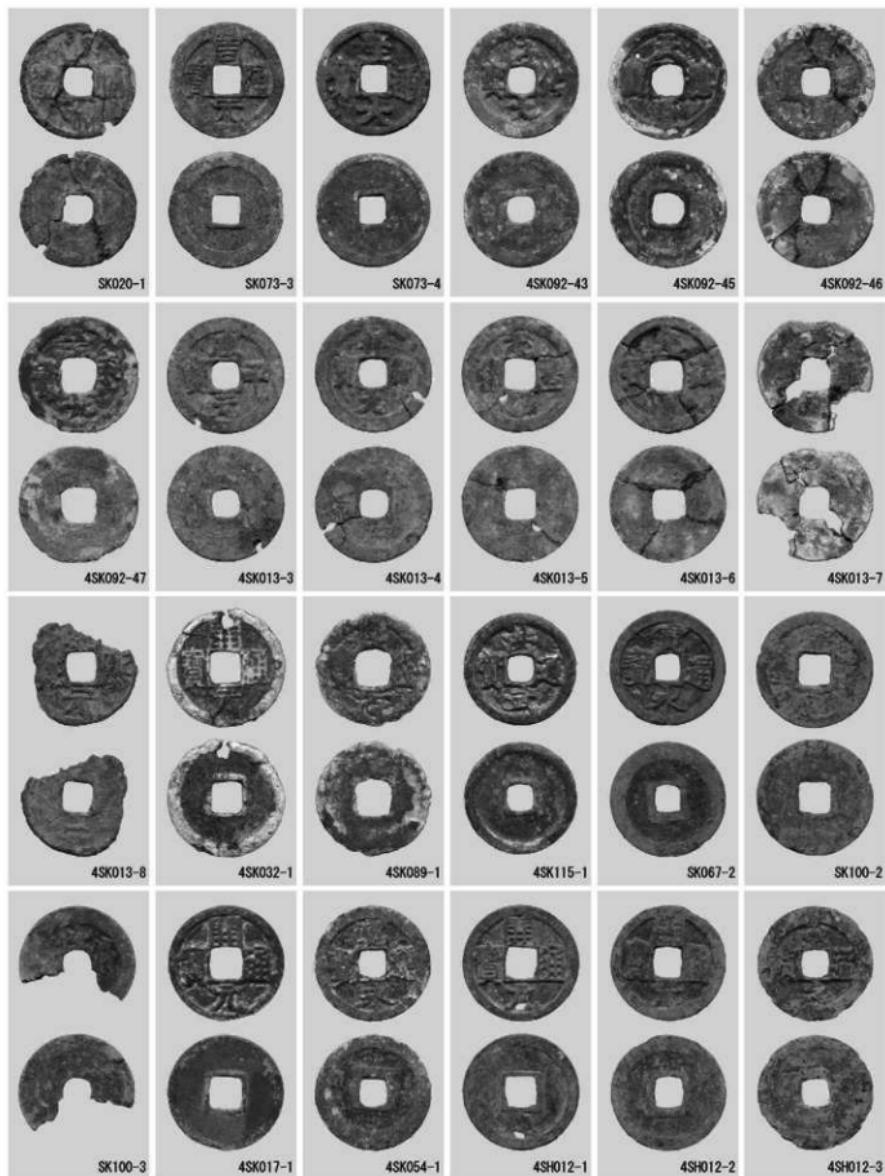
4SD017-7



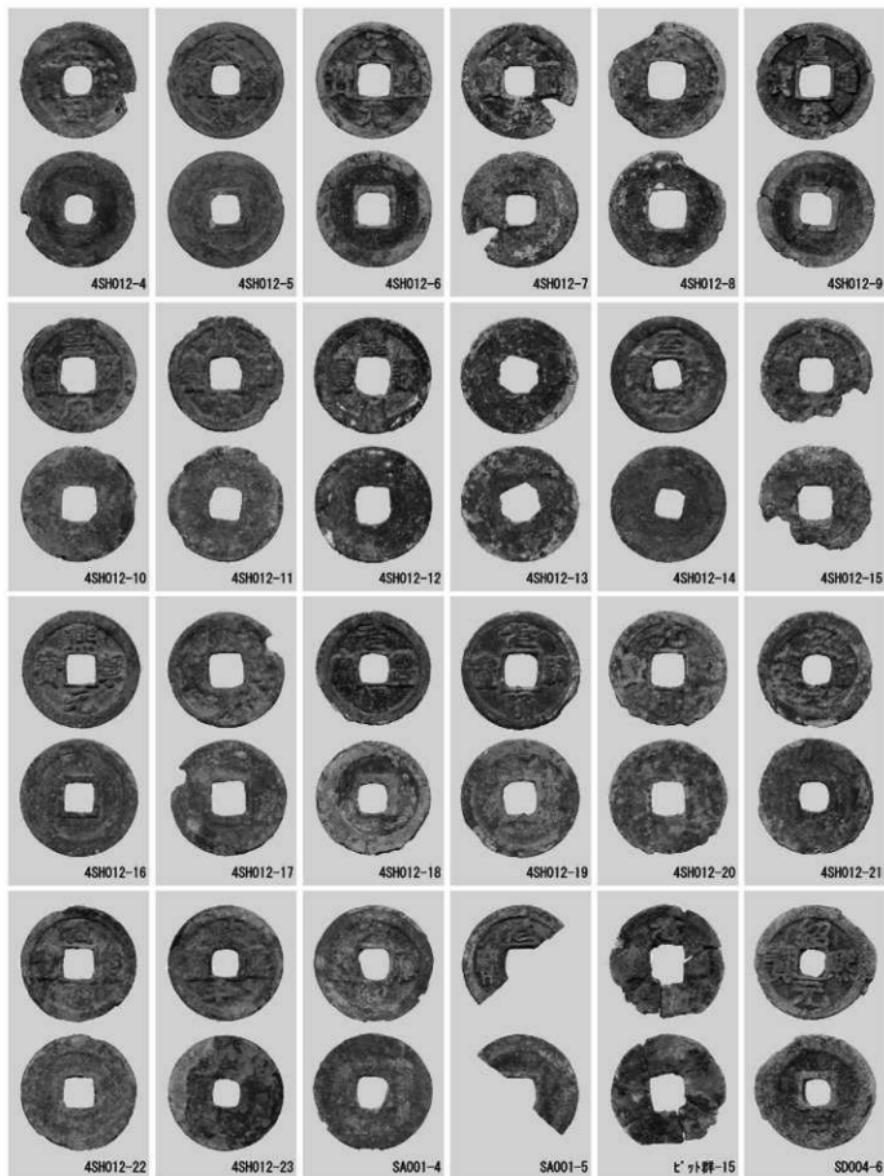
造構外15(H23-5H)



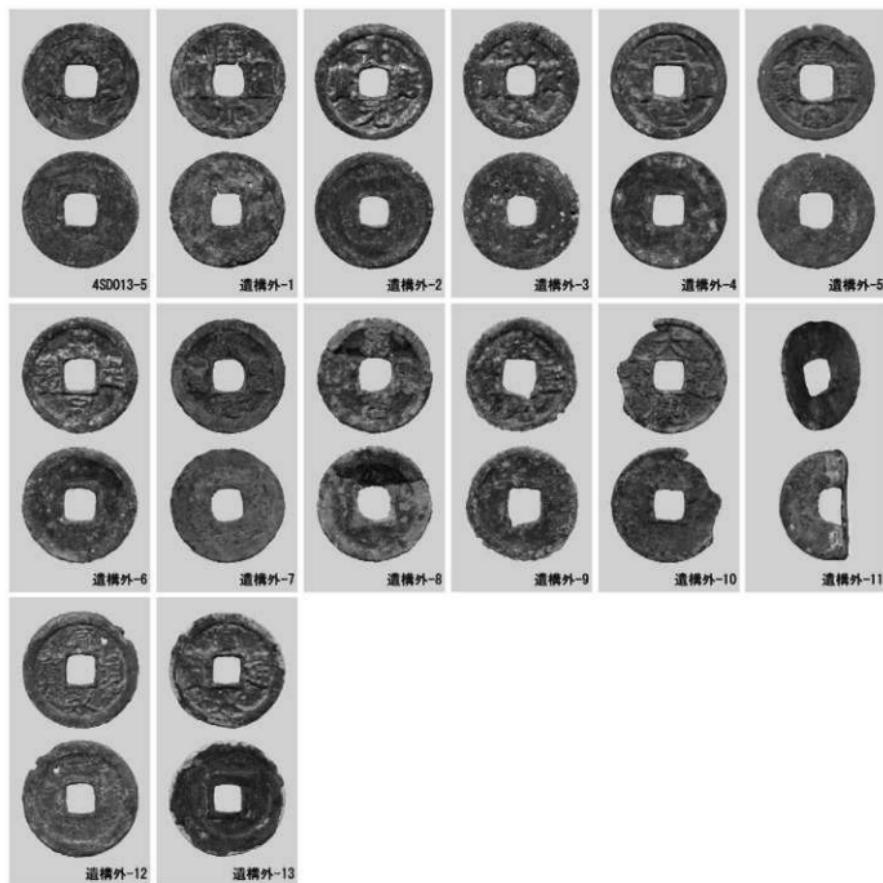
金属製品X線写真



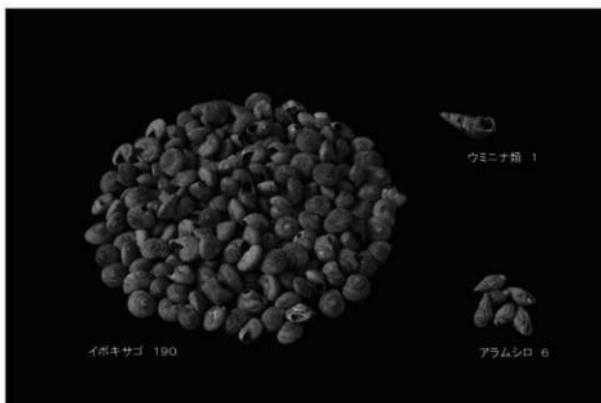
出土錢貨（4SK-014 以外）（1）



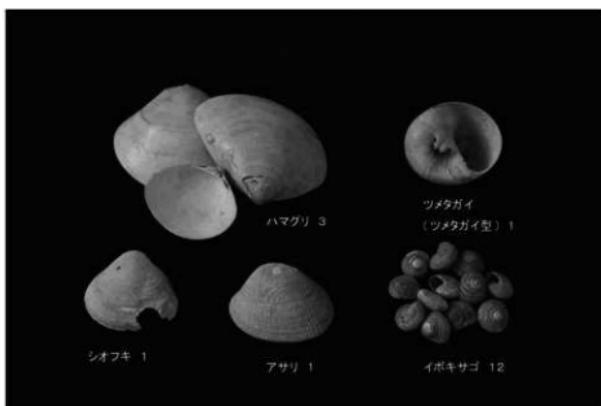
出土銭貨（4SK-014 以外）（2）



出土錢貨（4SK-014 以外）（3）



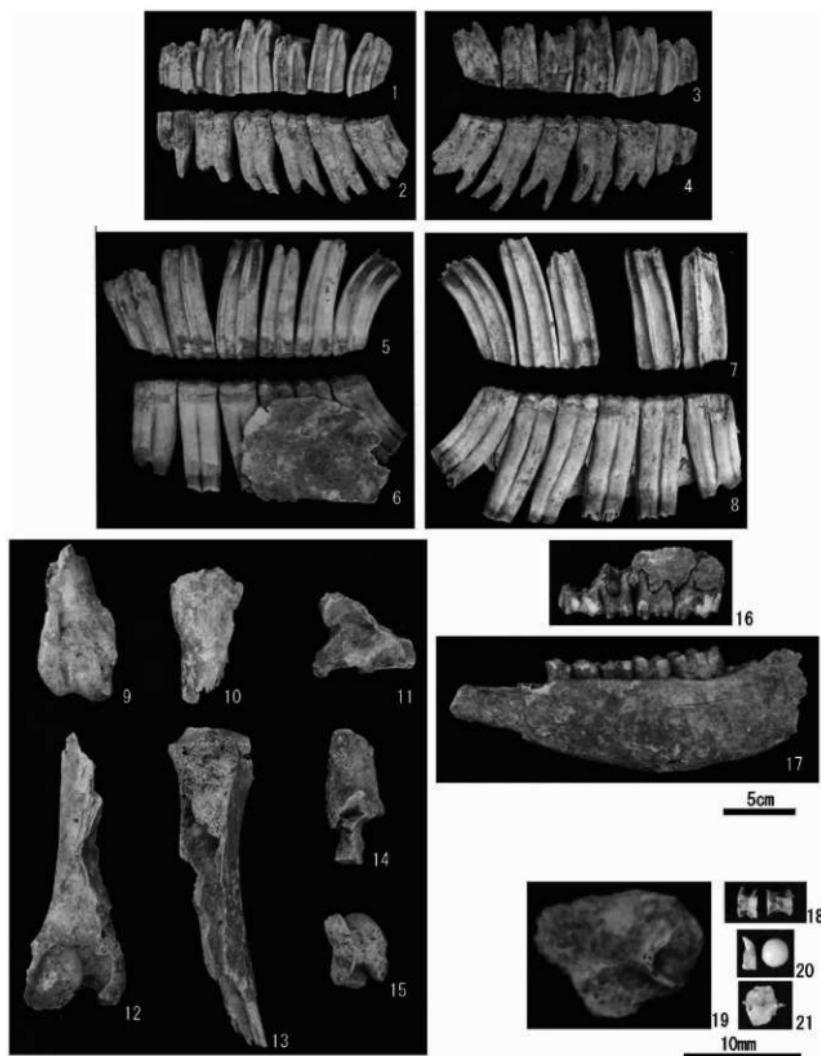
4SK-055 標準貝類相



4SK-092 標準貝類相



主要種以外の貝



文臨遺跡から出土した動物遺体

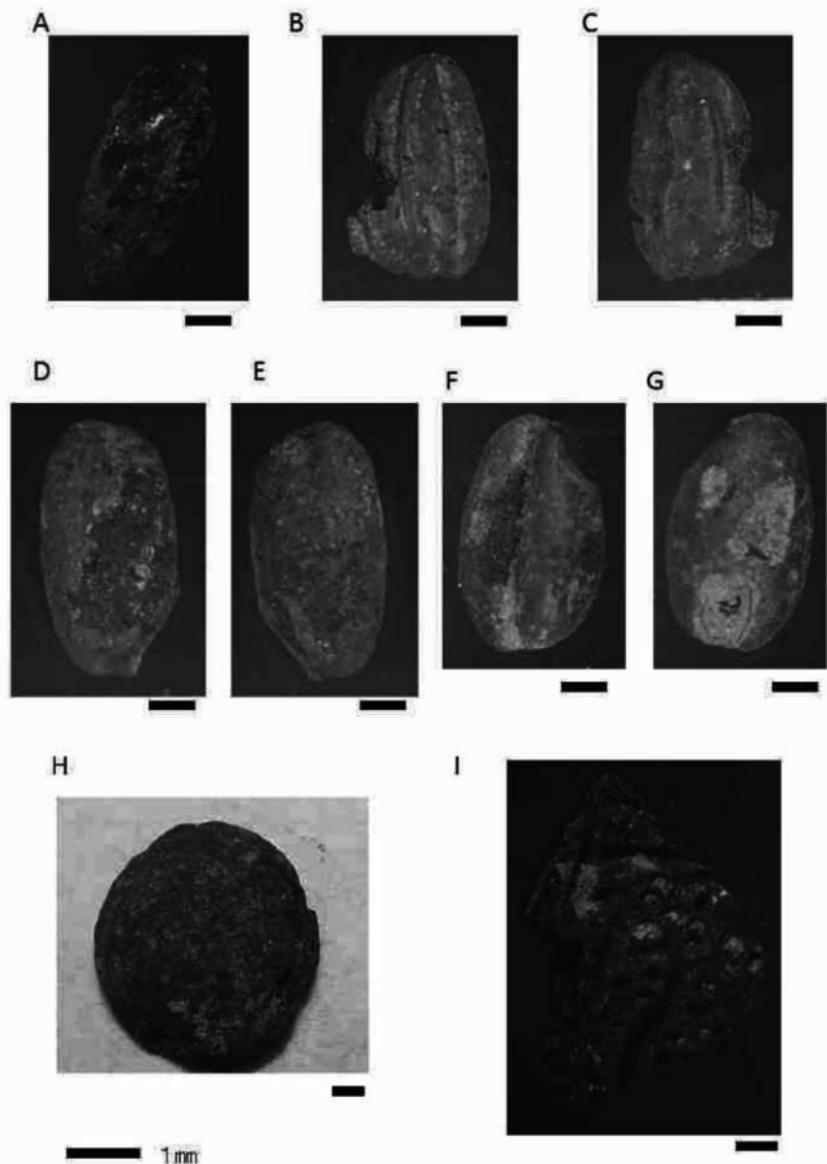
1-4. ウマ(No. 3) : 1. 左上顎骨 2. 左下顎骨 3. 右上顎骨 4. 右下顎骨

5-15. ウマ(No. 7) : 5. 左上顎骨 6. 左下顎骨 7. 右上顎骨 8. 右下顎骨 9. 左上腕骨 10. 右桡骨

11. 右寛骨 12. 右大腿骨 13. 左脛骨 14. 左踵骨 15. 左距骨

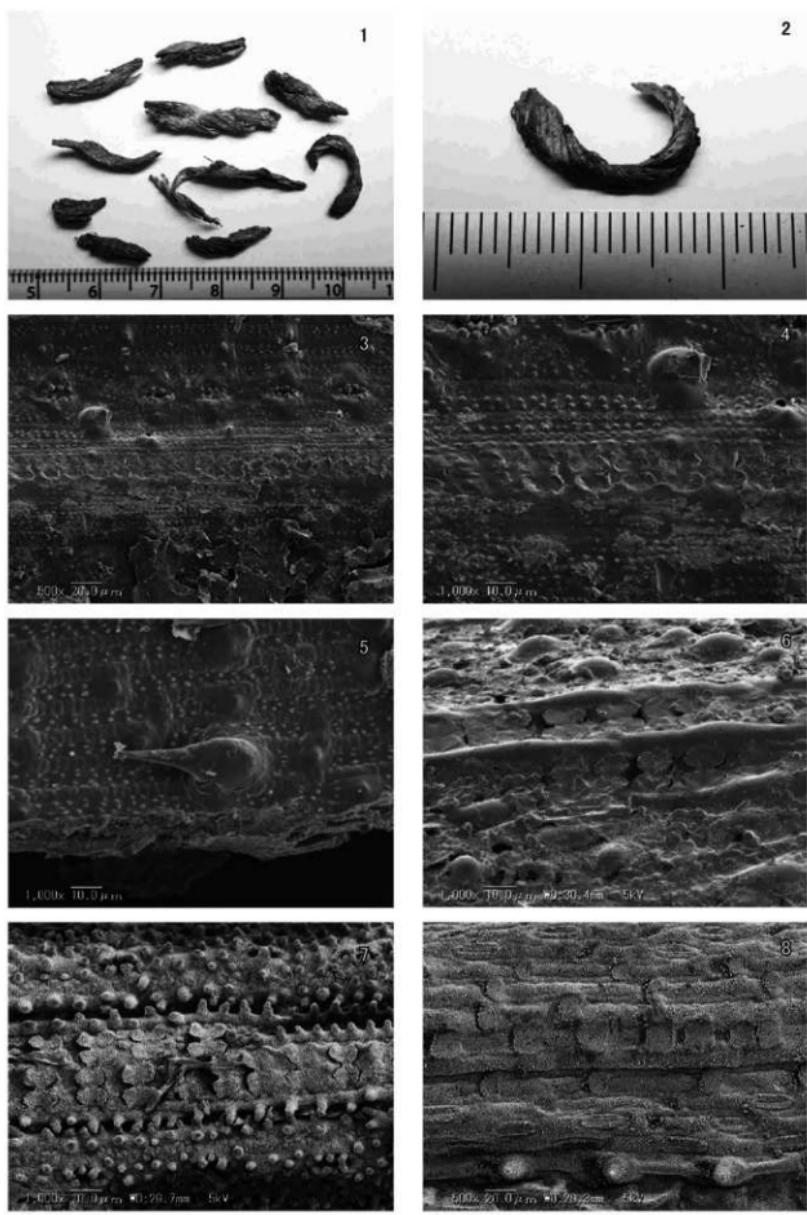
16. ウシ左上顎骨(No. 5) 17. ウシ左下顎骨(No. 4)

18. ニシン科腹椎(No. 14) 19. スズキ属右主鰓蓋骨(No. 8) 20. タイ科歯(No. 14) 21. アジ科獲鱗(No. 14)



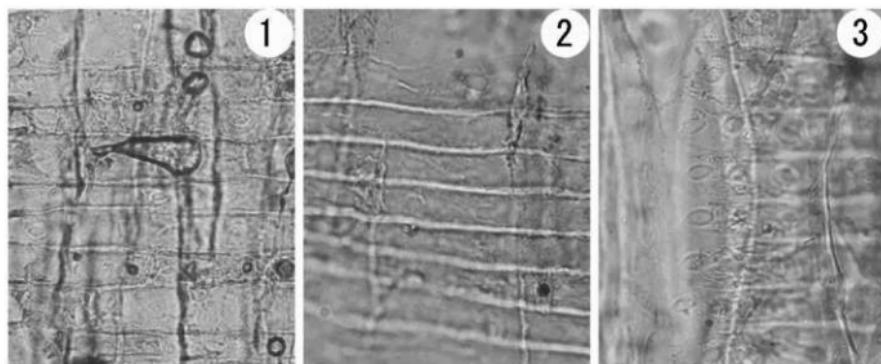
文脇遺跡から出土した植物遺体

A : オオムギ 胚乳 B-E : イネ 胚乳 F, G : コムギ 胚乳 H : フジ属 種子
I : ウメ 核 (破片)



文部省遺跡出土の鐵鉢と植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真

1. 試料全形。
 2. 走査型電子顕微鏡用試料。
 3. イネ型短細胞珪酸体列。
 4. イネ型短細胞珪酸体列拡大。
 5. ポイント不明植物珪酸体。
 6. イネ型短細胞珪酸体列（現生イネ葉鞘）。
 7. イネ型短細胞珪酸体列（現生イネ葉身）。
 8. イネ型短細胞珪酸体列（現生ヨシ葉身）。
- 図2のスケールは1mm



スケール：■

文豪遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（放射断面、スケール=25 μm）

1. スギ（曲物側板片）、2. スギ（曲物底板片）、3. スギ（曲物木材片）

報告書抄録

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第19集

袖ヶ浦市文脇遺跡

(中・近世編)

—主要地方道千葉鴨川線（袖ヶ浦市高谷）

県単道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書1—

【第2分冊】

平成29年3月30日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

印 刷

(株)集 賛 舎

館山市山本226
